目次

仕様の設定.....1
仕様の設定: イントロダクション.....1
セットアップ オプションの選択.....3
セットアップ オプション: 一般タブ.....3
プログラム エリア.....4
[一般]タブのその他の編集ボックス.....32
実行エリア.....33
セットアップ オプション: パーツ/測定機タブ.....34
測定機エリア.....36
設定オプション: [測定結果]タブ.....41
デフォルト誤差.....47
セットアップ オプション: IDセットアップ タブ.....53
セットアップオプション:[レーザーセンサー] タブ.....58
設定オプション: [サウンド イベント]タブ.....58
セットアップ オプション: アニメーションタブ.....60
レポート、及び、動作パラメータの変更.....64
パラメータ設定: 測定寸法タブ.....64
パラメータ設定: [クリアランス平面]タブ.....68
パラメータ設定: プロービング タブ.....74
パラメータ設定: 動作タブ.....78
パラメータ設定: [回転テーブル]タブ.....83
パラメータ設定: 加速タブ.....86

パラメータ設定: プローブオプション タブ 87
パラメータ設定: プローブ引き金オプション タブ 92
パラメータ設定: クリア点タブ....99
編集ウィンドウのセットアップ....100
編集ウィンドウの色定義 100
編集ウィンドウのレイアウトを定義....105
プローブ読み出しウィンドウのセットアップ 106
フィーチャー エリア 108
プローブ/ヒット エリア 109
座標エリア 110
軸線表示エリア 110
色エリア 111
追跡機エリア 112
グラフィカル描写エリア 112
ターゲットへの距離エリア 113
プロンプトの歴史エリア 128
プローブビデオ視界の中心点常時追跡....128
複数のアームのセットアップ....128
旋回テーブルの定義....129
積み重ねとデュアルの回転テーブルの違い....130
旋回テーブルのキャリブレーション....133
プローブ交換器のオプション設定 137
種類....138

通信ポート 140
校正 141
取り付け点 147
ｽﾛｯﾄ 149
複数のプローブ交換機の操作 159
TP2に関する予備知識 159
ACR1に関する予備知識 159
TP20、及び、TP200に関する予備知識 160
SP600 アナログ プローブに関する予備知識 160
複数のラックのコンフィギュレーション 160
SP25プローブ/スタイラス変更システム 163
ARC 1 ラックの理解 163
TP 20 スタイラス変換機を持つARC 1 の理解 164
アクティブ プローブをロードする 168
単一および複数のプローブチェンジャーを使用する実例 169
測定機インターフェースのセットアップ 177
コントローラーからの工場設定を回復 178
測定機の軸線割り当て 179
デバッグ ファイル作成 180
OIT 通信 182
PH9通信 183
回転テーブル設定 184
通信プロトコール設定 185

軸線のスケール係数の設定 186
リスト コンフィギュレーション.....187
軸インターフェース 188
バックトーク インターフェイス.....188
ブライト インターフェース.....189
ライカ インターフェース.....189
DEAインターフェース.....189
Elm インターフェース 192
埋め込みボードインターフェース.....193
FARO インターフェース 194
GOMインターフェース.....194
ヨハンセン インターフェース.....194
ライツ インターフェース.....194
LK ドライバー インターフェース 198
LKRS232インターフェース.....201
Manmitiインターフェース.....204
Manmoraインターフェース 205
Metrocom / Metromecインターフェース 205
メトロログ インターフェース.....208
ミツトヨ インターフェース.....209
Moraインターフェース 211
MZeizz インターフェース 211
Numerex インターフェース.....212

Reflexインターフェース 215
レニショー インターフェース.....215
Romerインターフェース.....216
シャープ インターフェース.....216
シェフィールド インターフェース.....218
Tech80インターフェース.....221
Wenzel インターフェース 223
Zeissインターフェース 223
ZssGPIBインターフェース.....224
温度補償 225
STPファイルの使用 226
利用可能な入力パラメータ 226
編集ウィンドウ内の温度補償コマンド.....234
コントローラー対応 234
ローカル温度設定 235
OpenGLオプションの変更.....237
測定方法エディターの使用.....242
インポート オプションの設定.....246
ファイル位置の説明 247
DATファイルの理解.....249

仕様の設定

仕様の設定: イントロダクション

PC-DMISを用いて、個々の必要をみたすように、PC-DMISのフォーム、及び、機能を作るための、お客様個人の仕様を設定できます。この章を用いて、出力形式、スクリーン
グラフィックス、測定機パラメータ、及び、その他のオプションをコントロールすることが可能です。

この章の主なトピックは、次のとおり:

- セットアップ オプションの選択
- レポート、及び、動作パラメータの変更
- 編集ウィンドウの設定
- プローブ読み出しウィンドウのセットアップ
- 複数のアームのセットアップ
- 回転テーブルの定義
- プローブ交換機オプションのセットアップ
- 複数のプローブ交換機の操作
- アクティブ プローブをロードする
- 測定機インターフェースのセットアップ
- 温度補償
- 検索パスの特定
- OpenGLオプションの変更
- 測定方法エディターの使用
- インポート オプションの設定
- ファイル位置の説明
- DATファイルの理解

- PC-DMIS コンフィギュレータの使用

以下の文章は、各種のシステム オプションとその機能についての記述です。

複数ユーザー用の設定保存についての付記

測定機プロファイルの間での切り換え

複数ユーザー用の設定保存についての付記

PC-DMISの設定、パラメータ、または、ユーザー
インターフェースのカスタマイゼーションになされた、各ユーザーごとの変更はすべて、記憶されます。これは、Windows
ユーザー許可を用いて、内部的にコントロールされています。お客様の特定のユーザー名で、オペレーション
システムにログオンすると、お客様の設定が自動的に呼び出されます。これらの設定は、PC-DMISがインストールされた位置にある、ユーザー名の付いたサブ
ディレクトリ内に記憶されています。

測定機プロファイルの間での切り換え

重要事項: 測定機プロファイルの保存、及び、**測定機呼び出し**
メニュー項目を表示するには、お手持ちのポートロックが、**IP測定**オプションがプログラムされていなければなりません。

オフラインで測定ルーチンを作成時、これら二つのメニュー項目を用いると、測定機のプロファイルを簡単に切り換えることができます。

編集 | 優先設定 | 測定機プロファイル保存 -
このメニュー項目は、ファイル名を尋ね、バーチャル測定機の現在のすべての設定を「mpl」拡張子のファイルに記録する **[名前を付けて保存]** ダイアログ ボックスを表示します。PC-DMISは、将来の呼び出しに備え、以下のものをファイルに保存します:

- ロードされた測定機モデル
- ロードされたツール変換機モデル
- 回転テーブルの設定
- プローブの備え付けの方向性
- デフォルト設定でのプローブ コンポーネント（PH 10 , CW 43 等）を起動する
- アクティブ プローブ ファイル

- すべての「固定された」クイック取付具コンポーネント
- 測定機の速度設定、及び、制限

編集 | 優先設定 | 測定機を再呼び出し -
このメニュー項目は、.mplファイルに保存されている測定機の設定を復元します。PC-DMISは**[開く]** ダイアログ ボックスを表示し、開くファイルが選択された後に、設定を復元します。

セットアップ オプションの選択

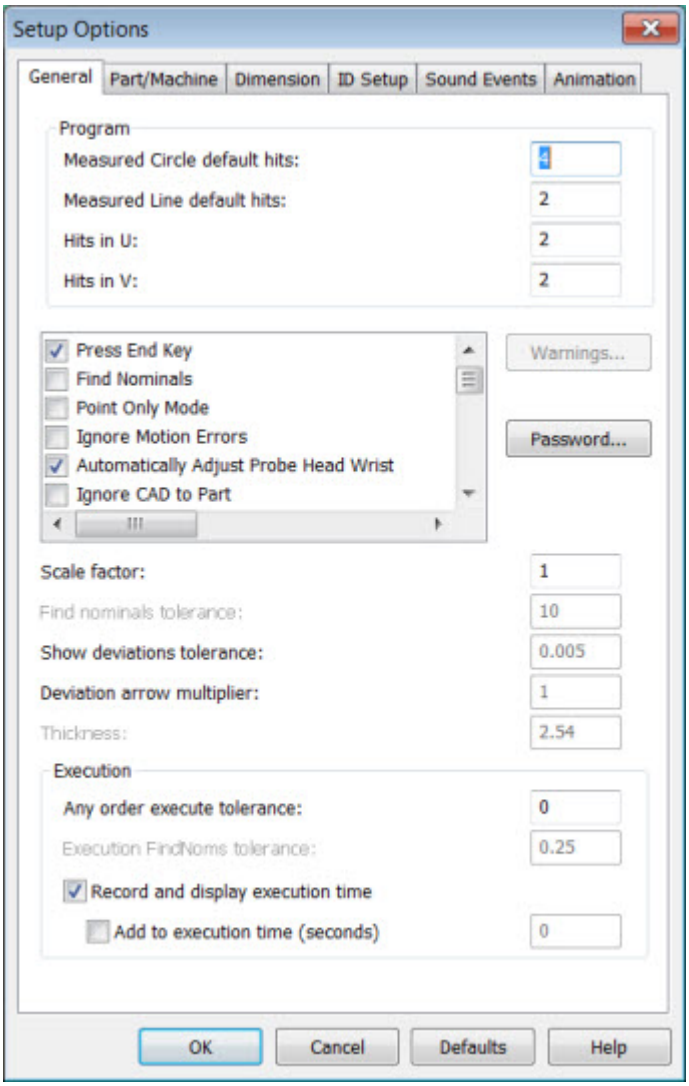
編集 | 環境設定 | セットアップメニュー オプションを選択すると、**セットアップ オプション**ダイアログ ボックスが表示されます。フォームやPC-DMISの機能を変更するために、このダイアログボックスのタブを使用してください。タブは次のアイテムを持っています:

- セットアップ オプション: 一般タブ
- セットアップ オプション: パーツ/測定機タブ
- セットアップ オプション: 測定寸法タブ
- 設定オプション: [ID設定]タブ
- セットアップオプション:[レーザーセンサー] タブ
- 設定オプション: [サウンド イベント]タブ
- セットアップ オプション: アニメーションタブ

[OK]および**[デフォルト]**ボタンの機能について詳しくは、「ユーザーインタフェースの操作」の章の「OK」および「デフォルト」のトピックを参照してください。

セットアップ オプション: 一般タブ

その機能に関する情報を表示するには、下の画像内のセクションのいずれかをクリックしてください。



[セットアップ オプション] ダイアログ ボックス - [一般]タブ

この**全般**タブをアクセスするには、**[セットアップ オプション]** ダイアログ ボックスの**[全般]** タブをクリックして下さい(**編集 | カスタム設定 | セットアップ**)。測定プロセスを制御する様々な機能を変更するには、このタブを使用することができます。

プログラム エリア

一般 タブの**プログラム**
プログラムエリアの中の編集ボックスを用いて、以下のオプションを編集することができます:

測定円のデフォルト取込点：

Measured Circle default hits: 4

[測定円のデフォルトヒット数] ボックスでは CAD データを使用した円の学習中に PC-DMIS が取得するヒットのデフォルト数を設定できます。入力可能な最小ヒット数は3です。プログラムされる円のヒット数のみを変更し、既にプログラムされた円のヒット数については変更しません。

このオプション用の、PC-DMISの設定エディタへのエントリーは、以下のようになります: **AutoCirHits= [number of hits]**。レジストリエントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーを変更する」の章をご覧下さい。

測定線のデフォルト取込点

Measured Line default hits: 2

[測定線のデフォルトヒット数] ボックスでは、CAD データを使用して線を学習中に PC-DMIS が取得するヒットのデフォルト数を設定できます。入力可能な最小ヒット数は2です。プログラムされる線のヒット数のみを変更し、既にプログラムされた線のヒット数については変更しません。

このオプション用の、PC-DMISの設定エディタへのエントリーは、以下のようです:**AutoLineHits= [ヒット数]**。レジストリエントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーを変更する」の章をご覧下さい。

Uでのヒット

Hits in U: 2

[Uでのヒット] ボックスは、スキャン中に最低限取得する必要のある行の数を示します。

付記:このスキャン時のオプションは、曲線及び曲面オプションと併用の時にのみアクティブになります。

Vでのヒット

Hits in V: 2

[Vでのヒット]
ボックスは、スキャン中に1行あたり最低限取得しなくてはならないヒット数を示します。

付記:このスキャン時のオプションは、曲線及び曲面オプションと併用の時にのみアクティブになります。

一般タブ用チェック ボックス

セットアップオプションダイアログボックス（**編集 | 環境設定 | セットアップ**）の**一般**タブ上にリストされたチェックボックスを用いて、各種のオプションを作動または不作動にすることができます。お客様の特別なニーズに合うよう、PC-DMISオペレーションをカスタマイズする時、これは役に立ちます。

終了キーを押す

ENDキーを押すチェックボックスは、最後に行われたヒットを確定する前に、ENDキーが押されるのをPC-DMISが待つか否かをコントロールします。このチェックボックスを選択すると、確定前に最後のヒットをプレビューすることができます。このチェックボックスが選択されていない場合には、ジョグボックスを用いて行われた、その時点でのヒットは、ヒットバッファに記憶されません。しかし、誤った場所にヒットを行った場合でも、それが自動的に当該フィーチャーへの最終ヒットになります。

名目値の発見

[公称値検索]チェック ボックス は、PC-DMISのヒットの扱い方をコントロールします。このチェック ボックスが選択されると、PC-DMISは自動的に各プローブタッチについて、最も近いCAD公称値を見つけます。「END」キーが押されるまで、PC-DMISはヒットを蓄積します。その後、要素の種類が計算され、CAD公称値が適用されます。

このチェックボックスを選択すると、**[公称値検索の公差]**ボックスが利用可能になります。「公称値検索の公差」を参照して下さい。

ポイント限定モード

ポイント限定モードチェック ボックスは、PC-DMISが、各プローブヒットにどう反応するかをコントロールします。このチェックボックスが選択されている場合、PC-DMISは、各プローブヒットを単一ポイント測定と自動的にみなし、自動ベクトルポイントを自動的に作成します。このチェック ボックスが選ばれていない場合、PC-DMISは終了キーが押されるまで、プローブヒットを継続して行います。終了キーが押されると初めて、PC-DMISは測定されたばかりのフィーチャーのタイプを決定します。

このチェックボックスをチェックすると、**ポイント限定モードのポイント厚さ**チェックボックスが利用可能になります。「ポイント限定モードのポイント厚さ」を参照して下さい。

エッジ ポイント限定モード

エッジ ポイント限定モードチェック ボックスは、PC-DMISが、プローブ
ヒット1セットごとにどう反応するかをコントロールします。この場合、1セットは、2つの単独プローブ
ヒットを意味します。そのうちの最初のヒットは、常に面上で行われなければいけません。2番目のヒットは、常にエッジ上で行われなければいけません。このチェック
ボックスが選択されている場合、PC-DMISは、プローブ
ヒット1セットを単一ポイント測定と自動的にみなし、自動エッジ
ポイントを自動的に作成します。このチェック ボックスが選択されていない場合、PC-DMISは終了キーが押されるまで、プローブ
ヒットを継続して行います。終了キーが押されると初めて、PC-DMISは測定されたばかりのフィーチャーのタイプを決定します。

エッジ点が作成された時、PC-DMISは、「**エッジ点**」ダイアログ
ボックスの**ヒット**、**自動**、及び**その他**エリアに表示されているオプションを使用します
(「自動要素の作成」の章を参照して下さい)。

名目値発見オプションがチェックされている場合、CAD名目値が適用されます。

動作ｴﾗｰを無視

このオプションは、すべての測定機の形式に適用するものではありません。一部の測定機はこのオプションを利用できる一方、他の測定機には何の効果もありません。

動作エラー無視チェックボックスをチェックすると、PC-DMISは衝突エラーを無視します。このチェックボックスをチェックし、**OK**をクリックすると、編集ウィンドウに`IGNOREMOTIONERRORS/ON`コマンドが挿入されます。PC-DMISがこのコマンドを認識し、プローブが障害物に衝突した場合、プローブは自動的に止まり*ません*。粘土やプラスチックのように、順応性が要求されるものを測定する時、このオプションは役に立ちます。

編集ウィンドウにおいて、このコマンドを`OFF`に設定すると、再び、衝突エラーが衝突されます。

プローブ ヘッド リストの自動調整

[**プローブ ヘッド
リストの自動調整**]チェックボックスを選択すると、実行中にソフトウェアがTIPコマンドに到達した場合、幾何図形をもとにチップシャンクのIJKがTIPコマンドのIJKに最も近いと思われるチップを自動的に選択します。TIPコマンドのIJKはパーツの座標と関連し、実際に選択されたチップはパーツのアラインメントにより異なります。

マッピングされていないリストを使用するには

マッピングされていないリストに対しては、PC-DMISは最も近い理論位置を返します。この理論位置に合致する校正済みチップが存在する場合、その校正済みチップが使用されます。[**パーツ/測定機**]タブの[**リスト警告デルタ**]ボックスで定義された角度公差の範囲内にPC-DMISが校正済みチップを見つけた場合には、より近い角度の未校正チップではなく、これら校正済みチップが使用されます（「設定オプション: [パーツ/測定機]タブ」を参照してください）。

考えている理論値が見つからない場合、エラーメッセージ「TIPコマンドが間違っているか、TIPが校正されていません」を返します。

有効な理論値が見つかったがチップが存在しない、または校正されていない場合、測定機がTIPステートメントに到達して測定機の動作が進行しない状態になるまで待機し、それから最も近い校正済みチップを使用するか尋ねます。

- [**はい**]を選択した場合、校正済みの先端を使用します。
- [**いいえ**]を選択した場合、理論値に最も適合するチップのオブジェクトを追加して実行を停止し（キャンセルではない）、新しいプローブの校正が完了したら[続行]を押すよう求めるメッセージがPC-DMISステータス バーに表示されます。この時点では、[**プローブ ユーティリティ**]ダイアログボックスにアクセスし、必要に応じて校正作業を行い、[**続行**]をクリックして先に進みます。

マッピングされたリストを使用するには:

実際にマッピング（すなわち校正）されている非限定リストを使用して、PC-DMISは自動的に最適にマッチするチップの位置を返し、その位置を使用して先に処理を行うことが可能です。

その他の注記

このオプションは、「自動要素の作成」章の中で**自動手首トグル**アイコンを使用することにより、自動要素の個々のヒットのためにオンにすることもできます。

このオプション用のPC-DMISの設定エディタの`AutoAdjustPh9`エントリーは、０または１を読み取ります。レジストリエントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーの変更」付録を参照して下さい。

注記: [プローブ ユーティリティ]ダイアログ ボックス（**挿入 | ハードウェアの定義 | プローブ**）の[**使用済みをマーク**]ボタンを使用している場合、PC-DMISは校正用にすべてのプローブチップを選択しない可能性があります(「ハードウェアの定義」の章の「使用済みのマーク」の項目を参照して下さい）。

CADから測定物への座標変換を無視

（保存された、またはそれ以外の）アラインメントが作成される度に、PC-DMISは2つの変換行列を作成します。

1. **測定機からパーツへの変換行列 -**
   内部的に測定機座標内に保存された、入力フィーチャーの測定値から算定されたもの。

2. **CADからパーツへの変換行列 -**
   内部的にCAD座標内に保存された、入力フィーチャーの理論値から算定されたもの。

利用可能なCADデータが存在しない場合、通常、理論値は学習済みの幾何要素の測定値から取られます。理論値を使用して常に一致した結果を得るのは困難です。これは、他が編集されなくともいくつかの値が編集された場合に起きる可能性があります。

パーツ配置を保存する際に、**CADからパーツ無視** チェック ボックスが選択されている場合、PC-DMISは、*CADからパーツ*
行列を無視し、かわりに、*測定機からパーツ*のパーツ配置のみをセーブします。全理論値が同一の座標システム内に置かれます。

一般的に、CADデータを使用していない場合に、このチェック ボックスを選択して下さい。

CAD イコール パーツへの影響

DCCモードでCADデータを使用せずに測定された要素からアラインメントを実行し、[**CADをパーツに等化**]メニューオプション（または[**CAD = パーツ**]ボタン）を使用する場合、CADとパーツの等化を設定する前に[**CADからパーツへの変換を無視**]チェックボックスを必ず選択しておいてください。CADとパーツの等化の設定に関する、より詳しい説明については、「整列の作成と使用」の章にある「CADとパーツの等化」のトピックを 参照して下さい。

コピーされたフィーチャーの理論値

- このチェック
  ボックスをクリアし、編集ウィンドウの新規の位置に要素をコピーする場合、要素の理論値は、その要素の元の位置でのアラインメントと関連付けられています。

- このチェック
  ボックスがチェックされ、編集ウィンドウの新規の所在位置にフィーチャーをコピーする場合、当該フィーチャーの理論値は、その新規の所在位置にあるパーツ配置に結びついています。

「整列の作成と使用」の章にある「整列の公称値変更」を参照して下さい。

分枝時の包括的設定リセット

[分岐時にグローバル設定をリセット] チェックボックスを選択すると、PC-DMIS は分岐ステートメントに当たった後、ステートコマンドのグローバル値をリセットします。影響を受けるコマンドの一覧は以下を参照してください。(分岐については、「フローコントロールを使用した分岐」の章を参照してください。)
分岐ステートメントのためにジャンプされたステートコマンドは実行されません。これにより、これらの設定を変更することなく測定ルーチンのセクションをスキップすることができます。

例えば、パーツプログラムに以下のコマンドがあったとします:

```
TIP /T1A0B0
MYLABEL=LABEL/
```

Measurements etc...

```
TIP/T1A90B90
GOTO/MYLABEL
```

このチェックボックスをチェックすると、PC-DMISが`GOTO`ステートメントを読んだ時、`MYLABEL`にジャンプします。そして、その後、最初に出会った`TIP/`コマンド: `TIP/T1A0B0`を用いて、探知が行われます。

注記:サブルーチンの実行時、サブルーチンによって変更されたいかなるグローバル設定も、**分岐時にグローバル設定をリセット**フラグによって影響を受けることはありません。詳細は「サブルーチンから設定を戻す」を参照してください。

このチェックボックスの選択が解除されると、PC-DMISが`GOTO`ステートメントを読んだ時、`MYLABEL`にジャンプします。PC-DMIS は分岐ステートメントに到達してもグローバル設定をリセットしません。代わりに、最後に実行された `TIP/` コマンドを使用します：
`TIP/T1A90B90`

PC-DMISはデフォルト設定により、このチェックボックスを選択します。

分枝後にリセットされるコマンド:

- Start/align
- Recall/align
- Mode/
- Rmeas/
- 作業平面/

- Tip/
- Loadprobe/
- Retract/
- Check/
- Touchspeed/
- Movespeed/
- Polarvectorcomp/
- AutoTrigger/
- Triggerplane/
- TriggerTolerance/
- Videosetup/
- Displayprecision/
- ManRetract/
- Scanspeed/
- Prehit/
- Clamp/
- Clearp/
- Format/
- 132column/
- Gaponly/
- Retrolinearonly/
- Probecom/
- Array_indices/
- Fly/
- Positivereporting/

- Ignoremotionerrors/

幾何学要素を参照平面に移動

要素を参照平面に移動チェックボックスをチェックすると、PC-DMISは測定済みの要素を作動平面へ自動的に投影します。一般的に、これは、フィーチャーが内部の最適機能を用いている限りにおいて、以下のフィーチャー形式のいずれに対しても機能します:

- 円形
- 楕円
- 直線
- 多角形
- スロット

参照型についての詳しい情報は、「その他のウィンドウ、エディタ、ツール等の使用」の章にある、「クイックスタートダイアログボックスの使用」トピックの「参照要素」エリアの説明を参照してください。

広幅板金オプションの表示

広幅板金オプションの表示チェックボックスをチェックすると、PC-DMISは、**自動要素**ダイアログボックスに、利用可能な板金オプションすべてを表示します。（色々な広幅板金に関する項目については、「自動要素の作成」の章を参照して下さい。)

このオプションにおいては、PC-DMISの設定エディタの`ShowExtendedSheetMetal`エントリーは、 0 or 1を読み取ります。レジストリエントリーの変更に関する、より詳しい説明については、付録の「レジストリのエントリーを変更する」をご覧下さい。

ﾀﾞｲｱﾛｸﾞ位置の固定

固定のダイアログ位置チェック ボックスが選択されると、PC-DMISはダイアログボックスをデフォルトの位置で表示します。このオプションがチェックされていない場合、PC-DMISは、各ダイアログ ボックスを前回位置していた場所で表示します。

このオプション用のPC-
DMISの設定エディタの`DialogFixedPosition`エントリーは、０または１に設定されます。レジストリ
エントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーの変更」付録を参照して下さい。

マークされたフィーチャー セットの閉じ込め

マークされたフィーチャー セットの閉じ込めチェックボックスをチェックすると、PC-
DMISは、ユーザーがその時点でのマークされたフィーチャー
セットのコンフィギュレーションを不意に削除したり、または、変更したりするのを防止します。
PC-DMISは、マークされたフィーチャー
セットの実行、及び、起動のみを許可します。マークされたフィーチャー
セットにフィーチャーを追加、または削除するには、このチェック
ボックスのチェックが消去されていなければいけません。

スケール自動適合

スケール自動適合チェック ボックスが選択されている場合、PC-
DMISは、フィーチャー測定の都度、自動的にスクリーンを拡大縮小します。

このオプション用の、PC-
DMISの設定エディタの`AutoScaleToFit`エントリーは、０または１を読み取ります。レジストリ
エントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーの変更」の章をご覧下さい。

ヒットのずれ表示

ヒットのずれ表示チェックボックスをチェックすると、PC-
DMISは、ヒットが行われた場所に矢印を描き、名目偏差を引いた測定値を表示します。

丸みのあるフィーチャーに円形動作使用

[円形要素に円形動作を使用]チェックボックスをチェックし、パーツにヒットを行って測定ルーチンを「学習」している場合、PC-
DMISは円形要素の内部と外部に円形動作コマンドを自動的に配置します。[円形要素に円形動作を使用]チェックボックスをチェックし、パーツにヒットを行って測定ルーチンを「学習」している場合、PC-
DMISは円形要素の内部と外部に円形動作コマンドを自動的に配置します。円形要素には、円、円筒、円錐、及び、球が含まれます。しかしながら、この状態は、学習モードでのみ効果を持ちます。いったん円形/動作コマンドが、要素内に挿入されると、ユーザーがそれを除去しない限り、そこで機能し続けます。

このオプションのPC- DMIS設定エディタの`UseCircularMoves`エントリは、0または1のいずれかに設定されます。レジストリエントリーの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーを変更する」の章を参照して下さい。

ポイント限定モードのポイントの厚さ

このチェックボックスをチェックすると、ポイント限定モードで作成されたポイントに、ご希望の厚さを適用できます。このチェックボックスをチェックすると、同一ダイアログボックス内の**厚さ**ボックスを編集のため利用することが可能になります。その後、厚さを入力し、ポイント限定モードで作成されたポイントにその厚さを適用することができます。

より詳しい説明については、「ポイント限定モード」及び「厚さ」を参照して下さい。

よりよいパーツ配置の調節

パーツ配置を変更するとその都度、PC-DMISは、変更された配置に従って、下記のコマンドを更新すべきか否か、問います。このチェックボックスがチェックされており、このプロンプトに対して**いいえ**ボタンがクリックされた場合、PC-DMISは必要に応じ、MACHINETOPART変換を変更します。このチェックボックスのチェックが消されている場合、MACHINETOPART 変換は変更されません。

CADのIDをフィーチャーに使用

CADのIDを要素に使用チェックボックスを用いて、CADファイルから要素IDをインポートできます。このチェックボックスをチェックすると、**自動要素** ダイアログボックス内でCAD要素がマウスの左クリックにより選択された時に、PC-DMISが、そのダイアログボックス内に、CADからのIDを自動的に入力します。この値を使用すると、作成されたフィーチャーがそのIDを持つことになります。

実行中に名目値発見

☑ Find Nominals during Execution

[実行時に公称値検索]チェックボックスを選択すると、測定ルーチン実行中に、面およびベクトル点両方に対する新規の公称値を検索します。PC-DMISが用いる公差の定義に関しては、「実行時の公称値検索の公差」を参照して下さい。また、「公称値検索の公差」も参照して下さい。

穴検索が失敗した場合の自動継続実行

[穴発見に失敗した場合の自動継続実行]チェック ボックスがチェックされていると**[自動要素]**ダイアログ ボックス内の「**穴発見**」オプションが穴の発見に失敗した場合、PC-DMISはパーツの実行を自動的に継続します。

旧バージョンでは、「**穴発見**」オプションが失敗した場合、PC-DMISは、この測定ルーチンを継続して実行するために、穴の中心点にプローブを位置するようプロンプトしていました。しかし、**穴発見に失敗した場合の自動継続実行**チェックボックスがチェックされていると、PC-DMISは、自動的にレポートにエラーメッセージを印刷し、測定ルーチンの残分の実行を継続します。

穴発見に関するより多くの具体的情報については、「PC-DMIS CMM」ドキュメンテーションで「接触穴発見プロパティの利用」トピックを参照してください。

始動ダイアログ表示

始動ダイアログ表示チェック ボックスを用いて、始動時のたびに、PC-DMISが、**ファイルを開く**ダイアログ ボックスを表示するか否かを決定できます。このダイアログボックスは開こうとする使用可能な測定ルーチンの一覧を表示します。

このチェック ボックスのチェックを消去すると、PC-DMISは、この始動ダイアログを作動不能にします。

[ファイルを開く]ダイアログボックスについて詳しくは、「基本的なファイルオプションの使用」の章にある「既存のパーツプログラムを開く」を参照して下さい。

ラベルの自動的位置付け

ラベルの自動的位置付け チェック ボックスは、当該パーツ上にフィーチャーラベルを自動的に位置付けるよう、PC-DMISに指示します。ですから、パーツモデル上でパン、ズーム、または旋回オペレーションが行われる都度、フィーチャーIDラベルの再配置付けが行われます。

また、フィーチャーIDラベルの右クリック、及び、ショートカット メニューから**ラベル プロセス | ラベルの自動的位置付け**の選択によって、ラベルの自動的位置付けを作動させることもできます。

プログラム モード中のプローブ動画

プログラムモード中にプローブをアニメーション表示
チェックボックスは、プログラムモード中にプローブのアニメーションを有効化します。このチェックボックスを選択すると、CADからヒットが生成された時にプローブがグラフィックス表示ウィンドウにヒットの取得をアニメーション表示します。

テキスト ボックス内のアイコン表示

テキスト ボックス内のアイコン表示チェック ボックスを用いて、フィーチャー
タイプ、または、ディメンション タイプを描くアイコンを、テキスト
ボックス、及び、フィーチャーIDラベル内に表示するか、否かを決定することができます。テキスト ボックスには、フィーチャーID、ディメンション情報、及び、ポイント情報のテキスト
ボックスがあります。

テキスト ボックスに関する、より詳しい説明については、「CAD表示の編集」の
章にある「テキスト ボックス モード」を参照して下さい。

実行時における測定ルーチンの保存

[実行時における測定ルーチンの保存]チェック
ボックスは、実行中常にその時点での測定ルーチンを自動的に保存するようPC-
DMISに指示します。

編集ウィンドウでのDMISボタンの使用

編集ウィンドウでのDMISボタンの使用チェック ボックスは、**DMISモード**モード
アイコンが**編集ウィンドウ**ツール バー上に表示されるか否かを決定します。

増分維持のパッチ スキャン

増分維持のパッチ スキャンチェック ボックスは、パッチ
スキャンの新ラインのそれぞれに、直前のラインからの増分を継続して使用するよう強います。このチェック
ボックスが選択解除されている場合、スキャンは、各ライン上の初回ヒットを行う前に、最低のスキャン増分に戻ります。

自動ずれ文字の使用

[自動車用偏差文字] チェック ボックスを用いると、PC-
DMISは、位置度の測定結果および位置の測定結果レポートで偏差番号の後に文字を付け加えます。PC-DMISは、以下の文字を挿入します

- **F** は、車の前方向にフィーチャーがずれる場合、挿入されます。

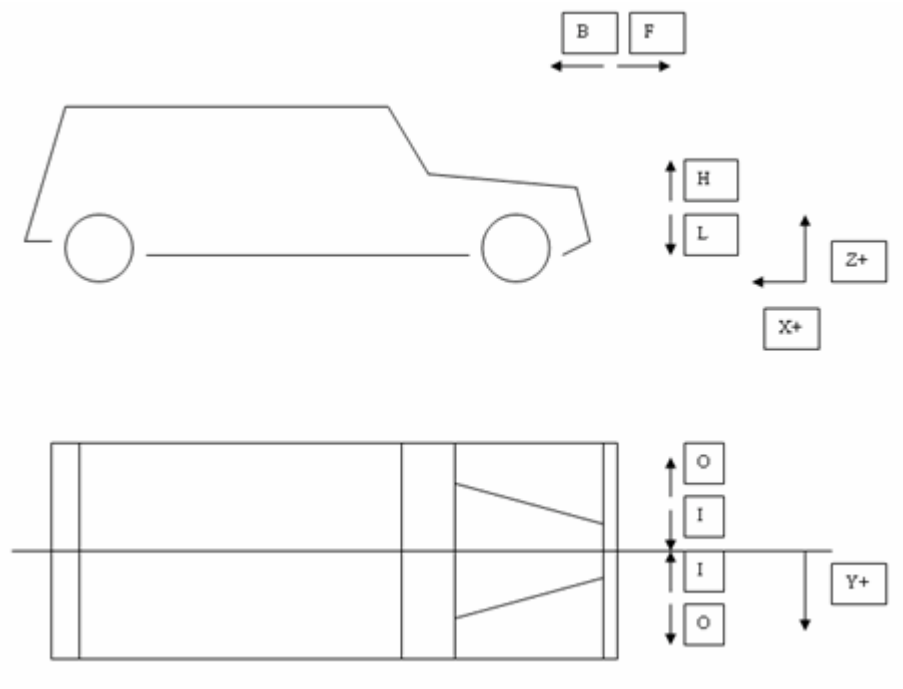
- **B** は、車の後ろ方向にフィーチャーがずれる場合、挿入されます。

- **I**
は、車の中心線に向かってフィーチャーがずれる場合、挿入されます（車の幅が狭すぎることを意味する）。

• **O**
は、車の中心線から遠ざかってフィーチャーがずれる場合、挿入されます（車の幅が広すぎることを意味する）。

• **H**は、車の上方向にフィーチャーがずれる場合、挿入されます。

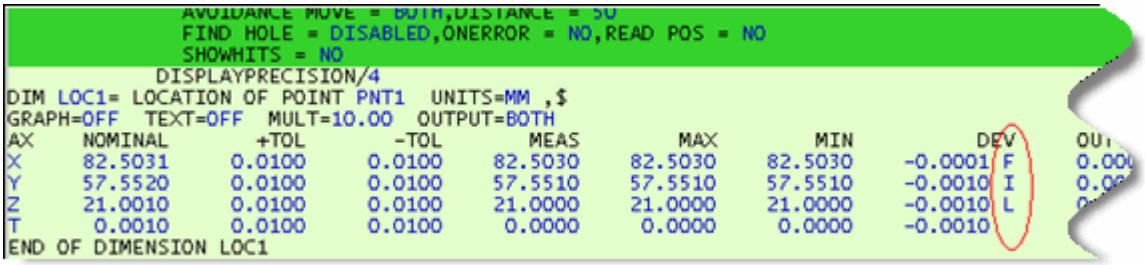
• **L** は、車の底方向にフィーチャーがずれる場合、挿入されます。



自動ずれ文字マップ

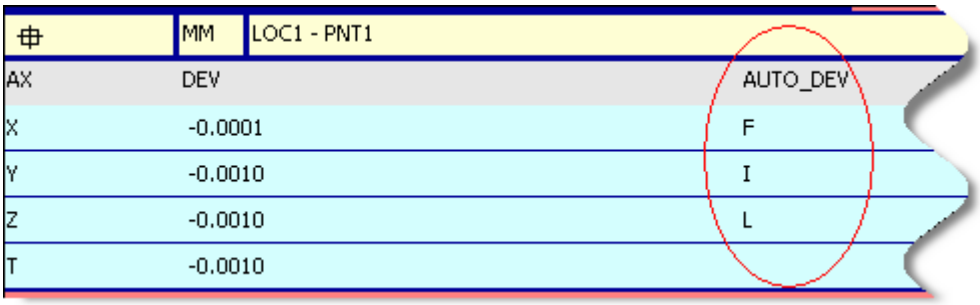
これらの文字は、位置および位置度の測定結果でレポートされた偏差番号の直後に追加されます。これらの偏差文字は適切な測定結果用にレポートウィンドウの中にも現れます。

コマンド モードでの車両偏差文字



```
                AVOIDANCE MOVE = BOTH,DISTANCE = 50
                FIND HOLE = DISABLED,ONERROR = NO,READ POS = NO
                SHOWHITS = NO
              DISPLAYPRECISION/4
DIM LOC1= LOCATION OF POINT PNT1  UNITS=MM ,$
GRAPH=OFF  TEXT=OFF  MULT=10.00  OUTPUT=BOTH
AX    NOMINAL       +TOL       -TOL       MEAS        MAX        MIN        DEV    OU
X     82.5031     0.0100     0.0100    82.5030    82.5030    82.5030    -0.0001 F    0.00
Y     57.5520     0.0100     0.0100    57.5510    57.5510    57.5510    -0.0010 I    0.0
Z     21.0010     0.0100     0.0100    21.0000    21.0000    21.0000    -0.0010 L    0.
T      0.0010     0.0100     0.0100     0.0000     0.0000     0.0000    -0.0010
END OF DIMENSION LOC1
```

レポート ウィンドウでの車両偏差文字



中	MM	LOC1 - PNT1
AX	DEV	AUTO_DEV
X	-0.0001	F
Y	-0.0010	I
Z	-0.0010	L
T	-0.0010	

スキャン時の発見名目値をオーバーライド

スキャン時の発見名目値オーバーライド使用チェック
ボックスを用いて、スキャン実行時に、スキャンの測定ポイント用の名目値をサーチ中、発見済みの名目値をオーバーライドすることができます。

> **付記:**
> 発見済みの名目値をオーバーライドするには、スキャン実行時に、測定された名目ポイント値のうち、最低一つが発見できない場合に限られます。

詳しい情報については、「測定ルーチンの編集」の章にある、「検索された公称値を上書き」を参照して下さい。

スキャン中名目値発見用に優先表面のみ使用

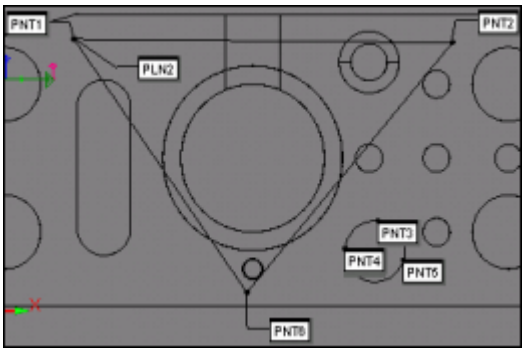
スキャン中公称値検索用に優先面のみ使用チェック ボックスを選ぶと、PC-DMIS（測定ルーチン実行中）は**CAD要素の編集**ダイアログ
ボックスで設定された優先面においてのみ、スキャンの測定ポイント公称値を検索します。

「CAD表示の編集」の章にある「CAD編集」を参照して下さい。

平面のｱｳﾄﾗｲﾝ表示

平面の外郭表示チェック ボックスは、通常使われる小型の三角形の記号のかわりに、PC-DMISが、新規に測定または構築したプレーンの要素を作成したときにグラフィックス表示ウィンドウに実際の平面外郭を表示するか否かを決定します。

例えば、このチェック
ボックスをチェックし、平面製作のために三点を測定した場合、平面を表す三角形記号が、その寸法に合わせて表示され、その三交点が3つの測定ポイントに正確に位置付けられます。



このチェック ボックスが選択された状態で、製作された平面の表示例

注記: このチェック
ボックスの選択、未選択に関わらず、*既存の*外郭が再描画されることはありません、その時点以降に作成された平面にのみ作用します。既存の外郭変更は、手動で行う必要があります。

既存の平面の表示を変更するには:

1. 編集ウィンドウにアクセスして下さい。
2. 編集ウィンドウをコマンド モードにして下さい。
3. 変更したい平面の表示用のコマンドへ進んで下さい。例えば、

   `PLN1 = FEAT/PLANE,RECT,TRIANGLE`

4. 三角形または外郭フィールドをハイライト表示するまで、タブ キーを押して下さい。
5. このフィールドの入手可能な値の間で切り換えを行うには、F7 または F8を押して下さい。

   - 三角形は、平面が三角形として表示されます。
   - `OUTLINE`は平面を構築する点の実際のアウトラインとして平面を表示します。
   - `NONE`は、平面の特定図を隠します。

   これらの表示方式の例については、「平面要素の構築」トピックの下の「表示エリアの使用」を参照してください。

6. グラフィック表示ウィンドウに結果を表示するようにTABキーを押して下さい。

または、右クリックして[**編集**]を選択しますと、平面のダイアログボックス自体に変更を加えることができます。

この設定は、PC-DMIS設定エディタの[**オプション**]セクションで`DisplayOutlineOfPlane`レジストリエントリに対応します。

理論値をパーツ座標保存として扱う

理論値をパーツ座標保存として扱うチェックボックスを使用すると、PC-DMISは、パーツ座標系に保存されている値のように理論値を扱います。このチェックボックスは測定ルーチンがループを実行し、ループコード内でアラインメントが変化するケースのために追加されました。

LOOP/STARTコマンドのオフセットパラメータは自動的にこの問題を処理します。これはWHILE - END/WHILEなどのLOOP/STARTおよびLOOP/ENDコマンドを使用しないループ測定ルーチン用です。

以下のサンプルは疑似測定ルーチンと考えてください：

```
ASSIGN/COUNT = 4

ASSIGN/I = 1

WHILE/I<4

  LOOPALIGN = START/ALIGN

    ALIGN/TRANSLATION OFFSET, X, 50

    END/ALIGN

  MYCIRCLE = MEAS/CIRCLE

    THEO/ 0 , 0 , 0

ASSIGN/I = I + I

END_WHILE/
```

ループからのXの値は、毎回50で移動して調整をするため、Xの値は50で移動します。PC-DMISはパーツ座標にフィーチャーデータを保存せず、CADと測定器の座標にしますが、フィーチャーの効果は、たとえ毎回ループから調整が変更されてもこの状態から変わりません。なぜならCADTOPART とPARTTOMACHINEが調整の数を同じように変換するからで、CADTOMACHINEの算式の効果は変わりません。これはデフォルト（チェックボックスが選択されていないとき）によって、PC-DMISはループから同じスポットを４回全て測定することになります。

PC-
DMISが、座標を内部的にパーツ座標内に記憶する場合には、このサンプルはうまく機能する、と考えられます。そこで、このチェック
ボックスが役に立ちます。このチェックボックスをチェックすると、PC-
DMISは、初回の測定時に使用されたパーツ配置を追跡し続けます。初回以降のフィーチャー測定では、PC-
DMISは、その時点でのパーツ配置が、初回のものと異なるか否かを検査します。異なる場合には、PC-
DMISが、その違いを算出し、フィーチャーをその違い分だけ移動し、このサンプルが予定通りに機能することになります。

この機能はPC-
DMISの内部機能を単に変更するのではなく、既存の測定ルーチンを保護するためのチェック
ボックスとして設けられました。

Whileループ中に理論値を更新

実行時に測定ルーチンでWhileループを使用して要素を複数回測定するとき、ソフトウェアはこれらの要素の複数のコピーを作成します。CADパーツ座標系が実行中に変更しても、彼らは実行前に使用される元のパーツ座標系フレームになるために、要素のCADの値が変更されるように、**whileループで理論値を更新**チェックボックスはコピーされた要素の理論値を更新します。

変数をパーツプログラム全体で見えるようにする

通常、サブルーチンが呼び出されると、すべての変数は「開放され」使用できなくなります。**[変数をグローバルに参照]**チェックボックスは、測定ルーチン全体を通して任意の変数をグローバルに「参照」、または使用可能にします。

デフォルト設定では、このチェックボックスが選択されていないので、サブルーチンにある変数は、メインの測定ルーチン内の同一名称の変数に保存されているデータに置き換えられることはありません。

例:

```
ASSIGN/V1 = 1

C1 = CALLSUB,MYSUB

.

.

.

SUBROUTINE/MYSUB
```

```
COMMENT/OPER,V1

END/SUB
```

- このチェックボックスの選択をクリアすると、変数はグローバルに参照されません。V1はサブルーチン内から参照できないので、OPERコメントに値0が表示されます。
- このチェック·ボックスを選択した場合、変数はグローバルに表示されています。V1はサブルーチン内から見ることができるので、OPERコメントは、 1の値を表示します。

変数に関する情報は、「式および変数の使用」の章を参照してください。

DMIS極様式の使用

このオプションを選ぶと、極角が、標準DMIS極様式で表示されます。

- XY平面（プラスZ、または、マイナスZ）座標「a」は、x-軸線からy-軸線に向かっての角度です。
- YZ平面（プラスX、または、マイナスX）座標「a」は、y-軸線からz-軸線に向かっての角度です。
- ZX平面（プラスY、または、マイナスY）座標「a」は、z-軸線からx-軸線に向かっての角度です。

サブルーチンから設定を戻す

このチェックボックスは、実行フローがサブルーチンから戻る際に、測定ルーチンの残りの設定に対して、サブルーチンに適用されるグローバル設定が永久的に変更されるかどうかを定義します。

- このチェックボックスを選択すると、サブルーチン内のグローバル設定が「戻され」、測定ルーチンの残りに対して使用されます。
- このチェックボックスをクリアした場合、サブルーチン内のグローバル設定はそのサブルーチン内でのみ適用されます。実行フローがサブルーチンを抜けた後は以前の設定に戻されます。

例えば、サブルーチンの前に「`SCANSPEED/10`」ステートメント、サブルーチン内に「`SCANSPEED/5`」ステートメントが存在するとします。このチェックボックスを選択すると、実行フローがサブルーチンを抜けた時、5のスキャンスピードが戻され、その値が測定ルーチンの残りで使用されます。このチェックボックスを選択しない場合、実行フローがサブルーチンを抜けるとスキャン速度は自動的に元の値である10に戻ります。

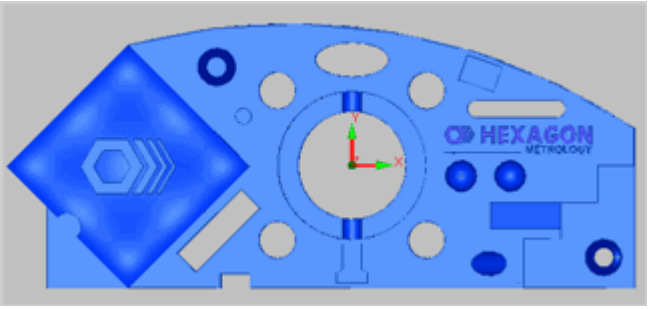
実行用プログラム レイアウトの使用

このチェックボックスをチェックすると、プログラム時に加えて、実行時に、同一のウィンドウレイアウトを使用することができます。

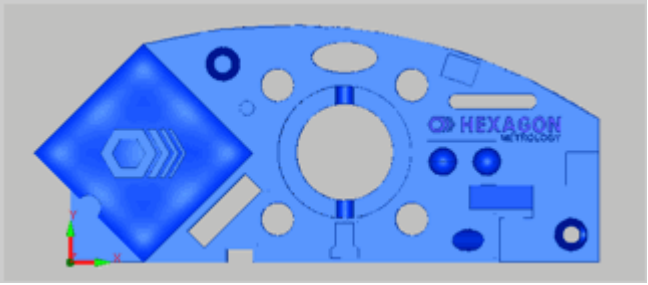
車体内のパーツ配置強要

車体内のパーツ配置強要チェックボックスは、ご希望のパーツ配置が車体パーツ配置になるよう強要します。このチェックボックスをチェックすると、どのパーツ配置方法が選択されている場合でも、車体パーツ配置はCADのものと常に一致します。このチェックボックスを選ぶと、最初のパーツ配置後の二次変換が行われます。

例えば、ライツメス テクニックのテストブロックの中心穴に移動して、このチェックボックスを選択した場合、依然、そのブロック角が原点となりますが、原点設定でその中心穴が使用されたので、中心穴の関するレポートは完全に行われます。



このチェック ボックス使用前のパーツ配置



このチェック ボックス使用後のパーツ配置

既存ディメンションの軸線保存

既存ディメンションの軸線保存チェックボックスがチェックされていると、寸法測定されたフィーチャーを別のフィーチャー形式に切り換える場合でさえ、寸法測定されたフィーチャーの既存の軸線を更新せずに、保存します。このチェック

ボックスを選択しない場合、関連のディメンション軸線は、選択のフィーチャーに応じて更新されます。

デフォルトでは、これは選択されません。

GDS出力用パーツ配置の選択

このチェック ボックスを用いて、PC-DMISが、.gds
ファイルとして出力するパーツ配置を選択するためのダイアログ
ボックスを表示するか否か、を決めることができます。このチェックボックスをチェックすると、PC-
DMISでは、.gdsファイルに出力するパーツ配置を選択することが可能です。このチェックボックスが選択されていない場合、PC-
DMISは前回使用されたパーツ配置を自動的に出力します。「高度なファイルオプションの使用」内の「GDSファイルへのエクスポート」を参照して下さい。

ｷﾞｬｯﾌﾟのみ

このチェック
ボックスは、現在の測定ルーチンの、新規の[位置の測定結果]で使用されている[**ギャップのみ**]チェック ボックスのデフォルト値を設定します。

- **ギャップのみ**が選択される場合、 測定ルーチンが次回に起動される時、`GAPONLY/ON`
  コマンドが編集ウィンドウ上に付け加えられます。その上、新規の位置寸法が作成されるたびに、位置寸法の**要素位置**ダイアログボックス（**挿入|寸法|位置**）でデフォルトで**ギャップのみ**チェックボックスが自動的に選択されます。

- **ギャップのみ**が選択解除されると、**要素位置**ダイアログ
  ボックスは、新規の位置寸法が作成される度に、**ギャップのみ**チェックボックスをも選択解除します。

オフラインでの追跡機パラメータ表示

ポータブルのライカ追跡機デバイスをオンライン モードで使用し、フィーチャー
コマンドを作成する場合、PC-DMISは、これらのフィーチャー
コマンド内の編集ウィンドウに、以下の情報を自動的に挿入します:

- **RMS** - 各ヒットの二乗平均平方根の値。

- **プローブ タイプ** - フィーチャー測定に用いられた、プローブのタイプ。

- **時間刻印機** - フィーチャーが実行、または、学習された時間。PC-
  DMISは、実際にオンライン
  モードでフィーチャーを測定した場合にのみ、この時間を更新します。

- **環境条件** - 温度、気圧、及び、湿度のような情報。

オフラインモードではPC-DMIS は機能は異なります。これらの Leica トラッカー項目は **[オフラインチェックでのトラッカーパラメータの表示]**ボックスを選択した後にのみ、および、このオプション選択後に測定ルーチンに挿入された新しい要素コマンドに対してのみ表示されます。以前に測定された要素は、各要素コマンドに空のトラッカーパラメータグループを追加して恒久的に構造を変更しない限り影響されません。

注記:
このチェックボックスを選択すると、後でこのチェックボックスのチェックを外したかどうかにかかわらず、測定ルーチン構造のパラメータが永久的に変更されます。例えば、既にこの機能を幾つかのフィーチャーに使用した後で、このチェックボックスのチェックを消去した場合、新規に挿入されたフィーチャーは、依然、追跡機パラメータ グループを含みます;
しかし、そのグループはグループ項目を持ちません。

これらの項目が、フィーチャー
コマンド上に表示される時の、その場所、及び、その表示方法に関する、より詳しい説明については、「PC-DMISポータブル」文書を参照して下さい。

実行中にレポートをアップデート

これは測定ルーチンの実行中にレポートウィンドウにレポートが作成される必要があるかどうか、または実行が完了した後にレポートが作成される必要があるかどうかを決定します。無効にした場合、レポートウィンドウは実行中にアップデートするリクエストを送信しません。このチェックボックスをオフにするとレポートの生成速度を向上することができます。

実行中にサマリモードをアップデート

これは、実行中または実行が完了した後にサマリモードをアップデートするかどうかを決定します。無効にした場合、編集ウィンドウのサマリモードは実行中にアップデートするリクエストを送信しません。

マークされた場合、通常実行中にアップデートされる情報は以下のとおりです:

- 要素の測定値
- 測定結果の測定値、偏差、公差範囲外など

注記: このチェックボックスをオフにするとレポートの生成速度を向上することができます。

ビジョンロードプローブダイアログを抑制します

この設定は光学測定機でのみ使用されます。「PC-DMIS Vision」文書の「利用可能なVision設定オプション」トピックを参照してください。

カメラベクトルに沿ってフォーカス

この設定は光学測定機でのみ使用されます。「PC-DMIS Vision」文書の「利用可能なVision設定オプション」トピックを参照してください。

自動エッジ強度

この設定は光学測定機でのみ使用されます。「PC-DMIS Vision」文書の「利用可能なVision設定オプション」トピックを参照してください。

実行の時に入力をクリアする

チェックボックスをオンにすると、測定ルーチンが実行されるたびに、表示されている任意の入力フィールドは空になります。この機能がオンになっていない場合、表示された任意の入力フィールドは、前の入力からの内容が表示されます。

平面を表示しません。

測定された平面要素あるいは構築された平面要素が加えられる場合、PC-DMISはどちらかとして暗くなった平面を平面を構成するヒットのアウトライン、あるいは三角形として表示するオプションを持っています。それがグラフィック表示ウィンドウがごちゃごちゃしないように作成時に描かれた影付きの平面を非表示にするには、このチェックボックスにマークを付けることができます。これは単に引かれた平面のみを隠し、実際の平面要素はまだ作成されます。この設定は、PC-DMIS設定エディタの[**オプション**]セクションで`DoNotDisplayPlane`レジストリエントリに対応します。

ﾌﾟﾘﾝﾄ背景色

この**背景色を印刷**チェックボックスは、**出力設定**ダイアログボックスの**背景色を印刷**チェックボックスのデフォルト状態を決定します。詳細は「デフォルトプリンターへ出力」を参照してください。この設定は PC-DMIS設定エディタの**印刷**セクションの`PrintBackgroundColors`レジストリに対応しています。

レガシー 2D プロファイルを使用

このオプションを選択すると、プロファイル２Ｄ（選択）のレガシーバージョンとプロファイル２Dの最新のバージョンの間で（選択解除）トグルで切り替えます。

旧式のプロフィール2Dは、プロフィール2Dの最新バージョンにおいてもはや利用可能でない、端とスキャンとマッチするオプションを持っています。

レガシープロファイル2D機能の使用方法の詳細については、ビジョンのトピック「**ビジョンプロファイル２D**」を参照ください。

焦点位置に移動

このチェックボックスは、焦点計測が終了した時に、ステージの動きを制御します。

- このチェックボックスが選択されている場合、測定機は、焦点走査運動終了時の焦点位置に戻します。
- このチェックボックスの選択がクリアされた場合、焦点測定の後で動きか測定があれば、機械は焦点位置へ移動しません。代わりに、それは、直接的に焦点走査のトップから次の機械位置へ移動します。

Clearance Cube は開始/終了面のためにチップベクトルを使用します。

このチェックボックスが選択された場合、プローブ先端のベクトルを測定ルーチンに挿入された新規の要素はデフォルトClearanceCubeの開始面と終了面として使用します。そうでなければ、ClearanceCube開始面あるいは終了面は要素のベクトルによって決定されます。

Start Points Always Track Execution

[**出発点が常に実行を追跡する**]チェックボックスは出発点が常に測定ルーチンの実行を追跡することができるようにします。具体的には、それは、ユーザが出発点を作成したか、**実行**ダイアログ・ボックス中の**キャンセル**ボタンが選択されたのでPC-DMISがそれを作成したかどうか判断します。

チェックボックスが選択された場合：

- 実行を停止するには、[**キャンセル**]が選択された場合、 PC-DMISは、それが挿入されている最低の腕番号開始点にあるように編集ウィンドウにある挿入点を調整します。
- **キャンセル**が選択されなくて、実行が正常に完了された場合、 PC-DMISは、開始点をチェックします。**キャンセル**が以前に選択されたので、PC -DMISがそれらを挿入した場合、 PC-

DMISは、それらをクリアします。このケースでは、PC-
DMISは測定ルーチンを実行した以前にそれが出発した位置に挿入点を戻します。

- [**キャンセル**]が選択された場合、 PC- DMISは開始点を挿入します。

チェックボックスのマックがクリアされた場合：

- 実行を停止するには、[**キャンセル**]が選択されて、PC-DMISが開始点を挿入した場合、PC-
DMISは、それが挿入されている最低の腕番号開始点にあるように挿入点を調整します。

- **キャンセル**が選択されなくて、実行が正常に完了された場合、 PC-
DMISは、開始点をチェックします。**キャンセル**が以前に選択されたので、PC -
DMISがそれらを挿入した場合、 PC-
DMISは、それらをクリアします。このケースでは、挿入点は測定ルーチンを実行した前にそれが出発した位置に戻ります。

- [**キャンセル**]が選択されると、腕には開始点が存在しない場合は、または、**キャンセル**が以前に選択されたことによるそれらを挿入した場合、 PC-
DMISは開始点を挿入します。開始点が挿入された場合、 PC-
DMISはそれを調整しません。

開始点の詳細については、 「開始点の設定」を参照してください。

QuickAlignにスキャン戦略の使用

[QuickAlignのためのスキャン戦略の使用]チェックボックスは 、QuickAligncheck 操作中の DCC モード要素が.ipd (inspection plan defaults)
ファイルで定義されるスキャン戦略を使用して作成されるかどうかを決定します。しかしながら、ユーザがその自動要素タイプを修正し、整列を生成する前に新しい戦略を選択すれば、それはより新しい戦略を思い出して使用し、もはや.ipdファイル中のデフォルトを使用しません。

下記の条件が当てはまる場合、QuickAlign 操作のためにスキャン戦略が使用されます：

- このチェックボックスがマークされている。

- 手動アライメントにおける要素が自動要素である。

- プローブタイプはスキャンプローブである。

このチェックボックスがマークされていない場合、PC-DMIS
はデフォルトの接触トリガ戦略を使用します。

ストラテジーに関する情報については、「PC-DMIS
CMM」文書の「測定ストラテジーを使用した操作」を参照してください。

QuickAlign の詳細については、「アラインメントの作成および使用」の章の「QuickAlign について」を参照してください。

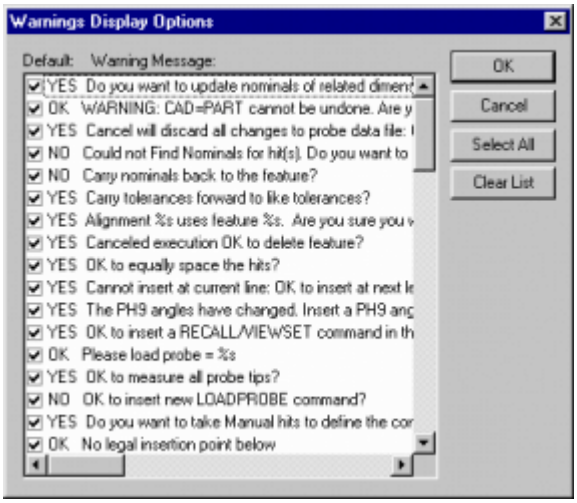
生成時にレポートファイルを開く

これは測定ルーチンが実行を終了したとき、生成された.pdf、.rtf または xls レポートファイルがオープンされるかどうかを決定します。これにマークを付けると、PC-DMISは[出力設定]ダイアログボックスの[レポート]タブと[**Excel**]タブの両方の[レポートの表示]チェックボックスにマークを付けます。[出力設定]ダイアログボックスについて詳しくは、「レポートウィンドウの印刷」トピックとそのサブトピックを参照してください。

警告

Warnings

セットアップオプションダイアログボックス（編集|環境設定|セットアップ）の全般タブの[警告]ボタンは警告表示オプションダイアログボックスを表示します。



[警告表示オプション] ダイアログ ボックス

このダイアログボックスにより、PC-DMIS にすでに消した警告メッセージを再表示する指示ができ、またすでに消した警告メッセージのデフォルト行為を変更できます。デフォルトによりこのダイアログボックスは空になります。警告メッセージが表示される場合、PC-DMISはこのメッセージを再度表示しないオプションを提示します。この警告を表示しないと選択すると、警告が出るのはこのダイアログ ボックスで最後となります。

特定の警告に関する情報をご希望の際は、「PC-DMIS Settings Editor」文書の「オプション」項目にある「警告（オプション）」トピックをご覧下さい。

重要：それらがオフにされれば、警告メッセージが単に**警告表示オプション**ダイアログボックスに現われます。警告がすべてオフになったら、ダイアログボックスは空になります。

警告メッセージを再度受け始めるには:

1. **[警告表示オプション]** ダイアログボックスにアクセスします。オフにされたすべての警告を表示します。
2. 警告を選択し、チェックボックスをクリアします。
3. **OK**をクリックして、警告を削除します。PC-DMISは再びその警告メッセージの表示を開始します。

[リストをクリア]ボタンは、このダイアログボックスにある全項目のチェックボックスをクリアします。これによって、PC-DMISは、すべての警告メッセージを表示するデフォルト モードに戻ります。

警告メッセージ用のデフォルト行為を変更するには:

1. 警告が現れると、**質問を繰り返さない**チェックボックスを必ずクリックするようにして下さい。これにより、警告は、**警告表示オプション**ダイアログ ボックスに送られます。こうして、
2. **[警告表示オプション]** ダイアログボックスにアクセスします。オフにされたすべての警告を表示します。
3. デフォルト行為の変更を望む、警告メッセージをダブルクリックして下さい。PC-DMISがその警告を表示し、ご希望の新規のデフォルト行為の選択が可能になります。
4. 新しいデフォルトのアクションを選択して、新しいアクションの一覧を更新します。
5. **OK**をクリックして、選択を保存します。

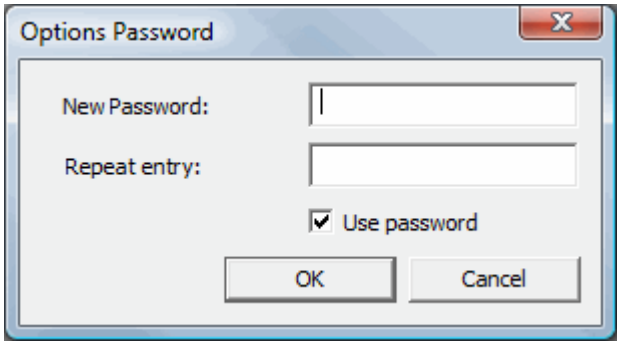
パスワード

パスワード ボタンを用いて、**セットアップ オプション**ダイアログボックスへのアクセスをパスワードによって保護することができます。

お客様のセットアップオプションをパスワードで保護するには:

1. **セットアップ オプション**ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | セットアップ**)にアクセスして下さい。
2. **一般**タブを選択して下さい。

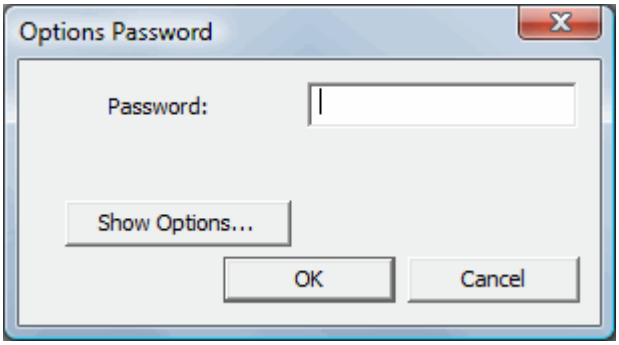
3. *[**パスワード**]ボタンをクリックします。[**オプションのパスワード**]ダイアログボックスが現れます。*



[パスワードのオプション]ダイアログ ボックス

4. **新パスワード**ボックス内に、ご希望のパスワードをタイプ入力して下さい。
5. お客様の入力内容を確定するために、**入力内容を繰り返し入力**ボックス内に、同一のパスワードをもう一度、タイプ入力して下さい。
6. **パスワードを使用**チェック ボックスを選択して下さい。
7. **[OK]** をクリックします。

次回より、**[セットアップ オプション]**ダイアログボックスにアクセスしようとした時、事前にパスワードを入力するよう催促されます。パスワードには大文字、小文字の区別があります。



たとえ設定の編集にアクセスするパスワードがなくても、**[オプションを表示]**ボタンを使用すれば常に利用可能な設定を表示できます。これは**セットアップオプション]**ダイアログボックスが表示されていますが、変更することができません。

重要:
保護モードのパスワードは定義したすべてのその他のパスワードを優先して上書きます。**設定オプション** ダイアログ

ボックスまたはIPDファイルにパスワード保護されて有効な場合、保護モードが有効にされたときパスワードを定義を使用する必要があるという意味です。

[一般]タブのその他の編集ボックス

一般タブ のその他のボックスを使用すると以下のオプションが編集できます:

倍率ボックス

Scale factor: 1

倍率ボックスは、入力した倍率に測定データを拡大または縮小します。例えば、円が測定され、直径が1.0インチであり倍率が0.95である場合、測定値は0.95インチとしてレポートされます。

[公称値の検索誤差]ボックス

Find nominals tolerance: 0.0098

このボックスは、最初に**公称値検索**チェックボックスを洗濯した場合に利用可能になります。「公称値検索」を参照してください。

公称値の検索誤差 ボックスを使用して、PC-DMISが公称値を検索する際に使用する誤差の量を入力します。デフォルトは10mmです。

この値を設定し、**[OK]**をクリックすると（または、学習モードで公称値検索を実行した場合）、PC-DMISはこの値をアクティブなチップの半径と比較します。この値がチップの半径より小さい場合、PC-DMISはこの値をアクティブなチップの直径と合うよう変更します。

[偏差の誤差を表示]ボックス

Show deviations tolerance: 0.005

[偏差の誤差を表示] ボックスを使用して、PC-DMIS がヒットの偏差を表示する際に PC-DMIS が使用する誤差の量を入力します。このオプションは、最初に**ヒットの偏差を表示**チェックボックスを選択した場合のみ利用できます。

[偏差矢印の乗数]ボックス

Deviation arrow multiplier: 1

偏差矢印の乗数ボックスは、最初に**ヒットの偏差を表示**チェックボックスを選択した場合のみに利用できます。矢印がグラフィックス表示ウィンドウに現れ、取得したヒットがそれぞれマークされ、偏差が表示されます。このボックスに入力する値が大きくなるほど矢印のサイズも大きくなります。

[厚さ]ボックス

Thickness: 0.1

厚さボックスは **ポイント限定モードの 点の厚さ**

チェックボックスとともに機能します。**ポイント限定モードの点の厚さ**チェックボックスを選択すると、ポイント限定モードで作成された各点にこのボックスの厚さが適用されます。

詳しくは「ポイント限定モード」および「ポイント限定モードの点の厚さ」を参照してください。

実行エリア

[**一般**]タブの[**実行**]エリアの項目を使用して、以下のオプションを編集することができます:

ランダム順実行時の誤差

[**ランダム順実行時の公差**]ボックスを用いて、ランダム順実行モードで測定ルーチンが実行されている場合、PC-DMISが幾何要素を測定するための、ヒットの公差範囲を定義することができます。

最初のヒットが、指定の公差以上幾何要素から離れている場合、PC-DMISは測定ルーチンを検索して最初のヒットがユーザーの最初のヒットに最も近い幾何要素を検索し、その要素をかわりに実行します。より詳しい情報については、「詳細ファイルオプションの使用」の章にある「ランダム順での実行」を参照して下さい。

PC-DMISは、誤差値をお手持ちの測定ルーチンを共に保存します。これにより、ご希望の場合には、異なる測定ルーチンが、異なる検索ゾーンを持てます。

FindNoms 実行の誤差

FindNoms 公差の実行ボックスを用いて、測定ルーチン実行中、PC-DMISが、名目値を見つける時に使用する公差値をタイプすることができます。

最初に**実行中に名目値を発見**チェックボックスが選択された場合、このボックスが入手可能になります。詳細については、「実行中に名目値の検索」を参照してください。

実行時間を記録および表示する

実行時間を記録及び表示チェックボックスが選択された場合、 PC-DMISは、**実行**ダイアログボックスで測定ルーチンまたはミニルーチンの残り実行時間を表示します。時間は実行のDCC部のみのために記録されます。

このチェックボックスは、ポータブル測定機（実行時間はDCCの測定値しかに適用されません）には利用できません。

測定ルーチンまたはミニルーチンが実行されるたびに、 PC-DMISその実行時間を記録し、格納します。次回の実行を起動する時に、最後の時間に記録されたものは**実行**ダイアログボックスに表示されます。こうして、ユーザが要素を追加や削除したり、測

定ルーチンまたはミニルーチンに速度を減少や増加することを決定する場合に、 PC-DMISは、実行時間の変更を記録します。

PC-DMISは.MiniRoutines.xmlファイル<*測定ルーチンの名前*>に実行の時間を記録します。このファイルは、測定ルーチンと同じフォルダにあります。測定ルーチンがこのファイルが存在しない際に、実行される場合に、 PC-DMISは、ファイルを作成します。このファイルの詳細については、「ミニルーチン」を参照してください。

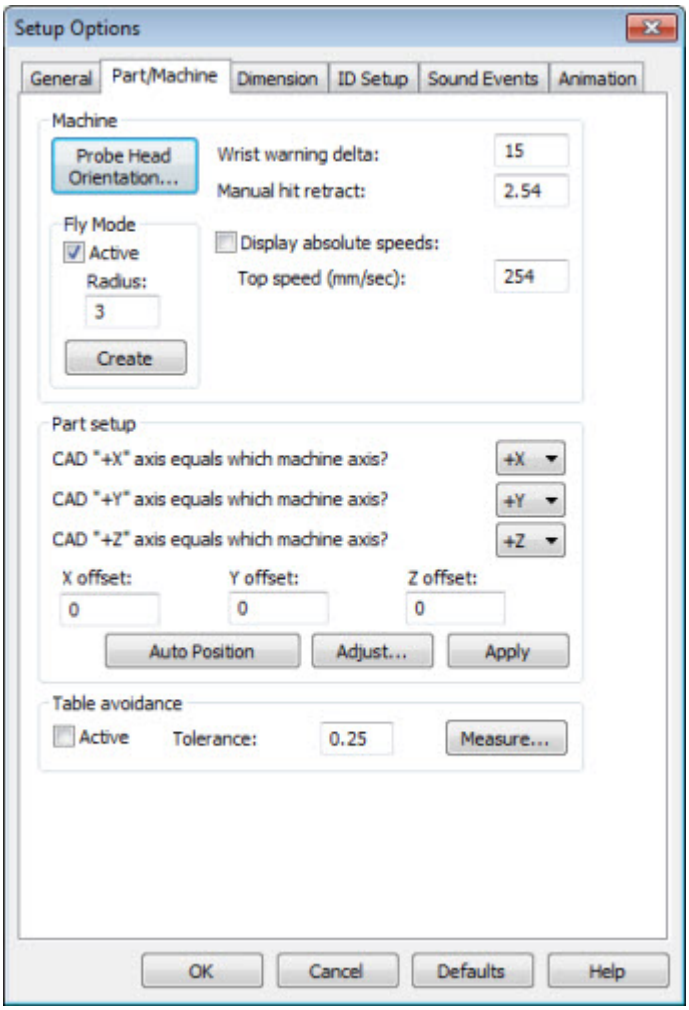
ユーザは**実行**ダイアログボックスで実行時間を記録及び表示しないことを決定できます。例えば、手動モードで動作する測定機には実行時間を記録や表示する必要はありません。実行時間を記録や表示しないように、**実行時間を記録および表示**チェックボックスをオフにします。

実行時間を増加させる (秒)

測定ルーチンを完了するのに必要な時間は、測定ルーチンまたはミニルーチンの実行時間に加えて、測定結果を印刷するなどの他のアクションも含むことがあります。**実行時間（秒）に追加**チェックボックスが選択されて、時間が秒単位で入力された場合に、 PC-DMISは、実際の実行時間に秒を追加します。測定ルーチンまたはミニルーチンが再度実行去るたびに、**実行**ダイアログボックスに表示される残り時間はこの追加の時間が含みます。

セットアップ オプション: パーツ/測定機タブ

その機能に関する情報を表示するには、下の画像内のセクションのいずれかをクリックしてください。



[セットアップ オプション] ダイアログ ボックス—[パーツ/測定機] タブ

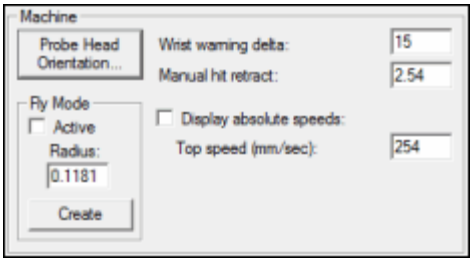
パーツ/測定機 タブ を用いて、測定機軸線
と関連したCADの軸線を変更することにより、CMM（または、測定機）用のパーツ
セットアップを定義できます。**セットアップ オプション** ダイアログ ボックス (**編集 | 優先設定 | セットアップ**)内の、**パーツ/測定機**
タブをクリックすることで、このオプションにアクセスできます。

この機能は測定ルーチンがPC-
DMISを使用して作成され、CAD座標システムがCMMパーツ設定と異なる場合に必要になります。

例： Aパーツは測定機に設定され、その X+ CAD軸線はCMM's Z+ 軸線と同じ方向を示します。
Z+ CAD軸線はCMM's Z+
軸線と同じ方向を示します。この機能は正しい関係を作るのに使われます。

CADのセットアップをパーツのセットアップと同じ内容にするには、ただ、ドロップダウン一覧から適切な軸線を選択して下さい。この関係が確立されると、PC-DMISはパーツとの関係で正しくプローブを表示するため測定ルーチンの作成が簡単になります。

測定機エリア



測定機エリア

プローブ ヘッドの方向性ボタン

[プローブ ヘッドの方向]ボタンを用いて、複数アームに対してプローブ ヘッドリストのAB角の設定を行うことができます。

複数アームに対してリストのAB角の設定を行うには:

1. **セットアップ オプション**ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | セットアップ**)にアクセスして下さい。
2. **パーツ/測定機** タブを選択して下さい。
3. **プローブ ヘッドの方向性**ボタンをクリックして下さい 。**プローブ ヘッドリスト角度コンフィギュレーション** ダイアログ ボックス が現れます。
4. （必要に応じて）アーム1およびアーム2の両方に対して、AB角に使用する適当な軸線を選択して下さい。
5. **OK**ボタンをクリックします。

飛ぶモード エリア

[Flyモード]エリアには、プローブがパートの周囲を中断せずに滑らかに移動する方法が提供されています。このオプションを使用する前に、測定ルーチンに移動点を挿入する必要があります。（より詳しい説明については「移動コマンド挿入」の章にある「移動点コマンドの挿入」を参照して下さい） Flyコマンドは測定ルーチンの任意の幾何要素の前後にのみ挿入できます。

Flyモードを使用するには:

1. 編集ウィンドウ上の、「飛ぶ」コマンドを置きたい位置にスクロールして下さい。

2. [**アクティブ**] チェック ボックスを選択して下さい。
3. 半径の値を入力してください。
4. [**作成**]ボタンをクリックします。
5. 飛ぶモードでは、その時点で使用中の測定ルーチン内の指定場所へ、自動的に移動します。このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:

   `FLY/TOG1,TOG2`

   TOG1
   このトグルフィールドはオンまたはオフの間を切り替えます。オンの場合、PC-DMISはコマンドをアクティブにします。オフの場合、PC-DMISは当該コマンドをスキップします。

   TOG2
   このフィールドは、半径の値をリスト表示します。

不適切な位置が選択された場合、PC-DMISが、その時点でのライン上にコマンドを挿入できない旨を知らせる、メッセージを表示します。その後、当該メッセージは、次の適切な位置へコマンドを挿入すべきか否か、尋ねます。

- **はい**ボタンをクリックすると、PC-DMISは、編集ウィンドウ上の、その時点での要素の末尾にFlyコマンドを移動します。
- [**いいえ**]ボタンがクリックされると、PC-DMISはFlyコマンドをキャンセルし、[**パーツ/測定機**]タブに戻ります。

測定ルーチンが実行される時、PC-DMISは、移動点からあらかじめ決められた距離の場所へ、躊躇なくプローブを移動します。移動の距離は、**半径**ボックス内に入力された値です。

リスト警告デルタボックス

これは、PC-DMISがその時点でのリスト位置変更を要求する前に、必要なリスト角の最低変更値を定義しています。これは、すべての自動関節を備えたDCC CMMを持ったユーザに影響します。

手動ヒット撤回ボックス

このオプションは、（LKやミツトヨのような）あるDCCタイプのCMMを使用の場合にのみ、入手可能です。

[**手動ヒットの後退**]ボックスを用いると、手動ヒットが取られた後、CMMが自動的に移動する後退距離を入力できます。

[手動ヒットの後退]値がデフォルト、または最後に使用された値から変更されると、PC-DMISは測定ルーチンの編集ウィンドウで、後退コマンド（`MANRETRACT/`とその値が示されている）を現在のカーソル位置に挿入します。手動ヒットが取られる度に、CMMは当コマンドに記された新しい値だけ後退します。

例えば、手動ヒット撤回値が、デフォルト設定値の.1から.003に変更された場合、「`MANRETRACT/0.003`」というコマンドが、編集ウィンドウに現れます。

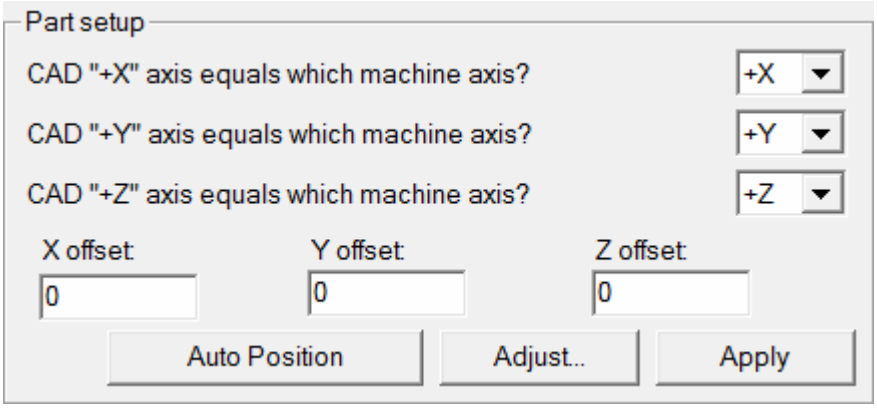
絶対速度の表示ボックス

絶対速度の表示チェックボックスが選択された場合、PC-DMISはパーセンテージの代わりに絶対値として他のダイアログボックスで速度値を示します。この値には、測定ルーチンの設定にある単位の種類（インチまたはミリメートル）に対応する単位が使用されます。

最高速度（ミリメートル/秒）ボックス

最高速度（ミリメートル/秒）ボックスを用いて、測定機が移動可能な最高速度をリセットできます。指定する値は、測定機に固有の最高速度を超えることはできません。この設定値は、**[移動速度]**オプションと連携して機能します。

パーツ セットアップ エリア



パーツ セットアップ エリア

測定ルーチンがPC-DMISを用いて作成され、CAD座標システムがCMMパーツセットアップと異なる場合に、パーツ・測定機タブの**パーツセットアップ**エリア内のこのオプションが必要になります。

CAD「+X」軸線イコール一覧

このドロップダウン一覧を用いて、CAD X+軸線と測定機の軸線の関係を設定することができます。

CAD「+Y」軸線イコール一覧

このドロップダウン一覧を用いて、CAD Y+
軸線と測定機の軸線の関係を設定することができます。

CAD「+Z」軸線イコール一覧

このドロップダウン一覧を用いて、CAD Z+
軸線と測定機の軸線の関係を設定することができます。

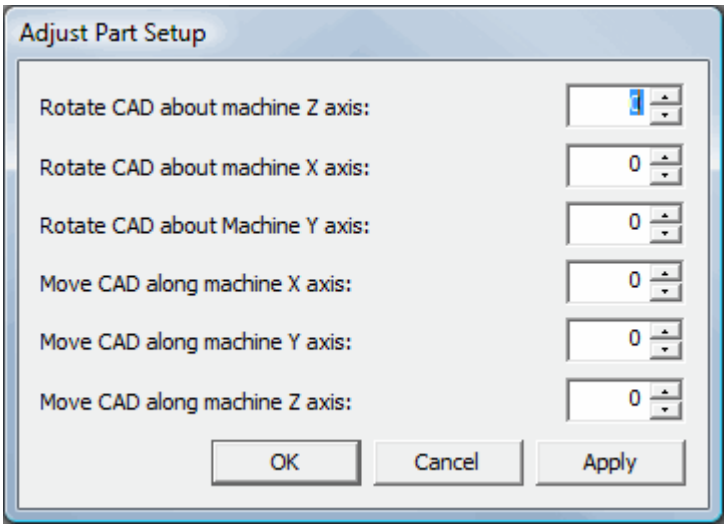
X オフセットボックス、Y オフセットボックス、Z オフセットボックス

これらのボックスでは PC-DMIS が X、Y、Z軸に沿って CAD
描画のオフセットを取る距離を入力できます。PC-DMIS
はX、Y、Z軸に沿って指定された距離だけCAD描画をシフトします。例えば、X フィールドに .5
と入力するとグラフィックの表示ウィンドウで CAD 表示全体が X 方向に .5
の距離だけシフトします。

注記: 測定ルーチン内で作成されたすべての要素はCAD描画と共に軸に沿って移動*しません*。

調整ボタン

[**調整**]ボタンを選択すると、[**パーツの設定を調整**]ダイアログ ボックスが開きます。



パーツ セットアップ調整ダイアログ ボックス

このダイアログ
ボックスを用いると、CADを測定機のXYZ軸の周囲を徐々に*回転*、または軸に沿って*移動*させることが可能です。

- CADを回転する場合、値は角度になります。360の値は、0と同じ効果を持ちます。

- CADを移動する場合、その値は測定ルーチンの測定単位で示され、お手持ちの測定ルーチンで使用されている測定単位次第で、値2が2インチ、または、2ミリメートルを意味します。

軸線に沿った、またはその周りのCADを調整するには:

1. 適切なボックスをクリックして下さい。
2. 新しい値を入力します。PC-DMIS
   はグラフィックの表示ウィンドウでこの調整をダイナミックに表示します。
3. **OK** をクリックして値を確定し、ダイアログ ボックスを閉じて下さい。

パーツのCADモデルが再インポートされないかぎり、PC-DMISは、この調整内容を維持します。

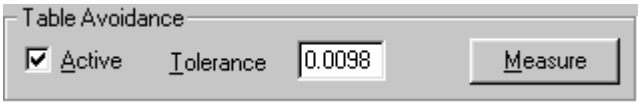
自動位置付けボタン

[自動位置決め]ボタンは、測定機のグラフィックス画像上で、パーツの位置を自動的に決めます。自動位置決めは、グラフィックス画像上でパーツの最適な位置を推測します。この機能を使用してCMMに対するパーツの位置をPC-DMISに決めさせることができます。また、XYZオフセットフィールドを用いてパーツ位置をキー入力することもできます。（CMMのグラフィックス画像設定に関する、より詳しい説明については、「ハードウェアの定義」の項にある「測定機の定義」を参照して下さい。）

適用するボタン

適用する ボタンは、当該ダイアログ ボックスを開いたまま、X, Y, またはZオフセットフィールドの変更を即座に適用し、適切な軸線 (または、複数の軸線)
に沿って画図を移動します。

テーブル回避エリア



パーツ/測定機タブ 上の**テーブル回避**エリアにおいて、PC-DMISは、DCCモード中に、プローブがテーブル（または、設定平面）に接触するか否かを確認します。

測定ボタンをクリックすると、PC-DMIS
はテーブルの表面を定義するためにヒットを取るよう求めます。この位置がZ軸の閾値を定義します。誤差範囲は、設定平面に関して正の値のためのZの正の方向と負の値のためのZの負の方向を決定します。

- プローブの動作が表示された誤差を超える場合、PC-DMISが、危険の可能性を示す、エラーメッセージを表示します。
- あらかじめ定義された域を越える、リスト回転の要求があった場合、PC-DMISは、エラーを警告するメッセージを表示します。

キャンセルまたは**続ける**を選択し、当該オペレーションを停止、または、完了して下さい。

例： 25の誤差範囲は、 PC-DMISに、示された基準値プラス誤差の値を避けるために警告を発します。もし基準値がテーブルの表面にあれば、PC-DMISは、プローブチップがテーブルの約4分の1インチ（設定装置によって異なります）に来るよう警告を発します。

付記:
テーブル回避オプションは、DCCモードで、特定のタイプのインターフェースが使用されている場合のみ利用可能です。

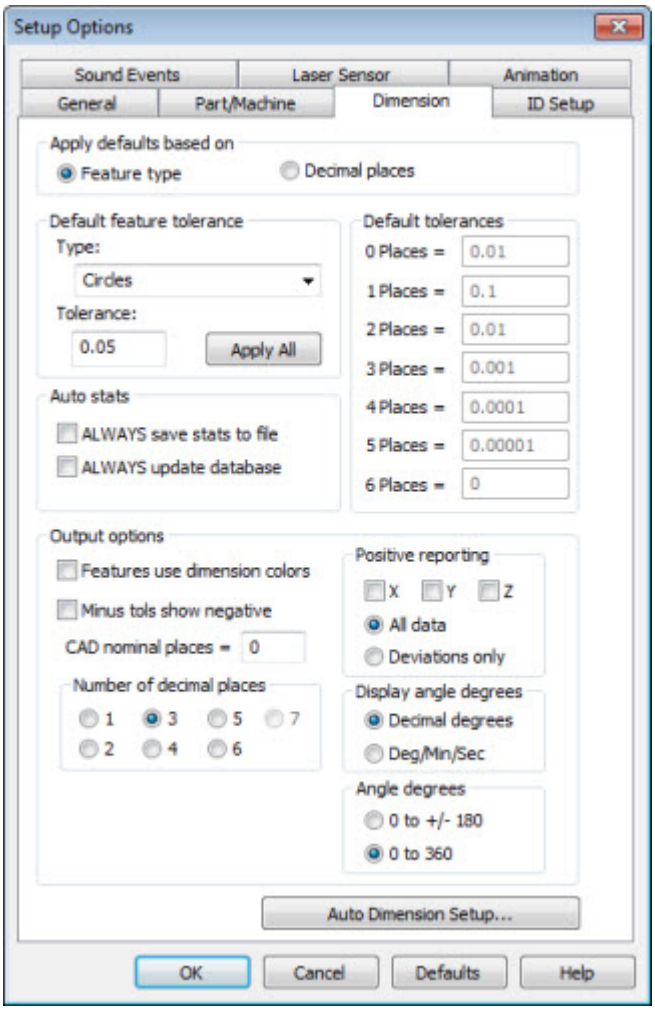
デフォルト ボタン

（**編集|環境設定|設定**）**デフォルト**ボタンをクリックすると、**セットアップオプション**]ダイアログボックスの**パート/マシン**タブのオプションのいくつかにデフォルト設定を更新することができます。新規の測定ルーチンが作成され、[**デフォルト**]ボタンが押された場合にのみ、変更内容がアクセス可能なパラメータに反映されます。（[**デフォルト**]ボタンを押さずに）[**OK**]ボタンを選択すると、定義したパラメータがその時点でアクティブな測定ルーチンにのみ適用され、PC-DMISのレジストリのエントリー変更は行われません。このデフォルト値はレジストリに保存されます。これらのパラメータは、対応するダイアログボックスから、またはPC-DMIS設定エディタを用いて更新することが可能です。「レジストリのエントリーを変更する」の章を参照して下さい。

パラメータが1つでも変更され、[デフォルト]ボタンがクリックされた場合、PC-DMISはレジストリ ファイルを更新し、デフォルト値を現在の設定に再定義します。

設定オプション: [測定結果]タブ

その機能に関する情報を表示するには、下の画像内のセクションのいずれかをクリックしてください。



[セットアップ オプション] ダイアログ ボックス—[寸法]タブ

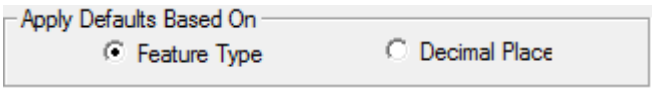
測定寸法タブを用いて、測定寸法プリントアウトのパラメータにアクセスできます。

測定寸法タブにアクセスするには:

1. **セットアップ オプション**ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | セットアップ**)にアクセスして下さい。

2. **測定寸法**タブをクリックして下さい。

デフォルト適用の基準



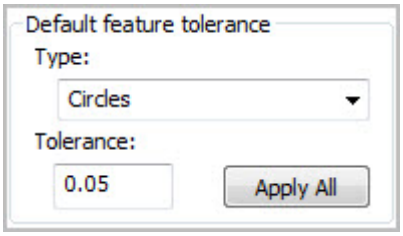
「デフォルト適用の基準」エリア

デフォルト適用の基準エリアにより、フィーチャー
タイプ、または表示される小数点以下の数のいずれかを基準として、デフォルトの寸法測定誤差を適用することが可能です。

- **要素タイプ**オプションを選択すると、**デフォルト要素公差**エリアが作動可能になり、それを用いて、個々の要素タイプに基づいた寸法公差を定義することができます。**位置**ダイアログ ボックス（**挿入 | 寸法 |**
  位置）内の**自動**オプションが選択されている場合、または、自動寸法測定セットアップボタンが使用された場合のいずれの場合でも、PC-
  DMISが自動的に寸法測定を行う時にはその都度、当該要素タイプに関連されるデフォルトの寸法公差が使用されます。「デフォルトの要素公差」のアイテムを参照して下さい。

- **小数点以下**オプションを選択すると、**デフォルト**
  フィーチャー誤差エリアが作動可能になり、それを用いて、小数点以下の数に基づいた測定寸法の誤差を定義することができます。これは、測定寸法の誤差を決める際用いられていた、PC-DMISの旧方式です。「デフォルト誤差」の項目を参照して下さい。

デフォルト フィーチャー誤差



デフォルト フィーチャー誤差エリア

[デフォルト適用の基準]エリアから[**要素の種類**]オプションを選択すると、[**要素のデフォルト公差**]エリアがアクティブになり、それを用いて、個々の要素の種類に基づき、デフォルトの測定寸法公差を定義することができます。

注記: 当機能は旧バージョンの測定寸法のみに適用されます。

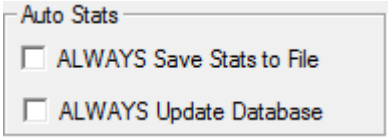
位置の測定寸法を手動で作成した場合、またはPC-
DMISが（[**自動寸法測定の設定...**]ボタンにより）任意の測定寸法を自動作成した場合、同じ種類の幾何要素が測定ルーチンに存在しない限り、その幾何要素の種類に関連する寸法測定のデフォルト公差が使用されます。同じ種類の要素が測定ルーチンに存在する場合、同じ種類の幾何要素の寸法が新しく自動測定されると既存の要素の公差が使用されます。このように、要素の種類に対して一度公差を変更するだけで、PC-
DMISは測定ルーチン全体を通して同じ種類の残りの幾何要素に対して同じ公差を使用します。

類別一覧
この一覧は、デフォルトの公差を設定できるすべての要素を表示します。

公差ボックス
このボックスは、**類別**一覧にある要素に使用されるデフォルトの公差値を定義します。

このボタンにより、**公差**ボックスにあるその時点の公差値を、*すべての要素類別*に適用することができます。

自動統計



自動統計エリア

[常に統計データをファイルに保存]チェックボックス
[常に統計データをファイルに保存]チェック
ボックスを用いると、有効なSTATS/ONコマンドを伴う測定ルーチンの実行が開始される度に現れて統計データの保存を尋ねるプロンプトを迂回することができます。このオプションがチェックされ、実行中の測定ルーチン内にSTATS/ONコマンドが存在する時、統計データは、XSTATS11.tmpファイルに自動的に保存されます。より詳しい情報については、「統計データの追跡」の章を参照して下さい。

常時データベース更新チェック ボックス
常時データベース更新チェック
ボックスを用いると、測定ルーチンの実行、及び統計データの収集、保存のたびに、データベースのその場での更新を問うプロンプトなしに、PC-DMISが、XSTATS11.tmpファイル内の情報を持つ、お手持ちの統計データベースソフトウェアを更新します。このオプションがチェック マークされていない場合、PC-DMISは、データベース更新前に、このプロンプトを表示し続けます。より詳しい情報については、「統計データの追跡」の章を参照して下さい。

ディメンション色を使用のフィーチャー

[幾何要素に寸法測定の色を使用]チェック ボックスは、PC-DMISに、関連する測定結果を持つ要素を色付けするよう指示します。要素は、理論値からのずれを示すために寸法が使用する色と同じ色付けでグラフィックの表示ウィンドウに描かれます。

デフォルトで、これは単に位置寸法で機能します。PC-DMISセッティング・エディターのディメンション・セクションの中で`NonLocationDimsSetFeatColor`登録エントリーを使用することにより、非位置寸法と共に同様にこれを使用してもよいです。

CAD名目値四捨五入位置＝

CAD Nominal Places = 0

[CAD公称値の四捨五入位置 =]ボックスを用いて、PC-DMISがCADデータを使うときに、小数点以下第何位の後で四捨五入するか定義する数値を入力できます。例えば、CAD円が3.9995の直径を持ちその値が3に設定されている場合、PC-DMISはその値を4.000に四捨五入します。このオプションはPC-DMISが SHEET METAL MEASUREMENT
モードでCADデータを変換する方法のみに影響を与えます。値が0に設定されている場合、PC-DMISは四捨五入をしません。

マイナス誤差の負号表示

☑ Minus Tols Show Negative

[負の公差をマイナスで表示]チェック
ボックスは、測定寸法の負の公差をマイナス記号付きで表示するか否かをコントロールします。例えば、測定寸法が5.0000 +0.3 (公差の上限), -0.2
(公差の下限)として特定される時、このチェックボックスがチェックされていると、当該測定寸法は以下のように表示されます:

軸線	名目値	＋公差	過小公差	測定値	最高	最低	ずれ	誤差範囲外
Y	5.00	0.30	-0.20	5.00	0.00	0.00	0.00	0.00

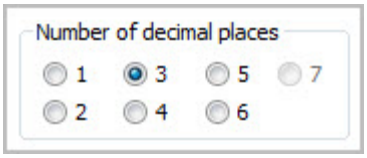
このチェック
ボックスのチェックが消去されている時には、同一の例が以下のように表示されます:

軸線	名目値	＋公差	過小公差	測定値	最高	最低	ずれ	誤差範囲外
Y	5.00	0.30	0.20	5.00	0.00	0.00	0.00	0.00

このチェック
ボックスは、数値が記憶され、または、計算で使用される様式に影響しません。これは、ユーザー仕様に応じて数値が表示される様式のみをコントロールします。このチェック
ボックスは、デフォルト設定では選択されません。

重要事項: このチェックボックスのチェックが消去されている場合、依然として、誤差の前にマイナス記号を示すことが可能です。通常、お客様の過小誤差と過大誤差は、名目値の反対側に位置し、このチェックボックスのチェックがない場合、これらの数値は正の値として表示されます。しかし、偏差下限と偏差上限が両方、名目値より大きい場合—例えば、このチェックボックスが使用される前には、数値は実際、+TOL 0.03、–TOL –0.02ですー が、このチェックボックスが選択されると—、マイナス公差値が正の値として表示されます。

小数点以下の数字



「小数点以下の数字」エリア

小数点以下の数字エリアは、編集ウィンドウおよびインスペクションレポートに小数点以下第何位まで表示するかをコントロールします。

ご希望のオプションを選択して、表示される小数点以下の桁数を表示します。

これが測定ルーチンで変更されるたびに、PC-DMISはコマンド: `DISPLAYPRECISION/#`を測定ルーチンに配置します。このコマンドは測定ルーチンのこの項で表示される精度を指定します。このコマンドが使用されない場合、自動的にデフォルト設定値が使用されます。このコマンドが使用される場合、別のコマンドによる変更がない限り、特定された表示精度が適用されます。

- ミリ測定ルーチンは、小数点以下6桁まで可能です。
- インチ測定ルーチンは7小数点以下まで可能です。

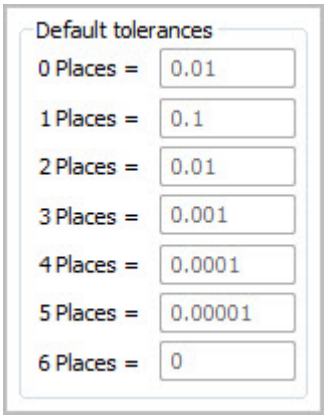
例えば、インチを使用する測定ルーチンに対して**6**を選択し**[OK]**をクリックすると、次のコマンドが編集ウィンドウに挿入されます：`DISPLAYPRECISION/6`

これで、以下の位置度の測定結果に示されるように、このコマンド以下のリストに表示される測定結果のすべてが小数点以下第6位まで表示されるようになります：

```
DISPLAYPRECISION/6

DIM LOC2= LOCATION OF POINT PNT1 UNITS=IN ,$

GRAPH=OFF TEXT=OFF MULT=10.00 OUTPUT=BOTH HALF ANGLE=NO

AX NOMINAL +TOL -TOL MEAS DEV OUTTOL
```

```
X 2436.427000 0.001970 0.001970 2436.427000 0.000000 0.000000 ----#----
Y 229.658000 0.001970 0.001970 229.658000 0.000000 0.000000 ----#----
Z 849.992000 0.001970 0.001970 849.992000 0.000000 0.000000 ----#----
T 0.000000 0.001970 0.001970 0.000000 0.000000 0.000000 ----#----
END OF DIMENSION LOC2
```

デフォルト誤差



デフォルト誤差エリア

[デフォルト適用の基準]エリアにある[**小数点以下桁数**]オプションを選択すると、[**デフォルト公差**]エリアが使用可能になり、それを用いて、編集ウィンドウで測定寸法の公称値を変更した時にPC-DMISが使用するデフォルト公差を定義することができます。使用されるデフォルト公差は、公称値の小数点以下桁数に基づいています。

例えば、公称値を6.250に変更した場合、小数点以下第3位まで使用されていたので、PC-DMISは正および負の公差を[**第3位=**
デフォルト公差値]に設定します。代わりに6.25と入力した場合、小数点以下第2位まで使用されていたので、PC-DMISは正および負の公差を[**第2位**=値] に設定します。

0-6 位置 = ボックス
これらのボックスを用いて、異なるデフォルト誤差を設定することができ、小数点以下０から6位の公称値が定義された場合、PC-DMISはその誤差値を適用します。

正の値のレポート

正の値のレポート エリアに関連したチェック
ボックスは、通常は負の値を持つ、原点の負側にある要素が、常に正の数値でレポートに印刷されるようコントロールします。

- **X**、**Y**、及び、**Z** チェック ボックスは、PC-DMISがどの軸線（または、複数の軸線）に正の数字を表示するかを決定します。
- **全データ**オプションは、選択された軸（複数も可能）の測定値および理論値を反転し、公称軸の負の値を正の値として表示するよう、PC-DMISに指示します。
- **偏差のみ**オプションは、軸の理論値が負の値の場合、選択された軸（複数も可能）の偏差のみ反転するよう、PC-DMISに指示します。

これらのチェックボックスを選択すると、`POSITIVEREPORTING`コマンドが測定ルーチンのその時点でのカーソル位置に挿入されます。編集ウィンドウ内での、このコマンドのフォーマットは、以下のようです:

```
POSITIVEREPORTING/ a, b, c, TOG1
```

場所:

Xチェックボックスが選択された場合、**a =**
Xであり、Xチェックボックスのチェックが消去されている場合には、空白となります。

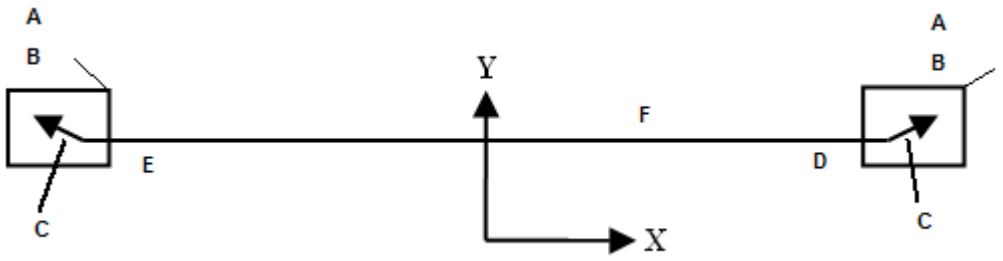
Yチェックボックスが選択された場合、**b =**
Yであり、Yチェックボックスのチェックが消去されている場合には、空白となります。

Zチェックボックスが選択された場合、**c =**
Zであり、Zチェックボックスのチェックが消去されている場合には、空白となります。

全データ または**偏差のみ** オプションのどちらが選択されているかにより、**TOG1 =** ALLDATA
または DEVONLY となります。

X, Y, 及び
Zの各方向は、これら三つのオプションの組み合わせ次第で、いずれも正の値のレポートを行うことができます。複数の`POSITIVEREPORTING`コマンドを同一の測定ルーチンで使用でき、測定ルーチンのすべての測定結果がその前にある`POSITIVEREPORTING`コマンドを使用して表示されます。測定ルーチンに`POSITIVEREPORTING`
コマンドが存在しない場合、すべての測定寸法がX、Yおよび
Z方向においてオフになったオプションでレポートされます。

以下の図表は、正の値のレポートにより誤差がどのように影響されるかを明示しています:



誤差に影響する正の値のレポート

A = 0.3 +Xの公差

B = 0.1 -Xの公差

C = Xの偏差0.2

D = 点 1

E = 点 2

F = 1.0 理論値

正の値のレポートの目的

正の値のレポートを用いて、対称的様式でフィーチャーをレポートすることができ、それにより、フィーチャーが原点のどちら側に位置するかに関わらず、偏差が:

- 原点から遠ざかる場合、その数値は正とみなされます。
- 原点に向かう場合、その数値は負とみなされます。

このように、上記の図表では、X軸の正の値のレポートが実行され、ポイント1、及び、2が、正の偏差を表示しています。しかし、これはまた、以下のことをも意味しています:

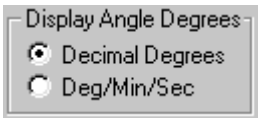
- 原点から遠ざかる場合、正の誤差が適用されます。
- 原点に向かう場合、負の誤差が適用されます。

古い測定ルーチンの移行

古いバージョンのPC-DMIS(バージョン3.7等)から4x以降のバージョンへ測定ルーチンを移行する際に、測定結果に正のレポート作成を使用し、変数を使用して公差値をプラスおよびマイナス公差フィールドに挿入すると、公差バンドが反転するという問題が生じる場合があります。PD-DMIS設定エディタのオプションセクションにある**UseLegacyPositiveReporting**レジストリ・エ

ントリを使用すると、このような場合に旧式の正のレポート作成を使用し、公差の値が反転しないようにすることができます。

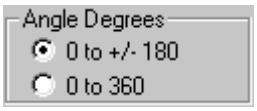
角度表示



角度表示エリア

角度表示エリアを用いて、十進経緯度、または、度/分/秒による角度寸法を表示することができます。ご希望のオプションを選択して下さい。極角位置軸線、及び角度寸法はすべて、選択されたオプションで表示されるよう変更されます。

角度

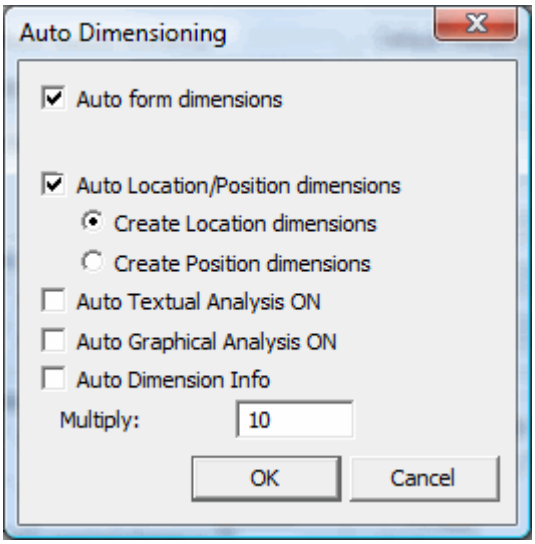


角度エリア

また、**角度** エリアは現在の測定ルーチンの 0° -360°または、0°から +/- 180°の角度測定値を表示できます。極角位置軸線、及び、角度測定値はすべて、選択された角度の範囲内に入るよう変更されます。今後、すべての測定ルーチンに対してデフォルト値を変更したい場合、PC-DMIS設定エディタの[**オプション**]ツリーに含まれる`AngleRange0To360`レジストリエントリを使用してください。

自動寸法測定セットアップ

設定オプションのダイアログボックス(**編集|環境設定|設定**)の**寸法**タブからの**自動寸法設定**のボタンは、**自動測定**のダイアログボックスを開きます。



自動寸法測定ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスは、PC-DMISがフィーチャーを作成し、測定寸法の作成の仕方を指定した後で、即座に、フィーチャーの自動寸法測定を行うか否かを決める、幾つかのオプションを提供します。

測定寸法の自動作成を作動可能にしたい場合、**自動フォーム測定寸法**及び/または**自動場所 / 位置付け測定寸法**を選択して下さい。**OK** がクリックされると、PC-DMISは、フィーチャー作成時に、選択された測定寸法タイプを自動的に作成し始めます。

入手可能なオプションに関する、より詳しい情報については、以下の表を参照して下さい:

自動形状寸法

このチェック ボックスは、PC-DMISが自動的に形状寸法を持つ要素タイプの形状寸法を作成するか否かを決めます。

幾何学要素	関連のフォーム測定寸法
円	真円度
円筒	真円度
円錐	真円度
校正球	真円度

平面	平面性
直線	真直度

自動位置付け/位置寸法
このチェック ボックスは、PC-DMISが、位置付けまたは位置寸法を持つ要素タイプのために位置付けまたは位置寸法を自動的に作成するか否かを決めます。

位置づけ寸法の作成
自動位置づけ/ 位置寸法を選択すると、このオプション ボタンはPC-DMISに、、これらの寸法を位置付け寸法として作成することを指示します。

位置寸法の作成
自動位置づけ/ 位置寸法を選択すると、このオプション ボタンはPC-DMISにこれらの寸法を位置寸法として作成することを指示します。

自動本文の分析ON
このチェック ボックスでは、PC-DMISが、寸法のテキスト分析を自動的に行うか否かをコントロールします。このボックスがマークされている時は「オン」とみなされます。「旧式寸法の使用」章の「分析設定」及び「レポートコマンドの挿入」の章の「分析」を参照して下さい。

自動画像分析オン
このチェック ボックスは、PC-DMISが、「**寸法の自動作成**」または「**自動真円度**」を用いて作成された、寸法のグラフィックス分析を自動的に行うか否かをコントロールします。「旧式寸法の使用」セクションの「分析設定」及び「レポートコマンドの挿入」の章の「分析」を参照して下さい。

自動寸法情報
このチェック ボックスは、PC-DMISが、**寸法自動作成**チェックボックス、または**自動真円度**チェック ボックスを用いて作成された寸法のために、**寸法情報**チェック ボックスを自動的に作成するか否かをコントロールします。この寸法情報ボックスのデフォルトフォーマットの設定方法に関する、より詳しい情報については、「レポートコマンドの挿入」の項にある「寸法情報ボックスの挿入」を参照して下さい。

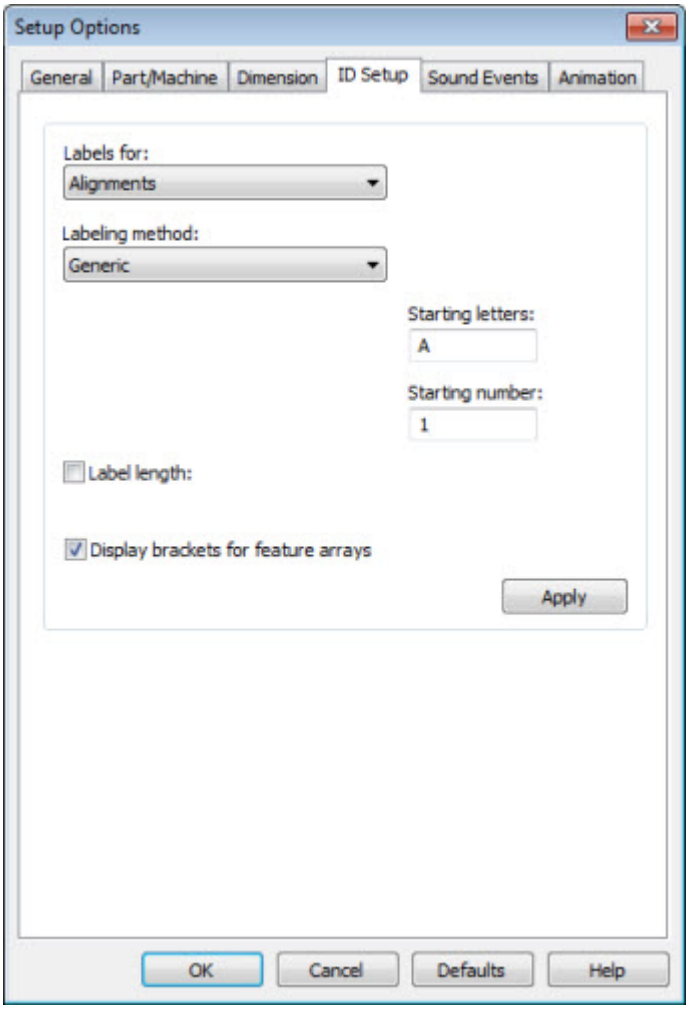
倍率値
倍率値は、グラフィックス分析モードにおいて、矢印及び誤差域を拡大する倍率です。2.0が数値として入力されると、PC-DMISは、矢印のグラフィックス イメージを2倍に拡大します。

増大ボックスは、閲覧目的のみの使用であり、テキスト
プリントアウトには影響を及ぼしません。

注記: [挿入 | 寸法測定]サブメニューにある[レガシー測定寸法を使用]メニュー
オプションの横にチェック マークがあるか否かにより、PC-
DMISは、測定寸法を**レガシー測定寸法**または
要素のコントロールフレームの測定寸法のいずれかとして作成します。

セットアップ オプション: IDセットアップ タブ

上部のタブのいずれかまたは下の画像の下部のボタンをクリックして、その機能に関する情報を表示してください。



[セットアップ オプション] ダイアログボックス—[IDセットアップ] タブ

ID変更時には、既に設定されたIDを見失わないことが重要です。このオプションを用いて、複数の変更が行われると、IDの重複が起こる可能性があります。

IDセットアップタブを用いて、パーツ配置、ディメンション、フィーチャー、コメント、ラベル、変数とほかの項目の識別に用いられるフォーマットを変更できます。

このオプションにアクセスするには:

1. **セットアップ オプション**ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | セットアップ**)にアクセスして下さい。
2. **[IDセットアップ]** タブを選択して下さい。

デフォルトの**ラベリング方法**は**一般**です。各要素の作成時に、PC-DMISは、文字**F**で始まり、数字（開始番号1から一つずつ増加するよう設定）が続くIDをそれに割り当てます。このタブのオプションを選択してこの設定の上書きを選択できます。

要素IDルール

IDを変更する際は、以下のルールに従います:

- 空白文字を使用しない (代わりに下線_を使用する)
- 異なる要素に対して同じ要素名を使用しない
- PC-DMIS のキーワードまたはコマンド (ALIGN, PROBE, OFFSET等) と同一の名前を使用しない。
- IDタイプ間で名前を共有しない。例えば、アラインメントIDは要素IDやラベルIDと同じIDを持つことはできない。
- すべてのIDは英数字であること。下線またはダッシュを使用することは可能。
- IDの先頭は文字であること。
- 次の文字の使用を避ける: @ # $ % & * ( ) + = / \ [ ] { }

PC-DMIS はユーザーが要素IDを望みどおりに変更するのを防ぐことはしませんが、これらのルールを無視すると式、レポート、または別の製品(DataPage+、Excel等)が使用するルーチンを伴うID関数に問題が発生する場合があります。

[ID設定] タブのオプション

用ラベル -
ドロップダウンリスト**用ラベル**を使用して、以下の項目に使用される識別子を選択します:
(「ラベリング方法」を参照)。

アラインメント
汎用はアラインメントを特定するために利用できる唯一の方法です。

コメント
汎用はコメントを特定するために利用できる唯一の方法です。

測定結果
。測定結果は**汎用**または**タイプごと**の方法のいずれかを使用して特定できます。**タイプごと**の方法が使用された場合、識別子は各測定タイプと同類であったり、あるいは個別のニーズに基づき異なることもあります。

要素
要素は**汎用**または**タイプごと**の方法のいずれかを使用して特定できます。

タイプ別方法が選択されると、また、をフィーチャーIDの表示用の色を変更することが可能です。

すべてのIDの表示チェック ボックスを選択し、**適用する**をクリックすると、PC-DMISはグラフィックス表示ウィンドウにその時点でのカーソル位置から測定ルーチンの終りまでのすべての要素IDラベルを表示します。新しく作成された要素もそのIDを表示します。このチェックボックスをクリアし、**[適用]**をクリックすると、現在のカーソル位置から測定ルーチンの最後まですべての要素IDが非表示になります。編集ウィンドウでは新規作成された要素を作成することもできますが、グラフィックス表示ウィンドウにIDラベルは現れません。

色オプションを選択した場合、**[適用]**ボタンを押した後に作成される(マークされた)すべての要素が影響を受けます。(色の変更前に作成された要素は置換されません)

ラベル
汎用はラベルを特定するために利用できる唯一の方法です。

変数
汎用は変数を特定するために利用できる唯一の方法です。

呼び出しサブルーチン
汎用は呼び出されたサブルーチンを特定するために利用できる唯一の方法です。

特定クエリ
特定クエリは**汎用**または**タイプごと**の方法のいずれかを使用して特定できます。

要素コントロールフレーム
要素コントロールフレームは**汎用**または**タイプごと**の方法のいずれかを使用して特定できます。

ポイントクラウド操作
ポイントクラウド操作は**汎用**または**タイプごと**の方法のいずれかを使用して特定できます。**タイプごと**の方法を使用すると、識別子は各演算子タイプと同様か、個々のニーズによって異なることがあります。

ラベリング方法 -
このドロップダウンウィンドウを使用して、[**タイプごと**]識別方法と[**一般**]識別方法のいずれかを選択します。

タイプごと
タイプごとでは、各要素タイプ (円、円錐、円筒、線、平面、点、球など)
の識別子を設定できます。

汎用
汎用は要素(測定結果)タイプにかかわらず同じ識別システムを適用します。

PC-
DMISには、タイプ識別に用いられる文字数制限は内在しません。しかしながら、グラフィックス表示エリア、及び、編集ウィンドウでは、IDの長さに制限があります。編集ウィンドウは完全なIDを表示するわけではありませんが、PC-
DMISはすべてのIDの記録を内部に保存します。

開始文字 - このボックスは識別過程で使用される最初の文字を決定します。PC-
DMISは常にIDを大文字で表示します。

注記： IDが表示される各種ダイアログボックスでIDを変更すると、PC-
DMISはその項目タイプのデフォルトIDを変更するかどうかをユーザーに問う画面を即座に表示します。

[**開始番号**] -
[開始番号]ボックスは識別の過程で使用される最初の番号を決定します。1から9999までの任意の番号が入力可能です。

注記:
IDが表示されている様々なダイアログボックスでIDの数字部分のみを変更する場合、カウンタを目的の数字にリセットすることができます。

[**ラベルの長さ**] -
[**ラベルの長さ**]チェックボックスは識別子の長さを決定します。選択すると数値の入力が可能な小

さな編集ボックスを表示します。チェックボックスはオプションをアクティブにするために選択する必要があります。長さが設定されると、必要に応じた長さにするために、PC-DMISはID文字にゼロを付け加えます。

例:
ID 長さ = 10, ID 文字= 円。
PC-DMISは ID =
CIRCLE0001等を作成します。これは長さが設定されたときのみ適用されます。

要素配列のブラケットを表示- 要素配列用のブラケット表示チェックボックスは、一度以上実行されたコマンドのID内に、配列角カッコが表示されるか否かを決定します。このチェックボックスが選択されると、検査レポートは、コマンド実行のどのインスタンスが参照されるかを表示します。

例:
F1[3]=POINT MEASURED FROM 1 HIT

要素F 1 がここで3回（角カッコ内の数字 3
によって明示）の測定を受けたことを示しています。

配列誘導オブジェクトを用いて、角括弧を用いた表示の形式をコントロールすることができます。「入力式及び変数の使用」の章にある「
配列誘導オブジェクト」を参照して下さい。

適用 -
適用ボタンは「ラベリング方法」で説明した変更を任意の要素識別子に適用します。これらの変更は要素IDのみに適用されます。**適用**ボタンを押さない場合、PC-DMISは前に示した方法を使用して引き続き要素識別子を割り当てます。

付記: IDが重複して割り当てられると、PC-DMISは、すべてのフィーチャー、ディメンション、等に独自のIDが割り当られなければならない旨を告げます。

デフォルト -
デフォルトボタンではデフォルト設定をすべてのID設定パラメータに更新することができます。新しい測定ルーチンを作成すると、その測定ルーチンは**デフォルト**ボタンがクリックされた場合にのみパラメータに行われたすべての変更を反映します。**デフォルト**ボタンの詳細については、「ユーザーインターフェイスのナビゲート」の章の「デフォルト」トピックを参照してください。

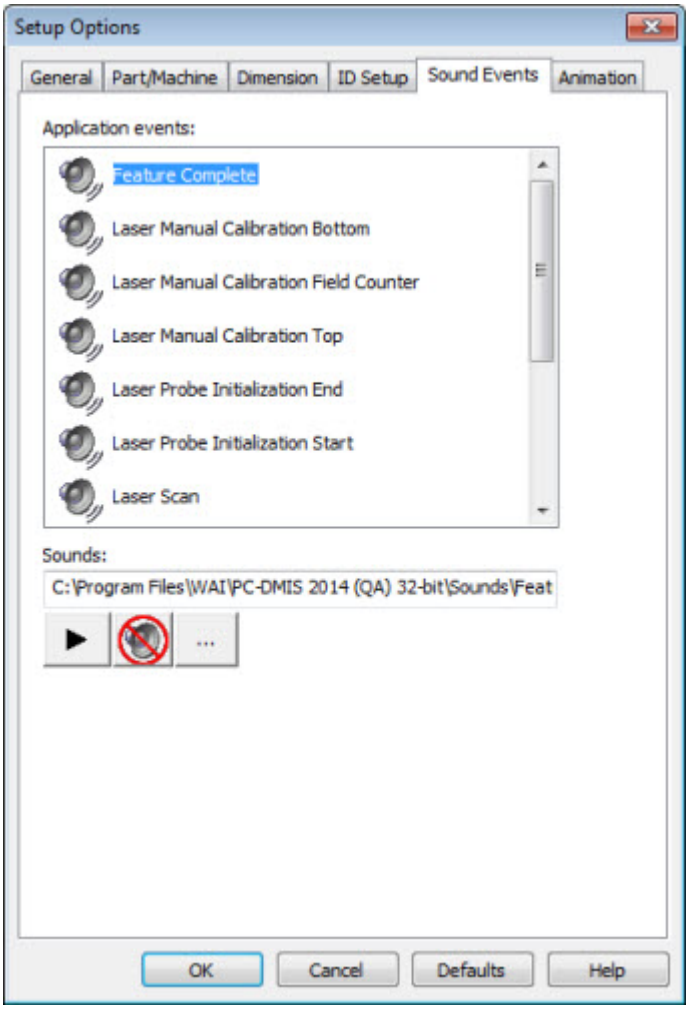
付記:
変更が行われた後には、（**OK**または**デフォルト**ボタンが押される前に）常に**適用する**ボタンを押して下さい。

セットアップオプション:[レーザーセンサー] タブ

注記: [レーザーセンサー]
タブはポートロックに指定のレーザーが存在し、レーザープローブを使用している場合のみ現れます。このタブについての詳細は、「PC-DMIS Laser」マニュアルの「ステップ3: レーザーセンサーのセットアップオプションの定義」トピックにあるレーザーセンサータブについての説明を参照してください。

設定オプション: [サウンド イベント]タブ

それらの機能に関する情報を表示するには、以下の画像の上部に沿って任意のタブか、またはイメージの底に沿ってボタンをクリックします。



[セットアップ オプション] ダイアログ ボックス—[サウンド イベント] タブ

サウンド イベントタブ (**編集 | 仕様 | セットアップ**) には、ご希望のサウンドファイルに結び付けることのできる、アプリケーションイベントの一覧があります。イベントが起こった場合、PC-DMISは関連のサウンドを自動的に再生します。

アプリケーションイベントの一覧
この一覧は、サウンドファイルを結び付けることのできる、アプリケーションイベントを表示します。

サウンドボックス
このボックスは、選択されたアプリケーションイベントのサウンドファイルへの経路を列挙しています。

サウンド再生のボタン

このボタンは、指定されたサウンドファイルのテストを行います。イベントにサウンドが関連付けられていない場合、無効となります。

サウンドをオフにするボタン

このボタンは、指定されたサウンドファイルをオフにをにします。

ブラウズボタン

このボタンは、カーソルを移動して選択されたアプリケーションイベントのサウンドファイルを選択するために使用されます。

サウンドの関連付け

カスタム サウンド ファイルをイベントに関連付けるには:

1. **アプリケーション イベント** 一覧からイベントを選択して下さい。
2. [**ブラウズ**]ボタンをクリックします。
3. ご希望のサウンド ファイルがあるディレクトリに進んで下さい。PC-DMISは、.wavファイルの再生のみサポートします。
4. .wavファイルを選択し、[**開く**]をクリックして下さい [**サウンド**] リストボックスは選択されたサウンドファイルのパスを表示します。

5. **再生する** ボタンを押して、ファイルのテストを行ってください。
6. **OK** を押して変更を保存します。

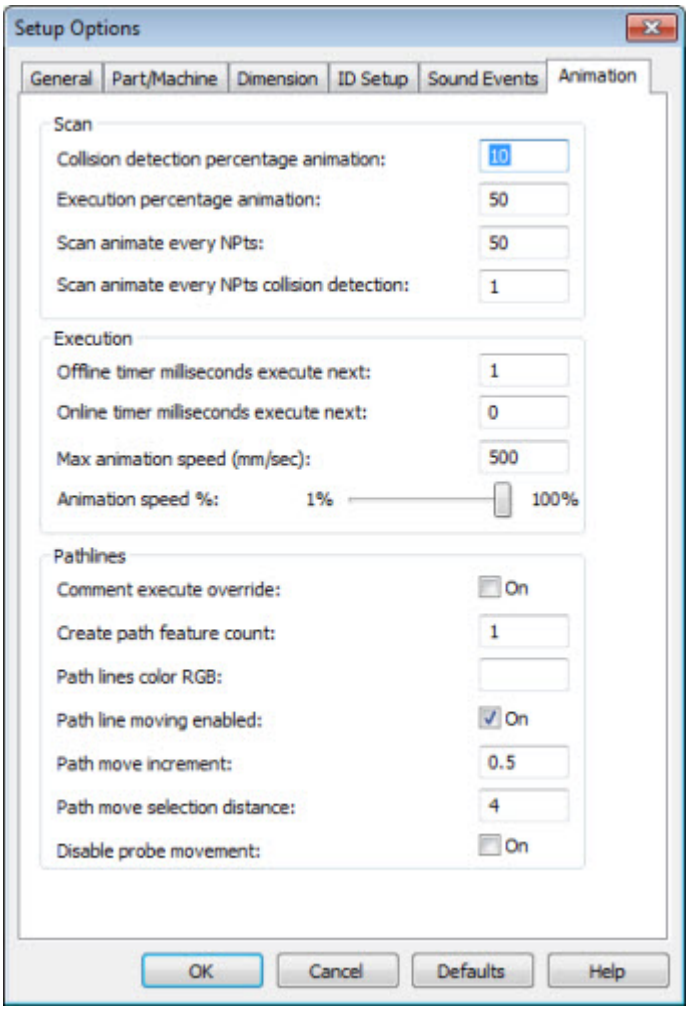
サウンドのオフ

イベントに関連付けられたサウンドをオフにすることができます。サウンドをオフにするには:

1. **アプリケーション イベント** 一覧からイベントを選択して下さい。
2. **サウンドをオフ**ボタンをクリックします。
3. イベントの左にあるスピーカーアイコン が円内部に斜線の付いたもの に変わり、イベントがオフになったことを示します。
4. **OK** を押して変更を保存します。サウンドがイベントから削除されました。

セットアップ オプション: アニメーションタブ

その機能に関する情報を表示するには、下の画像内のセクションのいずれかをクリックしてください。



[セットアップオプション] ダイアログボックスー[アニメーション] タブ

アニメーションタブ (**編集 | カスタム設定 | セットアップ**)
にはオフラインの動画およびパスラインの設定が含まれています。PC-DMIS 2010 MR1
より前のバージョンでは、これら多くの設定はPC-DMIS設定エディタでのみ利用可能でした。

スキャンエリア

衝突検知パーセンテージのアニメーション: -
これは衝突検知操作中に行われるプローブアニメーションのパーセンテージを定義します。

- 100の値は画面が最大速度で再描画されることを意味します。
- 0の値は画面が全く再描画されないことを意味します。
- デフォルト値は50です。

実行パーセンテージアニメーション: -
これは、通常の測定ルーチン実行中に発生するプローブアニメーションのパーセンテージを定義します。

- 100の値は画面が最大速度で再描画されることを意味します。
- 0の値は画面が全く再描画されないことを意味します。
- デフォルト値は50です。

点ごとにスキャンをアニメーション: -
これはアニメーションに使用する点の数を制限します。例えば、この値を10に設定すると、PC-DMISは10個目ごとの点と、最初と最後の点のみを取得します。この値は実行中のプローブアニメーションに使用されます。デフォルト値は50です。

点の衝突検知ごとにスキャンをアニメーション: -
これは衝突検知アニメーションに使用する点の数を制限します。例えば、この値を10に設定すると、PC-
DMISは10個目ごとの点と、最初と最後の点のみを取得します。この値は衝突検知中のプローブアニメーションに使用されます。

実行エリア

次回オフラインタイマーを実行するミリ秒: - これはPC-
DMISがオフライン実行中にコマンド処理を行う頻度を設定します。この数はミリ秒です。デフォルトは50です。

次回オンラインタイマーを実行するミリ秒: - これはPC-
DMISがオンライン実行中にコマンド処理を行う頻度を設定します。この数はミリ秒です。デフォルトは50です。

例えば、これらが1に設定されるとPC-DMISは1ミリ秒ごとに実行中のコマンド処理を試みます。

最大アニメーション速度(mm/秒): -
これによって、測定ルーチンの実行中にアニメーション表示されたプローブが[グラフィックの表示]ウィンドウで使用する最大アニメーション速度を定義できます。速度はmm/秒で表されます。これはアニメーション表示が遅すぎる原因になる複雑な測定ルーチンでこの値を変更する場合に便利です。アニメーションの再描画ビューの間隔を増やしたい場合、この値を増やします。このようにすると描画するアニメーションコマ数が少なくなります。

アニメーションスピード %: -
このスライダを使用すると**アニメーション最高速度**値に使用する実際のパーセンテージを素早く簡単に調整することができます。

アニメーション速度の変更:
オフラインアニメーション速度をさらに微調整したい場合は、「オフラインモードの使用」の「オフラインでの測定ルーチンの実行およびデバッグ」を参照してください。

パスラインエリア

コメント実行上書き: -
このチェックボックスは、パスラインの生成時に`COMMENT`コマンドが実行されるかどうかを決定します。このチェックボックスをマークすると実行されます。デフォルトではこのチェックボックスは選択されていません。

パス要素カウントを作成: - このボックスは**表示 | カーソルからパスライン**を選択したときに使用されます。カーソル位置の上下でいくつの要素が使用されるかを定義します。例えば、これを3に設定すると、PC-DMISはカーソル位置の上で3つの要素、下で3つの要素を使用します。デフォルト値は1であり、これはPC-DMISが現在の要素の前にある1要素のためのパスラインと、現在の要素の後にある1要素のためのパスラインを描くことを意味します。「CAD表示の編集」の章の「パスラインの表示、アニメーション、および移動」を参照してください。

パスラインの色 RGB: -
このボックスではグラフィックの表示ウィンドウで生成されたパスラインの色を定義します。色をクリックすると標準の**色**ダイアログボックスが開き、そこから新しい色が選択できます。

パスライン移動を有効化: -
このチェックボックスはパスライン移動を有効にするかどうかを決定します。これをマークした場合、パスラインをクリックしてその位置に`MOVE/POINT`コマンドを挿入できます。「CAD表示の編集」の章の「パスラインの移動」を参照してください。

パス移動増分 -
これは**パスラインの移動**ダイアログボックスでパスラインを移動する距離の増分を定義します。「CAD 表示の編集」の章の「パスラインの移動」を参照してください。

パスの移動選択距離 -
これはパスラインの開始および終了点の選択距離を決定します。**[パスラインの移動を有効化]**チェックボックスをマークし、グラフィックの表示ウィンドウで指定の距離内でパスラインをクリックすると、PC-DMISはパスラインを分割する`MOVE/POINT`コマンドを新たに挿入する代わりに既存の`MOVE/POINT`コマンドを検索して変更します。

プローブ移動を無効化 -
このチェックボックスはデフォルトではオフになっており、パスラインの生成中にプローブが移動

する原因となります。このボックスをオンにすると、パスライン生成中にプローブは移動しません。

レポート、及び、動作パラメータの変更

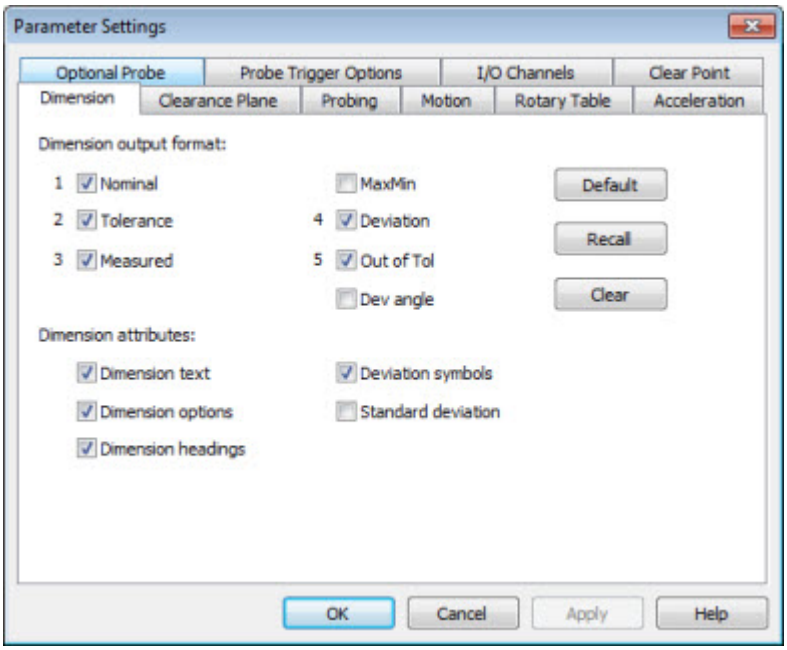
[編集 | ユーザー設定 | パラメータ]メニュー
オプションを用いて、任意のレポートで用いられる内容、書式、および計算方法を変更することができます。加えて、このオプションを用いて、DCC
CMMの測定機動作パラメータを変更することもできます。このメニュー
オプションを選択すると、[**パラメータ設定**]ダイアログ ボックスが開きます。

パラメータ設定ダイアログ ボックスへのアクセスに加えて、**挿入 | パラメータ変更**
サブメニューからコマンドを選択することにより、このダイアログ
ボックスから測定ルーチンに直接コマンドを挿入することが可能です。

以下のタブは、**パラメータ設定**ダイアログ ボックスにおいて利用可能です。

- パラメータ設定:測定結果タブ
- パラメータ設定: [クリアランス平面]タブ
- パラメータ設定: プロービング タブ
- パラメータ設定: 動作タブ
- パラメータ設定: [回転テーブル]タブ
- パラメータ設定: 加速タブ
- パラメータ設定: プローブオプション タブ
- パラメータ設定: プローブ引き金オプション タブ
- パラメータ設定: I/Oチャネル タブ
- パラメータ設定: 点のクリアタブ

パラメータ設定: 測定寸法タブ



パラメータ設定ダイアログボックス - 測定結果タブ

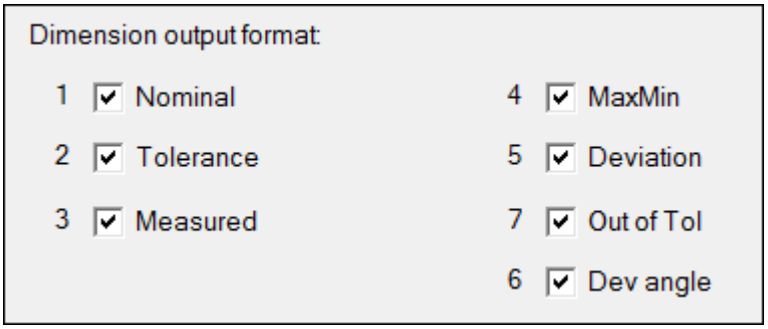
測定結果タブを使用して測定結果の出力形式を変え、印刷レポートに変更を加えることができます。このタブの設定は測定結果テンプレートのラベルのみに適用されます。

DEFAULT.RPT および TEXTONLY.RPT のレポートはいかなる変更も設定に反映されます。

測定寸法タブにアクセスするには:

1. **パラメータ設定** ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | パラメータ**)にアクセスして下さい。
2. **測定寸法**タブをクリックして下さい。

測定寸法出力フォーマット



このコマンドは、PC-DMISの測定寸法出力フォーマットをコントロールします。フォーマット変更のためには、ご希望のフォーマットチェック ボックス（複数可）を選択して下さい。

利用可能なフォーマット:	説明
名目値	全測定寸法の名目値を表示します。
公差	全測定寸法の誤差値を表示します。
測定値	すべて寸法の実測値を表示します。
最大最小	すべての寸法の最大値と最小値を表示します。
ずれ	すべての寸法の偏差値を表示します。
公差範囲外	すべての寸法の公差外れの値を表示します。
ずれ角度	位置寸法の偏差角度を表示します。

ボックス公差から位置度に切り換え（またはその逆方向の切り換え）の場合、正確さを期するためにフォーマットを確認することが重要です。

PC-DMISでは、ボックス公差と位置の公差の印刷の両方で同一のフォーマットを使用しますが、位置の測定結果では追加の欄があるため、欄が多少違って見えます。

例: [最大/最小]チェック ボックスが選択された状態で、2線間の距離の公差を算出する場合、PC-DMISは、最も離れた2点間、または、最も近い2点間の距離を算出します。その後、2つのうちでより悪い（公差範囲から最も離れた）ほうを選択します。**[最大/最小]**チェックボックスが選択されていない場合、PC-DMISは、最大/最小値を表示せずに測定寸法を算出します。

PC-DMISは、当該チェックボックスの左側に数字を表示することで選択した出力の順序を示します。これによって必要に応じて書式の順位を変更することができます。チェックボックスの選択を解除するために、それをダブルクリックして、チェックボックスをクリアできます。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:

```
FORMAT/TEXT,OPTIONS,HEADINGS,SYMBOLS, SD; "DIMENSION OUTPUT"
```

測定寸法出力 =
出力フォーマットは、選択肢の順序に基づいたものとなります。デフォルト出力では、指定された順序ですべての選択肢を表示します。

測定寸法テキスト

☑ Dimension Text

測定寸法テキストチェック
ボックスは、このコマンドのあとに現れる測定寸法用に、測定寸法テキストが編集ウィンドウ内に表示されるか否かをコントロールします。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:

```
FORMAT/TEXT, , , , ;NOM,TOL,MEAS,MAXMIN,DEV,OUTTOL,DEVANG
```

このコマンドに関連するオプションに関しては、「測定寸法出力フォーマット」を参照して下さい。

測定寸法オプション

☑ Dimension Options

[測定寸法オプション]チェック
ボックスは、このコマンドのあとに現れる測定寸法に対して測定寸法オプションが編集ウィンドウ内に表示されるか否かをコントロールします。

これらのオプションは、以下のとおり:

- 単位（「旧式寸法の使用方法」章の「単位」を参照）
- 画像解析（「旧式寸法の使用方法」章の「分析設定」を参照してください）
- テクスチャ解析（「旧式寸法の使用方法」章の「分析設定」を参照してください）
- 矢印乗数（「旧式寸法の使用方法」章の「分析設定」を参照してください）
- 出力オプション（「旧式寸法の使用方法」章の「分析設定」を参照してください）

このチェック ボックス用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:

```
FORMAT/OPTIONS, , , , ;NOM,TOL,MEAS,MAXMIN,DEV,OUTTOL
```

測定寸法の見出し

☑ Dimension headings

測定結果の見出しチェック ボックスは、インスペクション
レポートでの、コラムの見出しをコントロールします。このチェック
ボックスがチェックされていない場合、PC-DMISはコラムの見出しを印刷しません。

ずれの記号

☑ Deviation Symbols

ずれの記号チェック
ボックスは、設定範囲内のずれを表示します。値が大きいために誤差範囲から逸脱している場合には、PC-DMISが、その行の右側に「より大きい」記号 (>)
を示して、そのずれを表示します。値が小さいために誤差範囲から逸脱している場合には、PC-DMISが、その行の右側に「より小さい」記号 (<) を示して、そのずれを表示します。

例:
公称値 = 0.00
測定値 = 0.02
正の公差 = 0.10
負の公差 = 0.20
総公差範囲 = (.10 - (-.20)) = .30
パーセンテージ = 100*(.02 - (-.20))/.3 = 73.3 %
- - - - - - # - - パーセンテージを確認し、それに基づきシフト。

DIM D1= LOCATION OF CIR F5 GRAPH=OFF TEXT=OFF MULT=1.00

軸線	名目値	＋公差	過小公差	測定値	ずれ	誤差範囲外	
x	5.00	0.0100	0.0100	5.00	0.00	0.00	----#----
y	2.00	0.0100	0.0100	2.00	0.00	0.00	----#----
z	-0.25	0.0100	0.0100	-0.25	0.00	0.00	----#----
d	2.00	0.0100	0.0100	2.00	0.00	0.00	
v	i	j	k				

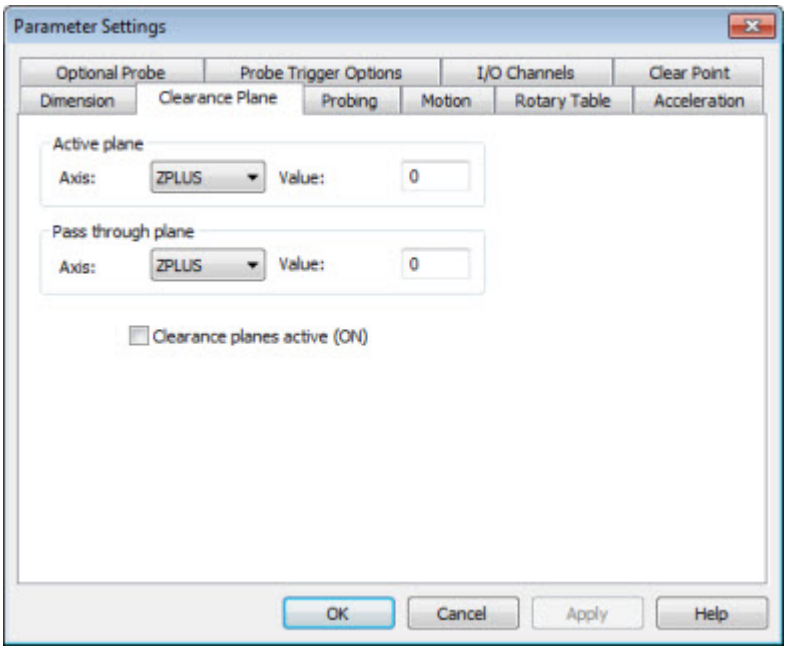
測定寸法 **D1**のデータはここまで

標準偏差

☑ Standard Deviation

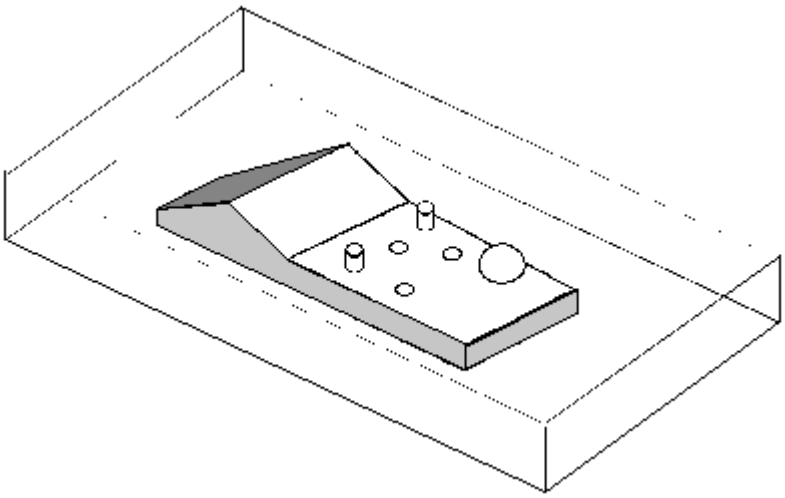
標準偏差チェック ボックスは、要素の標準偏差を表示します。

パラメータ設定: [クリアランス平面]タブ



[パラメータの設定]ダイアログボックス - [クリアランス平面]タブ

[クリアランス平面]タブは、クリアランス平面を定義し、追加する方法を提供します。本質的に、クリアランス平面は、プローブが一つの要素から別の要素へ移動する時に、常に通行できる、パーツ周囲の包囲域を作成します。PC-DMISは定義されている座標系に関してプローブをパーツから事前に決定された距離だけ移動させます。プローブは要素の最終ヒット測定後、次の要素へ呼び出されるまでプローブ深度で停止します。これは中間の移動を定義する必要性が最小限になるためルーチン作成時間を短縮するのに役立ちます。加えて、適切に定義されたクリアランス平面を使用すると、プローブがパーツと不意に衝突することを防ぐことができます。



空き平面からの、想像上の包囲域を持つサンプル パーツ

クリアランス平面を使用するには:

1. [**パラメータ設定**]ダイアログ ボックス（[**編集 | ユーザー設定 | パラメータ**]）にアクセスし、次に[**クリアランス平面**]タブを選択して下さい。

2. **アクティブ平面**、及び、**横断平面**エリアを用いて、空き平面を選択し、それぞれの**値**ボックスを用いて、空きの距離を特定して下さい。

3. [**OK**]をクリックしてクリアランス平面の定義を終了してください。PC-DMISが、編集ウィンドウ上のクリアランス平面に関する情報を含む、`CLEARP`コマンドを挿入します。完成したコマンドは以下のようになります:

   ```
   CLEARP/ACTIVE_PLANE, n, PASS_THROUGH_PLANE, n,TOG1
   ```

   `ACTIVE_PLANE`および`PASS_THROUGH_PLANE`は選択されている軸を参照します。`n`は指定されたオフセット距離を参照します。TOG1はクリアランス平面がアクティブで、新規作成した測定要素および自動要素に対して自動的に使用されるかについてオン/オフを切り替えるフィールドです。

4. ここで、`MOVE/CLEARPLANE`コマンドを測定ルーチンに挿入することができます。`MOVE/CLEARPLANE`コマンド自体は、プローブをクリアランス平面に移動する動きは作成しません。むしろ、PC-DMISは実行中に`MOVE/CLEARPLANE`コマンドに出会うと、基本的に当コマンドは次の移動、測定、チップの選択、または要素の自動作成コマンドの次に予め定義されたクリアランス平面へ移動する許可を与えます。これらの移動コマンドのいずれかが実行された時、プローブは選択済みのアクティブな平面から指定された距離だけに移動します。

5. 新しい`CLEARP`コマンドが定義されると、その直後の`MOVE/CLEARPLANE`は最初に古いクリアランス平面、次に横断平面、それから新しいクリアランス平面へと移動します。

ヒント: グラフィック項目ツールバーから**クリアランス平面項目を切り替え**アイコン を選択すると、現在のクリアランス平面を半透明の画像としてグラフィックの表示ウィンドウに簡単に表示できます。「CAD表示の編集」の章の「クリアランス平面を表示」を参照してください。

アクティブな平面エリア

[**アクティブな平面**]エリアでは、要素が測定されたときにその要素が存在する平面（または軸）を定義します。[**値**]ボックスでは、クリアランス平面がオフセット距離として指定された平面からどれだけ離れるかを現在の測定単位で定義します。クリアランス平面を定義するには、[**軸**]リストより平面を選択し、[**値**]ボックスに新しい値を入力します。

[横断平面]エリア

[横断平面]は、プローブのTIPコマンドに従って、次のアクティブなクリアランス平面に到達するためにプローブが移動し横断するクリアランス平面を定義します。横断平面を適切に定義するには、新規のCLEARP 定義コマンドが、TIPコマンドの直後にある必要があります。PC-DMISが次のMOVE/CLEARPLANEコマンドに出くわすと、横断平面に移動し、次のアクティブなクリアランス平面に到達するまでオフセット距離を保持します。

[クリアランス平面をアクティブ（オン）にする]チェック ボックス

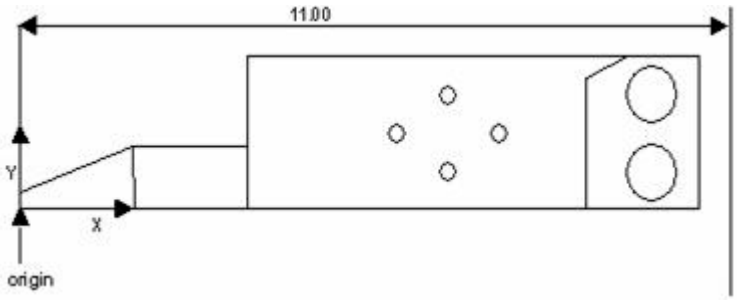
[クリアランス平面をアクティブ（オン)にする]チェックボックスをチェックすると、PC-DMISは、それ以降に編集ウィンドウに挿入された測定要素や自動測定要素の前にMOVE/CLEARPLANEコマンドを自動挿入します。

クリアランス平面に関する注記

距離値以内に入った時に表示される、空き平面の正負の記号に注意してください。当該記号は、平面を定義する直角軸の正、または、負の軸端に対応していなければなりません。例えば、上部空き平面を定義するためには、正の数値を入力し、底部空き平面を定義するためには、負の数値を入力して下さい。

空き平面から他の空き平面への移動は、プローブの位置に影響します。一連の空き平面が、パーツから十分離れていることを確認して下さい。

クリアランス平面は現在の座標系とパートの原点に相対して定義されます。ゆえに、クリアランス平面を定義する際は、パートの周囲に適切なクリアランス空間があるか慎重に確認する必要があります。



クリアランス平面の例

注記: 上記の図面を使用して、パーツの長さが10インチであり、X
原点を左下隅として測定機の軸近くに並んでいると仮定します。XPLUS クリアランス平面を
11インチに設定することでパーツの右側から 1インチのクリアランスを設定できます。

クリアランス平面は、常に、その時点での座標システムとの関連で定義して下さい。新規の座標システムを作成した時でも、空き平面は依然として最初のパーツ配置に関連しています。当該クリアランス平面を新規の座標システムに関連付けたい場合には、クリアランス平面を再定義する必要があります。

付記: サンプル
ヒットを行っている時には、空き平面は使用されません。ですから、ピンを測定時に、プローブがピンの周囲を移動できる距離に、スペイサーの値を設定することが重要です。

コードの例

この例を参考にして下さい:

```
TIP/T1A0B0, SHANKIJK=0, 0, 1, ANGLE=0

CLEARP/ZPLUS,2,ZPLUS,0,ON (新規クリアランス平面の定義)

PLN1 =FEAT/PLANE,CARTESIAN,TRIANGLE

THEO/<0.3597,0.3544,-0.8268>,<0,0,1>

ACTL/<0.3597,0.3544,-0.8268>,<0,0,1>

MEAS/PLANE,3

MOVE/CLEARPLANE (プローブがあらかじめ定義されたクリアランス平面に移動)

HIT/BASIC,NORMAL,<0.2346,0.6411,-0.8268>,<0,0,1>,<0.2346,0.6411,-
0.8268>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<0.2034,0.2502,-0.8268>,<0,0,1>,<0.2034,0.2502,-
0.8268>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<0.6412,0.172,-0.8268>,<0,0,1>,<0.6412,0.172,-
0.8268>,USE THEO = YES

測定の終了/

CON2 =FEAT/CONE,CARTESIAN,IN

THEO/<8.9134,0.4921,-0.9193>,<0,0,-1>,0.3964,0.5906,0.5906

ACTL/<8.9134,0.4921,-0.9193>,<0,0,-1>,0.3964,0.5906,0.5906
```

```
MEAS/CONE,8

MOVE/CLEARPLANE (プローブがあらかじめ定義されたクリアランス平面に移動)

HIT/BASIC,NORMAL,<9.2087,0.4921,-0.9193>,<-1,0,0>,<9.2087,0.4921,-
0.9193>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.9134,0.7874,-0.9193>,<0,-1,0>,<8.9134,0.7874,-
0.9193>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.6181,0.4921,-0.9193>,<1,0,0>,<8.6181,0.4921,-
0.9193>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.9134,0.1969,-0.9193>,<0,1,0>,<8.9134,0.1969,-
0.9193>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<9.2087,0.4921,-1.3158>,<-1,0,0>,<9.2087,0.4921,-
1.3158>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.9134,0.7874,-1.3158>,<0,-1,0>,<8.9134,0.7874,-
1.3158>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.6181,0.4921,-1.3158>,<1,0,0>,<8.6181,0.4921,-
1.3158>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<8.9134,0.1969,-1.3158>,<0,1,0>,<8.9134,0.1969,-
1.3158>,USE THEO = YES

測定の終了/

CIR1 =FEAT/CIRCLE,CARTESIAN,IN,LEAST_SQR

THEO/<6.0827,3.1693,-0.012>,<0,0,1>,0.5906

ACTL/<6.0827,3.1693,-0.012>,<0,0,1>,0.5906

MEAS/CIRCLE,4,WORKPLANE

MOVE/CLEARPLANE (プローブがあらかじめ定義されたクリアランス平面に移動)

HIT/BASIC,NORMAL,<6.378,3.1693,-0.012>,<-1,0,0>,<6.378,3.1693,-0.012>,USE
THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<6.0827,3.4646,-0.012>,<0,-1,0>,<6.0827,3.4646,-
0.012>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<5.7874,3.1693,-0.012>,<1,0,0>,<5.7874,3.1693,-
0.012>,USE THEO = YES
```

```
HIT/BASIC,NORMAL,<6.0827,2.874,-0.012>,<0,1,0>,<6.0827,2.874,-0.012>,USE
THEO = YES
```

測定の終了/

```
CLEARP/YMINUS,-3,ZPLUS,2,ON
```
(この場合、横断平面とともに新しいクリアランス平面を定義)

```
TIP/T1A90B-180, SHANKIJK=0, -1, 0, ANGLE=180

CIR2 =FEAT/CIRCLE,CARTESIAN,IN,LEAST_SQR

THEO/<4.8819,0,-0.5906>,<0,1,0>,1.2362

ACTL/<4.9445,15.8342,-0.5906>,<0,0,1>,31.4282

MEAS/CIRCLE,4,WORKPLANE
```

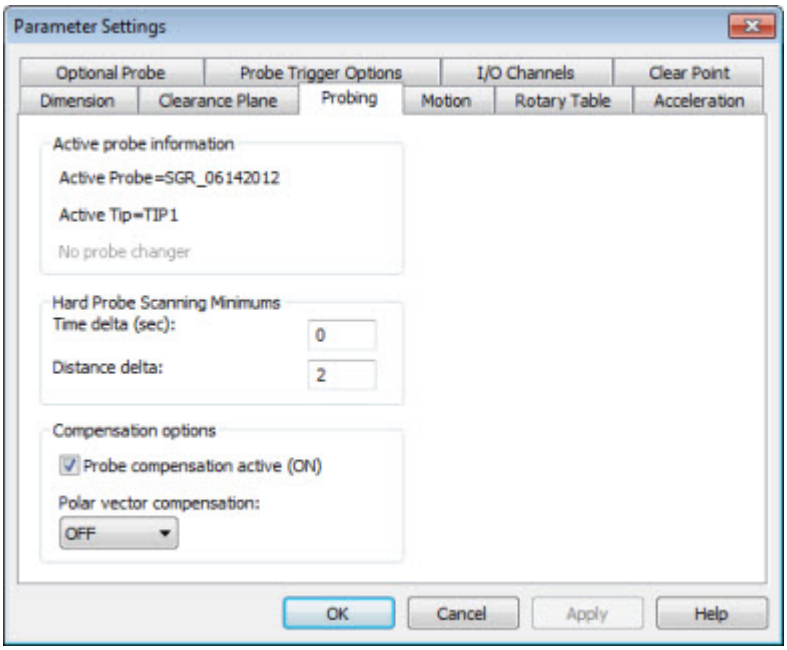
MOVE/CLEARPLANE (プローブがZPLUSにある横断平面を通って、YMINUSの空き平面へ移動)

```
HIT/BASIC,NORMAL,<4.8819,0.0623,-0.8406>,<-0.9999185,-
0.012768,0>,<4.8224,0.0025,-0.8406>,USE THEO = YES

MOVE/CIRCULAR

HIT/BASIC,NORMAL,<5.1319,0.0623,-0.5906>,<-0.9999279,-
0.012008,0>,<5.0733,0.0026,-0.5906>,USE THEO = YES

MOVE/CIRCULAR

HIT/BASIC,NORMAL,<4.8819,0.0623,-0.3406>,<-0.9999185,-
0.012768,0>,<4.8224,0.0025,-0.3406>,USE THEO = YES

HIT/BASIC,NORMAL,<4.6319,0.0623,-
0.5906>,<0.9999071,0.0136308,0>,<4.69,0.0041,-0.5906>,USE THEO = YES
```

測定の終了/

```
MOVE/CLEARPLANE
```

パラメータ設定: プロービング タブ



[パラメータ設定] ダイアログ ボックス—[プロービング] タブ

[プロービング]タブは、その時点で使用中のプローブ
ファイル、アクティブなチップ、及び、プローブ
スロット（使用している場合）を表示します。また、これにより、**[ハード
プローブスキャン最小値]** で時間変化量および距離変化量を設定し、**[プローブ補整をアクティブ（
オン）にする]**チェック
ボックスを選択し、ドロップダウンリストから**[極ベクトル補整]**を選択することができます。

> **注記:**
> この機能をサポートしないトラッカーについては**ハードプローブスキャン最小値**エリアは無効化されます。

プロービングタブにアクセスするには:

1. **パラメータ設定**ダイアログ ボックス **(編集 | 仕様 | パラメータ)**にアクセスして下さい。
2. 利用可能なタブの中から**プロービング**タブをクリックして下さい。

[アクティブプローブの情報]エリア

アクティブ プローブ

Active Probe=PH9

[プローブ]タブにあるこの行は、その時点で使用中のプローブ
ファイルを表示します。別のプローブ ファイルの選択、または、新規のプローブ

ファイル名の作成に関する、より詳しい情報については、「ハードウェアの定義」章の「プローブファイル名」を参照して下さい。

アクティブ先端チップ

Active Tip=T1A0B0

[プローブ]タブにあるこの行は、その時点で使用中のプローブファイルを表示します。表示された値、及び先端チップの選択、作成、削除に関する、より詳しい情報については、「ハードウェアの定義」章の「[アクティブチップ]リスト」を参照して下さい。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`TIP/active_tip_name`

何番スロット内のプローブ

[プローブ]タブにあるこの行は、現在使用中のプローブのプローブ交換器、またはスタイラスのスロット番号を示します。このオプションは、プローブ交換器が設定された時のみ利用可能です。

プローブ交換機を使用していない場合、または、その時点で使用中のプローブがプローブ交換機に属さない場合、PC-DMISは、お客様のその時点で使用中のプローブ、または、スタイラスがプローブ交換機に属さない旨、あるいは、プローブ交換機が使用されていない旨を知らせるテキストを表示します。

プローブ、または、プローブピンをプローブ交換機に追加することに関する、より詳しい説明については、「プローブ交換機オプションのセットアップ」の項目下の「スロット」を参照して下さい。

[ハードプローブスキャン最小値] エリア

注記:
この機能をサポートしないトラッカーについては**ハードプローブスキャン最小値**エリアは無効化されます。

[時間変分 (秒)] ボックス

Time delta (sec): 0

この値により、PC-DMISは、ミリセコンドの単位で特定された、遅延時間を待たずに行われたヒットを削除し、スキャンを行うポイントの数を減らすことができます。

[距離の変化量] ボックス

Distance delta: 0.0787

この値により、ミリメートルの単位で特定された、距離よりも近くに行われたヒットを削除し、測定データの数を減らすことができます。ヒットの削除は、データが測定機から送付された時に起こります。PC-DMISは、特定の距離以上に離れたポイントのみを保存します。

[補正オプション]エリア

プローブ補整アクティブ（オン）

プローブ補整アクティブ(オン) チェックボックスを用いて、プローブの半径を補整することができます。もしマークされ、また、**OK**をクリックすれば、これは編集ウィンドウに`PROBECOM/ON`コマンドを挿入します。PC-DMISは、測定したそれぞれの要素にプローブの半径を補整します。マークがクリアされれば、コマンドは編集ウインドウで`PROBECOM/OFF`にセットされます。ユーザがポータブルデバイスを使用している場合は、同様にこれをオンかオフにトグルすれば、**ポータブル**ツールバーを使用することができます。

極ベクトル補整

[**極ベクトル補整**]ドロップダウンリストを用いると、ベクトルおよび面上の点の測定は常に、極ベクトルに沿って補整されます。以下のオプションが利用可能です。

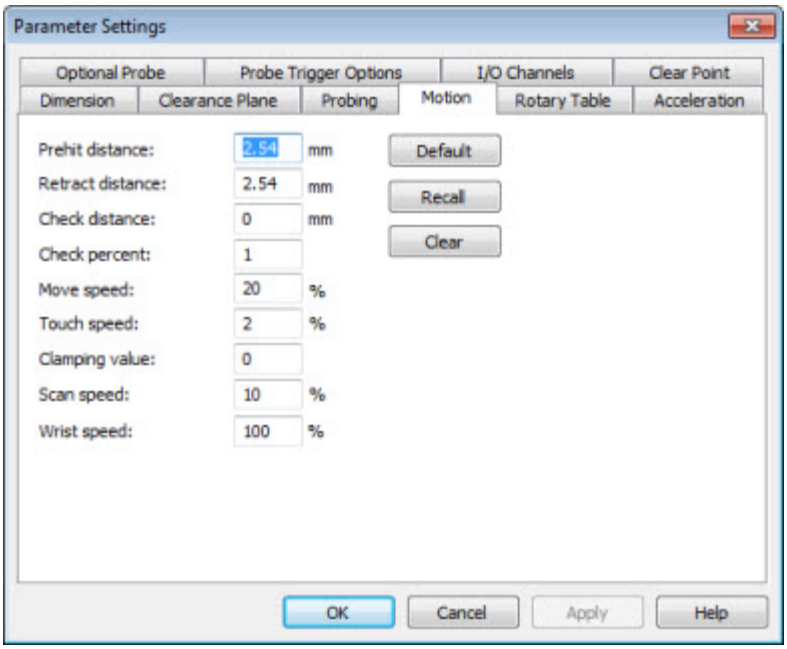
- **オフ** - ベクトルおよび面上の点は通常どおりに機能します。
- **XYPL** -
  各ベクトル、及び、曲面ポイントに対するベクトル補整が、当該ポイントからその時点での原点に渡るベクトルに沿った、XY平面上の２Dで行われます。
- **YZPL** -
  各ベクトルおよび面上の点に対するベクトル補整が、当該点から現在の原点に向かうベクトルに沿って、YZ平面上で2次元的に行われます。
- **ZXPL** -
  各ベクトルおよび面上の点に対するベクトル補整が、当該点から現在の原点に向かうベクトルに沿って、ZX平面上で2次元的に行われます。
- **3D** -
  極ベクトル補整が、当該点から現在の原点に向かう3次元ベクトルに沿って行われます。

これらのオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:

```
POLARVECTORCOMP/ OFF
POLARVECTORCOMP/ XYPL
```

```
POLARVECTORCOMP/ YZPL
POLARVECTORCOMP/ ZXPL
POLARVECTORCOMP/ 3D
```

パラメータ設定: 動作タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス—[動作]タブ

[動作]タブではヒットを取る時にプローブが移動できる距離を変更できます。また、PC-DMISがヒットを取り点から点へ移動する速度も設定できます。

注記: 速度ボックス(**移動速度**、**接触速度**、及び**スキャン速度**)の値は、**ミリメートル毎秒**または、全許容速度のパーセンテージのいずれかで表示するか、決定することができます。これは、[**設定オプション**]ダイアログ ボックスの[**パーツ/測定機**]タブ上の[**絶対速度を表示**]チェックボックスを選択または選択解除することで可能です。

動作タブ内の情報を編集するには:

1. **パラメータ設定**ダイアログ ボックス (**編集 | 仕様 | パラメータ**)にアクセスして下さい。
2. **動作**タブをクリックして下さい。様々なボックスが現れます。
3. 変更したい数値をハイライトで表示して下さい。
4. 新しい値をタイプ入力して下さい。

5. **適用する**または**OK**をクリックして下さい。PC-DMISは変更したコマンドを測定ルーチンに挿入します。

動作値を初期工場設定にリセットするには、[**呼び出し**]ボタンを押して下さい。[**呼び出し**]ボタンは、表示されている動作値をPC-DMIS設定エディタ内に記憶されている値に戻します。[**デフォルト**]ボタンが選択されると、表示されている値は設定エディタ内に記憶されます。PC-DMIS設定エディタに関する、より詳しい説明については、「レジストリのエントリーを変更する」の項を参照して下さい。

動画速度の変更:
オフライン動画速度を変更したい場合、[設定オプション]ダイアログボックスの[**一般**]タブにある、「**実行エリア**」を参照してください。また、「オフラインモードの使用」の「オフラインでの測定ルーチンの実行およびデバッグ」を参照してください。

ヒット前の距離

ヒット前の距離ボックスを用いて、測定機のヒット前の距離の値を入力できます。これは、PC-DMISが、パーツを探し始める曲面から遠ざかる時の距離です。円弧や円内にヒットを行う時、必要に応じて、PC-DMISは自動的にこの値を変更します。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`PREHIT/ nnn.nnnn`

ここで`nnn.nnnn`は距離値です。

撤回距離

撤回距離ボックスを用いて、ヒットが行われた後に、プローブが撤回する距離を入力できます。円弧や円内にヒットを行う時、必要に応じて、PC-DMISは自動的にこの値を変更します。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`RETRACT/ nnn.nnnn`

ここで`nnn.nnnn`は距離値です。

注記: コントローラの中には自身で撤回できないものもあります。このような場合、PC-DMISは撤回を実施するための移動を発し、その距離はボールの表面からパートの理論的なヒット位置までに基づきます。コントローラが撤回を実施しない場合、その距離は特定のコントローラに基づき、ボール表面またはボールの中心から理論的または測定されたヒットの位置までの距離のいずれかで計算できます。

チェック距離

Check Distance: 0 inches

距離をチェックボックスを用いて、理論的ヒット位置からの距離をインチかミリメーターのいずれかで入力できます。この距離を参考に、曲面が存在しないと決めるまで、測定機はパーツの曲面を探知し続けます。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`CHECK/distance,percentage`

穴発見オペレーション中のパーセンテージ移動

穴発見オペレーション用にチェックする距離を定義する時、チェック距離のパーセンテージによりサーチを行うよう、PC-DMISに指示することができます。

これをするには、以下の操作を行います。

1. 編集ウィンドウにアクセスし、それをコマンド モードにして下さい。
2. 編集ウィンドウ上のチェックコマンドをクリックして下さい。
3. 二番目の数字へ移動するために、TABキーを押して下さい。
4. 新規のパーセンテージ値をタイプして下さい。デフォルト値は、1で、これは、チェック距離の100%を意味しています。このように、1=10%, .2=20%, .3=30%等となります。

例えば、次のコードにおいて、数値.3は、20単位ある総チェック距離のうちの30%を表します:
`CHECK/20,.3`

孔の発見に関する、より詳しい情報については、「要素の自動作成」の章を参照して下さい。

チェック パーセント

Check Percent: 1

チェック
パーセント値は、孔発見オペレーション時に移動する、総距離のパーセントを決めます。**1**がタイプされた場合、その数値は100%に相当することに注意してください。このように、100%は**1**として、25%は**.25**として、及び、10%は**.10**として入力して下さい。

移動速度 %

Move Speed: 20 %

[**移動速度**]ボックスを用いて、点から点へCMMが移動する速度を変更することができます。[**設定オプション**]ダイアログ

ボックスの[パート/測定機]タブにある[絶対速度を表示]チェックボックスの状態により、これは絶対速度(ミリメートル/秒)または測定機の定義された最高速度のパーセンテージのいずれかとなります。

（移動速度のオプション、及びプローブ校正に関する説明については、「ハードウェアの定義」の章にある「プローブの定義」の「測定」トピックを参照して下さい。）

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、次のようになります:
`MOVESPEED/ nnn.nnnn`

ここで`nnn.nnnn`は速度値です。

接触速度 %

Touch Speed: 2 %

接触速度ボックスを用いて、CMMがヒットを行う速度を変更することができます。[**設定オプション**]ダイアログ
ボックスの[パート/測定機]タブにある[絶対速度を表示]チェックボックスの状態により、これは絶対速度(ミリメートル/秒)または測定機の定義された最高速度のパーセンテージのいずれかとなります。これは20パーセントを超えることはできません。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようです:
`TOUCHSPEED/ nnn.nnnn`

ここで`nnn.nnnn`は速度値です。

ヒット前距離、または、撤回距離のいずれか、及び、移動速度、または、接触速度のいずれかの、変更の効果を確認するには、DCCでのフィーチャー測定時に、これらのオプションが、どうお互いに影響するかを理解することが重要です。イベントの順序について述べると、まず、測定機がフィーチャーに向かい、移動速度で移動します。ヒット前距離に達した時、ヒットを行うために、接触速度で当該フィーチャーに近づきます。ヒット後、撤回距離に達するまで、接触速度で返却します。撤回距離に達すると、測定機は、次の場所へ移動速度で向かいます。

留め金値

Clamping Value: 0

留め金値は、Leitz 社のコントローラーおよび Leitz
ブランドのTTPと併用された場合にのみ機能します。この数値は、プローブがライツCMM上に固定される強度を、コントローラーに指示します。

プローブ先端チップの重量次第で、留め金値の増減が必要かもしれません。

- チップの重量が大きいと、留め金値の増加が必要かもしれません。

- 軽い先端チップ用には、留め金値の減少が必要かもしれません。

スキャン速度 %

スキャン速度ボックスを用いて、CMMがパーツをスキャンする速度を変更することができます。[**設定オプション**]ダイアログボックスの[パート/測定機]タブにある[**絶対速度を表示**]チェックボックスの状態により、これは絶対速度(ミリメートル/秒)または測定機の定義された最高速度のパーセンテージのいずれかとなります。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`SCANSPEED/nnn.nnnn`

ここで`nnn.nnnn`は速度値です。

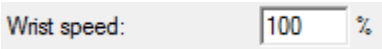
実行中に**あらかじめ定義された**モードを使ってスキャンする時（「あらかじめ定義する」の意味に関しては「パーツをスキャンする」章の「実行コントロールエリア」をご覧下さい）スキャン速度は増分を特定した所で、**データを取り戻す**のに大変重要です。**速いスキャン速度**を特定した際は、CMMは要求通りにスキャンを実行しますが、CMMからのデータは増分を特定した時に余地がないことがあります。

例:
CMMが**DEFINED**モードで20ミリ秒当たりのヒット速度でデータを収集するとします。増分(ヒット間の最低距離)を0.5mm、**スキャン速度**を75mm/秒に指定すると、CMMは1.5mmごとに点を返します。これを避けるには、**スキャン速度**を15、または、20mm/秒に下げて、必要条件を満たすよう、1ヒット/20ミリ秒の割合にすることが可能です。

PC-DMISは、特定のスキャン速度では、与えられた増分を測定できない旨を告げるメッセージを表示し、このような場合の発生について警告します。その後、**スキャン速度**を減少するか、または、増分を増加するよう、求められます。

それから、**スキャン速度**設定を選択し、適切なスキャン速度に変更することができます。

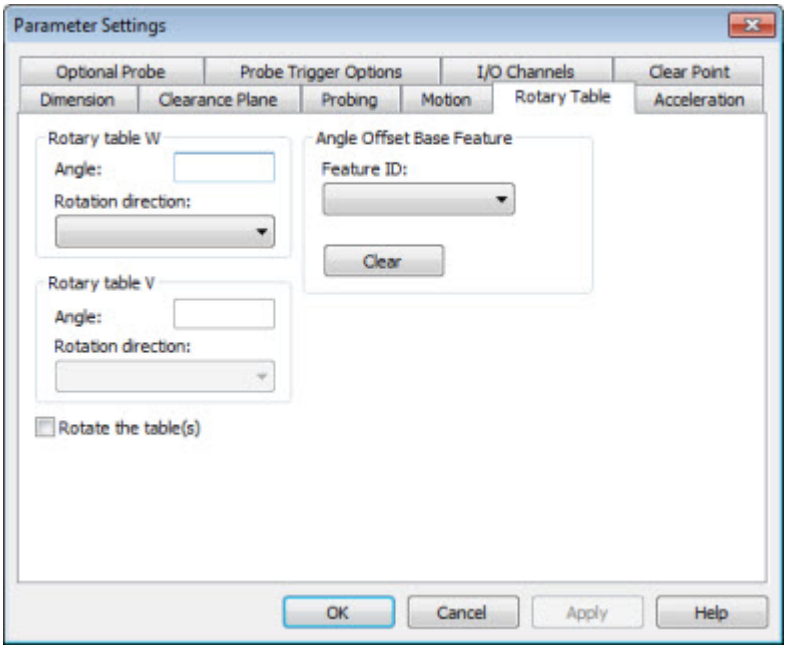
リスト速度 %



[リスト速度]
ボックスによって測定の速度を変更できます（CW43Lなど）。[**設定オプション**]ダイアログボックスの[パート/測定機]タブにある[**絶対速度を表示**]チェックボックスの状態により、これは絶対速度(ミリメートル/秒)または測定機の定義された最高速度のパーセンテージのいずれかとなります。

このオプション用の編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`WRISTSPEED/ nnn.nnnn`

パラメータ設定: [回転テーブル]タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス—[回転テーブル]タブ

[回転テーブル]
タブでは現在アクティブな回転テーブルを定義された角度および方向に回転させることができます。 また、これを使用して指定の要素またはアラインメントに基づいて回転を自動設定するか、または2つを組み合わせて指定の要素またはアラインメントまで回転し、その要素またはアラインメントに基づいたオフセットの相対角度に回転することも可能です。

[回転テーブルの設定]ダイアログ
ボックスから、**単一回転テーブル**、二重回転テーブル、または、**積み重ね回転テーブル**が選択すると、[回転テーブル]タブが利用可能になります。「回転テーブルの定義」を参照して下さい。

`MOVE/ROTAB` コマンドを挿入してテーブルを回転するには、以下の手順に従います:

1. パラメータ設定ダイアログ ボックス (**編集 | 仕様 | パラメータ**)にアクセスして下さい。
2. [回転テーブル]タブを選択します。
3. 特定の角度まで回転するか、または、要素まで回転するか (またはその両方)
   を選択して下さい。

- 特定の角度まで回転する場合、**回転テーブルW**、または、**回転テーブルV**エリアを記入し、回転**角度**と**回転方向**を定義して下さい。
- 特定の要素またはアラインメントまで回転する場合、**[角度オフセット基準要素]**エリアに入力します。

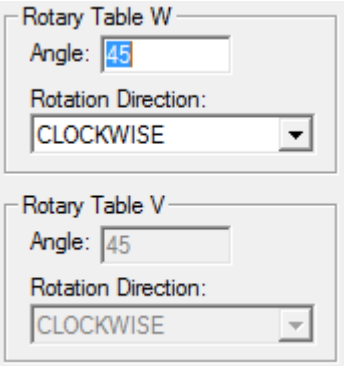
4. 即座にテーブルを回転したい場合、**テーブルを回転**チェックボックスをチェックして下さい。
5. **適用する**ボタンをクリックして下さい。PC-DMISが、編集ウィンドウ内に`MOVE/ROTAB`コマンドを挿入します。

このオプションに対する編集ウィンドウのコマンドラインは、以下のようになります:
`MOVE/ROTAB,` 角度, *`DIRECTION,`* *要素*

スタック設定にしてある場合、このオプションに対する編集ウィンドウのコマンド行は、以下のようになります:
`MOVE/ROTAB,` 角度, `DIRECTION,` 角度2, *`DIRECTION2,`* *要素*

これに加えて、お手持ちのポートロックが回転テーブル用にプログラムされている場合にのみ、**回転テーブルセットアップ**メニュー オプションは利用可能です。

回転テーブルW / 回転テーブルV



回転テーブルWエリア、及び、回転テーブルVエリア

回転テーブルWエリア、及び、**回転テーブルV**エリアを用いて、二個までの回転テーブル、テーブルW、及び、テーブルVをコントロールできます。PC-DMISが、その時点でのアクティブな回転テーブルに関連のエリアをアクティブにします。積み重ね回転テーブルのコンフィギュレーションがある場合には、PC-DMISが両方のエリアをアクティブにし、それにより、一度に両テーブル用に角度をタイプ入力し、回転方向を定義することができます。「回転テーブルの定義」を参照して下さい。

これらのエリアは、同一のオプションを持ちます:

角度ボックス
これはテーブルの回転角度を定義します。

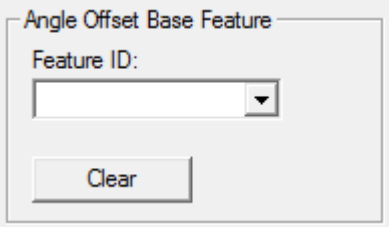
回転方向リスト
[回転方向]
ドロップダウンリストでは、テーブルを回転させたい方向を選択できます。利用可能なオプションは以下のとおりです。

時計回り:回転テーブルの角度ボックスに入力された角度に達するまで、テーブルを時計回りの方向に回転させます。

反時計回り:
回転テーブルの角度ボックスに入力された角度に達するまで、テーブルを反時計回りの方向に回転させます。

最短:
回転テーブルの角度ボックスに入力された角度に達するまで、最短の経路（時計回り、または、反時計回り、のいずれか）で回転します。

角度オフセットベース要素



[角度オフセット基準要素] エリア

[角度オフセット基準要素] エリアでは、[**要素 ID**]
リストより要素またはアラインメントを選択できます。要素の法線が測定機の Z
軸に一致する所(またはハードウェア設定にできるだけ近く一致する所) の角度が回転テーブルの 0 度になります。これにより、初期角度を定義することなく目的の要素またはアラインメントまで回転させることができます。目的の要素またはアラインメントを指定するだけです。選択した要素またはアラインメントが基準要素 (または 0度) となり、そこから PC-DMIS
は相対する角度までテーブルを回転します。このような相対測定は、初期開始角度が未知であるカメラベースの Vision 環境で特に便利です。

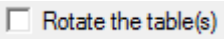
これは単一およびスタック回転テーブルの両方で機能します。

要素 ID リスト
これには測定ルーチンのすべての要素と引数が含まれます。テーブルの回転の中心となる要素またはアラインメントを選択することができます。

クリア
これは選択した要素またはアラインメントをクリアします。

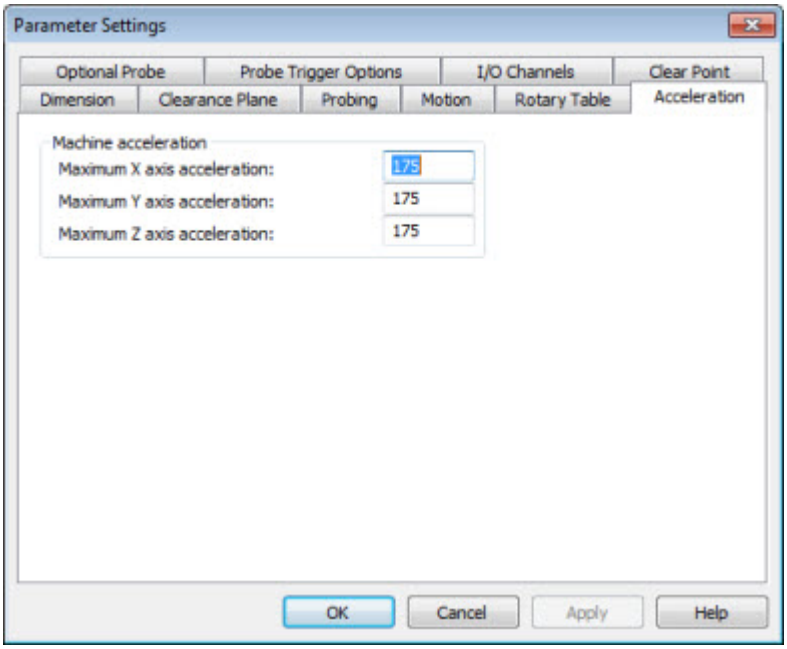
MOVE/ROTAB
コマンドを使用して、測定ルーチンの実行中にテーブルを要素またはアラインメントまで回転させることができます。「移動コマンドの挿入」の章にある「回転テーブルの移動コマンドの挿入」を参照して下さい。

テーブルを回転



テーブルを回転チェック
ボックスを用いて、適用するまたは**OK**ボタンが押されると、特定の角度へ、その時点でのテーブルが回転するように設定できます。

パラメータ設定: 加速タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス - [加速]タブ

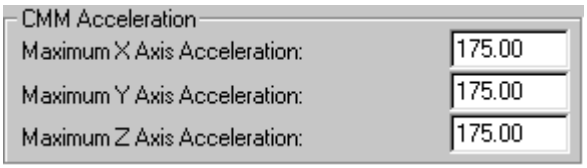
加速タブは、CMM及びテーブル両方の動作の追加の編集能力を表示します。

加速タブにアクセスするには:

1. メイン メニュー (**編集 | 仕様 | パラメータ**)から、**パラメータ設定**ダイアログ ボックスにアクセスして下さい。

2. **加速**タブを選択して下さい。

CMMの加速



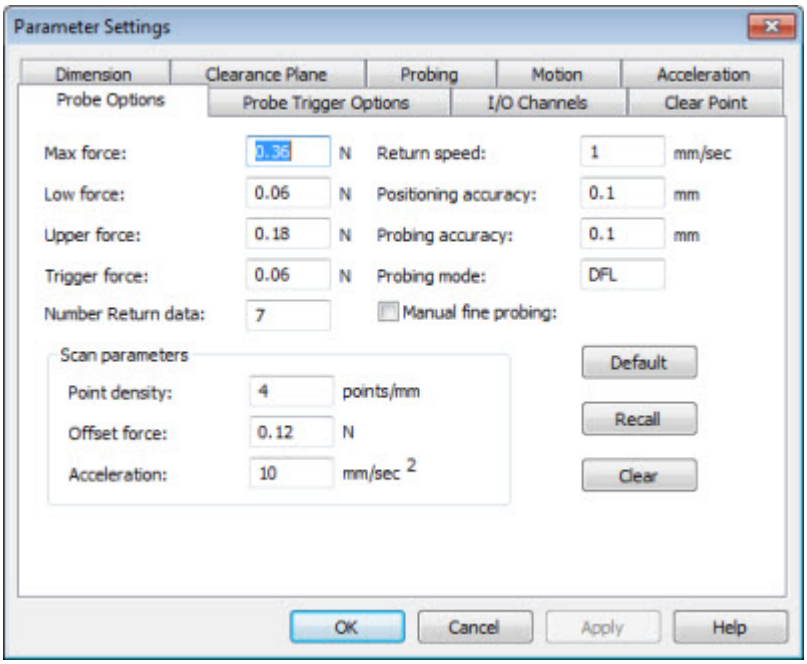
[**加速**]タブの[**CMMの加速**]エリアを用いて、CMMのX, Y,
またはZ軸沿いの最大加速度(ミリメートル毎秒毎秒)
を変更できます。利用可能なオプションは以下のとおりです。

最大X軸加速
のこのボックス内の数字は、CMMがX軸線に沿って移動する場合に、最大加速度を意味しています。

最大Y軸加速
のこのボックス内の数字は、CMMがY軸線に沿って移動する場合に、最大加速度を意味しています。

最大Z軸加速
のこのボックス内の数字は、CMMがZ軸線に沿って移動する場合に、最大加速度を意味しています。

パラメータ設定: プローブオプション タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス - [プローブオプション]タブ

[プローブ置く書ン]タブでは、アナログプローブをコントロールする追加機能が提供されます。これらの機能には、以下のプロービング関連の値が含まれます:

- 最高強度
- 最低強度
- 最高強度
- 引き金の強度
- 返却時のデータの数
- 返却速度
- 位置付けの正確さ
- プロービングの正確さ
- プロービング モード
- 精巧な手動プロービング

また、以下のスキャン関連値と一般的目的用ボタンが含まれます:

- ポイントの密度

- オフセット強度
- 加速
- デフォルト ボタン
- 呼び出しボタン
- 消去ボタン

これらの各項目については、以下により詳しい記述があります。

プローブオプションタブにアクセスするには:

1. メイン メニュー (**編集 | 仕様 | パラメータ**)から、**パラメータ設定**ダイアログ ボックスにアクセスして下さい。
2. [**プローブオプション**]タブを選択します。

注意:
プローブオプションタブの値は測定機固有です。[**精巧な手動プロービング**]チェックボックス、及び、[**点密度**]ボックスを除いて*その数値は一般に変更すべきではありません。*変更を行う前に、測定機の製造会社にお問い合わせ下さい。

[**適用**]または[**OK**]をクリックして、編集ウィンドウに`OPTIONPROBE`コマンドを挿入します。

校正中にアナログプローブを`OPTIONPROBE`
コマンドの使用に関する、より詳しい説明については、測定ドキュメントの「SP600上位マトリックス（定期校正）についてのご注記」トピックを参照して下さい。

最高強度

最高強度ボックス
を用いて、エラーが起こり、測定が停止される前の、プローブが持つことのできる最高強度を入力することができます。

「ニュートン」は力の単位です。 1ニュートンは1キログラムの質量の速度を1メートル毎秒毎秒加速するのに必要な強度です

アナログプローブサイクルの**間**、プローブが最初にパートに触れると、その最高強度値に達するまで移動を続けます。次に、方向を変えてパートから離れます。このパートに触れた後、パートに向かう動作は、しばしば*接触力*として参照されます。その数値は、ニュートンで指定されます。通常

偏差モード（DFL）のプロービング
サイクルでは、プローブがパートから離れる際にコントローラーはデータを集積します。

最低強度

Low Force: 0.06 N

最低強度ボックスを用いて、測定機が測定されるオブジェクトに接触する時の最低強度を入力できます。

通常偏差モード（DFL）のプロービング
サイクルでは、コントローラーは、この強度で、データ集積を中止します。その数値は、ニュートンで指定されます。

最高強度

Upper Force: 0.18 N

最高強度ボックス
は測定強度の上限です。この強度に達すると、測定機は、測定中のオブジェクトから遠ざかります。

通常偏差モード（DFL）のプロービング
サイクルでは、コントローラーは、この強度で、データ集積を開始します。その数値は、ニュートンで指定されます。

引き金の強度

Trigger Force: 0.06 N

引き金の強度ボックスを用いると、測定読み取り時の強度を入力できます。

通常偏差モード（DFL）のプロービング
サイクルでは、この強度で、現ポイント(APT)が算出され、PC-DMISに返却されます。その数値は、ニュートンで指定されます。すべてのアナログプローブ/コントローラーが、この入力を使用するわけではありません。

返却時のデータの数

Number Return data: 7

[**返却時のデータの数**]ボックスを使用して、測定機が測定中のオブジェクトから遠ざかるときに実行される読み取りの数を入力することができます。

この値は、**最高 強度**及び**最低強度**の値により定義され、プロービング
ウィンドウ内に集められる、最低データ数を定めます。

返却速度

Return Speed: 1 mm/sec

リターン速度ボックスを用いて、プローブが測定しているオブジェクトから離れる速度を決定する値を設定できます。これは、ミリメートル/秒で特定されます。

位置付けの正確さ

Positioning Accuracy: 0.1 mm

[位置決めの精度]ボックスは、Leitzインターフェースに特有のパラメータです。この値が入力されると、プローブが測定対象のパーツへ移動する際に、どれだけ慎重にアプローチ
ベクトル上に留まるべきかを、CMMに指示します。

数値が小さくなると、測定機が指定の位置を得ることがより困難になります。しかしながら、数値がより小さい場合、測定がより正確になります。この値は、常にミリメートルで表示されます。

この数値は、通常、デフォルト値に設定されるべきです。

プロービングの正確さ

Probing Accuracy: 0.1 mm

プロービングの正確さボックスを用いて、測定に必要な正確性を決定することができます。この値が満たされていない場合には、測定は行われず、エラーとなります。その数値は、ミリメートルで指定され、通常では、デフォルト設定値として保存されるべきです。

プロービング モード

Probing Mode: DFL

これは、使用されているプロービング
サイクルのタイプを特定します。最もよく使われるサイクルは、偏差モード（DFL)です。ソフトプロービング（SFT)のような、他のサイクルはまた、一部のアナログプローブ/コントローラーに対応している可能性があります。ある場合には、プローブ/コントローラーが複数のモードを持たないかもしれず、この値は無視されます。

精巧な手動プロービング

Manual Fine Probing: ☑

[**精巧な手動プロービング**]チェックボックスが選択され、手動でプローブ点が取られた場合、通常偏差モードのプローブサイクルを使用するためにパートから離れている間にコントローラーは自動的にDCCモードに切り替わります。これにより手動プローブは遅くなりますが精度は上がります。

アナログ プロービング
システムを持つ、最近の測定機は**精巧な手動プロービング**に対応している可能性がありますが、すべてのアナログプローブ/コントローラーが、このモードの手動プロービングに対応しているわけではありません。その場合には、PC-DMISはこのチェック
マークを無視します。お手持ちのコントローラーがこのオプションに対応しているか否かについては、お客様のCMMコントローラー製造会社にお尋ねください。

ポイントの密度

[**点密度**]ボックス
を用いて、スキャン中に、１ミリメートルごとに行われる測定読み取り回数を設定できます。

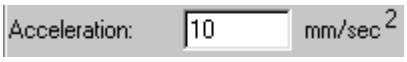
設定エディタ内のレジストリ
エントリーであらかじめ定義された**点密度**よりスキャン増分が小さい場合、PC-DMISは、最低増分がスキャン用のと点密度より小さいことに対する警告を表示します。それから、ダイアログ ボックス内の増分設定を確認するように催促されます。

その後、スキャンの**ポイントの密度**の値を適切なものに変更することが可能です。

オフセット強度

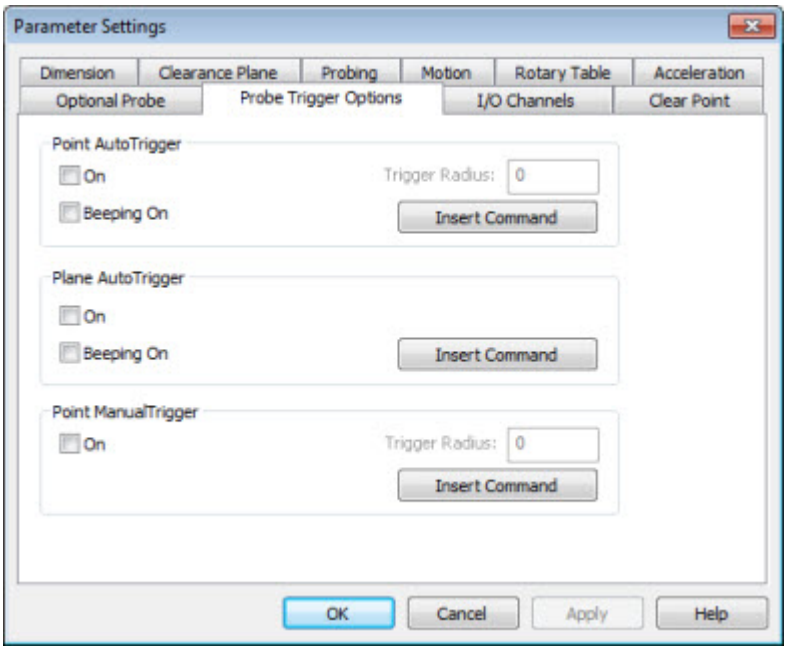
これを用いて、スキャン中に維持すべき強度のレベルを特定できます。その数値は、ニュートンで指定されます。

加速



これを用いて、スキャン中の加速度を特定できます。その数値は、mm/sec/sec で特定されます。

パラメータ設定: プローブ引き金オプション タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス—[プローブトリガオプション]タブ

[プローブトリガオプション]タブを用いて、公差領域を決定でき、その後、編集ウィンドウに`POINT AUTOTRIGGER`、`PLANE AUTOTRIGGER`、及び`POINT MANUAL TRIGGER`コマンドを挿入することができます。一定の条件が満たされると、これらのコマンドがヒットのトリガとなります。

注記:
特定のインターフェースを持つ、手動CMM測定機のみ、これらのプローブの引き金に関するオプションに対応しています。現時点でのこれらのインターフェースは次のとおりです:
BackTalk、Faro、Romer、Garda、GOM (Krypton)、Axila、Leica、Polar、及び、SMXLaser。

このタブにアクセスするには:

1. メイン メニュー (**編集 | 仕様 | パラメータ**)から、**パラメータ設定**ダイアログ ボックスにアクセスして下さい。
2. [**プローブトリガオプション**]タブを選択して下さい。

対応のフィーチャー

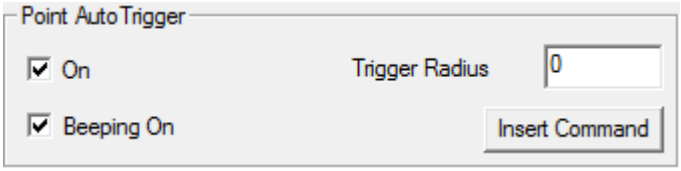
これらの引き金に関するコマンドは、以下の対応のフィーチャー上で機能します:

自動要素: 円、楕円、エッジ ポイント、円形スロット、四角形スロット、切り欠き、及び、多角形

測定された要素: 円、線、及び、円形スロット

これに加えて、POINT AUTOTRIGGERコマンドは、自動ベクトル点要素、及び、測定された点要素に対応します。

[点のAutoTrigger]エリア



[点の自動トリガ]エリアを用いると、公差領域を持つ編集ウィンドウにPOINT AUTOTRIGGER/コマンドを挿入することが可能です。

POINT AUTOTRIGGER/コマンドは、元来のヒット位置から指定された距離だけ離れた公差域にプローブが入った時、PC-DMISに、自動的にヒットを取るよう指示します。例えば、公差域の**半径**値が2mmに設定されている場合、プローブがヒットの位置から2mm以内に入った時、ヒットが行われます。

このコマンドは手動の測定機とともに使用できます;
ヒットを取るボタンを押す代わりに、編集ウィンドウ内の標準位置ならどこでも、POINT AUTOTRIGGER/コマンドを置くことが可能です。

オン

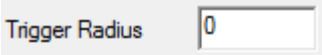
[**オン**]チェック
ボックスを選択すると、点の自動トリガコマンドがアクティブになります。挿入されたPOINT AUTOTRIGGER/コマンドに続いて、ヒットを要求する、編集ウィンドウのコマンドは、プローブの中心が、面の法線と要素の深さで定義された平面を通過する時に、自動的にヒットを行います。このオプションが選択されるまで、[**トリガ半径**]機能は無効です。

このチェック ボックスを*選択しない*で、[**コマンドの挿入**]ボタンをクリックすると、PC-DMISは編集ウィンドウにコマンドラインを挿入しますが、コマンドはアクティブになりません。

警報オン

[**警報音オン**]チェック ボックスをチェックすると、POINT AUTOTRIGGER/コマンドに関連してビーという警告音がアクティブになります。ターゲットに近づくほど、より頻繁にビーという警告音が鳴ります。

トリガ半径



[トリガ半径]ボックスでは、公差域の値を入力できます。プローブがこの公差域内に移動した時、自動的に直ちにヒットが取られます。

ｺﾏﾝﾄﾞの挿入

[コマンドの挿入]ボタンをクリックすると、その時点での測定ルーチンに対する編集ウィンドウにPOINT AUTOTRIGGER/コマンドが挿入されます。このコマンドラインは、以下のようになります:

```
POINT AUTOTRIGGER/ TOG1, TOG2, RAD
```

TOG1 このトグル
フィールドは[オン]チェックボックスに対応します。「オン」または「オフ」が表示されます。

TOG2 このトグル
フィールドは、[警報オン]チェックボックスに対応します。「オン」または「オフ」が表示されます。

RAD
半径フィールドには、公差域の値が含まれ、[トリガ半径]ボックスに対応しています。この数値は、PC-DMISがヒットを行う、現在の点からの距離です。

[平面の自動トリガ]エリア

[平面の自動トリガ]エリアを用いると、編集ウィンドウにPLANE AUTOTRIGGER/コマンドを挿入することが可能です。PLANE AUTOTRIGGER/コマンドは、プローブが、対応する要素の面の法線で定義された平面を、定義された深さレベルで通過する時に、ヒットを取るよう、PC-DMISに指示します。自動要素では、この定義された位置は、サンプルヒットやRMEAS要素のようなオプションに基づいて調整されます。プローブの中心が平面の一方から他方へ移動する間、プローブがトリガを出し、ヒットが取られます。

このコマンドは手動の測定機とともに使用できます;
ヒットを取るボタンを押す代わりに、編集ウィンドウ内の標準位置ならどこでも、PLANE AUTOTRIGGER/コマンドを置くことが可能です。

このコマンドは、オンライン モードでのみ機能します。POINT AUTOTRIGGER/コマンドが使用される場合、このコマンドが、PLANE AUTOTRIGGER/コマンドより優先されます。

FaroおよびRomer測定機を使用する場合の注記: 上記に述べるとおり、PC-DMISはプローブが平面を通過する際に自動的にヒットを取ります。ただし、FaroまたはRomer測定機を使用している場合、[受け入れ]ボタン（または[リリース]ボタン）が押されるまでプローブは次のトリガを出しません。続行するにはヒットを登録する度にこのボタンを押す必要があります。

ｵﾝ

☑ On

[オン]チェック ボックスをチェックすると、PLANE AUTOTRIGGER/コマンドがアクティブになります。挿入されたPLANE AUTOTRIGGER/コマンドに続いて、ヒットを要求する、編集ウィンドウのコマンドは、プローブの中心が、面の法線と要素の深さで定義された平面を通過する時に、自動的にヒットを行います。

このチェック ボックスを*選択しない*で、[挿入コマンド]ボタンをクリックされると、PC-DMISは編集ウィンドウにコマンドラインを挿入しますが、コマンドはアクティブになりません。このオプションがオンになるまでPLANE AUTOTRIGGER/コマンドは機能しません。

警報オン

☑ Beeping On

[警報オン]チェック ボックスをチェックすると、PLANE AUTOTRIGGER/コマンドに関連してビーという警告音がアクティブになります。ターゲットに近づくほど、より頻繁にビーという警告音が鳴ります。

ｺﾏﾝﾄﾞの挿入

Insert Command

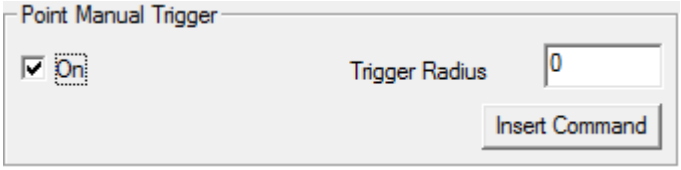
[コマンドの挿入]ボタンをクリックすると、その時点での測定ルーチンに対する編集ウィンドウにPLANE AUTOTRIGGER/コマンドが挿入されます。

```
PLANE AUTOTRIGGER/ TOG1,TOG2
```

TOG1 このトグル
フィールドは[オン]チェックボックスに対応します。「オン」または「オフ」が表示されます。

TOG2 このトグル
フィールドは、[警報オン]チェックボックスに対応します。「オン」または「オフ」が表示されます。

[点の手動トリガ]エリア



[**点の自動トリガ**]エリアを用いると、編集ウィンドウに`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドを挿入することが可能です。

`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドは、特定の公差域内にある手動ヒットのみを受け入れるよう、PC-DMISに指示します。

手動測定機を使用してこのオプションを使用できます: PC-DMISがヒットを取得するよう求めたら、好きなようにプローブをトリガします。各トリガは円筒トリガ公差範囲内にあるか評価されます。*そうでない場合*、**実行**ダイアログボックスの**測定機エラーリスト**でエラーを受信します。PC-DMISはヒットを再度取得するよう求めます。編集ウィンドウ内で、あらゆる標準位置に`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドを配置することができます。

このオプションは、オンライン モードでのみ機能します。

オン

[**オン**]チェック ボックスを選択すると、`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドがアクティブになります。挿入された`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドに続いて、ヒットを要求する、編集ウィンドウのコマンドは、プローブの中心が、面の法線と要素の深さで定義された平面を通過する時に、自動的にヒットを行います。このオプションが選択されるまで、[**トリガ半径**]機能は無効です。

このチェック ボックスを*選択しない*で、[**挿入コマンド**]ボタンをクリックされると、PC-DMISは編集ウィンドウにコマンドラインを挿入しますが、コマンドはアクティブになりません。

コマンドの挿入

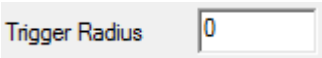
[**コマンドの挿入**]ボタンをクリックすると、その時点での測定ルーチンでの編集ウィンドウに`POINT MANUAL TRIGGER/`コマンドが次のオプションとともに挿入されます。

```
POINT MANUAL TRIGGER/ TOG1, RAD
```

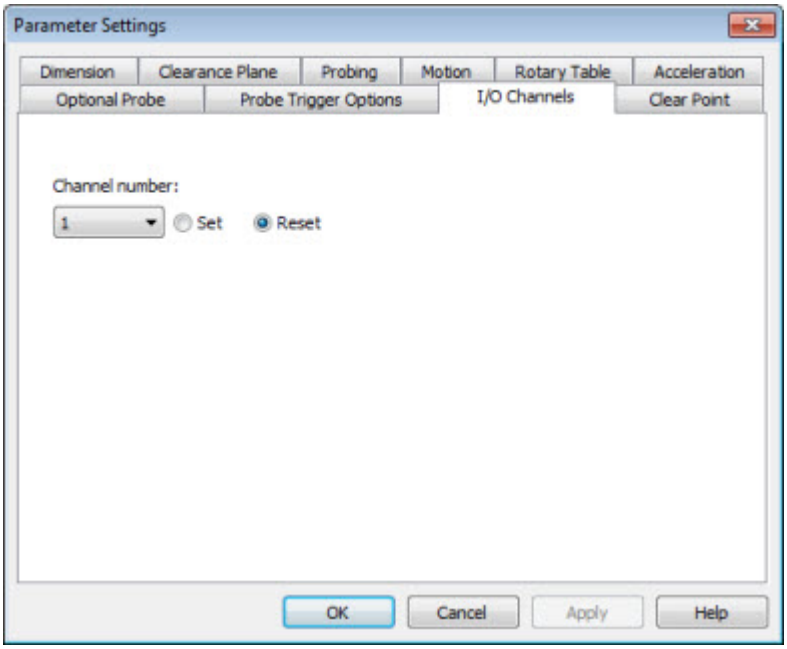
TOG1 このトグル
フィールドは、[**トリガ公差を使用**]チェックボックスに対応しています。「オン」または「オフ」が表示されます。

RAD
半径フィールドには、公差の領域の値が含まれます。これは[**トリガ半径**]ボックスに対応しています。この数値は、PC-DMISがヒットを受け入れる、現在の点からの距離です。

トリガ半径



[**トリガ半径**]ボックスでは、公差半径の値を入力できます。プローブの引き金が引かれると、PC-DMISはプローブがこの公差領域内にあるかどうかをチェックします。公差領域内にある場合、ヒットは受け入れられます。公差領域内に*ない*場合、別のヒットを取るよう促されます。



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス—[I/Oチャネル]タブ

*現在、**I/O チャンネル**タブ上のオプションは、DEA測定機においてのみ機能します。その他のタイプの測定機が、将来これに加えられる可能性があります。*

[I/O チャンネル]タブを用いて、コントローラーのI/Oチャンネル使用に関連したオプションを選択し、さらに、コントローラーの状態を定義する`IOCHANNEL/`コマンドを編集ウィンドウ内に置くことができます。

一部の測定機コントローラーには、オン状態（値1）に設定、または、オフ状態（値0）に再設定できるI/Oチャンネルがあります。`IOCHANNEL/`コマンドは、特定の状態に設定するよう、PC-DMISに指示します。

I/O チャンネルタブ内の情報を編集するには:

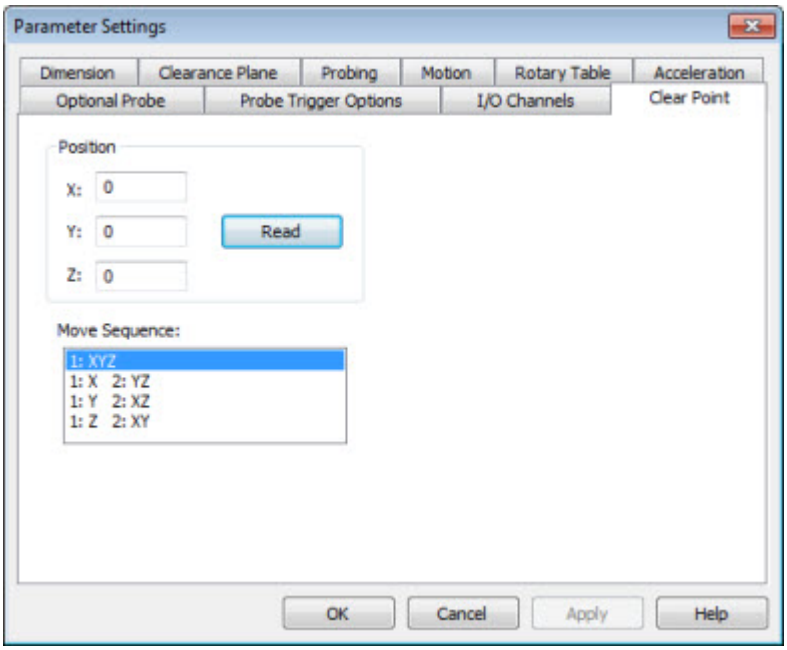
1. **パラメータ設定** ダイアログ ボックス(**編集 | 仕様 | パラメータ**)にアクセスして下さい。
2. **I/O チャンネル**タブをクリックして下さい。
3. 必要に応じて、変更を行って下さい。
4. **適用する**または**OK**をクリックして下さい。

チャンネル - これは、**設定** または**リセット**するチャンネル番号を特定します。

セット - `IOCHANNEL/SET`コマンドを測定ルーチンに挿入します。PC-DMISがこのコマンドを実行すると、指定されたチャンネル番号が、0に設定されます。

リセット - このオプションは`IOCHANNEL/RESET`コマンドを測定ルーチンに挿入します。PC-DMISがこのコマンドを実行すると、指定されたチャンネル番号が、0に設定されます。

パラメータ設定: クリア点タブ



[パラメータ設定]ダイアログ ボックス: [クリア点]タブ

[**クリア点**]タブを使用して、測定機に対して測定機の座標系でクリア点と呼ばれる1つの移動点の位置を定義できます。これにより、測定機はアーム終端を定義された位置まで移動します。この目的

は、プローブ交換器を使用するときにアームが安全に移動する位置を決めることです。これは**移動シーケンス**リストを使用して移動の形態を特定し、移動位置が機械に対して絶対位置を取るという意味で標準のMOVE/POINTコマンドとは違います

位置エリア -
[**XYZ**ボックスでは移動点を位置を定義できます。[**読み込み**]ボタンをクリックすると、測定機の現在の位置が読み込まれ、座標が**XYZ**欄に入力されます。

移動シーケンスリスト -
クリア点に到着するまでの移動の形態を選択します。以下の3つのオプションが含まれます:

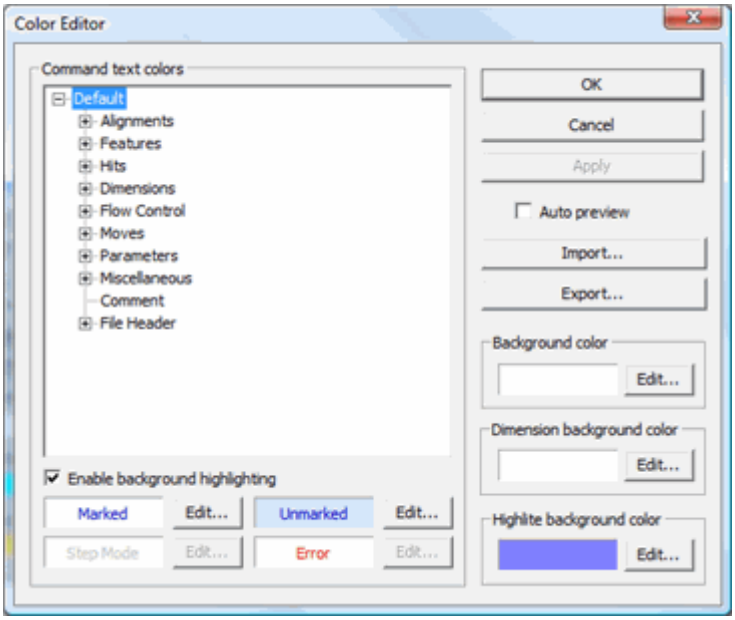
- **1: XYZ** - 測定機はクリア点の位置まで直線状に移動します。
- **1: X 2: YZ** - 測定機は最初、X軸を移動しそれからYZ軸を移動します。
- **1: Y 2: XZ** - 測定機は最初、Y軸を移動しそれからXZ軸を移動します。
- **1: Z 2: XY** - 測定機は最初、Z軸を移動しそれからXY軸を移動します。

このコマンドと挿入するには、[**挿入 | 移動 | クリア点**]メニューオプションを選択します。PC-DMISが、編集ウィンドウ内に`MOVE/CLEARPOINT`
コマンドを挿入します。このコマンドが実行されると、PC-DMISは定義されたクリア点を選択した移動シーケンスを使用して移動します。

編集ウィンドウのセットアップ

PC-DMISを用いて、編集ウィンドウの外見に加えて、編集ウィンドウの一部のモードで表示する情報を決めることができます。

編集ウィンドウの色定義



色エディターダイアログ ボックス

編集 | 仕様 | 編集ウィンドウの色メニュー オプションは、**色エディタ**ダイアログボックスを表示します。このメニュー項目を選ぶには、コマンドモード、または、DMISモードである必要があります。

編集ウィンドウがコマンド モード、または、DMISモードにある場合、**色エディタ** ダイアログボックスを用いて、編集ウィンドウのテキスト、及び、背景に使用される色を定義することができます。また、別のコンピューターシステムに用いられている、お手持ちの色スキームをエクスポートすること、または、外部の色をインポートすることが可能です。

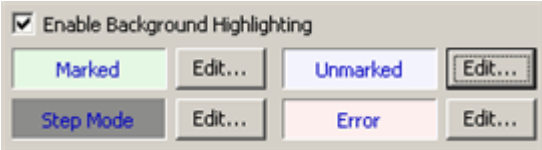
注記: [色エディタ]ダイアログボックスは、コマンド及びDMISといった、編集ウィンドウのテキストモードの色のみ特定します。

主要な4色を、全コマンド、または、個々のコマンド用に設定することが可能です。**背景ハイライト表示作動可**チェックボックスをチェック、あるいは、チェック消去することにより、これらの色を、ハイライト表示の背景色、または、テキスト色として表示するか否か、決めることができます。**コマンド テキストの色**エリアには、以下の四つのボックスがあります。

- マークされた
- マークされていない
- ステップ モード

- エラー

デフォルトにより、**背景ハイライト表示作動可**チェックボックスがチェックされ、以下の色を持つボックスが現れます:



このチェック ボックスのマックをクリアして、かわりにテキストの色付けを有効にすれば、PC-DMISは、以下のボックスを表示します:

主要色

マーク済み -
この色は、実行のためにマークされている要素で使用されます。アラインメントのような一部の要素は常に実行されるので、常にマークされた色で表示されます。

無指定-
この色は無指定の要素に使用されます。この色はデフォルトの色です。それ以外の条件がない時には、デフォルト色が使用されます。

ステップ・モード -
区切り点を使用して、測定ルーチンを実行する時実行が次に生じるラインを強調する場合、この色が使用されます。

エラー -
この色は、エラー状態のコマンドや公差範囲外にある測定値を色付きで表示します。例えば、プローブデータベースに定義のない先端が呼び出されている場合、この先端についてのテキストがエラー色で色付けされます。

編集ウィンドウ、寸法表示やハイライト色を表示するために、背景色を変更することも可能です。

背景色 - これは、編集ウィンドウの背景色を設定します。

寸法背景色 - これは寸法レポート ボックスの背景色を設定します。

ハイライト背景色は、マウスをドラッグして一つまたは、複数のコマンドを選択する時、背景色を設定します。

コマンドに使用されている、テキスト色を変更するには:

1. メニュー バーから**編集 | 優先設定 | 編集ウィンドウ**の色を選択して下さい。**色エディタ**ダイアログ ボックスが開きます。

2. **自動プレビュー**チェック
   ボックスをクリックして下さい。これにより、編集ウィンドウ内で、ご希望の変更のプレビューを行うことができます。

3. **コマンド**
   テキストの色エリアにあるコマンド一覧から、特定のコマンド、または、親コマンドを選択して下さい。追加のサブコマンドを見るには、＋符号をクリックし、一覧を拡大して下さい。これにより、特定コマンド、または親コマンド用の主要色
   (**マークされた**、**マークされていない**、**ステップモード**、及び、**エラー**)を設定することができます。全てのコマンド
   テキスト用の色変更を設定するには、当該一覧の上部から**デフォルト**設定を選択して下さい。

4. **コマンド**
   テキストの色エリアにある、テキスト色、または、背景色を選ぶには、**編集**ボタンをクリックして下さい。**[色]** 選択のダイアログ ボックスが現れます。

5. 新規の色を選ぶか、または、**カスタム色の定義**ボタンを押して、色付けのカスタマイズを行ってください。

6. **OK**ボタンをクリックします。**色**選択ボックスが閉じます。親コマンドを選択した場合、PC-DMIS
   はその親コマンドの下にあるすべての子コマンドに同じ色を設定できるオプションを表示します。このプロンプトで **はい**または**いいえ**を選択します。

7. ご希望の色付けが終了すると、**適用する**ボタンをクリックし、**色**ダイアログ
   ボックスを閉じることなしに、変更を確認して下さい。

8. **OK** ボタンをクリックして、これまでの変更内容を適用し、**色エディタ**ダイアログ
   ボックスを閉じて下さい。

色の変更が、即座に実行されます。

使用されている背景色を変更するには:

1. メニュー バーから**編集 | 優先設定 | 編集ウィンドウ**の色を選択して下さい。**色エディタ**ダイアログ ボックスが開きます。

2. **自動プレビュー**チェック
   ボックスをクリックして下さい。これにより、編集ウィンドウ内で、ご希望の変更のプレビューを行うことができます。

3. **背景色**エリアから、背景色、または、ハイライト色を選ぶには、**編集**ボタンをクリックして下さい。**[色]** 選択のダイアログ ボックスが現れます。

4. 新規の色を選ぶか、または、**カスタム色の定義**ボタンを押して、色付けのカスタマイズを行ってください。

5. **OK**ボタンをクリックします。**色**選択ボックスが閉じます。

6. ご希望の色付けが終了すると、**適用する**ボタンをクリックし、**色**ダイアログ
   ボックスを閉じることなしに、変更を確認して下さい。

7. **OK** ボタンをクリックして、これまでの変更内容を適用し、**色エディタ**ダイアログ
   ボックスを閉じて下さい。

色の変更が、即座に実行されます。

色スケームをエクスポートするには:

1. メニュー バーから**編集 | 優先設定 | 編集ウィンドウ**の色を選択して下さい。**色エディタ**ダイアログ ボックスが開きます。

2. 必要に応じて、お手持ちの色スケームにご希望の変更を行って下さい。

3. **エクスポート**ボタンをクリックして下さい。**[名前を付けて保存]**
   ダイアログボックスが現れます。このダイアログ
   ボックスを用いて、ご希望の編集ウィンドウの色スキーマを、色ファイル（*.clr*
   拡張子付きのファイル）として保存することができます。

新名でセーブ ダイアログ ボックス

4. このファイルの保存先に進んで下さい。

5. **ファイル名**ボックスに、保存する色ファイルの名称を入力して下さい。

6. **保存**ボタンをクリックします。

色スケームをインポートして使用するには:

1. メニュー バーから**編集 | 優先設定 | 編集ウィンドウ**の色を選択して下さい。**色エディタ**ダイアログ ボックスが開きます。**自動プレビュー**チェック
ボックスをクリックして下さい。色スキーマを選択すると、編集ウィンドウ内でご希望の変更のプレビューすることができます。

2. **[インポート]**ボタンをクリックして下さい。**開く**ダイアログボックスが現れます。

3. カラースキーマ ファイル（ *.clr* 拡張子付きのファイル）に進んで下さい。

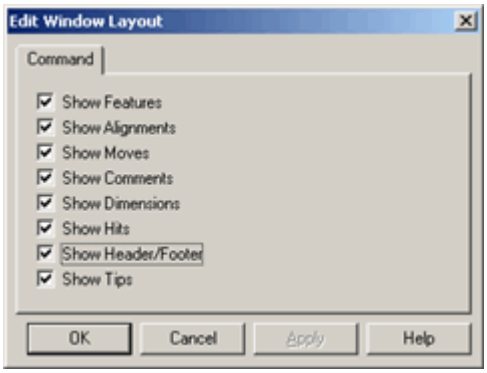
4. ファイルを選択し、**開く**をクリックして下さい。**[開く]**ダイアログ ボックスが閉じます。

5. **適用する**をクリックして、それから、先程インポートした色スキーマを使用するために**OK**をクリックして下さい。

編集ウィンドウのレイアウトを定義

[編集 | ユーザー設定 | 編集ウィンドウ レイアウト]メニュー オプションから、**[編集ウィンドウ レイアウト]**ダイアログ ボックスを開くことができます。このダイアログ
ボックスには、**[コマンド]**タブがあります。このタブを用いて、編集ウィンドウにある特定のコマンドを隠したり、表示したりすることができます。

コマンド モード表示オプション



[編集ウィンドウ レイアウト] ダイアログ ボックス—[コマンド]タブ

編集ウインドウのレイアウトダイアログボックス（**編集 | 環境設定 | 編集ウインドウのレイアウト**）の**コマンド**タブを用いて、コマンドモードで入手可能な、以下の表示オプションから選択することが可能です。

要素の表示
このオプションは、測定ルーチンにより測定された要素を表示します。

整列の表示
このオプションは、測定ルーチンで起こるパーツ配置変更を表示します。寸法、または要素一覧に発生するパーツ整列変更の全部が表示されます。

移動の表示
このオプションは、測定ルーチンに加えられた全動作を表示します。

コメントの表示
このオプションは、測定ルーチンに加えられたコメントを表示します。(より詳しい情報については、「レポートコマンド挿入」の章の「プログラマーのコメント挿入」を参照して下さい。)

寸法の表示
このオプションは、PC-DMISによって検査された要素において、指定された寸法を表示します。それは、「編集ウィンドウを使用する」章の「寸法書式」トピックに述べられていた`FORMAT`コマンドを使用して、選択されたフォーマットで表示されます。

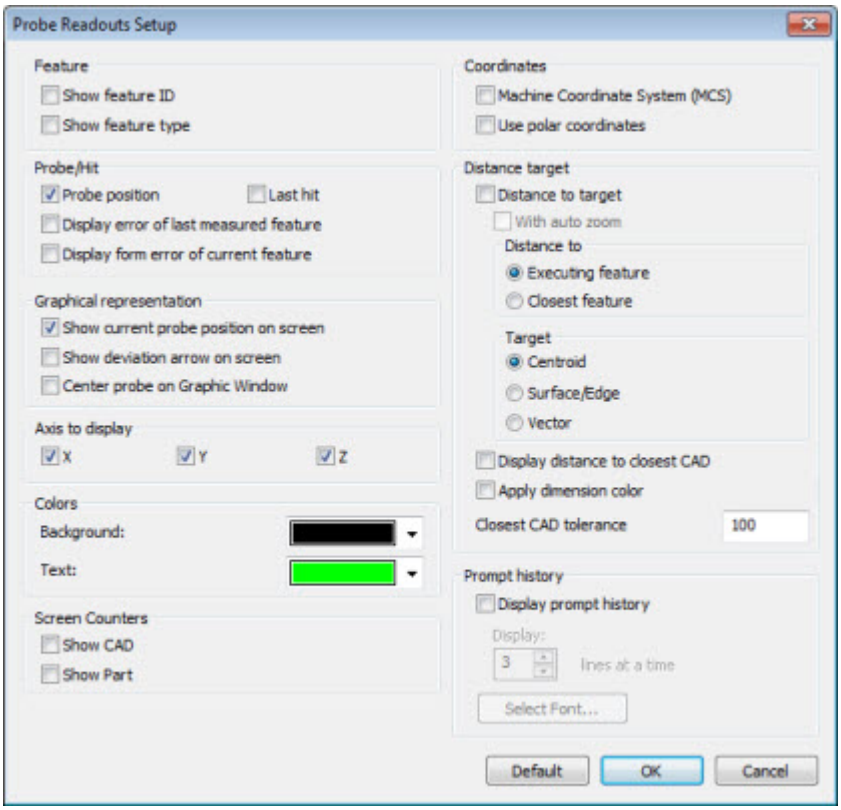
ヒットの表示
このオプションは、各ヒットを表示します。

ヘッダー/フッターの表示
このオプションを使用すると、LOGO.DAT、HEADER.DAT、およびELOGO.DATファイルのヘッダー/フッターが表示されます。(これらのファイルを置き換えについては「編集ウィンドウの使用」の章にある「ヘッダーおよびフッターの変更」を参照してください)

先端の表示
このオプションは、パーツの検査に用いられる、先端チップ ファイル名を表示します。

コマンドモード使用に関する、より詳しい情報については、「編集ウィンドウの使用」の章にある「コマンド モードの使用」を参照して下さい。

プローブ読み出しウィンドウのセットアップ



[プローブ読み出しセットアップ]ダイアログボックス

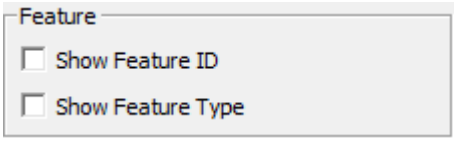
この[**プローブ計測値セットアップ**]ダイアログ ボックス(**編集 | ユーザー設定 | プローブ計測値の設定**)を使用して、*プローブ計測値ウィンドウ*の希望のフォーマットを選択することができます。プローブ計測値のニーズに合うチェックボックスを選択します。次回[プローブ計測値]ウィンドウにアクセスするときに、選択した形式が反映されます。

プローブ読み出しウィンドウのサンプル

ヒント:
[プローブ読み出し]ウィンドウを右クリックし、[セットアップ]をクリックしても、[プローブ読み出しセットアップ]ダイアログ ボックスにアクセスできます。

プローブ読み出しウィンドウの使用について詳しくは、「その他のウィンドウ、エディタおよびツールの使用」の章にある「プローブ読み出しウィンドウの使用」を参照して下さい。

フィーチャー エリア



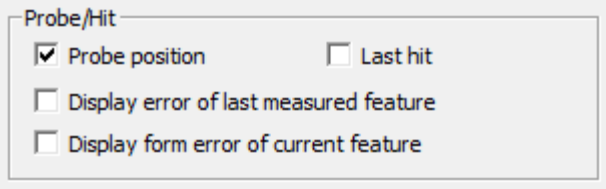
フィーチャー エリア

要素識別符を表示チェックボックス
学習モードで、CAD要素がある場合、このチェック
ボックスにより、最も近いCAD要素のテキスト ラベルが表示されます。

実行モードで、PC-DMISが当該測定ルーチンを継続的に実行している場合、このチェック
ボックスにより、実行中の要素のIDが表示されます。PC-
DMISがランダム順で実行中で、さらに、**ターゲットへの距離**エリアから**最も近いフィーチャー**オプションが選択されている場合、それは、最も近いフィーチャーのIDを表示します。

要素類型を表示チェックボックス
実行モードで、PC-DMISが当該測定ルーチンを継続的に実行している場合、このチェック
ボックスにより、実行中の要素の類型が表示されます。PC-
DMISがランダム順で実行中の場合、このチェック
ボックスにより、最も近いフィーチャーのフィーチャー形式が表示されます。

プローブ/ヒット エリア



プローブ/ヒット エリア

プローブ位置 チェックボックス
プローブ位置チェックボックスを洗濯すると、PC-DMIS
はプローブの現在位置を表示します。プローブ計測値ウィンドウはプローブの位置をアクティブな座標系に表示します。

最後のヒットチェックボックス
最後のヒットチェックボックスを選択すると、PC-DMIS
は最後にプローブで取得した位置を表示します。このオプションを選択しない場合、PC-
DMISはプローブの現在位置を表示します。

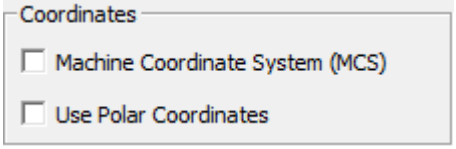
最後に測定した要素の誤差を表示 チェックボックス
[最後に測定した要素の誤差を表示]チェックボックスを選択すると、PC-
DMISはプローブ計測値ウィンドウに最後に測定した要素の偏差をXYZ座標系(および円要素ではD)に沿って表示します。偏差が0である場合も0が表示されます。

現要素の形状誤差を表示 チェックボックス
[現要素の形状誤差を表示]チェックボックスを選択すると、PC-DMIS
は学習または実行中の要素の形状誤差を表示します。

要素が有効な形状の測定結果(真円度、直線度、平面度、または円筒度)を持つ場合、値の近くに適切な GD&T
シンボルが表示されます。そうでない場合、標準偏差を示すギリシャ文字のシグマが表示されます。

形状値の計算に十分な取込点がない場合、 PC-DMIS
は十分な取込点が処理されるまで値の代わりに破線を表示します。

座標エリア



座標エリア

測定機座標システム (MCS) チェック ボックス
測定機座標システム (MCS) チェック ボックスを選ぶと、PC-DMISが、パーツの座標システムではなく、測定機の座標システムの中の情報を表示します。このチェック ボックスは、これらの座標システム間で切り換えを行います。このチェック
ボックスが選択解除されると、パーツの座標システム内の情報が再び表示されます。

極座標を使用チェックボックス
極座標を使用チェック ボックスが選択された場合、PC-DMISは直交座標と極座標の間で切り換えを行います。極座標使用の場合、作業平面の直角方向も表示されます。

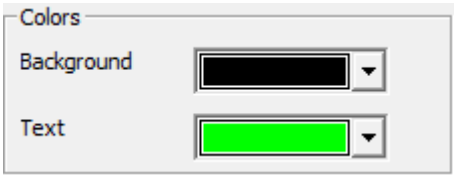
軸線表示エリア

軸線表示エリア

チェック	内容

ボックス	
X	これは、**プローブ解読**ウィンドウ内で、X軸を隠し、または、表示します。
Y	これは、**プローブ解読**プローブ解読ウィンドウ内で、Y軸を隠し、または、表示します。
Z	これは、**チェック** **ボックス**プローブ解読ウィンドウ内で、Z軸を隠し、または、表示します。

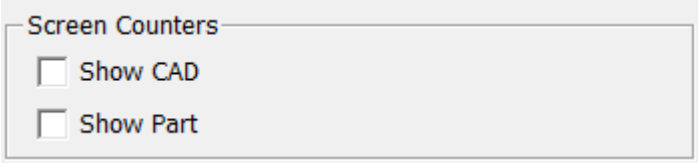
色エリア



色エリア

背景一覧	これは、プローブ解読ウィンドウの背景色を設定します。
テキスト一覧	これは、プローブ解読ウィンドウのテキスト色を設定します。

スクリーンカウンタエリア



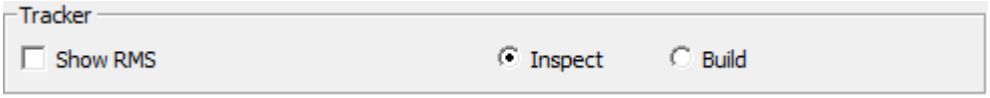
スクリーンカウンタエリア

[CADを表示] チェックボックス
これは、**プローブ計測値**ウィンドウのマウスポインタの位置で、CAD 要素の CAD
X、Y、Z、I、J、K 情報を表示または非表示にします。原点はCADモデルに基づきます。

[パーツを表示] チェックボックス
これは、**プローブ計測値**ウィンドウのマウスポインタの位置で、CAD 要素の パーツ
X、Y、Z、I、J、K
情報を表示または非表示にします。原点は現在のパーツのアラインメントに基づきます。

「CAD表示の編集」の章にある「スクリーンカウンタのテキストでマウスの座標を表示」を参照して下さい。

追跡機エリア



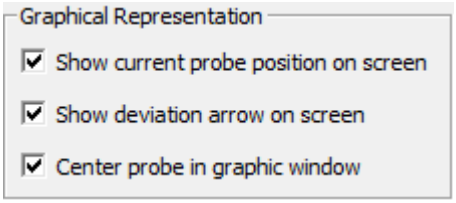
追跡機エリア

RMSを表示チェックボックス
測定機がポータブル追跡機デバイスである場合、これは、**プローブ計測値ウィンドウ**に二乗平均平方根（**RMS**）の値を表示します。

点検か、または**ビルド**オプション
これらは、トラッカーの情報が**点検**モードか、または**ビルド**モードかによって報告されるかどうかを判断します。

より詳しい情報については、「PC-DMIS ポータブル」文書を参照して下さい。

グラフィカル描写エリア



グラフィカル描写エリア

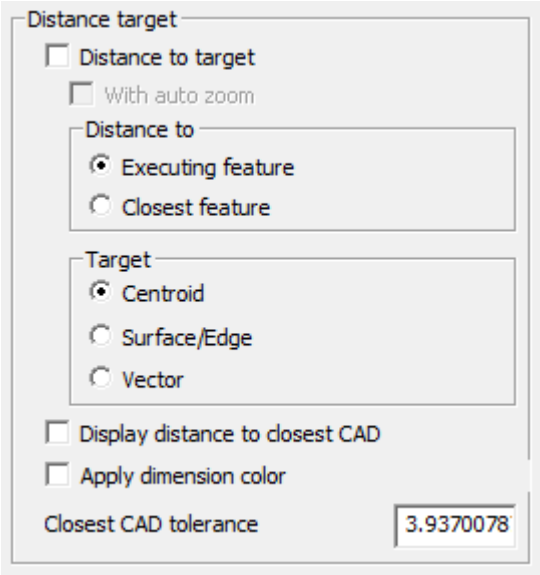
プローブの現在位置を画面に表示チェックボックス
[プローブの現在位置を画面に表示]チェック
ボックスは、ジョグボックスを使用して、機械に相対してプローブの位置を移動すると、画面上でプローブのグラフィカル表現を示しています。オンラインモードで作業するときに便利です。ジョグボックスを用いてプローブを移動すると、プローブのグラフィカルの表現はまた、PC-DMISのグラフィック表示ウインドウでも移動します。ユーザが実機に接続されたオンライン・モードでPC-DMISを実行して、測定ルーチンが整列を持っている場合のみ、これは機能します。

[偏差の矢印を画面に表示]チェックボックス
[偏差の矢印を画面に表示]チェック
ボックスは、実行中に偏差の方向を示すグラフィックの表示ウィンドウで3D矢印を表示します。

「距離ターゲット」エリアの**オートズーム備える**
チェックボックスをマークする必要があります。

プローブをグラフィックウィンドウの中心に移動チェックボックス
[プローブをグラフィックウィンドウの中心に移動]チェックボックスを選択すると、PC-DMISが移動コマンドを実行するかパートのヒットをとる時はいつでも動画表示されているプローブが常にウィンドウの中心にくるようグラフィックの表示ウィンドウをシフトます。これは、実行中、プローブの進行を視覚的に追跡し、パーツモデルに接近したビューを維持したい場合に便利です。これは単にPC-DMISがプログラムモードにない場合のみに機能します。

ターゲットへの距離エリア

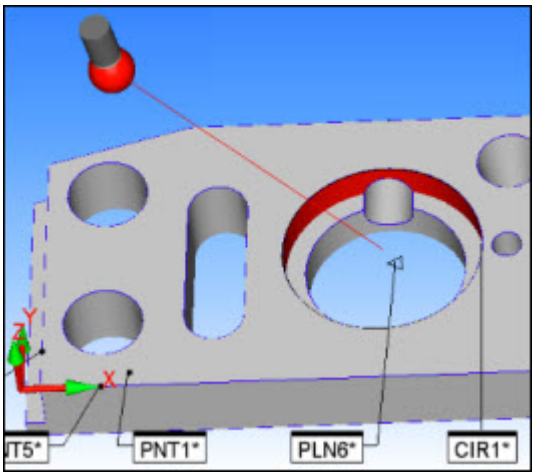


ターゲットへの距離エリア

[ターゲットまでの距離]チェックボックス
[ターゲットまでの距離]チェックボックスが選択され、**[最も近いCADまでの距離を表示]**チェックボックスが選択されていない場合、PC-DMISは**[ターゲットまでの距離]**設定にプローブのターゲットまでの距離を表示するようになりました。それ以外の場合、PC-DMISは常に最も近いCADまでの距離を表示します。

プローブの位置は、アクティブな座標系に表示されます。入力された位置へ、プローブを手動で移動してください。ターゲット地点に到達すると、[プローブ読み取りウィンドウ]が 0,0,0 を表示します。

赤い線もプローブ先端から目標までグラフィックス表示ウインドウに現れて、測る次の要素を示します。



PLN6要素の中心を指している赤い線

目標はダイアログ・ボックスの**までの距離**及び**目標**エリアで指定されたオプションの組み合わせに基づいています。下記のこれらのオプションと「T値のターゲットの説明」話題の下での説明を見てください。

自動ズーム使用チェック ボックス
ターゲットへの距離チェック ボックスと**自動ズーム使用**チェック ボックスの両方を選択すると、PC-DMISはまた、プローブからターゲットポイントへの距離を表示します。プローブの位置は、アクティブな座標システム内に表示されます。プローブが入力された位置へ、手動で移動されると、PC-DMISは、ターゲットポイントをスクリーンの中心点とし、グラフィックス表示ウィンドウ上でそのポイントにズームインします。

距離エリア
この地域は、さらに目標を定めるために、これらの2つのオプション・ボタンを含みます：

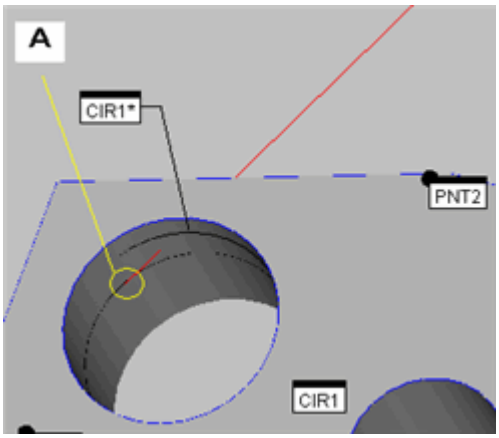
- **実行要素**はターゲットを次の実行要素に定義します。
- **最近要素**が目標をプローブに最も近い要素と定義します。

ユーザは、**目標**エリアから望ましいオプションを選択することによって、目標要素（重心あるいは最も近い表面 / 縁点）で正確な場所を決定することができます。

ターゲットアリア
このエリアは、使う正確な目標場所を決定するために、2つのオプション・ボタンを含みます：

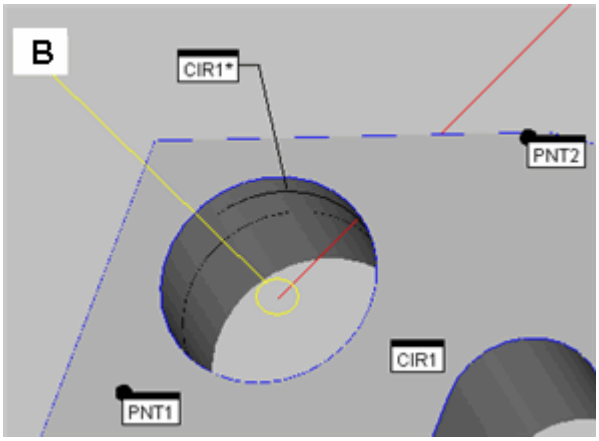
- **表面/縁**は要素上で最も近い点かユーザが**距離**エリアから選択した何かに基づく次の予想された点と目標を定義します:
    - **最近い要素**が選択された場合、 目標は要素上にある最も近い点になります。

o　**実行の要素**が選択された場合、目標は要素で取る次の予想された点になります。



上記のイメージで示すように、たとえば、円（CIR1）を測っている間、**表面/縁**オプションはプローブウインドウが場所Aの実際の目標点までの距離を表す原因になります。

- **[重心]**では、要素の重心までの距離が算出されます。



上記のイメージで示すように、たとえば、円（CIR1）を測っている間、**重心**オプションはプローブ読み取りウインドウが場所B（実際の目標点の代わりに）で特徴の重心までの距離を表す原因になります。

- **ベクトル**は、プローブのセンターから要素のベクトルにある最も近い点までの距離を計算します。

「**CADに最も近い距離を表示**」チェックボックス
このチェックボックスをマークすること
はいくつかの影響を持っています。マークされた場合、目標は最も近いの不良面の上にある最も近い点になります。赤い線はプローブ先端をこの目標に接続します。

また、PC-DMISはプローブ計測値ウインドウに'T' (CAD)
値、または総偏差値を表示します。距離が正確に何にそれぞれの要素のＴ値のために使われるかという情報については「Ｔ値のための目標の記述」トピックを参照してください。

注記: この設定は、実行の間に「**ターゲットまでの距離**」の設定を支配します。

寸法色を適用チェックボックス
このチェック
ボックスは、公差範囲外の寸法色に一致するように、偏差値（ターゲット値までの距離）の色を変更します。

最も近いCAD公差フィールド
これは、ソフトウェアが、現在のプローブの位置を比較するために表面を検索しようとの最大距離を決定するために使用される許容値（現在の単位で）入力するフィールドです。この距離を越えれば、CADまでの距離は、返されません。

T値の目標記述

Ｔ値は常にプローブチップから目標点までベクトルの大きさ（あるいは長さ）です。目標ポイントは**プローブ読み出しセットアップ**ダイアログ・ボックス(**編集 | 環境設定 | プローブ読出しの設定**)の**目標**エリアに位置している**重心**、**表面 / エッジ**、あるいは**ベクトル**オプションボタンによって決定されます。

- もしユーザが**重心**あるいは**ベクトル**を選択したなら、ＰＣ - DMIS はプローブの中心点からの距離を使います。
- もしユーザが**表面縁**を選択したなら、ＰＣ - DMIS はプローブによって補償された距離を使います。

「最も接近の要素」および「図心」が選択され、CADに最も近い距離を選択せずの実行期間:

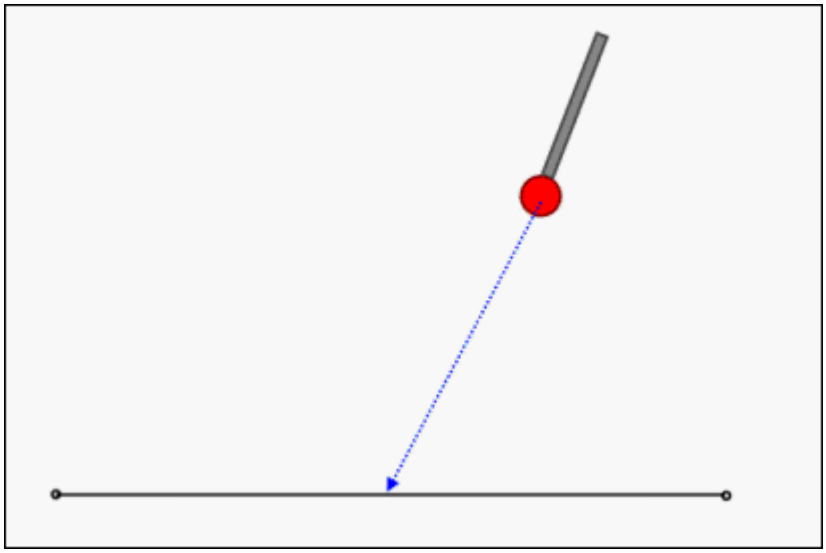
図心は要素のセンターです。しかし、これがいくつかの要素に対して、他のものより意味になっていて、すべての要素に、センターがあります。9つの基本要素タイプのために、各々のためのセンターは、必要な場合、具体例で下で定められます。

- *点*

  Ｔ値は点自体まで距離のです。

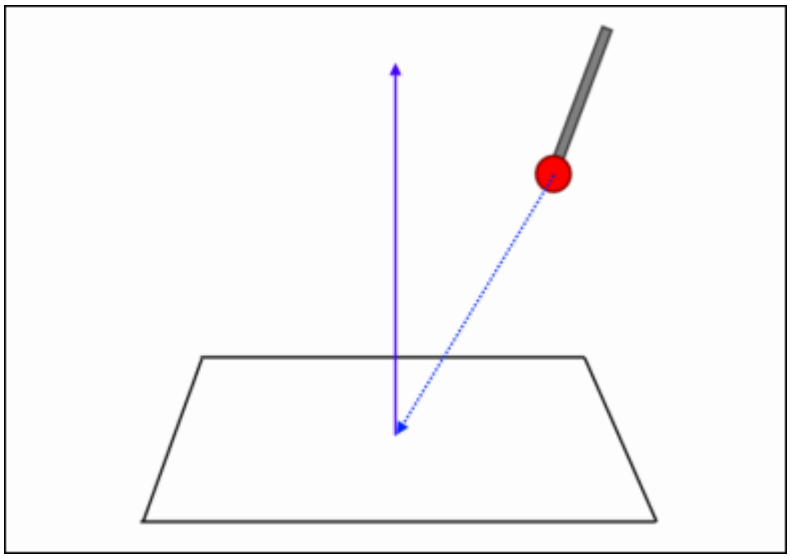
- *直線*

  T値は、線分の上の2つの最も外部のヒットの中間までの距離です。



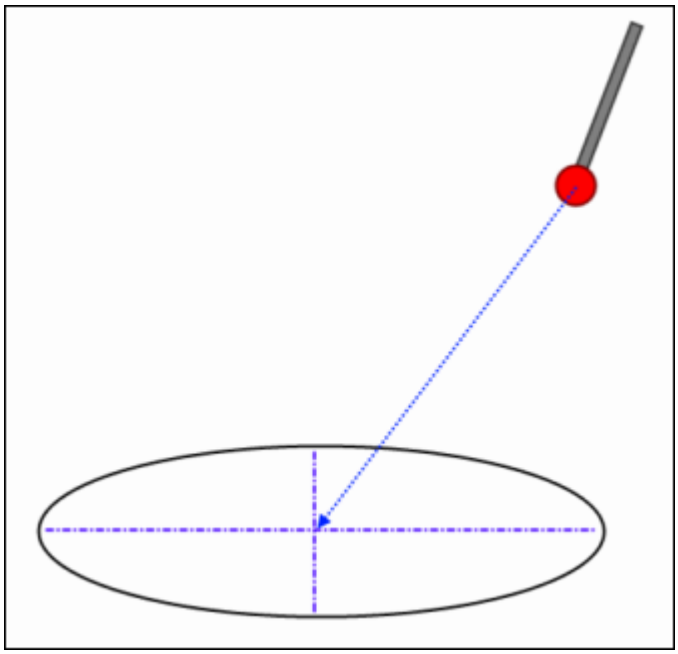
- *平面*

  T値は、平面のセンターまでの距離です。センターでは、平面を定義する境界のヒットポイントによって定義される多角形の中間点です。



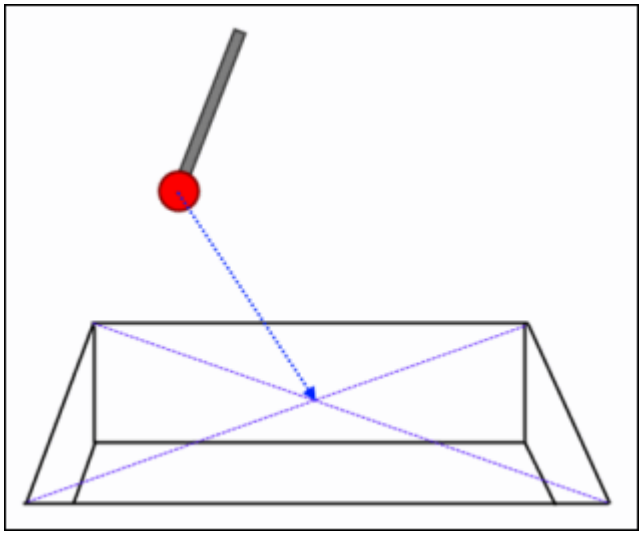
- *円*

  T値は、円の重心までの距離です。



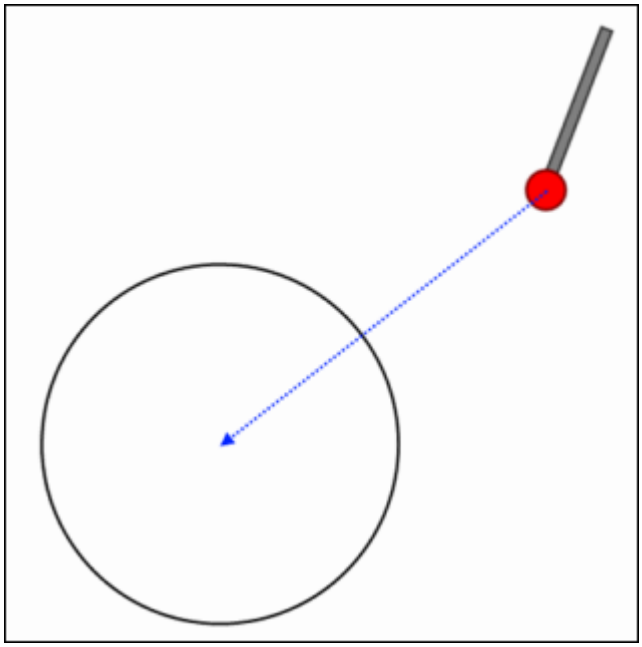
- *円と正方形のスロット*

  T値は、スロットのプレーンの中点までの距離です。



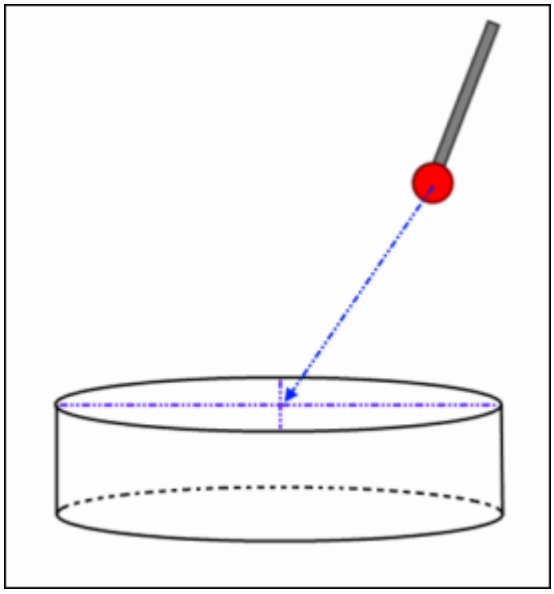
- *球*

  T値は、球のセンターまでの距離です。



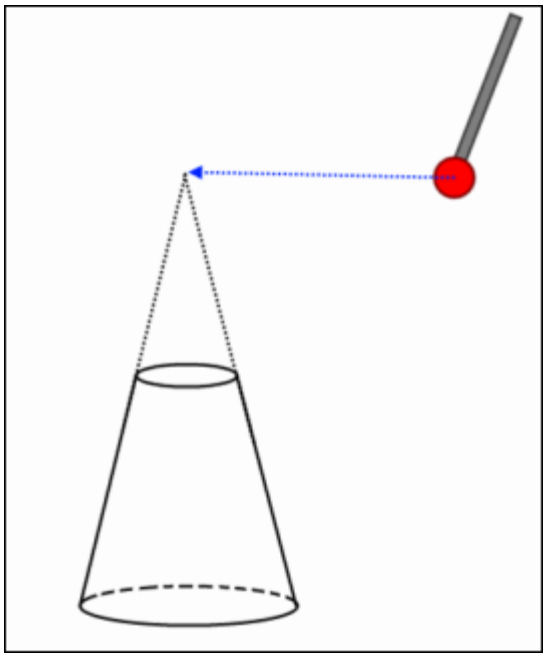
- *円筒*

  T値は、シリンダーのトップのセンターまでの距離です。



- *円錐*

  T値は円錐の頂点までの距離です。



「最も接近の要素」および「表面・エッジ」が選択され、CADに最も近い距離を選択せずの実行期間:

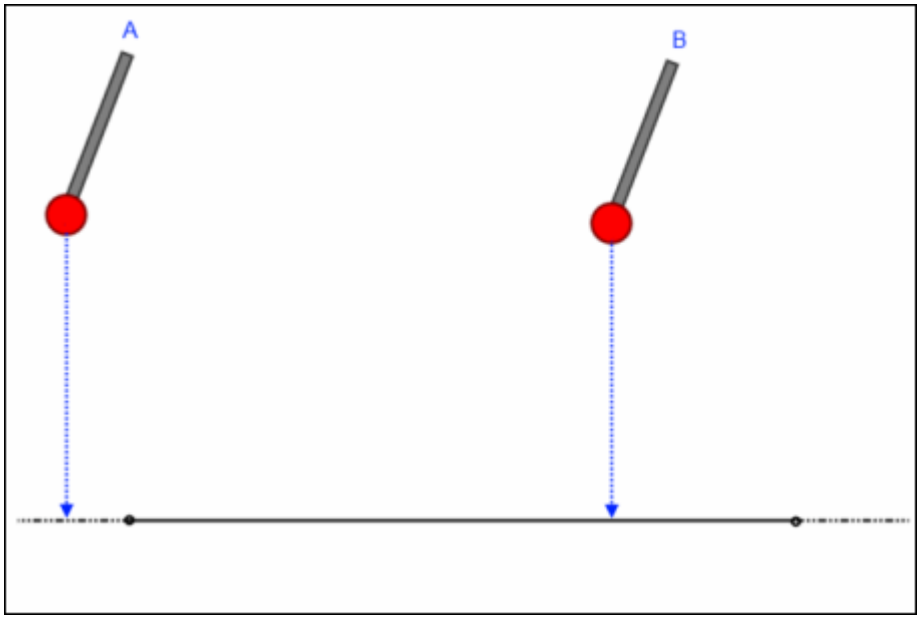
表面/縁を見つけるとき、T値の目標はプローブに最も近い要素の上にある点です。3D要素に対しては、最も近い点が要素の表面にあって、
2D要素に対しては、それは縁にあります。9つの基本要素タイプのために、各々のためのセンターは、必要な場合、具体例で下で定められます。

- *点*

  Ｔ値は点自体まで距離のです。

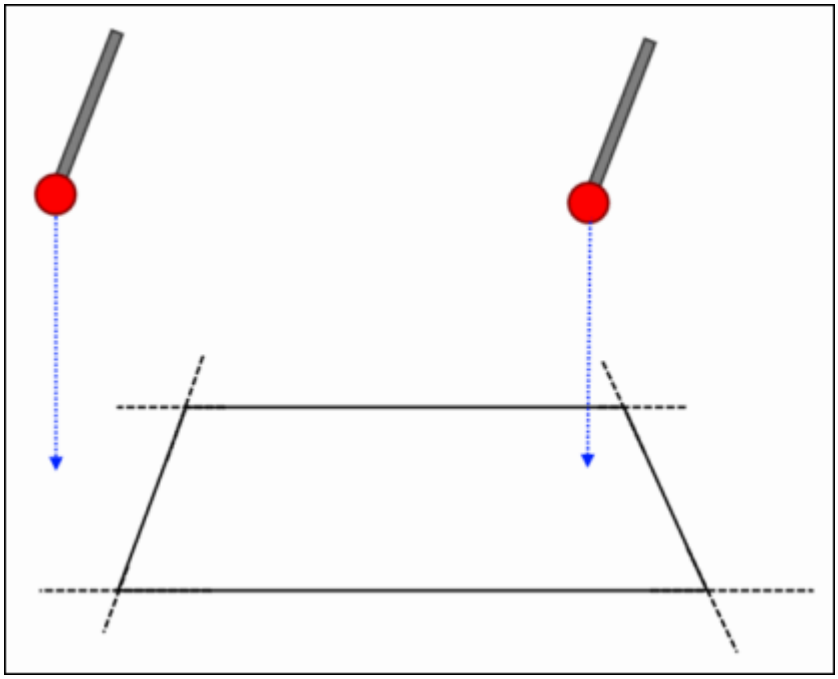
- *直線*

  T値は2つ以上のヒットで定義された線の上で最も近い点までの距離です。これは線セグメントではなく、真の幾何学上の線です。以下の例は2つの異なったケースを示しています。



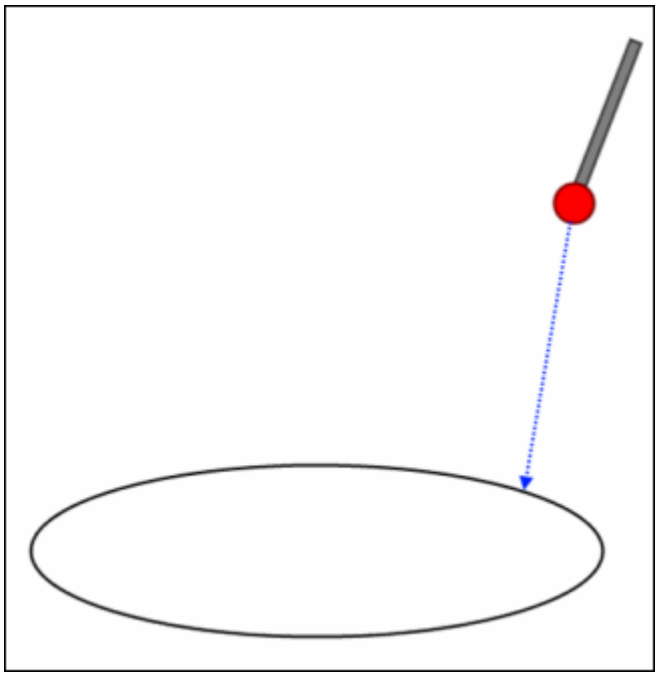
- *平面*

  T値は三つ以上のヒットで定義された幾何学のプレーンの上で最も近い点までの距離です。



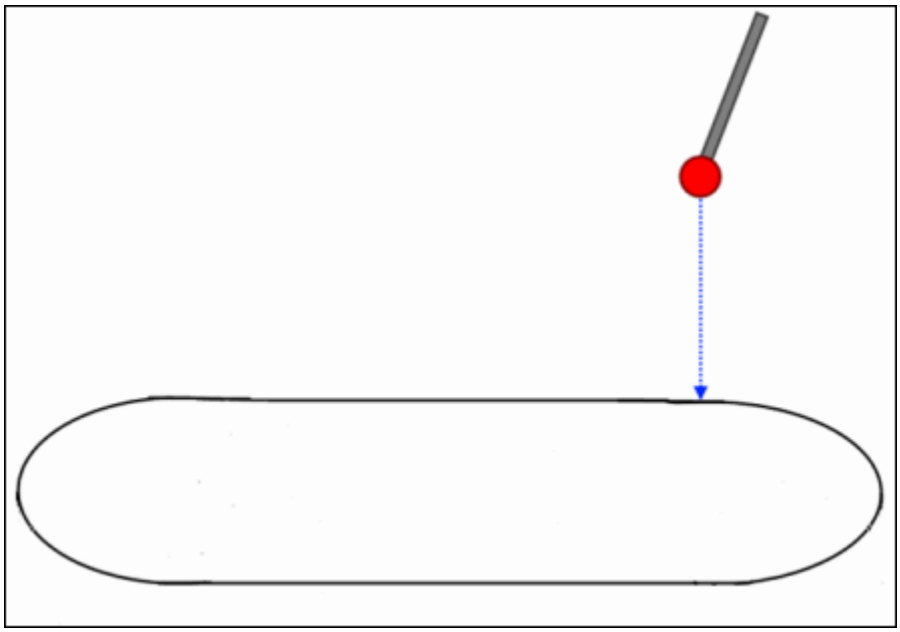
- *円*

T値は、円の縁で最も近い点までの距離です。



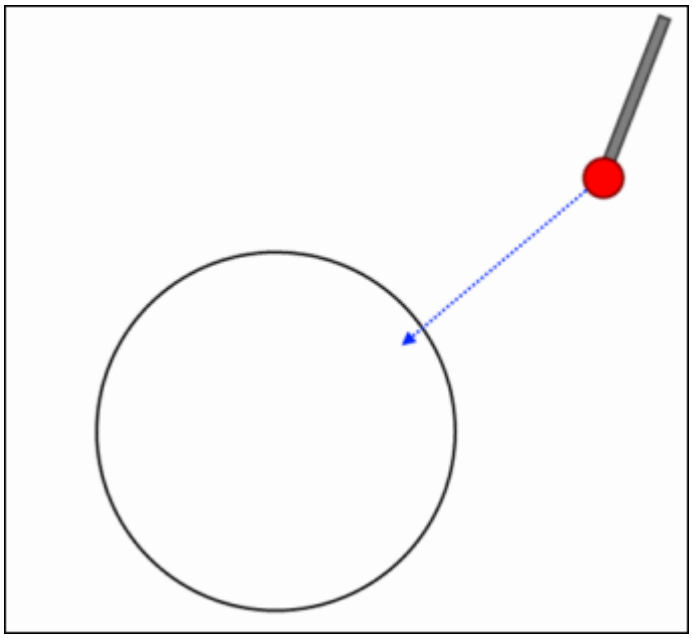
- *円と正方形のスロット*

T値は、スロットの縁で最も近い点までの距離です。



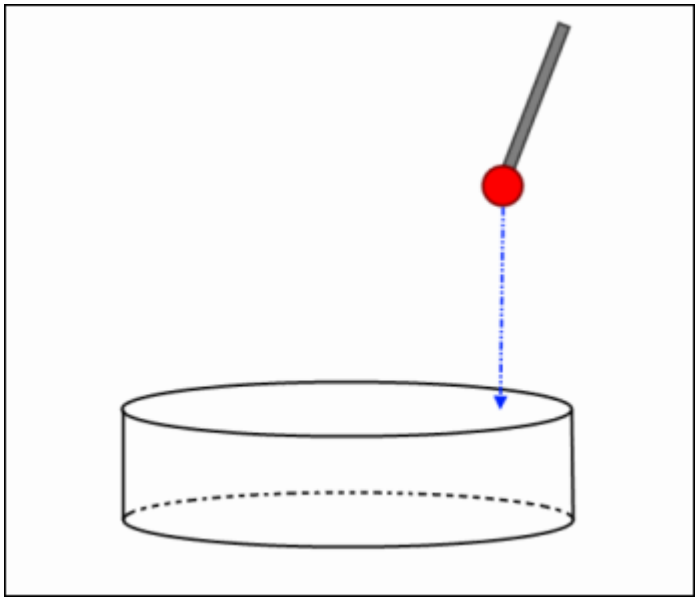
- *球*

T値は、球面の上で最も近い点までの距離です。下のイラストは表面上の外部幾何要素の点を見せますが、しかし内面的な要素が同じように作動して、そして内部の表面を使います。



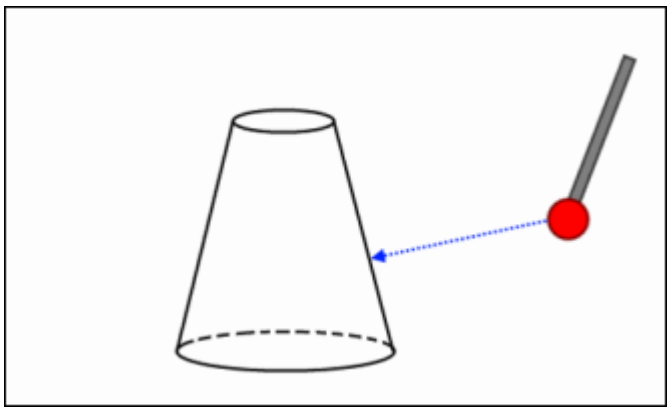
- *円筒*

T値は、シリンダ表面の上で最も近い点までの距離です。下のイラストは表面上の外部幾何要素の点を見せますが、しかし内面的な要素が同じように作動して、そして内部の表面を使います。



- *円錐*

  T値は(幾何学の円錐ではなく)円錐の表面の上の最も近い点までの距離です。下のイラストは表面上の外部幾何要素の点を見せますが、しかし内面的な要素が同じように作動して、そして内部の表面を使います。



「最も接近の要素」および「ベクトル」が選択され、CADに最も近い距離を選択せずの実行期間:

ベクトルを見つけるとき、T値の目標はプローブに最も近い要素の上にある点です。9つの基本要素タイプのために、各々のためのセンターは、必要な場合、具体例で下で定められます。

- *点*

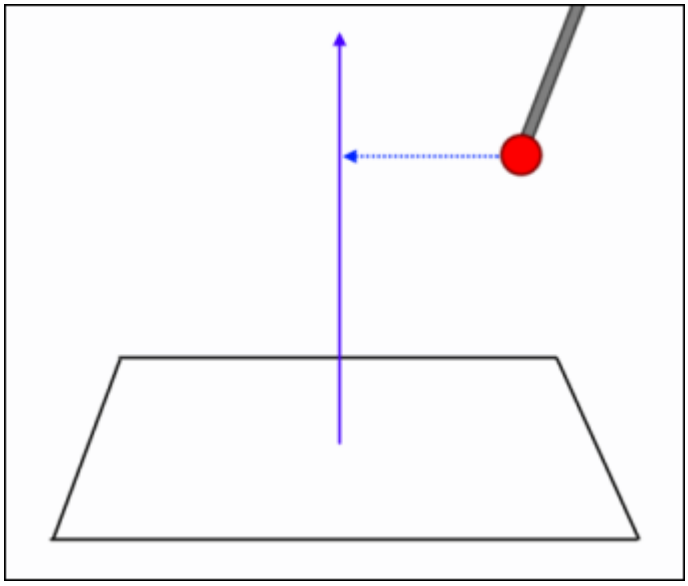
  T値は、点のヒットされたベクトルで最も近い点までの距離です。

- *直線*

  T値は、線のベクトルに沿って最も近い点までの距離です。

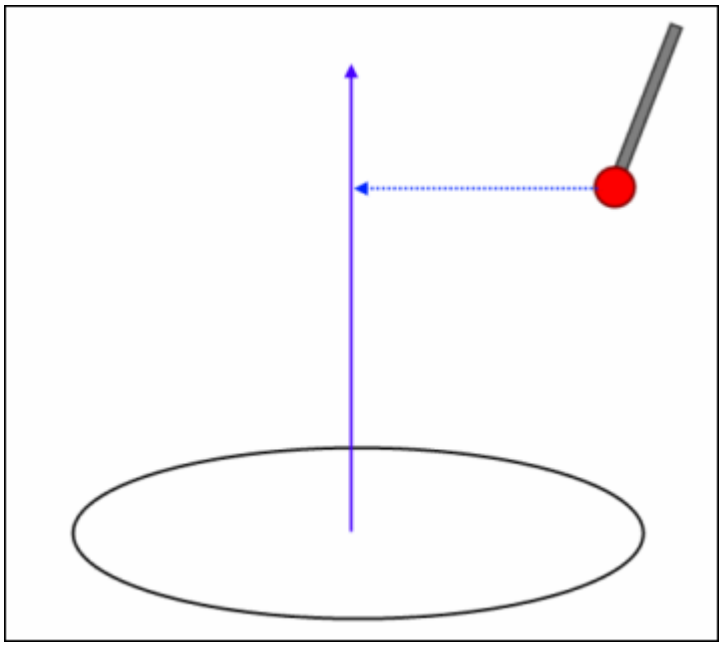
- *平面*

  T値は、プレーンのセンターに根ざしているプレーンの法線ベクトルで最も近い点までの距離です（プレーンのセンターの説明のために上のプレーンの重心の例を参照してください）。



- *円*

  T値は、円の中心の点に根ざしている円の法線ベクトルで最も近い点までの距離です。



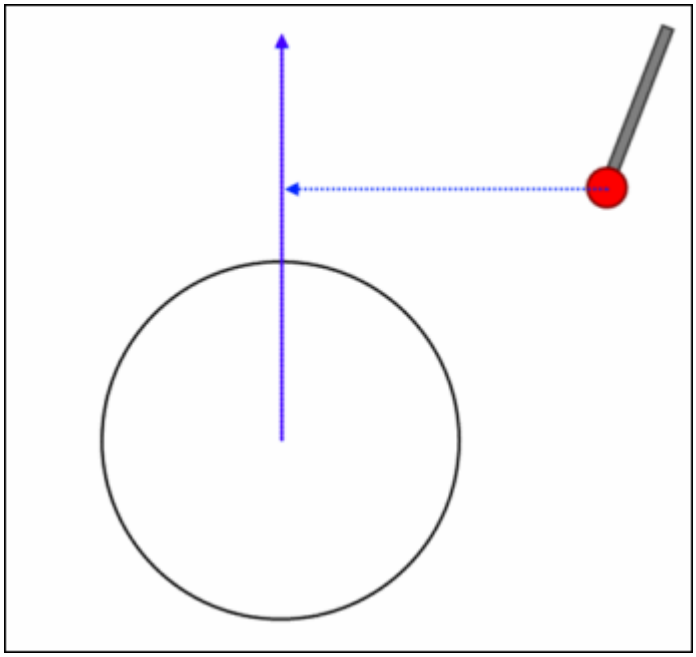
- *円と正方形のスロット*

  T値は、スロットのプレーンの法線ベクトルで最も近い点までの距離です。プレーンは、スロットのヒット点によって定義されます。上のプレーンベクトル例を参照

してください。その例と同様に、法線ベクトルはスロットのプレーンの中心の点に根ざしています。

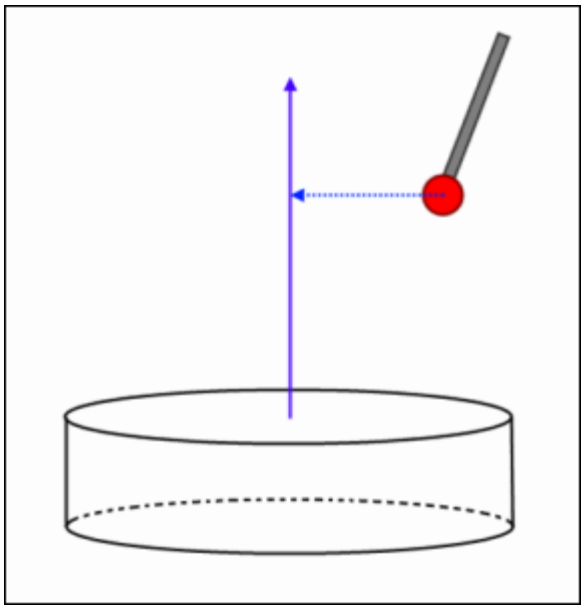
- *球*

T値は、球の法線ベクトルで最も近い点までの距離です。ベクトルは、定義済みワークプレーンまたは基準面と同じです。



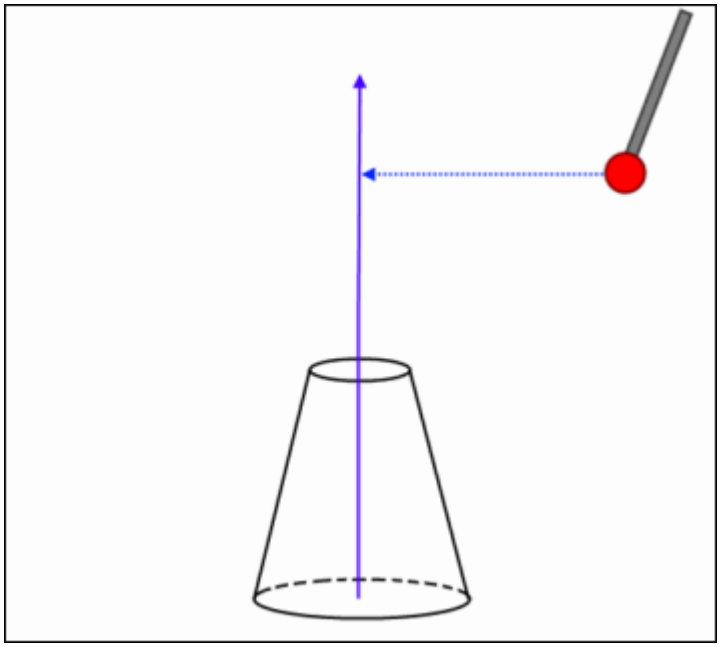
- *円筒*

T値は、シリンダーの中心軸ベクトルで最も近い点までの距離です：



- *円錐*

T値は、円錐の中心軸ベクトルで最も近い点までの距離です：



実行せず、または「最も近いCAD 」が選択されて、CADファイルが読み出された状態で実行：

T値がT （ CAD）として表示されて、 CAD上の最も近い点を指しています。DX、DY 、DZとは、T （ CAD ）値のベクトル成分です。表面 CAD
データがあるに違いありませんから、ユーザはこれがうまくいくためにビューを表面モードにセッ

トしなくてはなりません。CADがロードされない場合、T、DX、DYおよびDZ値は単に実行中のみにアクティブな**ターゲットまでの距離**の設定に指します。

「実行されている要素」と「表面 / エッジ」が選択された実行の間に:

このモードは下位互換性のためで、最初の機能です。この状態では、ターゲット点は要素における次のヒットへの距離です。

「実行されている要素」と「表面 / エッジ」が選択された実行の間に:

重心か**ベクトル**が選択されたなら、これらのオプションは上記の「最も近い要素」の例として振る舞いますが、彼らは次の実行の要素までの距離を示しています。

プロンプトの歴史エリア

[**プロンプトの履歴表示**]チェック ボックスが選択されている場合、PC-DMISは、[プローブ読み出し]ウィンドウに新規のプローブ読み出しコメントの形式を表示します。

- **一度に表示する行**ボックスを用いて、PC-DMISは、プローブ読み取りウィンドウ上でこれらのコメントを何行に分けるか特定することが可能です。
- また、[**フォントの選択**]ボタンを使用すると、[プローブ読み出し]ウィンドウで、これらのコメントに使用される必要のあるフォントタイプおよびサイズを指定することができます。

コメント挿入に関する説明については、「レポートコマンド挿入」の章の「プログラマーのコメント挿入」を参照して下さい。

[プローブ読み出し]ウィンドウでの表示について詳しくは、「その他のウィンドウ、エディタおよびツールの使用」の章にある「プローブ読み出しウィンドウの使用」を参照して下さい。

プローブビデオ視界の中心点常時追跡

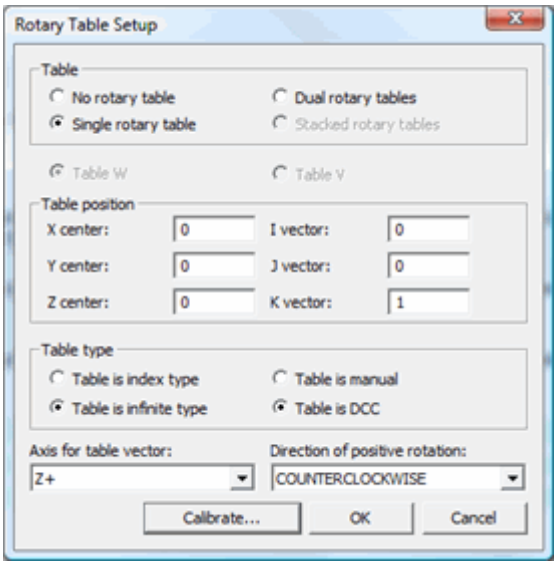
この項目が選択されると、PC-DMISは、接触しないビデオプローブの視界の中心点を表示します。この項目は、定義済みの接触しないビデオプローブをお持ちの場合にのみ、現れます。

複数のアームのセットアップ

複数のアームのセットアップの手続きに関する説明については、「複数アームモードの使用」の章を参照して下さい。

旋回テーブルの定義

編集 | 仕様 | 旋回テーブル セットアップメニュー オプションを選択すると、**旋回テーブル セットアップ**ダイアログ ボックスが表示されます。



[回転テーブルの設定]ダイアログ ボックス

注：
ClearanceCube動きがアクティブなときには、ロータリーテーブルの動きが無効になっています。

このダイアログ
ボックスを用いて、旋回テーブルの定義をすることができます。一つのカテゴリーにつき、一つのオプションしか選ぶことはできません。

1. 使用するテーブルのタイプを選択して下さい。**二重旋回テーブル**または**積み重ね旋回テーブル**を選択の場合には、アクティブなテーブル（テーブルW、またはテーブルV）を指定して下さい。また、**二重旋回テーブル**または**積み重ね旋回テーブル**を選択すると、**OK**
ボタンのクリック後に、**アクティブ旋回テーブル**ツール
バーが表示されます。このツール
バーにな、どちらの旋回テーブルをアクティブにするか選択できる、二つのアイコンがあります。

2. [テーブルはインデックス
タイプ]または[テーブルは非限定タイプ]のいずれかを選択することにより、テーブルがインデックス可能、または非限定タイプのいずれであるかを定義してください。

インデックス タイプの回転テーブルに関する注記:
インデックス
タイプの回転テーブルには、位置付けできる特定の角が有限個あります。一般的に、これらの角の、その時点での位置から次の位置への増分（回転の大きさ）は固定です。増分は特定のテーブルによって異なります。必要に応じて、使用している回転テーブルに関する文書を参照して下さい。非限定タイプの回転テーブルは、どのような位置（回転の大きさ）を取ることも可能です。

3. 当該旋回テーブルが手動、または、DCCのいずれであるか決め、**テーブルは手動**または**テーブルはDDC**のどちらか適切な方を選択して下さい。

4. [**テーブル用の軸**]リストから、テーブルの回転軸に最も近い測定機の軸を選択して下さい。

5. テーブルが選択した軸を中心に時計周りまたは反時計回りに正の回転を行うかどうか、[**正の回転方向**]リストから選択して下さい。方向のビューの基準点を原点に向かってテーブルの軸を見下ろす視点です。

6. 既知の場合、XYZ及びIJK値をキー入力してください。全体校正がDCC制御の下で行われているため、PC - DMIS
NCにおいては、（プローブのプレヒット距離の内に）テーブルセンターのおおよその位置が含まれている必要があります。

7. [**校正**]をクリックして、校正プロセスを開始してください。

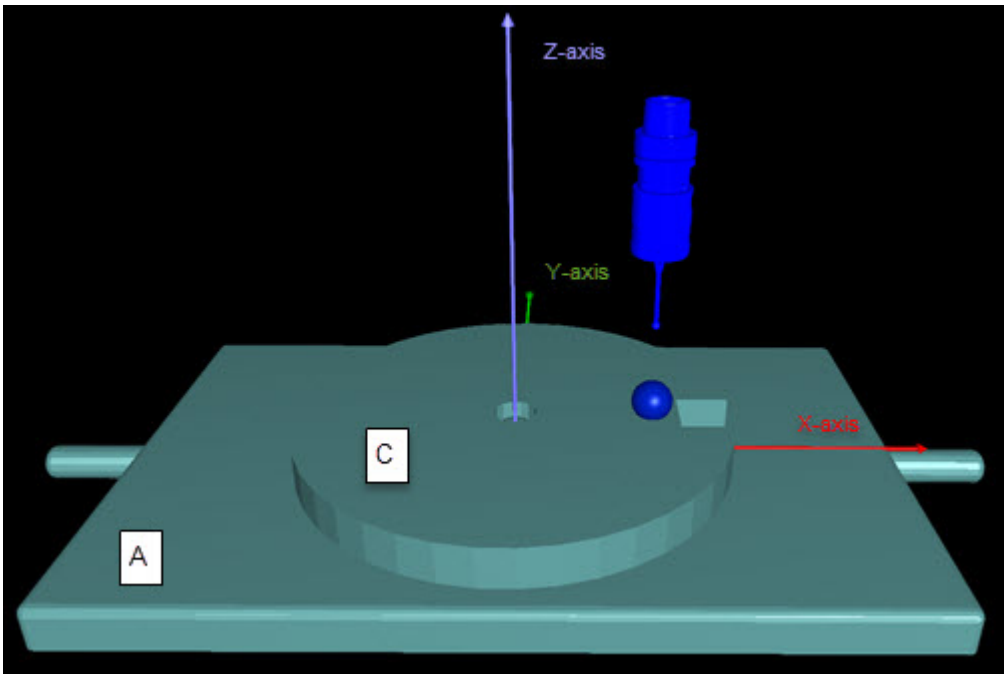
注記:
ポートロックが回転テーブルを受け入れるように設定されるまで、[**回転テーブルの設定**]メニューオプションは利用できません。

積み重ねとデュアルの回転テーブルの違い

スタックト回転テーブル

積み上げ回転テーブルは、標準的なXYZ軸を越えてパーツや校正アーティファクトを回転させる機能を提供します。

積み重ねられたテーブルシステムは、互いに積層された2つのテーブルを持っています。下のテーブルは、一般的に「Ａ」とラベルされ、上のテーブルは、一般的には、「Ｃ」とラベルされます。

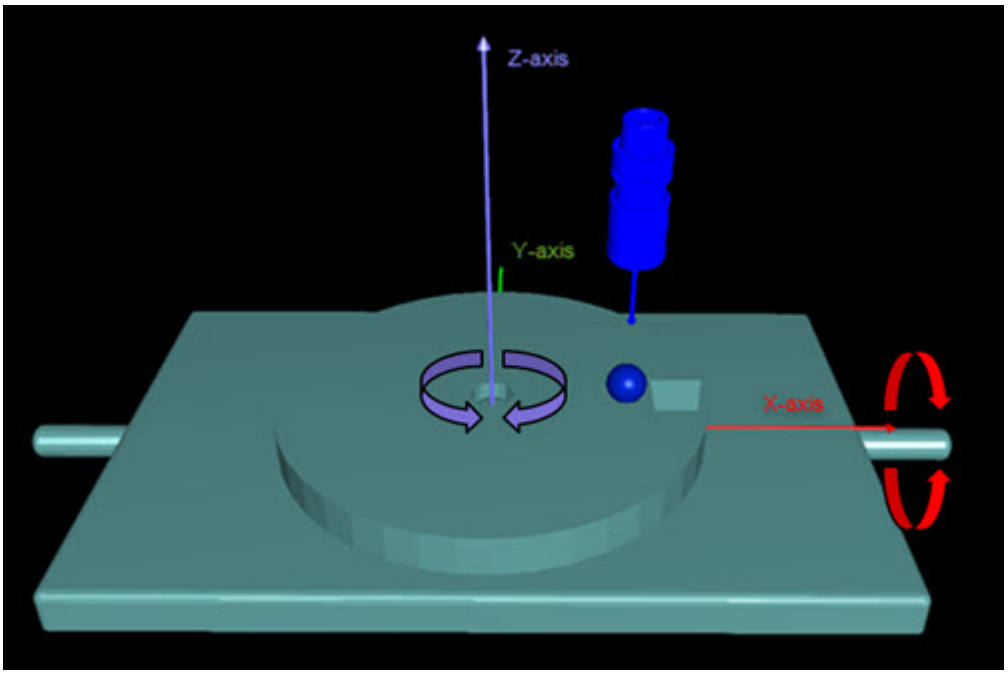


A - テーブルA 、下のテーブル

C - テーブル C、上のテーブル

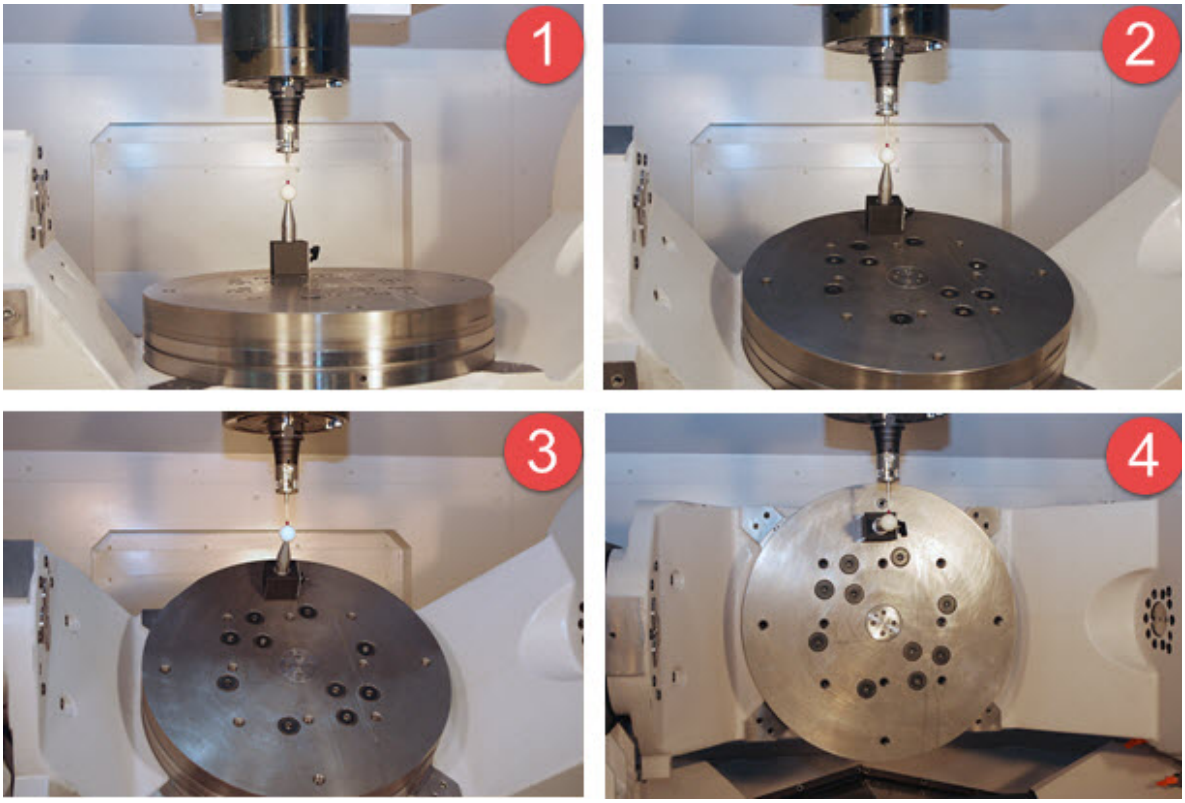
積み重ねた回転テーブルの詳細

このシナリオでは、「Ｃ」テーブルは、 Z軸を中心に回転し、 「Ａ」テーブルは、X軸を中心に回転します。



テーブルの回転方向

以下の4つの画像がそれが90度回転する時に積み重ね回転テーブル上のAテーブルの実例を示しています。



90度回転された積み重ねられた回転テーブルの例

デュアル回転テーブル

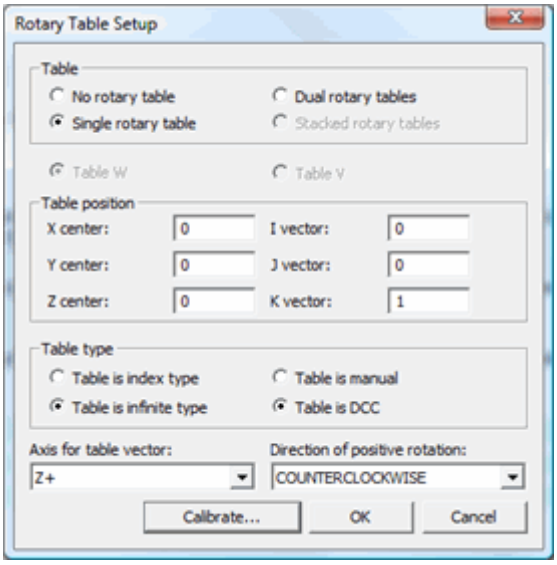
デュアル回転テーブルの構成は、2つの独立した積み重ねられた回転テーブルを保持している大型機から構成されています。測定機内のテーブルは、必要な作業スペースを提供するために、互いに一定の距離を間隔して位置される必要があります。

ユーザは、一度に1だけのアクティブテーブルを持つことができます。アクティブな回転テーブルツールバーからアクティブなテーブルを選択することができます。テーブルがアクティブにされると、それは測定プログラムの全工程にアクティブに保持されます。他のテーブルには、非アクティブの状態にしています。

ユーザはシングルのテーブルシステムのようにアクティブなテーブルを校正や使用することができます。

旋回テーブルのキャリブレーション

[編集 | ユーザー設定 |
回転テーブルの設定]メニュー項目を選択すると、**[回転テーブルの設定]**ダイアログボックスにアクセスできます。

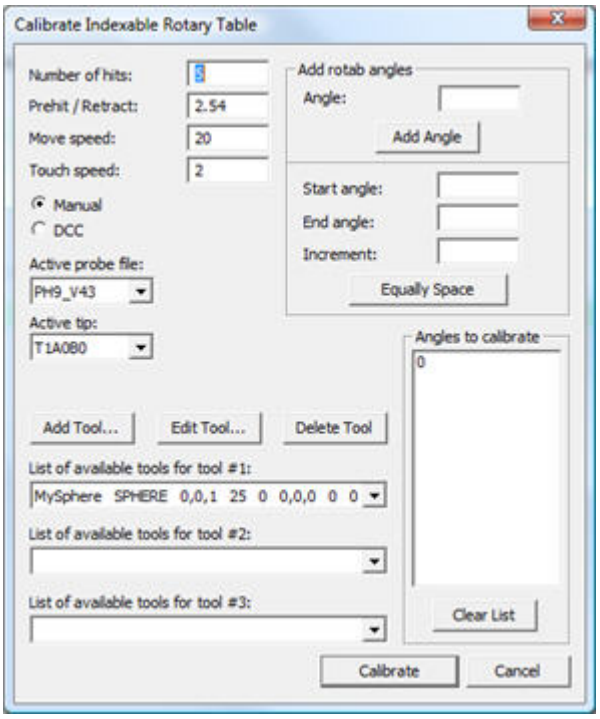


[回転テーブルの設定]ダイアログ ボックス

[回転テーブルの設定]ダイアログ
ボックスの[テーブルの種類]エリアで選択したオプションにより(「回転テーブルの定義」を参照して下さい)、[校正]ボタンをクリックすると、2つのダイアログ ボックスの内の一つが開きます。

- [テーブルは非限定タイプ]オプションを選択し、[校正]ボタンをクリックすると、[非限定回転テーブルの校正]ダイアログ ボックスが開きます。
- [テーブルはインデックスタイプ]オプションを選択し、[校正]ボタンをクリックすると、[インデックス可能な回転テーブルの校正]ダイアログ ボックスが開きます。

ｲﾝﾃﾞｯｸｽ型回転ﾃｰﾌﾞﾙの校正



インデクサブル旋回テーブルのキャリブレート

[インデックス可能な回転テーブルの校正]ダイアログ ボックス
を用いて、選択されたテーブルの校正にPC-
DMISが使用するオプションを選ぶことができます。ダイアログ
ボックス内のオプションが望みどおりのものになった後、[校正]ボタンをクリックして、回転テーブルの校正プロセスを開始してください。

用法注記:
インデックス可能な書いてインテーブルの校正は、位置0を含む必要があります。それに加え、測定ルーチンに使用される角もすべて、校正済みである必要があります。この校正プロシージャにより、当該位置0に関連した、その他すべての角度が計算され、変換が記憶されます。

用法注記:インデックス可能な回転テーブルの校正プロシージャには、適切な実行のために、テーブル用の有効な XYZ, IJK が必要です。これは以下の2つの方法で達成可能です。
1)値が分かっている場合は、[回転テーブル設定
]ダイアログボックスに手動で入力します。これは通常そうでは*ありません*。

2)
最初に**テーブルは非限定タイプ**オプションを選択し、非限定回転テーブルの校正を完了してください。この校正がXYZ,
IJKを計算し、保存します。次に、[テーブルはインデックス可能なタイプ]を選択してイン

デックス可能な回転テーブルの校正を行ってください。通常、これは、初回のソフトウェア
インストレーション/セットアップ時だけの問題です、または、旋回テーブルが移動されたり、測定機座標システムの原点を大きく変更することが発生した場合だけに限られる問題です。インデックス可能な回転テーブルの校正プロシージャが適切に実行されるよう、XYZ,
IJKが決定されると、インデックス可能な回転テーブルの校正再実行のために、非限定回転テーブルの校正に戻って再実行する必要はありません。

回転テーブルの角度を追加

[回転テーブルの角度を追加]エリアにおいて、校正に含まれるテーブル角度の一覧を定義することができます。一度に一つの角を定義することや、または、角度の増加範囲を定義することが可能です。定義された角度は、その後、**[校正する角度]**リストに加えられます。**[校正]**をクリックすると、定義された角度を用いて、PC-DMISが回転テーブルを校正します。

例:
すべての角を5度から95度の間でそれぞれ10度ずつ増加しながら、校正したい場合、**開始角度**、**終了角度**、及び**増分**ボックスにそれぞれ 5, 95, 10
を入力し、**[同じ間隔]**ボタンをクリックして下さい。

校正する角の一覧

このリストには校正のすべてのテーブル角度が含まれます。**[回転テーブルの角度を追加]**エリアからこのリストに角度を追加できます。**[校正する角]**リストには、角度0が使用されなければいけません。

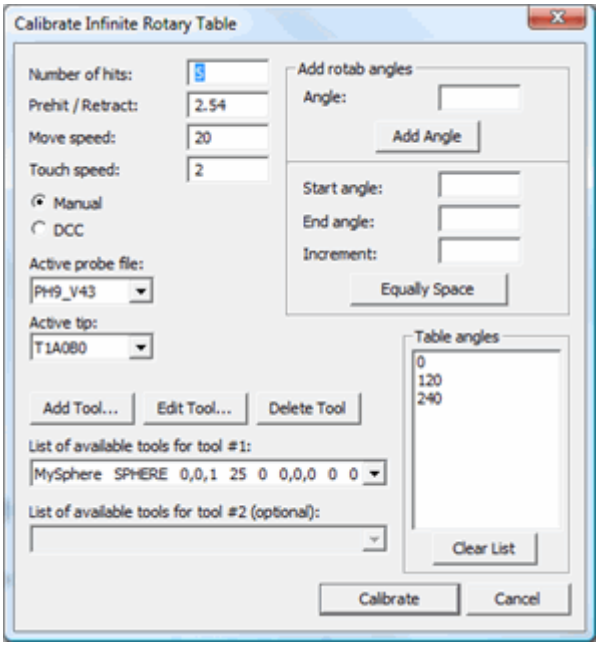
その他のダイアログ ボックスパラメータ

また、このダイアログ
ボックスには「ハードウェアの定義」の章で述べられているのと同じオプションが数多く含まれます。

- **ヒット数**、 **プレヒット/ 取り消し**、 **移動速度**、**タッチ速度**、 **手動 / DCC**、
  利用可能なツールの一覧、**ツールの追加**、
  及び**ツールの削除**に関する、より詳しい情報については、「ハードウェアの定義」の章にある「測定」のトピックを参照して下さい。

- **アクティブなプローブ ファイル** 及び
  アクティブなチップに関する、より詳しい情報については、「ハードウェアの定義」の章にある「プローブの定義」のトピックを参照して下さい。

非限定旋回テーブルのキャリブレーション



非限定回転テーブルの校正

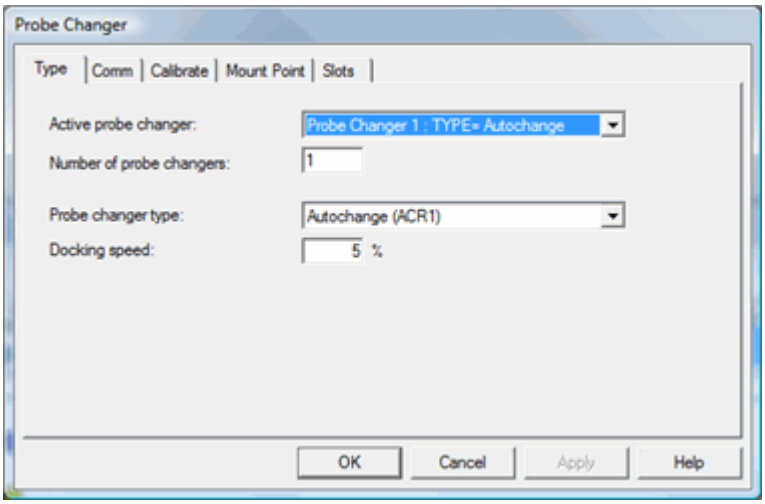
非限定旋回テーブルのキャリブレーションダイアログボックスは、以下のエリアにおいて、**インデクサブル旋回テーブルのキャリブレート**ダイアログボックスと異なります:

- **キャリブレートする角**一覧のかわりに、当該ダイアログは**テーブル角**一覧を表示します。
- **テーブル角**一覧では、角度0.0を使用する必要はありません。
- 三つのキャリブレーション ツールのかわりに、当該ダイアログボックスは一つのキャリブレーション ツールのみを表示します。

このダイアログボックスの特定のオプションに関する、より詳しい情報については、「インデックス可能な回転テーブルの校正」の章を参照して下さい。

プローブ交換器のオプション設定

編集 | 優先設定 | プローブ交換機メニュー オプションを選択すると、**プローブ交換機**ダイアログボックスが表示されます.



[プローブ交換機] ダイアログ ボックス

このダイアログ
ボックスを用いて、プローブ交換機において使用できる、様々なオプションをセットアップすることが可能です。プローブ交換機の定義が済むまで、このダイアログには、**タイプ**タブしか表示されません。**[プローブ交換機の型]** リストから使用するプローブ交換機を決定し、**[適用]**
をクリックすると、以下に示すタブのいくつか、またはすべてが使用可能となります:

タイプ - システムのプローブ交換機のタイプを定義するために使用します。

通信 - プローブ交換機で使用するシリアルポートを定義するために使用します。

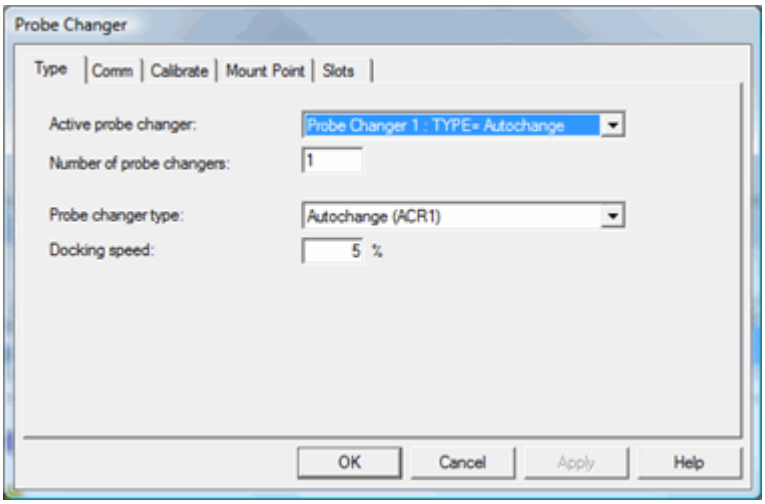
校正 - 校正対象のアクティブチップを選択するために使用します。

マウントポイント - AB リスト値を変更し、各測定サイクルの後 CMM
が移動するのにの安全な移動位置を定義するために使用します。

スロット -
プローブ交換機ラックの既存スロットでプローブまたはスタイラスの構成を定義するために使用します。

注記:
「ハードウェアの定義」の章にある「プローブ交換機の定義」トピックでは、プローブ交換機の設定および校正方法について順を追って説明します。また、グラフィックス表示ウィンドウ内で、既存のプローブ交換機を表示する方法も説明します。

種類



[プローブ交換機] ダイアログ ボックス—[型] タブ

校正が行われる前に、プローブ交換機のタイプを選択する必要があります。**プローブ交換機のタイプ**一覧から、プローブ交換機のタイプを選択して下さい。プローブ交換機のタイプ変更後には、PC-DMISを再起動しなければなりません。

変更サイクルのオペレーションを微調節するために、ドッキングする速度を変更することが可能です。ドッキング速度を設定するには、新規のパーセンテージ値をタイプ入力して下さい。

アクティブ プローブ交換機

プローブ交換機の数ボックス内の値次第では、**アクティブ プローブ交換機**一覧内に数字順の項目（プローブ交換機1、プローブ交換機2、プローブ交換機3、等）が列挙されており、それにプローブ交換機と関連の値を割り当てることができます。

最初に、PC-DMISは、この一覧から一項目、通常プローブ変換機1のみを表示します。**プローブ交換器の数**ボックス内の値を増加することにより、当該一覧に、付加の項目を付け加えることができます。

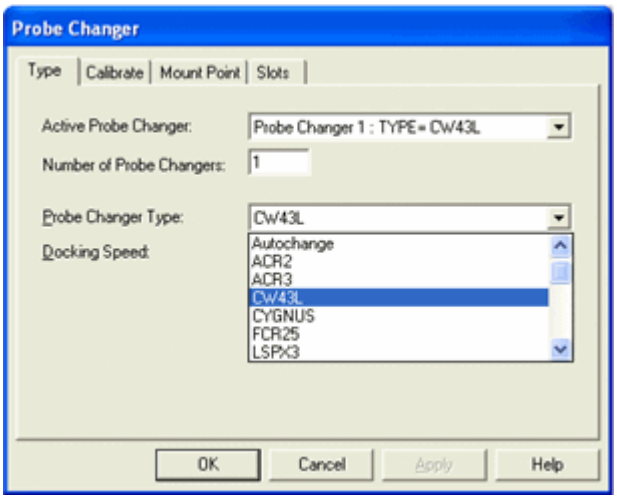
PC-DMISは、選択されたプローブ交換機のタイプ、及び、**アクティブ プローブ交換**一覧の数字の付いた項目に関する、その他の値すべてを保存します。

プローブ交換機の数

プローブ交換機の数ボックスを用いて、使用するプローブ交換機の数を決めることができます。このボックス内にタイプ入力される数が、アクティブ
プローブ交換機一覧内で利用可能なプローブ交換機の数になります。

プローブ交換機のタイプ

プローブ交換機のタイプドロップダウン一覧には、様々なタイプのプローブ交換機の一覧があります。



CW43L プローブ交換機タイプを示す、プローブ交換機ダイアログ ボックス

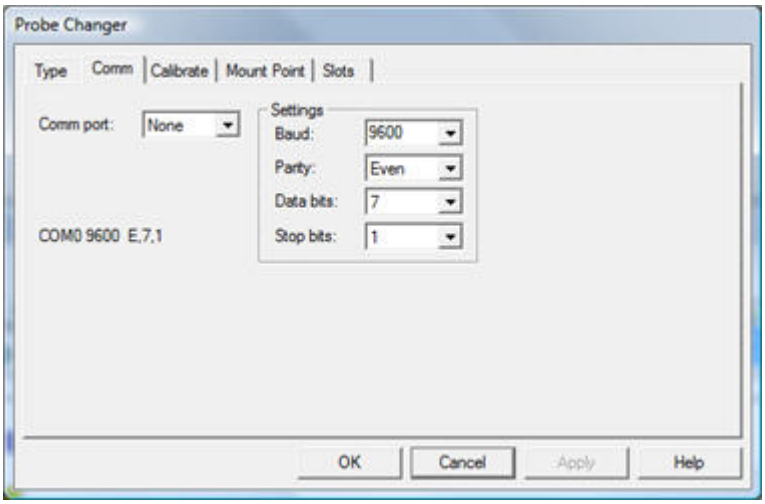
CW43Lプローブ交換機

CW43Lプローブ交換機のキャリブレーション手続きでは、ポートの所在位置を適切に算出するために、リスト
マップと共にプローブを用いて、キャリブレーションを行うことが必要です。いったんキャリブレーションが完了すると、プローブ交換機を用いて、リスト
マップを伴うか否かに関わらず、プローブを変更することが可能です。

ドッキング速度

ドッキング速度ボックスを用いて、変更サイクルでのドッキングの速度を決めることができます。

通信ポート

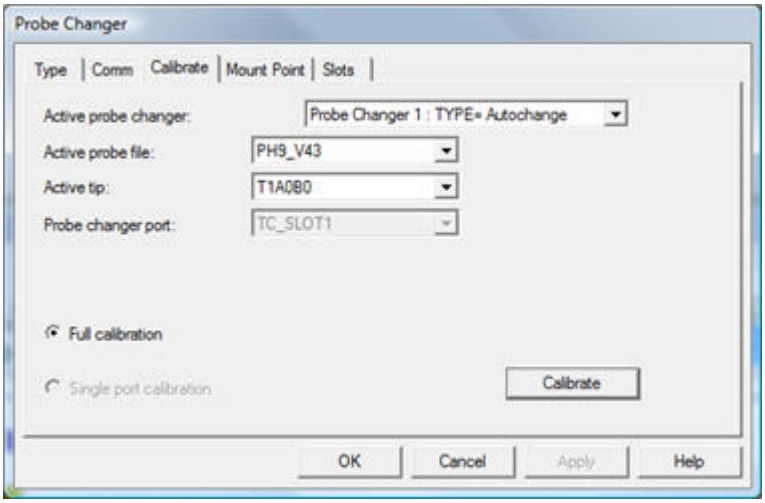


[プローブ交換機] ダイアログ ボックス—[通信ポート] タブ

あるタイプのプローブ交換機は、コンピューターへのシリアル接続を行います。このダイアログを用いて、お手持ちの通信ポート（COMポート）を選択し、COMポート設定を変更できます。お客様のCOMポート設定に関する情報については、お客様のコンピューターハードウェアに付随の文書をチェックして下さい。

使用しているプローブ交換機に、シリアル接続がない場合には、**通信ポート**タブは現れません。

校正



[プローブ交換機] ダイアログ ボックス— [校正] タブ

プローブ
コンフィギュレーションがラックにロードされうる前に、以下について考慮してください:

- プローブ、または、スタイラスは、**タイプ**タブから選ばれ、キャリブレートされていなければいけません。
- ラックは、CMM軸線の一つに直角であるべきです。
- レニショー社製のPS35Rスタイラスは、プローブ交換機のキャリブレーションに使用されなければいけません。
- このプロセスの前にスタイラスが校正されているか確認してください。(「ハードウェアの定義」の章にある「プローブの定義」を参照して下さい。)
- 拡張部品を持つスロットをキャリブレーションする場合、最初に、**マウントポイント**タブにおいて、変更に必要な**プローブ ヘッド**
  リスト角度を定義済みであることを確認してください。基準点の球上のリストのつなぎ目を測定前に、プローブ ヘッドは、この角度で旋回します。

注記:
電子赤外線探知システムは、常時アクティブです。これが誤って作動すると、PI200（プローブコントローラー）がTP200を停止します。

注記:
一般的に、プローブ交換器は物理的に測定機の軸線のひとつと一直線上に並んで配置されるべきです。しかし、TP20, TP200, 及び
SP600プローブ交換器については、この必要はありません。これらのプローブ変更機については、ラックが水平であるべきですが、その旋回が可能で、その結果、ラックの縦は測定機軸線と一線に並んで配置されていないことになります。

アクティブ プローブ交換機

アクティブ
プローブ交換機一覧から、キャリブレーションを行うプローブ交換機を選択することが可能です。

この一覧に関する、より詳しい情報については、タイプタブ下の「**アクティブ**
プローブ交換機を参照して下さい。

アクティブ プローブ ファイル

アクティブ プローブ ファイルドロップダウン一覧を用いて、キャリブレーション
プロセスに使用するプローブを選択することができます。

アクティブ先端チップ

アクティブ先端ドロップダウン一覧を用いて、選択されたプローブ用の先端コンフィギュレーションを選ぶことができます。

自動ﾌﾟﾛｰﾌﾞ交換装置 ﾎｰﾄ

プローブ交換ポート の一覧は**単一ポートキャリブレーション**
オプションと連動します。これを用いて、キャリブレートするアクティブ単一チップを選択できます。これらのダイアログボックスアイテムは個々のポートのキャリブレーションに対応するプローブ交換機を確定するまで選択ができません。より詳しい情報については、単一ポート
キャリブレーションを参照して下さい。

完全なキャリブレーション

[完全校正]オプションを選択すると、PC-
DMISはプローブ交換機全体を測定します。これは、最もよく用いられる校正方法であり、プローブ交換機によっては、唯一の校正方法となります。オペレーターは完全校正方法を使用することが薦められます。

部分的キャリブレーション

部分校正オプションでは、プローブ交換機の一部のみが校正されます。このオプションは、それに対応する形式の変更機用にのみ表示されます。

単一ポート キャリブレーション

ARC 1
のような、一部のプローブ交換機を用いると、全キャリブレーションが成功した後でのみ、単一のスロットの測定が行われます。**単一ポート キャリブレーション**
オプションは、それに対応する形式の変更機用にのみ表示されます。

キャリブレート ボタン

プローブチェンジャーダイアログボックスの**[校正]**タブの**[校正]**ボタンを使用すると、**プローブチェンジャー**ダイアログボックスを開くことで、校正プロセスを開始することができます。お手持ちのプローブ交換器を正確に校正するため、スクリーン上のプロンプトに従って下さい。

プローブ拡張部品のキャリブレーション

先端チップの測定が完了し、拡張部品なしのリスト
ジョイントが基準点球上で測定された後、拡張部品モジュールのキャリブレーション中に、拡張部品添付がコンフィギュレーションされた各スロットについて、拡張部品を添付するか問われます。そして、リスト自体に加えて、これら拡張部品の末端ジョイントの測定が必要となります。

SCR200プローブ交換機のキャリブレーション

以下のプロシージャは、SCR200プローブ交換機のキャリブレーション方法について述べています:

キャリブレートボタンをクリックすると、最初のプロンプトが現れます。

- 第三及び第四のふたを開き、これらのポートからプローブすべてを取り除いてください。
- **[OK]** をクリックします。
- プローブ交換機の中心支柱の前面に、ヒットを一度行ってください。

> PC-DMIS メッセージ:
>
> 蓋3と4を開き、ポート3と4からプローブを取り外します。準備ができたら、ポート3と4の間にある分離部の前面でヒットをとります。ヒットは下方の最も幅が広く、ポート3の隣の外側エッジにできるだけ近い左側部分でとる必要があります。

二番目のプロンプトが現れ、次のヒットを行うか、問います。

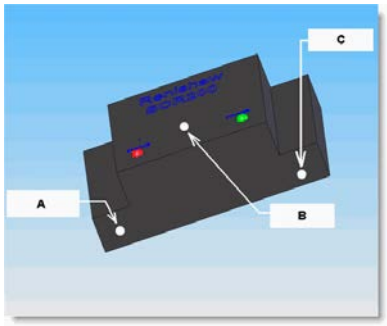
- **[OK]** をクリックします。
- 中心支柱の頂点に、二番目の手動ヒットを行ってください。

> PC-DMIS メッセージ:
>
> ラック中間の最上部でヒットをとります。このヒットが終了すると、DCCの校正が始まります。

三番目のプロンプトが現れ、最後のヒットを行うか、問います。

- **[OK]** をクリックします。
- 再び、中心支柱の前面に、三番目の手動ヒットを行ってください。

- 3つのヒットはすべて、ここに示すように行われているはずです:



A - 第一手動ヒット（中心の支柱の手前）

B - 第二手動ヒット（中心の支柱の頂点）

C - 第三手動ヒット（中心の支柱の手前）

- PC- DMISは、 DCCモードで残りのヒットを取ります。

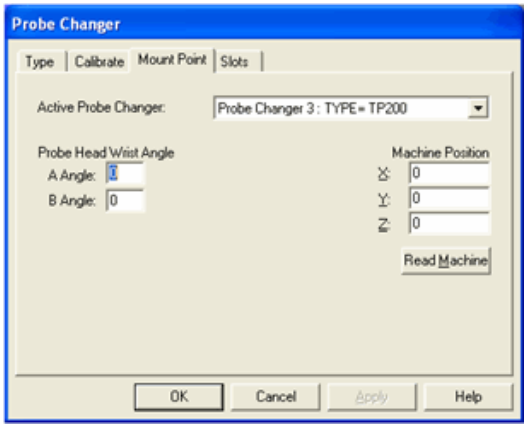
スロット3の左・右の内部側に一つ毎の取込み点を打ちました。

スロット4の左・右の内部側に一つ毎の取込み点を打ちました。

PC-DMIS メッセージ:

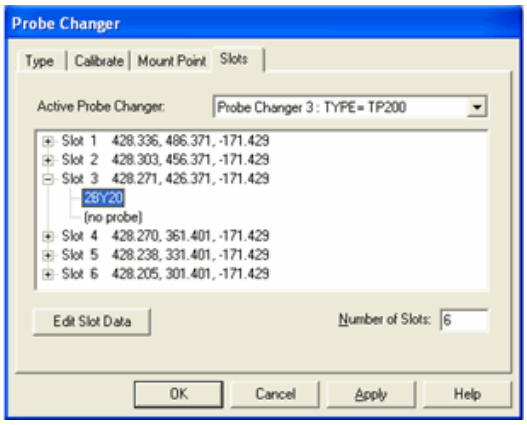
ポート3と4の間にある分離部の前面でヒットをとります。ヒットは下方の最も幅が広く、ポート3の隣の外側エッジにできるだけ近い右側部分でとル必要があります。このヒットが終了すると、DCCの校正が始まります。

キャリブレーション後、**プローブ交換機**ダイアログ ボックスが現れます。



「プローブ交換機」ダイアログ ボックス、点固定のタブ

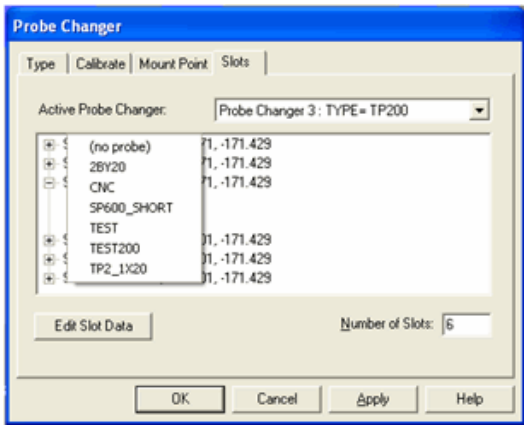
- **マウントポイント**タブを選択して下さい。
- **プローブ ヘッド リスト角度 A 角** 及び **B 角**ボックスに角度をタイプして、変更サイクル用のリスト角度を確定してください。
- 測定機座標において、ラックの安全な位置（プローブが安全に交換できる位置）を特定して下さい。この値を**測定機位置 X**、**Y**、及び **Z**ボックスに手動でタイプでき、または、**測定機読み込み**ボタンをクリックすることも可能です。
- **溝穴**タブをクリックして下さい。



プローブ交換機ダイアログ ボックス、スロットタブ

- 各スロットのプラスサイン**(+)**を拡大し、**(プローブ以外)**の項目をダブルクリックして、ラック内の各スロットの内容を定義して下さい。

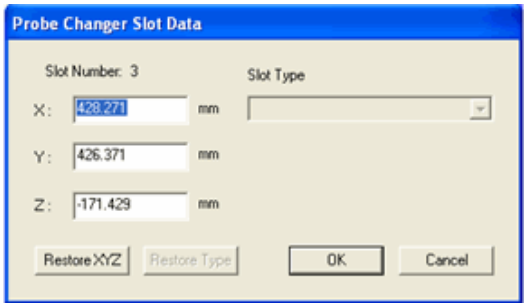
入手可能なプローブの一覧が現れます。



- その時点でのスロットに加える、プローブ ファイルを選んで下さい。

- 必要に応じて、スロットの位置を調整して下さい。スロットの位置を選択し、**スロット データの編集**ボタンをクリックして下さい。

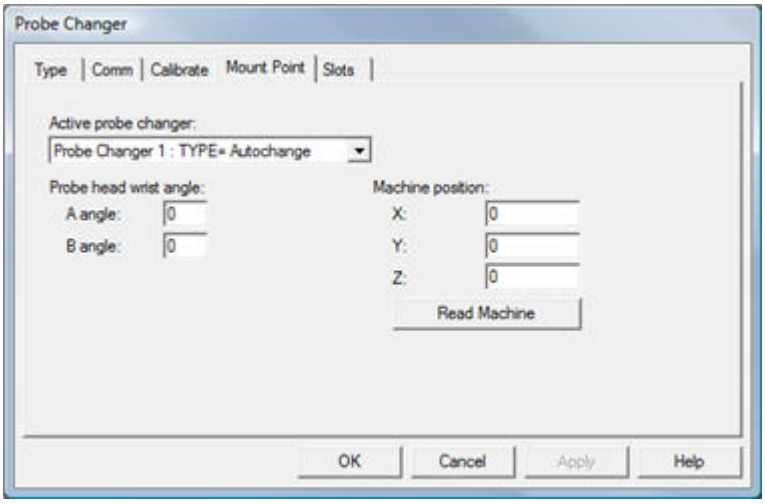
[**プローブ交換機スロット データ**] ダイアログ ボックスが現れます。



「プローブ交換機スロット データ」ダイアログ ボックス

- 当該スロットの**X**、**Y**、**Z**の位置を変更して下さい。
- **OK**をクリックして、**プローブ交換機スロット データ**ダイアログ ボックスを閉じて下さい。
- **OK**をクリックして、**プローブ交換機**ダイアログ ボックスを閉じて下さい。

取り付け点



[プローブ交換機] ダイアログ ボックス—[マウントポイント] タブ

[**マウントポイント**]タブを用いて、ABリスト角度の変更ができるのに加え、各変更サイクル前にCMMが安全に移動できる位置を定義することができます。

[型]タブより定義されたプローブ交換機であれば、その数に関わらず、これを行うことができます。[**アクティブなプローブ交換機**]リストからプローブ交換機を選択し、必要に応じてAB間の角度および測定機の位置を入力することが可能です。

アクティブ プローブ交換機

アクティブ
プローブ交換機一覧から、ABリスト角、及び、CMMの位置の定義を行うプローブ交換機を選択することが可能です。

この一覧に関する、より詳しい情報については、タイプタブ下の「**アクティブ プローブ交換機**を参照して下さい。

プローブ ヘッドのリスト角度

A角度と**B角度**ボックスはプローブ構成をスライドして位置づけする際のプローブヘッドの位置を示しています。たいていの場合、角度は真下の位置を示します。拡張端子を保持しているスロットを校正する場合、校正前にAとBの角度ボックスを定義する必要があります。スロットが校正された後にAとBの角度を変更しようとすると、再校正が必要であるとの警告が表示されます。

真下の位置にあるAB間の角度を変更するには:

1. **A 角**ボックス、または**B 角**ボックスにカーソルを置いてください。
2. ご希望の角度を、タイプ入力して下さい。

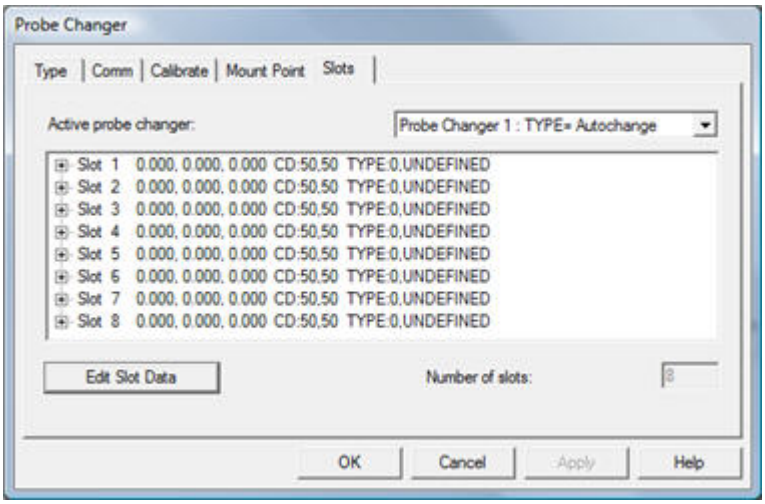
測定機の位置

この**プローブ交換装置**ダイアログボックスの**点固定**タブの**測定機位置**アリアを用いて、各変更サイクル前にCMMが安全に移動できる位置を指示することが可能です。通常、この安全位置は、プローブ交換機ラックに向かって約2インチ上となります。ただし、プローブ交換機の種類によっては、別の位置への移動が必要かもしれません。

CMM位置用の数値を変更するには:

1. 変更したい、**X**、**Y**、または**Z**ボックスの以前の数値を選択して下さい。
2. 適切なボックスに正しい数値を入力するか、または、[**CMMの読み込み**]ボタンを用いて、CMMの現在位置を入力して下さい。

スロット



[プローブ交換機] ダイアログ ボックス—[スロット] タブ

プローブ交換機は、各種のプローブ
コンフィギュレーションのためのスロットを備えたラックです。**スロット**タブを用いて、各スロット用のプローブ
コンフィギュレーションを定義できます。各スロットのデフォルト設定は、「プローブなし」です。選択されたプローブ交換機について、それが使用する各スロットに、プローブ
コンフィギュレーションを定義することが可能です。

各スロットの、プローブ コンフィギュレーションを行うには

1. **アクティブなプローブ交換機**一覧から、適切なプローブ交換機を選択して下さい。
2. スロット番号の左側にあるプラスサイン(**+**) をクリックして下さい。PC-DMISはデフォルト設定として、「（**プローブなし**）」のアイテムを表示します。
3. 「（**プローブなし**）」の項目をダブルクリック、または、右クリックして下さい。一覧が現れます。
4. 各スロットに、適切なプローブ ファイル、または、拡張部品を割り当てて下さい。

   ユーザがそれをダブルクリックし、リストから「（**プローブなし**）」のアイテムを選択することで、スロットからプローブファイルまたは拡張子を削除することができます。

5. スロット番号を選択し、それから、**スロット データの編集**ボタンをクリックして下さい。[**プローブ交換機スロット データ**] ダイアログ

ボックスが現れます。このダイアログボックスを使用するヘルプについては、「手動でスロットのデータを編集する」を参照してください。

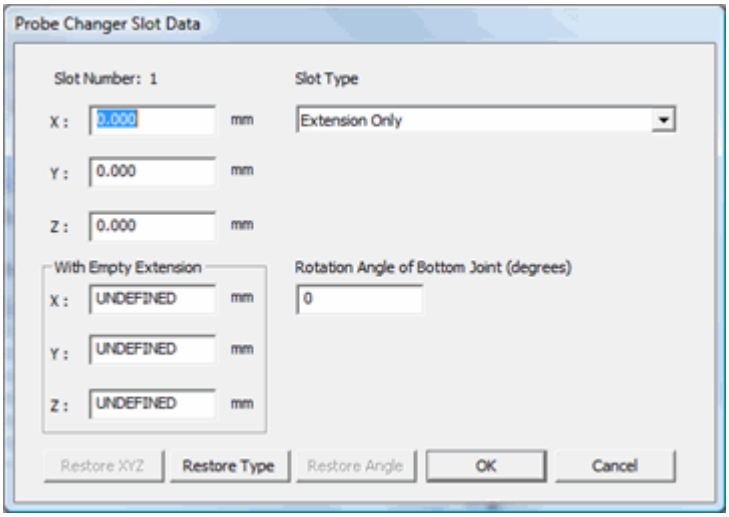
6. **スロット タイプ**一覧から、スロットが保持するハードウェアのタイプを指定して下さい。
   - それにプローブを保持したい場合、**プローブを取付る**を選択します。
   - 単にプローブの延長端子のみを保持したい場合は、**延長端子だけ**を選択します。
   - 当該のスロットが空の場合には、**未定義**を選択して下さい。
   - 一部のプローブ交換機については、この一覧から、特有の挿入部品を選択することが可能です。
7. **スロット番号**の **X**、**Y**、と **Z** 値に入力されたスロットにXYZ位置を定義します。
8. ACR1かTESASTAR-Rプローブ交換機を使用し、スロットタイプを**延長部品**だけに定義された場合、**ボトムジョイントの回転角度（度）**ボックスに値を設定して下さい。ご希望の場合、**空いている延長部品**エリアで**X**、**Y**、と**Z**ボックスを決定することにより決定できます。
9. **返却前** と**獲得前**の消去の距離の値はご希望通り定義できます。より詳しい情報については、スロット消去の距離をを参照します。
10. 変更を確定するために、**OK** をクリックして下さい。
11. 各プローブ構成は、**CMM アーム**、及び、**アクティブなプローブをロード**オプションを用いて、当該ラックにロードされる必要があります。（プローブをラックに手動で挿入*しない*で下さい。）

注意:
延長部品は、再校正なしで交換するために必要な誤差を含んで、製造されてはいません。ですから、特定の拡張部品用にスロットをコンフィギャー済みで、さらに、別の拡張部品（同一サイズの拡張部品をも含む）をそのスロットに収容したい場合には、その新規の拡張部品用に当該スロットを再キャリブレーションすることが必要です。

スロットのデータを手動で編集するには

1. **アクティブ プローブ交換機**一覧から、適切なスロットを選択して下さい。

2. [スロット データの編集] ボタンをクリックして下さい。[プローブ交換機スロット データ] ダイアログ ボックスが現れます。全ての交換機のタイプには、編集のために **[XYZ]** ボックスが利用可能です。必要の際は、これらのボックスに手動で位置を入力でき、これらの値は通常プローブ交換機のキャリブレーション手続きの実行の結果測定により決定されます。このダイアログ
ボックスを用いて、スロットのタイプ、または、XYZの位置を変更することが可能です。TESASTAR-R と自動交換(ACR1)
プローブ交換機の、拡張鵜品のXYZ位置と底接続の編集用にもこれを使用できます。



プローブ交換機スロット データ ダイアログ ボックス

3. プローブ交換機のいくつかは、各スロットの複数のコンフィギュレーションが可能です。いくつかのプローブ交換機には、自動交換機(ACR1) と TESASTAR-Rもその中に含まれます。

   - 各スロットに複数の機能を持つ交換機を使用する場合、 [スロットタイプ] リストが有効になり交換機のタイプに適した選択肢が表示されます。

   - 適切なコンフィギュレーションを特定するには、一覧から適切なエントリーを選択して下さい。更に、特定の交換機のタイプへ選択が可能にするには、プローブ交換機のためにお手持ちのハードウェアの書類を診断して下さい。

   - スロットタイプの選択が可能な時は、実行前にプローブ交換機にキャリブレーション手続きを設定します。これを後に設定すると、プローブ交換機の再キャリブレーションが要求するか、各スロットが変更されます。

4. いくつかのプローブ交換機では、プローブのない空の拡張部品を使用することになります。例にとると、プローブ交換機の中には自動交換機(ACR1) とTESASTAR-Rがこれに含まれます。

- 空の拡張部品に対応するプローブ交換機を使用する時、またスロットを**拡張部品のみ**として決定した場合は、 **空の拡張部品** と**回転角度底接続**
  エリアは有効化されます。

- 空の延長端子には手動でXYZの位置を入力できますが、これは通常プローブ交換機の校正から決定されます。

- 拡張部品のバーの中には一番上の接続の角度によって回転された底の接続があるものがあります。こういった拡張部品のバーをお使いの場合、プローブ交換機をキャリブレートする **前**にROIの底部の回転角度
  ボックスの度合を定義しなければなりません。後で変更することはプローブ交換機の再キャリブレーションを要求されるか、各スロットは変更されます。

5. 更なる情報は「スロット消去の距離」をご覧下さいご希望の際は、 **返却前** and **獲得前**
   の消去の**距離**
   を分けることができます。より詳しい情報については「スロット消去の距離」を参照して下さい。

6. 入力し終わると、 **OK**ボタンをクリックして下さい。PC-DMISはダイアログボックスを閉じ、
   プローグ交換機ダイアログボックスのスロットの仕様についてのサマリーを表示します。
   値が変更された場合は、「保留の変更」も表示します。

7. スロットを元の値に戻したい場合、当該スロットを選択し、 **スロット データの編集**をクリックし、それから、必要に応じて、**プローブ交換機スロット データ** ダイアログ ボックスから プローブ交換機スロット データ ダイアログ
   ボックス内の**XYZ値を復元**、**型を復元**、
   または**角度を復元**ボタンをクリックして下さい。これらのボタンは、変更が行われたがまだ**プローブ交換機**ダイアログ ボックスの **OK**
   または**適用**がクリックされていない場合にのみ利用可能です。

8. これまでの変更内容を確定する場合、 **プローブ交換機**ダイアログ
   ボックス上の**OK**または**適用する**ボタンをクリックして下さい。

定義されたプローブを、「デフォルトプローブなし」の設定に変更し戻すには

1. **アクティブなプローブ交換機**一覧から、適切なプローブ交換機を選択して下さい。

2. 変更しようとするスロットをダブル クリックして下さい。一覧が現れます。

3. 利用可能な一覧から、「**プローブなし**」を選択して下さい。

ダイアログ ボックスにスロットを付け加え、または、取り除くには

一部のタイプのプローブ交換機では、スロットの数を定めることができます。

1. **アクティブなプローブ交換機**一覧から、適切なプローブ交換機を選択して下さい。
2. **スロット数**ボックス内の値を変更して下さい。
3. 即座に、スロット数が変更されたのを見るには、**適用する** ボタンをクリックして下さい。

プローブ交換機がスロット数の変更を受け入れない場合、**スロット数**ボックスは利用不可能です。

新規のプローブを取り上げないで、プローブを返却するには

プローブ交換機から、新規のプローブを取り上げないで、交換機に使用済みのプローブを返却する場合があるかもしれません。

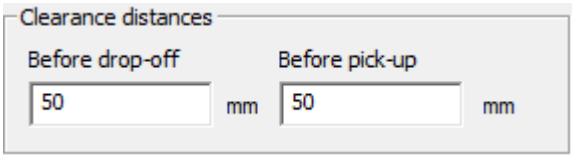
手順は次のとおりです:

1. 存在しないプローブのために、**プローブユーティリティ**ダイアログ ボックス（**挿入 | ハードウェア定義 | プローブ**）で、ダミー
   プローブファイルを作成して下さい。そのファイルに「unload」のようなファイル名を付けてください。

   注記:アンロード手順に使用される「ダミー」プローブが完全に定義される必要があります。新しいプローブを定義する方法の詳細については、「ハードウェアの定義」章の「プローブの定義」トピックを参照してください。

2. **セットアップ**ボタンをクリックして下さい。**プローブ セットアップ**ダイアログ
   ボックスが現れます。
3. **取り外し限定で、プローブ交換機に用いられるプローブファイル**一覧から、このプローブファイルを選択します。
4. **OK**をクリックして、**プローブ セットアップ**ダイアログ ボックスを閉じて下さい。
5. **プローブ交換機**ダイアログ
   ボックスにある**スロット**タブにアクセスし、当該プローブ交換機のどのスロットにも、当該プローブが割り当てられていないことを確認してください。
6. **OK**をクリックして、**プローブ交換機**ダイアログ ボックスを閉じて下さい。

スロットのクリアランス距離について



[クリアランス距離]エリア

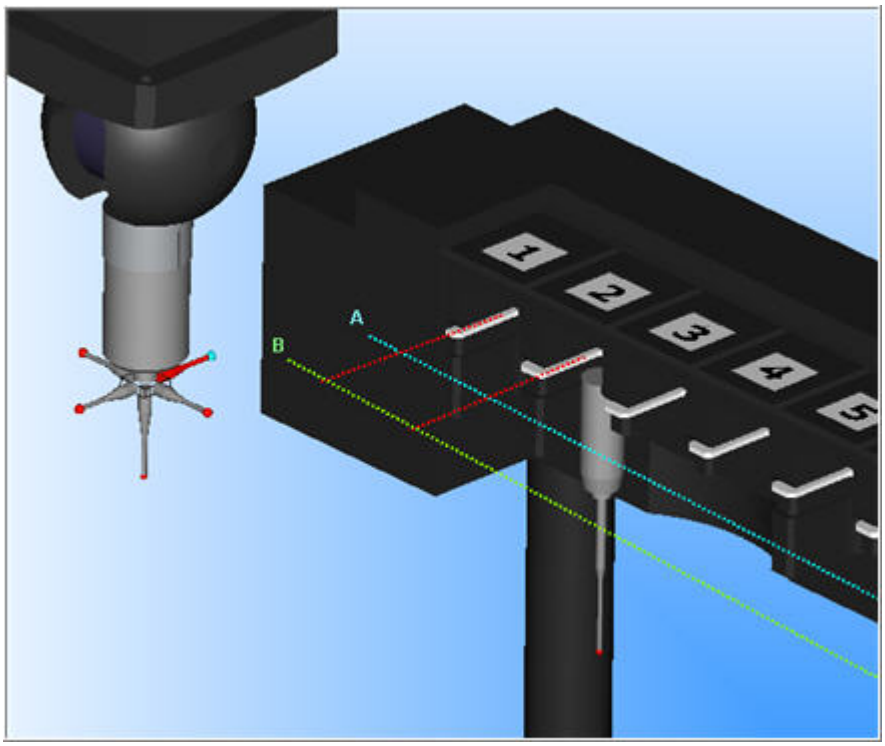
[プローブ交換器のスロットデータ]ダイアログボックスから使用可能な[クリアランス距離]では、ハードウェアをドロップオフする前とピックアップする前に測定機が使用するための、スロットからの2つの異なるクリアランス距離を定義できるようになりました。

注記: また、[プローブのセットアップ]
ダイアログボックスを使用することでクリアランス距離を定義し、それらを特定のプローブチップに関連付けることが可能です。定義されたプローブ固有の値は[クリアランス距離]エリアで定義されたものよりも優先されます。下記「プローブ固有スロットのクリアランス距離の使用」を参照してください。

PC-DMIS2009以前では、1つのクリアランス距離のみ指定可能であり、設定エディタを利用する必要がありました。今回より、PC-DMISソフトウェアからこれらの異なる距離を定義することが可能になりました。これらの距離はプローブ交換操作中の動作に影響します。

- ドロップオフ前 - プローブが装着されているときに使用されるクリアランス距離です。この距離はプローブがスロットへドロップオフされる前に適用されますが、そのスロットからプローブがピックアップされた後も適用されます。
- ピックアップ前 - プローブが装着されていないときに使用されるクリアランス距離です。

各スロットに対してこれら2つの個別のクリアランス値を持つ理由は、スタイラスがラックに戻る方向を指す際のプローブ設定に、より的確に適合させるためです。下の写実的な例で、星のプローブはラックに向かってポイントして針を含みます。2つの別個のクリアランス距離を説明するために、いくつかの例クリアランス・ラインもイメージ上で提供されます。



ピックアップ前（線A）およびドロップオフ前（線B）のクリアランス距離を表示した例

これらの種類のプローブ設定に加えて、ラックに収納されている他のプローブに衝突せずにクリアランス位置まで移動するための、追加のクリアランス距離が必要な場合もあります。例えば、上図を例にとると、マウントポイントはラックの中心エリア（スロット4または5の前の領域）に定義されています。現在の星形プローブをスロット1にドロップオフし新しいプローブをスロット2よりピックアップするプローブ交換操作では、マウントポイントからスロット1のクリアランス位置に移動する際に、ラックを指している星形プローブのスタイラスとスロット2のプローブの間で衝突が起きる可能性があります。この場合、(線Bとして示されている)[**ドロップオフ前**]距離が必要なクリアランスを提供します。しかしながら、ドロップオフとプローブが装着されていないスロットのピックアップの間の移動ではクリアランス距離の値を増やす必要はないので、[**ピックアップ前**]距離（線Aとして示されている）は役に立ちます。

この例を参考にして下さい

繰り返しますが、上図を使用して、典型的なプローブ交換サイクル、すなわち現在のプローブがスロット1にドロップオフされて新しいプローブがスロット2からピックアップされる場合、下記のように説明されます:

1. 測定機がプローブ交換のため、定義済みのマウントポイントまで移動します。
2. 測定機はスロット1の[**ドロップオフ前**]クリアランス位置（線B）まで移動します。
3. 測定機がスロット1に移動し、現在のプローブをドロップオフします。

4. 測定機はスロット1の[**ピックアップ前**]クリアランス位置（線A）まで後退します。
5. 測定機はスロット2の[**ピックアップ前**]クリアランス位置（線A）まで移動します。
6. 測定機がスロット2に移動し、新しいプローブをピックアップします。
7. 測定機はスロット2の[**ドロップオフ前**]クリアランス位置（線B）まで後退します。
8. 測定機が定義済みのマウントポイントまで後退します。

影響を受けるプローブ交換器

これらのクリアランス値はほぼ全種類のツール交換器に対して指定可能ですが、場合によっては影響が無いこともあります。測定機に特化した交換器の中には、交換サイクルが特定の機械インターフェースによって管理されるものもあり、そのインターフェースが当機能に対応していない可能性もあります。さらに、測定機に特化した交換器の中には、交換サイクルの動作が測定機のコントローラー自体によってなされるので、PC-DMISの制御を直接受けないものもあります。

クリアランス値の初期値

PC-DMIS設定エディタより、適切なレジストリ
エンティティを変更することで特定の種類のプローブ交換器に対するクリアランス初期値を変更できます。これらのエンティティは設定エディタの[**オプション**]セクションに存在し、次の名前で始まります:

- `TCDefaultClearanceBeforeDropoff_<交換器>` -
  これは、<交換器>で示される型のプローブ交換器のドロップオフ前クリアランス距離をミリメートルで表します。
- `TCDefaultClearanceBeforePickup_<交換器>` -
  これは、<交換器>で示される型のプローブ交換器のピックアップ前クリアランス距離をミリメートルで表します。

例えば、TP20プローブ交換器が次の名前の変数を持つとします:

- `TCDefaultClearanceBeforeDropoff_TP20`
- `TCDefaultClearanceBeforePickup_TP20`

これらの新規変数が任意の交換器用にカスタマイズされなかった場合、PC-DMISは何種類かのプローブで利用できる、古いクリアランス関連のレジストリ設定よりカスタマイズされた値が存在するか検索します。存在する場合、古い変数が削除されるか新規にカスタマイズされた値が上記エントリを使用して保存されるまで両方のクリアランスにその値を適用します。これらの古いクリアランス関連のレジストリ値はサポート対象外と考えてください:

- `AutochangeClearance`

- `ACR3Clearance`
- `FCR25Clearance`
- `SCP80Clearance`
- `TESASTAR-PRClearance`
- `TESASTAR-RClearance`
- `TP20Clearance`

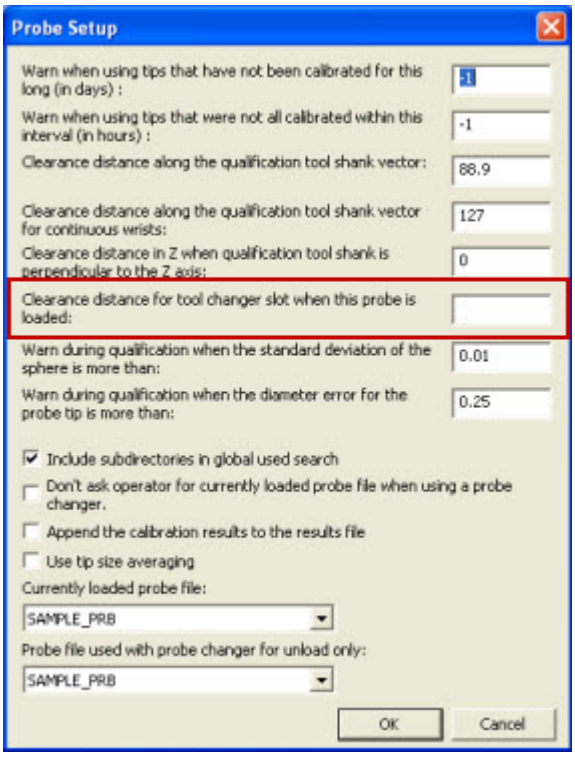
プローブ固有スロットのクリアランス距離の使用

[プローブ交換機スロットデータ]ダイアログボックスを使用して、プローブ交換器の各スロットに対して[ドロップオフ前のクリアランス距離]を定義できますが、プローブ/スタイラスの構成によっては独自のニーズがあるため、この方法は十分な柔軟性を提供しないことがあります。時には、所定のスロットに別のプローブ構成をロードするために新しい測定ルーチンに切り替えることが必要な場合があります。新しいプローブ構成は、ドロップオフのためにスロットに挿入したりピックアップの後にスロットから離れる際に衝突を避けるため別のクリアランス距離を必要とする場合があります。

PC-DMIS では[プローブ交換器のスロットデータ]ダイアログボックスで指定された距離より優先度の高いプローブに関係したクリアランス距離を定義することができます

プローブ固有スロットのクリアランス距離を定義するには:

1. 測定ルーチンの目的LOADPROBEコマンド位置でF9を押し、[プローブユーティリティ]ダイアログ ボックス にアクセスします。
2. [セットアップ]ボタンをクリックして、[プローブ セットアップ]ダイアログボックスにアクセスします。



[プローブ セットアップ] ダイアログ ボックス

3. [**このプローブがロードされた場合のツールの交換用スロットにのクリアランス距離**]と名のついたボックスで、固有のクリアランス距離を定義します。この測定に用いられる単位は、現在開いている測定ルーチンで使用されているものと同じです。

4. **OK**をクリックして、**プローブ セットアップ**ダイアログ ボックスを閉じます。

5. **OK**をクリックして、**[プローブユーティリティ]**ダイアログ ボックスボックスを閉じます。

[**プローブセットアップ**]ダイアログ
ボックスで指定されたクリアランス距離は、どのスロットにプローブが挿入されるかに関わらず、[**プローブ交換器のスロットデータ**]ダイアログ
ボックスの[**ドロップオフ前**]値より優先されます。[**プローブセットアップ**]ダイアログ
ボックスでクリアランス距離を指定しない場合、PC-
DMISは[**プローブ交換器のスロットデータ**]ダイアログ ボックスからの値を使用します。

この方法を用いると、プローブ交換器のセットアップ値はその他目的のプローブに対してプローブ固有の値を定義できる一方、ほとんどのプローブに対して十分な値をとることができます。

追加の注記:

- この機能の目的は特定のスタイラス構成に付随する複雑さを避けることです。つまり、スタイラスホルダー/構成が1つのスロットまたはプローブ交換器に維持され、延長端子また

はその他のプローブ本体が別のスロットまたはプローブ交換器に含まれるという複雑なプローブ交換器の操作の場合、この値はスタイラスが取り付けらた時に最初のドロップオフ(取り外し時)または最後のピックアップ(取り付け時)のみに適用されます。プローブ交換全体の中間部分はスタイラスが取り付けられていないので、PC-DMISは追加のクリアランスは必要ないと推測します。このような中間部分では、PC-DMISは代わりに一般的なプローブ交換器のセットアップから取得したクリアランス値を使用します。

- このクリアランス設定は、PC-DMISが(ACR2を例外として)測定機インターフェイスに依存しない方法で直接取り扱う種類のプローブ交換器に使用されます。測定機の種類に特化し、交換操作が関連する機械インターフェイス内で行われるような種類の交換器では、測定機のインターフェイスはこの値を使用する場合も使用しない場合もあります。

複数のプローブ交換機の操作

以下の項目は、現在広く利用されているプローブ システムについて述べています(TP2、ACR1、TP20 及びTP200、及びSP600)。さらに、「複数のラックのコンフィギュレーション」と「SP25プローブ/スタイラス変更システム」には、複数のプローブ交換機の操作法についての、より詳しい例が記述されています。

TP2に関する予備知識

レニショーが小型のタッチ トリガープローブ（TP2）を開発した時、TP2は、プローブ本体と一線となるよう、ねじ付きM8で接続されたプローブヘッドを通してCMMのラムに添付されました。しかし、このデザインでは、プローブが取りはずされたり、再取り付されたたびに、再キャリブレーションが必要でした。

再キャリブレーションの必要性を緩和するため、レニショーは、クイック接続アダプタ（クイックコネクトという名称）を開発し、それは、CMMからアダプタをロック及びアンロックするのに、キーを四分の一回転するだけでよいものでした。TP2は、このアダプタにねじで固定されます。このアダプタは、常時再キャリブレーションの必要性がなく、大変すばやく、何度でも取りはずし、及び、再取り付けができました。

ACR1に関する予備知識

ACR1は、レニショーにより導入された最初のプローブ交換機でした。これは、8個までのクイック接続拡張部品を付けることができ、その各々が別個のTP2プローブ本体を持つものでした。一グ

ループのプローブが位置決めされ、ラック内に配置されると、簡単な動作コマンドを用いて、それらの取り外し、取り付けがCMMにより自動的に行われ、ラックのロック/アンロック機能も付いていました。ラックのオペレーションをコントロールする、ソフトウェア
モジュールが後に開発されました。

TP20、及び、TP200に関する予備知識

時がたち、デザイン進化、及び電子関係の開発によって、TP2
プローブ本体に変わるものが作られました。それに加え、ある消費者には、8個ものプローブ本体の購入は不可能でした。新規のプローブ本体のデザインが開発され、それには、新スタイラス
アダプタの取り付け、取り外しが可能でした。これらが、クイック接続ジョイントに取って代わりました。個々のスタイラス
アセンブリは、何度でも、コストがかからずに、取り付け、取り外しができました。

Renishaw デザインで有名なプローブの型の2つはTP20 と
TP200です。TP20は、複数のプローブモジュールの交換を可能にする磁気結合を使用しています。ユーザが実際にMCR20 （ ここに「
MCR」はモジュール交換ラックである）と呼ばれているTP20プローブラックに個々のモジュールを格納することができます。

どちらのプローブ本体もTP2 と形状はほぼ同じですが、大きな違いが2つあります：

- これらの拡張された電子部品により、さらなる重量に耐えられると同時に、より精確で再現性の高い結果を出すことができます。
- これらは、上部プローブ本体と、下部スタイラス
  ホルダーの間に、磁気の「割れ目」がデザインされています。これは、それらがそれぞれ自分の針交換ラック・システムと共に使用されることを可能にします:
  MCR20およびSCR200。

SP600 アナログ プローブに関する予備知識

次に改良されたのが、人気のあるSP600 アナログ
プローブです。このプローブは、タッチトリガー測定に加え、アナログスキャンを行うことができます。この本体デザインが、TPシリーズのプローブよりかなり大きい一方、磁気スタイラス
ホルダーが本体から分離可能です。従って、それはまた、独自のラック
システム、SCR600先端チップ変換機を付随しています。

複数のラックのコンフィギュレーション

市場には他のプローブ
システムが入手可能ですが、ここで記述されている、最も人気の高い4つのプローブ
システムは、TP2, TP20, TP200, 及び SP600 システムです。それぞれが、独自のラック
システムを持ち、それ自体が単一ラックとして機能できます。そのかわりに、複数のラックをCMMと併用することも可能で、PC-
DMISソフトウェアは、必要に応じて、プローブ及びスタイラス
ホルダーを返却、取り上げのためにラック間を移動する能力を持っています。

重要事項:

- PC-
  DMISでは、各ラックにそれぞれ独自の校正方法があります。多くの共通点がある一方、校正については、それぞれ完全に独立しています。

- 次の移動先について、いくらか考慮しなければならないことを除くと、各ラックの除去動作ポイントは、そのラックにのみ関連したものです。このため、除去動作は、他のどのラックへも、自由に移動できるような位置で行われるべきです。単一のラックを用いている場合でも、この除去動作は、パーツのインスペクション
  オペレーションのために行き来するのに、じゅうぶんなものでなければいけません。

- 複数ラックのスロットの内容を定義することは、同時に複数ラックを使用する構成において最も重要な要素です。各スロットが複数のプローブを参照する可能性がある（複数のプローブが一つのスロット内容を利用できる）ので、各スロットは、使用する可能性のあるプローブすべてを識別する必要があります。

複数プローブ参照の例

以下の三つのプローブ コンフィギュレーションがある、とします:

プローブ_01	プローブ_02	プローブ_03
クイック接続 自動ジョイント	クイック接続 自動ジョイント	クイック接続 自動ジョイント
TP2	TP20	TP20
3mmx10mmスタイラス	2mmx10mmスタイラス	4mmx20mmスタイラス

ACR1は、TP2プローブ、とTP20プローブ間で切り換えを行います。MCR20は、TP20プローブシステム関連のプローブピン間で切り換えを行います。

典型的なスロットの割り当ては、以下のようになります:

ACR1		MCR20	
スロット 1	スロット 2	スロット 1	スロット 2
プローブ_01	プローブ_02	プローブ_02	Probe_03
	Probe_03		

オペレーション中、システムがプローブ_01 を使っていて、プローブ_02
への切り換えが必要になった、とします。 システムは次のメッセージを出します:

- 測定プログラムを中止して下さい。
- ACR1のクリアランス位置へ移動します。
- 現在ロードしていたプローブを、ACR1のスロット#1に戻して下さい。
- ACR1のスロット#2へ移動し、プローブ_02用のTP20本体をピックアップして下さい。
- それぞれの安全/クリアランスポイントを使用して、MCR20に移動して下さい。
- MCR20のスロット第1内に移動し、スタイラス
  アダプタをご希望のスタイラスに添付して下さい。
- MCR20の除去ポイントに戻ってください。
- 測定ルーチンを継続して下さい。

幾つかの幾何要素を測定後、システムは、プローブ_03の使用が必要になった、とします。
システムは次のメッセージを出します:

- 測定プログラムを停止して下さい。
- ACR20の除去位置へ移動して下さい。
- スロット#1へ移動し、プローブ_02のスタイラスをドロップオフして下さい。
- スロット#3へ移動し、プローブ_03に必要なスタイラスをピックアップして下さい。
- クリアランス位置へ移動して下さい。
- 測定ルーチンを継続して下さい。

今度は、システムが、プローブ_03 (4mm x 20mm スタイラスを持つTP20) からプローブ_01 (3mm x 10mm スタイラスを持つTP2) へ再度切り換えが必要になった、とします。
システムは次のメッセージを出します:

- 測定プログラムを中止して下さい。
- MCR20の除去位置へ移動して下さい。
- スロット#2へ進み、スタイラス アセンブリをドロップオフして下さい。
- MCR20の除去位置に戻ってください。
- ACR1のクリアランス位置へ移動して下さい。
- スロット第2へ進み、TP20アセンブリを返却して下さい。
- そこから、スロット第1へ戻ってTP2アセンブリを取り上げてください（TP2には、既にスタイラスが添付済み）。
- ACR1の除去位置へ移動して下さい。
- 測定ルーチンを継続して下さい。

この例では、一つの TP20
プローブ本体しか必要としないことに注意してください。MCR20を用い、様々な測定要求に応じて、二つの異なるプローブ スタイラス アセンブリ間で切り換えを行うことができます。

SP25プローブ/スタイラス変更システム

SP25ラックは、他のラックと同一のプロシージャを持つ、拡張部品です。ここでの記述は、ARC1、及び、TP20ラックについて、であり、それから、SP25ラック
システムについての記述へと進みます。

ARC 1 ラックの理解

ACR1を使用する際は、システムはプローブヘッドとプローブボディーの間の速い接続を適用します。全てのACR１のスロットは等しく、スロット1にSP600が挿入されている場合は、プローブヘッドに直接接続します。スロット２にTP２を挿入する際はTP２にアダプターを備え付ける必要があります。（TP２０とTP２００のプローブシステム）

このコンフィギュレーションに留意しながらも、各スロットには一つのプローブ名の定義のみ必要とされます。技術的に、ACR 1
はプローブ交換機であり、ラック内の各プローブには、すでにスタイラスが取り付けられています。

以下のプローブを、ARC 1 ラックに割り当てる、とします: 「SP 600 」、「TP 2 」、「TP 20 」、及び、「TP 200 」。ARC 1 ラック内のスロットの定義は、以下のようになります:

スロット 1	スロット 2	スロット 3	スロット
SP600	TP2	TP20	TP200

TP 20 スタイラス変換機を持つARC 1 の理解

ACR1とTP20ラック（スタイラス変換機）を組み合わせたい場合、事態は少し複雑になります。ACR1は、TP600プローブ、とTP20プローブ本体間で切り換えを行います。ACR1
システムがTP20を取り上げると、MCR20ラックに向かい、それに適切なスタイラスを取り上げます。

TP20と共に使用する予定の、三つのプローブピンがあり、そして、SP600は、単一のプローブとして（スタイラス変更なし）用いられる、とします。

スロットの定義を行う時、SP600プローブを「SP600_1」、そして、各種のプロービングが取り付けられたTP20を「TP20_1」、「TP20_2」、及び「TP20_3」を名付けるのが望ましいかも知れません。

ACR1プローブ交換機内のスロットは、以下のように定義されます:

スロット 1	スロット 2	スロット 3	スロット 4
SP600	TP2	TP20_1	TP200
		TP20_2	
		TP20_3	

TP20スタイラス交換機内のスロットは、以下のように定義されます:

スロット 1	スロット	スロット 3	スロット 4
TP20_1	TP20_2	TP20_3	空

SP25ラック システムの理解

上記の論理をSP25ラック
システムに拡張可能です。このラックは２種類のプローブコンポーネントを収容可能です

。このうちの１種類はスロットが空でキャリブレートされ、もう１種類は挿入された状態でキャリブレートされます。

SP25ラック
システムは、以下のコンポーネントを使用するので、ここでの記述では、上記でのSP600, TP2, TP20, 及び、TP200への言及を忘れて下さい:

- SP25M
- SM25-x
- SH25-x

SP25Mシステムは様々なプローブピンの長さ／重さの５種類の異なるSM25のモジュールのどれにでも対応可能です。また、６番目のモジュールはTP20に使用できます。これらは全て同じSP25Mプローブボディーを使用します。

- SM25 - 1モジュール - このモジュールは、 SH25 - 1スタイラスホルダだけを受け付けます。それを20から50mmまでの長さのスタイラスに使用されます。
- SM25 - 2モジュール - このモジュールは、 SH25 - 2スタイラスホルダだけを受け付けます。それを50から105mmまでの長さのスタイラスに使用されます。
- SM25 - 3モジュール - このモジュールは、 SH25 - 3スタイラスホルダだけを受け付けます。それを120から200mmまでの長さのスタイラスに使用されます。
- SM25 - 4モジュール - このモジュールは、 SH25 - 4スタイラスホルダだけを受け付けます。それを220から400mmまでの長さのスタイラスに使用されます。
- SM25 - 5モジュール - このモジュールは、 SH25 - 5スタイラスホルダだけを受け付けます。それはSM25 - 2とほぼ同じ範囲のストレートスタイラス長をサポートしています。しかしながら、それは、垂直に取付された針(すなわち、針配置をクランクで動かす)の処理改善のために特に設計されています。クランクス探針の最大の長さは、それが接続されている探針ホルダーから下へどのくらい離れることかに依存します。最大のクランク針長さは、15mmの下で105 mmから80mmの下で20mmまで変化のほぼ円錐形の形を形成します。
- TM25 - 20モジュール - このモジュールは、 TP20タッチトリガープローブだけを受け入れることができますから、走査をサポートしていません。

上記のSM25 -
xモジュールのいずれかは、個々の接触プロービングだけでなく、スキャンすることができます。

複数プローブを持つSP25の例

お手持ちのSP25ラックに、常時、プローブ ヘッドの付いた、以下の6個のプローブ
アセンブリがある、とします:

P1	P2	P3	P4	P5	P6
SP25M	SP25M	SP25M	SP25M	SP25M	SP25M
SM25-1	SM25-1	SM25-2	SM25-3	TM25-20	TM25-20
SH25-1	SH25-1	SH25-2	SH25-3	TP20	TP20
2mm x 20mmスタイラス	4mm x 30mmスタイラス	6mm x 80mmスタイラス	8mm x 100mmスタイラス	2mm x 20mmスタイラス	4mm x 20mmスタイラス

各種のプローブ
コンフィギュレーションの要素を収容する、FCR25ラック内のスロットを定義して下さい。この最初の表は、スロットと、その中に収容された、前述のプローブ
コンフィギュレーションのコンポーネントを表示しています。

スロット 1	スロット 2	スロット 3	スロット 4	スロット 5	スロット 6
P1	P1	P2	P3	P4	P5*
P2					

詳しく述べると、これらのスロットは、以下のコンポーネントを収容しています:

スロット 1	スロット 2	スロット 3	スロット 4	スロット 5	スロット 6
SM25-1	SH25-1	SH25-1	SH25-2	SM35-3	TM25-20
	2mm x 20mmスタイラス	4mm x 20mmスタイラス	6mm x 80mmスタイラス	SH25-3	TP20*
				8mm x	2mm x

				100mmスタイラス	20mmスタイラス*

スロット1は、SM25-
1モジュールのみ収容しています。これは何の挿入も必要としません。このコンポーネントは直接SP25に接続され、スロット2にある2mmスタイラスの付いたSH25-1、
または、スロット3にある4mmスタイラスの付いたSH25-1の追加が必要です。

スロット2には、SH25-1スタイラス ホルダーと、それに付随の2mm x
20mmスタイラスがあります。当該スロットの物理的特性をこのコンポーネントに適用するには、スロットへの挿入は必要です。このコンポーネントは、SM25-
1モジュール（スロット1にある）を必要とします。SM25-1を接続すると、プローブ
アセンブリが完了します。

スロット3には、SH25-1スタイラス ホルダーと、それに付随の4mm x
30mmスタイラスがあります。当該スロットの物理的特性をこのコンポーネントに適用するには、スロットに差し込み具を入れる必要があります。このコンポーネントではSM25-
1モジュール（スロット1にあります）が必要です。SM25-1をピックアップすると、プローブ
アセンブルが完成します。

スロット4には、SH25-2スタイラス ホルダーと、それに付随の6mm x
80mmスタイラスがあります。これは何の挿入も必要としません。プローブへの取り付けがすむと、プローブ アセンブリが完了します。

スロット5には、SM25-3とSH25-3スタイラス ホルダーと、それに付随の8mm x
100mmスタイラスがあります。これは何の挿入も必要としません。プローブへの取り付けがすむと、プローブ アセンブリが完了します。

スロット6は、TM25-
20モジュールのみ収容します。これは差し込み具を必要としません。このコンポーネントはSP25 Mに直接つながります。

* 単一のスタイラスと共に用いられる時、TP20プローブ
モジュールとスタイラスは、スロット内でTM25-
20モジュールに接続が可能で、追加のラック
システムを必要としません。しかし、（この例のように）複数のプローブピンと共に用いられる時、スロット内のTM25-
20モジュールは他のコンポーネントに接続される必要はありません。ただし、特にTP20モジュール/スタイラス
コンビネーションを接続するためには、アダプタに付いた、追加のFCR25スロットの使用が必要です。この例の場合、追加の3ポートは以下のようになります:

スロット 7	スロット 8	スロット 9
P5	P6	空

スロット 7	スロット 8	スロット 9
TP20	TP20	空
2mm x 20mmスタイラス	4mm x 20mmスタイラス	

P1を使用中、CMMは既に接続されているコンポーネントを取り外します。その後、FCR25のスロット1にあるSM25-1を取り付け、さらに、同一ラックのスロット2にあるSH25-1を取り付けます。

P2を使用中、CMMは既に接続されているコンポーネントを取り外します。その後、FCR25のスロット1にあるSM25-1を取り付け、さらに、同一ラックのスロット3にあるSH25-1を取り付けます。

P3を使用中、CMMは既存のコンポーネントをドロップオフします。その後、スロット4にあるSM25-2とSH25-2のコンビネーションを取り付けます。これで、プローブアセンブリは完全です。

P4を使用中、CMMは既存のコンポーネントをドロップオフします。その後、スロット5にあるSM25-3とSH25-3のコンビネーションを取り付けます。これで、プローブアセンブリは完全です。

P5を使用中、CMMは既に接続されているコンポーネントを取り外します。その後、FCR25のスロット6にあるTM25-20本体を取り付け、さらに、FCR25のスロット7にあるTP20モジュール / スタイラス コンビネーションを取り付けます。

P6を使用中、CMMは既に接続されているコンポーネントを取り外します。その後、FCR25のスロット6にあるTM25-20本体を取り付け、さらに、FCR25のスロット8にあるTP20モジュール / スタイラス コンビネーションを取り付けます。

他のツール変換機とプローブ
アセンブリと同様に、コンポーネントは、取り付け時と反対の順序で取り外されます。

アクティブ プローブをロードする

[**オペレーション | アクティブなプローブをロード**]メニュー
オプションを選択すると、測定ルーチンが要求するアクティブなプローブがロードされます。学習モードにおいて、ロードされたプローブ ファイルを変更するためには、[**プローブ ユーティリティ**]ダイアログ ボックス ([**挿入 | ハードウェアの定義 | プローブ**])

を使用して下さい。[**プローブ 交換機の設定**]ダイアログ ボックス ([**編集 | 優先設定 | プローブ交換機**]では、使用される各スロットに対して適切なプローブ構成を定義することができます。その後、必要なプローブ構成の交換を測定機に指示するために、[**アクティブなプローブをロード**]オプションを使用することができます。

単一および複数のプローブチェンジャーを使用する実例

プローブチェンジャーはキネマの継ぎ目でコンポーネントを変更する機械的なラックシステムです。このドキュメントでは、校正後の同じ測定ルーチンで、単一および複数のプローブチェンジャーを使用する実例を示します。

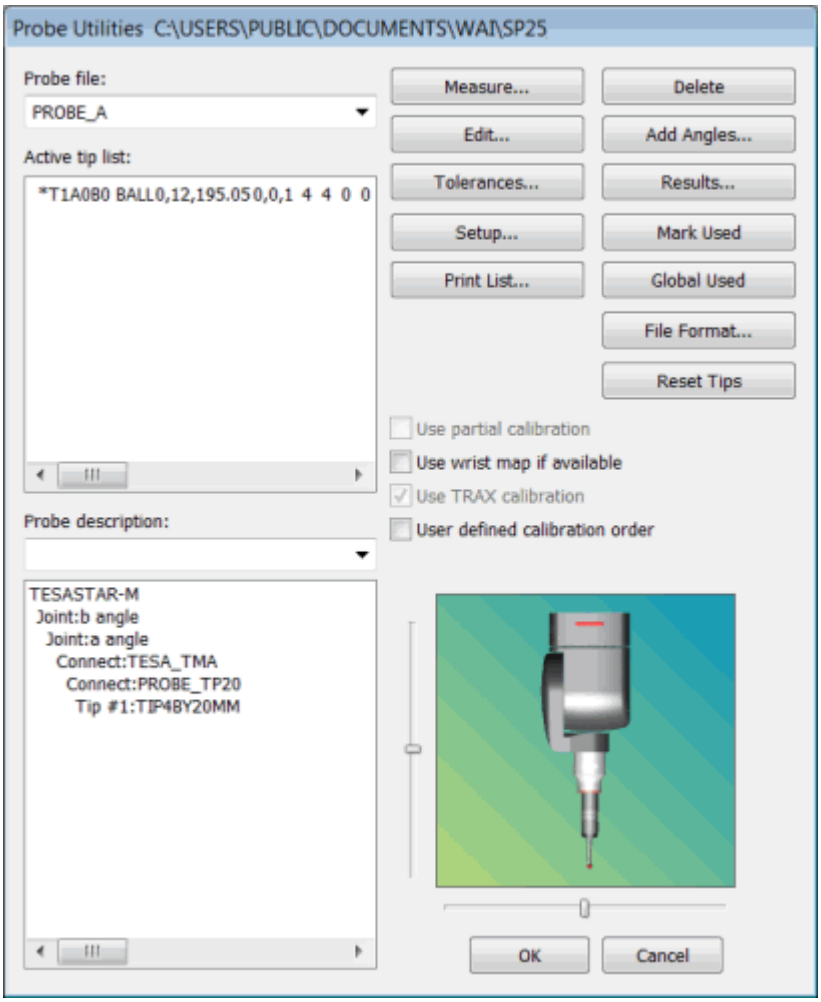
注記:
「ハードウェアの定義」の章にある「プローブ交換機の定義」トピックでは、プローブ交換機の設定および校正方法について順を追って説明します。また、グラフィックス表示ウィンドウ内で、既存のプローブ交換機を表示する方法も説明します。

その例は単一のプローブであるTP20およびLSPX1を使用します。また、これらの例においては、運動学的ジョイントはオートジョイントです。オートジョイントは、キーがこのカップリングの雄と雌の半分を係合するために使用される接続です。プローブラックのないシステムについては、手動でキーを使ってオペレーターは、自動ジョイントを係合するか、またははずします。ラック・システムについては、これは、キーを回すために、ラックとピニオン・スタイルの装置で行われます。

TP20プローブ位置の使用

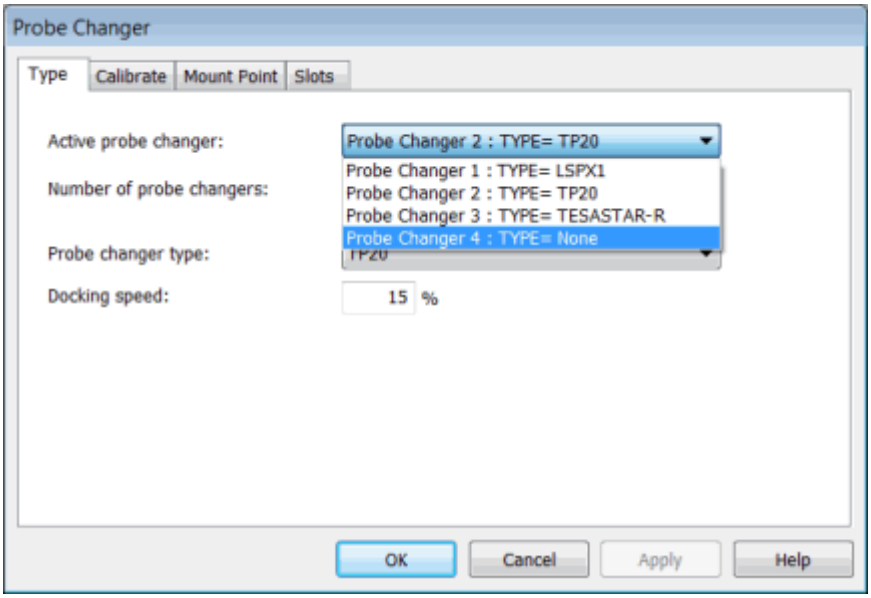
この例では、次のようにします：

> **プローブ ユーティリティ** ダイアログ ボックスで
> TP20のセットアップを行います。たとえば:



プローブユーティリティのダイアログボックスでTP20のセットアップ

[編集 | カスタム設定 | プローブ両替機]を選択します。**プローブチェンジャー]**ダイアログボックスの**[Type]タブ**が表示されます：

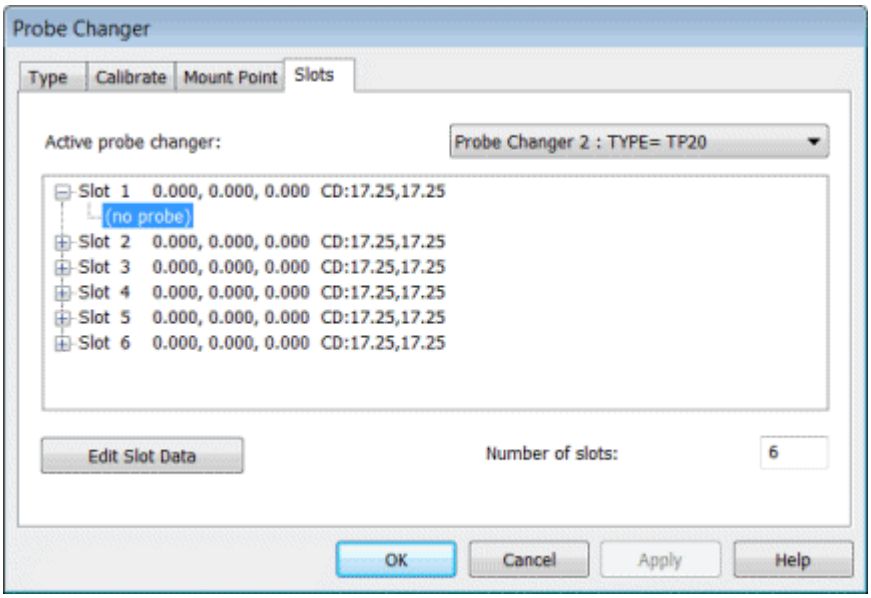


「プローブ交換機」ダイアログ ボックスの種類タブ

TP20プローブ用の異なるモジュールを利用して、それらを自動的にロードするには、プローブチェンジャーを使用します。このケースでは、それはアクティブのプローブチェンジャーのリストで、「TP20」ラックと呼ばれます。上の例は、TP20ラック（及びその他）がすでに構成されたことを示します。

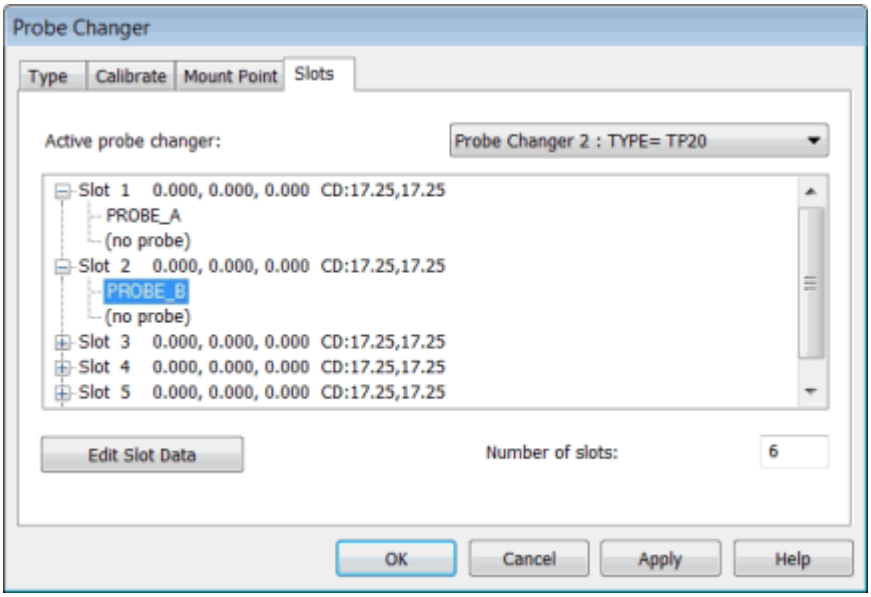
1. **TYPE= TP20**を選択します。

2. スロットタブを選択します：



スロットタブ

3. TP20プローブチェンジャーのスロットの内容を定義するスロット番号の左側にあるプラス記号（
+）をクリックし、表示されるリストから、各スロットにプローブファイルを割り当てます。（プローブファイルの割り当てのヘルプについては、
「各スロット用のプローブの構成を定義する」を参照してください）
使用する必要があるすべてのスロットを定義するまで、各スロットごとにこの手順を繰り返します。たとえば:



TP20の割り当てられたプローブのファイルが付いているスロットタブ

注：
1つだけのスロットに各プローブファイルを割り当てる必要があります。単一のプローブチェンジャーを使用しており、プローブのいずれかのファイルの名前が複数のスロットに表示されている場合は、 PC- DMISはご希望どおりに実行されないことがあります。

4. **適用** をクリックしてから、**OK**をクリックしてダイアログ ボックスを閉じます。

5. 測定ルーチン内のプローブを使用してください。これを行うには、ユーザの測定ルーチンに必要に応じてLOADPROBEコマンドを含める必要があります。PC-DMISこのコマンドに遭遇すると、マシンは以下を行います:

   - テーブル上の現在位置からプローブ両替機の固定点までの移行
   - 現在のプローブを放し、次に、新しいものを拾い上げることを始めます。
   - ラック用の固定点に返ります。

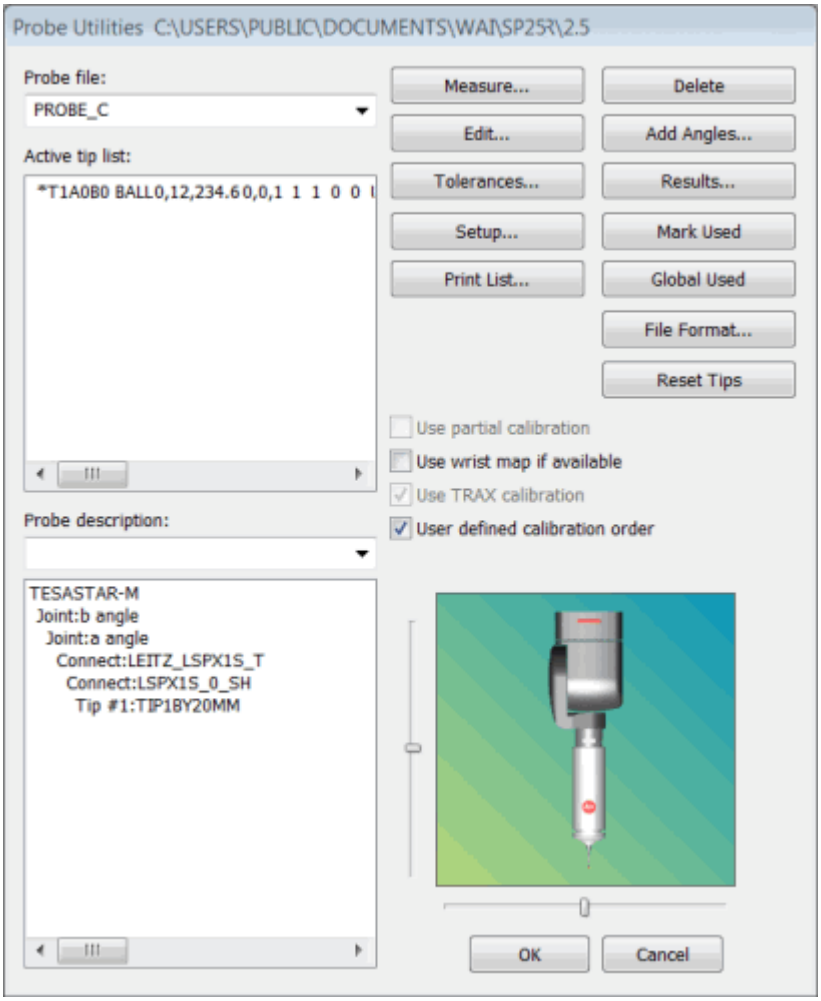
重要：測定ルーチンが測定ルーチン内の直前の位置、固定点、および次の位置の間で安全的に移動することを確保するために、点移動及びクリアランス面のコマンドを含む必要があります。これらのコマンドの詳細については、
「移動コマンドの挿入」を参照してください。

二つの異なるプローブの使用

2つの異なるプローブを持っており、同じ測定ルーチンでそれらを使用したいと仮定します。この例はTP20とLSPX1を使用します。LSPX1にも独自のプローブ両替機があります。

この例では、次のようにします：

プローブ ユーティリティ ダイアログ ボックスで
LSPX1のセットアップを行います。たとえば:

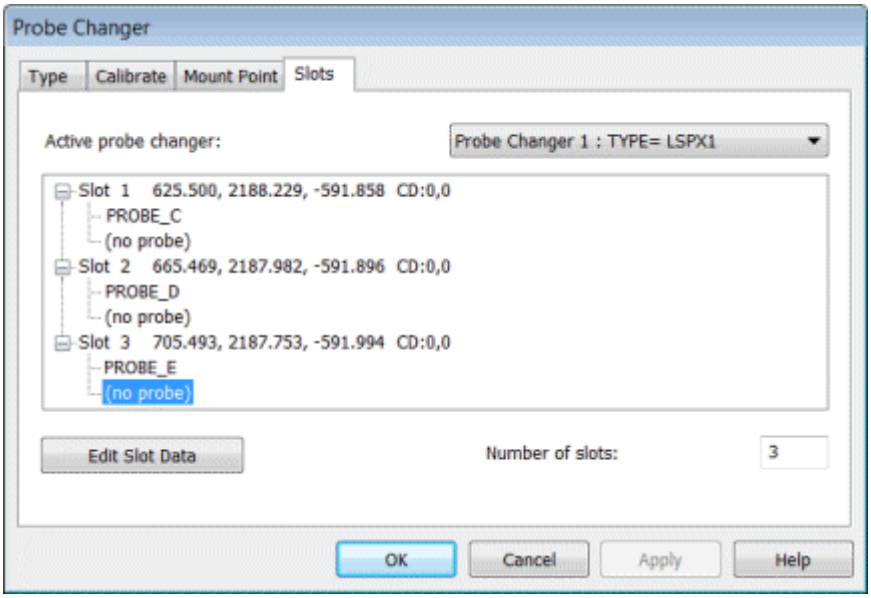


プローブ ユーティリティのダイアログ ボックスでLSPX1のセットアップ

[**編集 | カスタム設定 | プローブ両替機**]を選択します。**プローブ両替機**]ダイアログボックスの[種類]タブが表示されます：

TYPE= LSPX1を選択します。

LSPX1プローブチェンジャーのスロットの内容を定義する**スロット**のタブを選択します。たとえば:



LSPX1の割り当てられたプローブのファイルが付いているスロットタブ

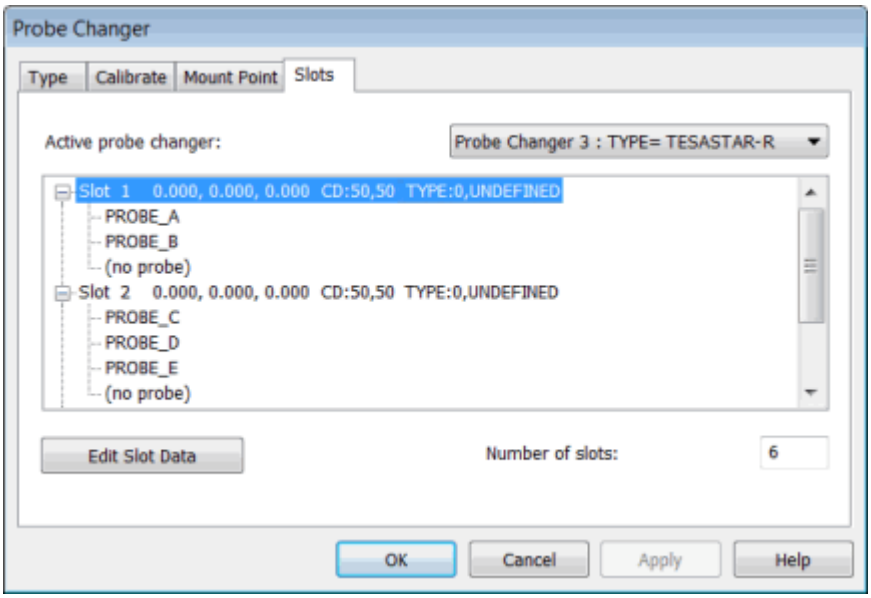
この時点で、
LSPX1ラックからの各プローブを使用して、それらを自動的にピックアップした測定ルーチンを持つことができます。ただし、
ユーザがTP20とLSPX1プローブの組み合わせを使用する測定ルーチンを希望すると想定します。転換が起こったとき、測定ルーチンは止まって、ユーザにプローブを外して、他のプローブを付けることを促します。それから、それは、落ちて、そのプローブに特有のモジュールを外し及び取り付けることを続けます。

このプロセスを自動化するには、第三の中間ラックを使用することができます。この例では、第3のラックはTesaStar - Rです。挑戦的な仕事はTesaStar - Rプローブチェンジャーのスロットの内容を定義することです。前の例では、
TP20プローブチェンジャーは2つの定義されたプローブを持っています:PROBE_AとPROBE_B。この例では、 LSPX1プローブチェンジャーは3定義されたプローブを持っています: PROBE_C 、PROBE_D 、およびPROBE_E。

TesaStar - Rは他の二つのプローブの個々のモジュールのいずれかを保持していませんが、それが単にプロー

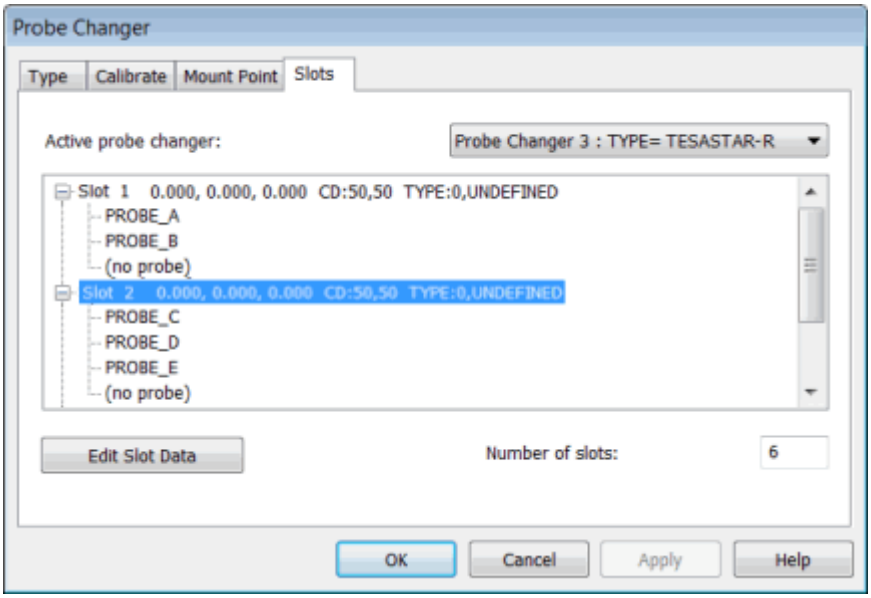
ブ本体だけを保持しています。本体が動関節から磁気プローブカップまでのプローブの上部です。TP20用プローブ本体は、 2つのモジュール（ PROBE_AとPROBE_B ）に関連付けられています。LSPX1用プローブ本体は、プローブの3つの他のモジュール（ PROBE_C 、 PROBE_D 、およびPROBE_E ）に関連付けられています。

したがって、下記の例で示すように、ユーザはプローブの２つは一つのスロットにして、残りの3つのプローブは他のスロットにすることを定義します：



最初のスロットがTP20プローブ本体に配置されたスロットタブ

このケースでは、 TP20のプローブ本体を保持するTesaStar - Rプローブチェンジャの最初のスロットが選択されました。LSPX1のプローブ本体を保持する二番目のスロットが選択されました。



LSPX1 プローブ本体用の第2のスロットを備えたスロット・タブ

物理的には、スロット内に一つだけのパーツがあります。論理的に、そのパーツは、複数のプローブ組立に関連付けられています。この例では、
TP20の本体は、2つの他のモジュールと一緒に使用され、 LSPX1プローブ本体は、
3つの他のプローブと共に使用されます。この例にスロットに示されるよりも多いエントリを持つことができます。この例は、単に複数のラックがどのように相互作用するかを説明することの目安です。

これについて考える一つの方法は下記の通りです：プローブ組立部品のいずれかの部品がそのスロットにある場合は、そのスロットの（プローブアセンブリ全体の）プローブのファイル名を選択する必要があります。これは、一つのプローブ組立部品がそのスロットに見出すことができるので、二つ以上のスロットで同一のプローブファイル名を検索することが可能です。

測定ルーチンが実行されて、PC - DMISがLOADPROBEコマンドが検出された場合、次の例は、PROBE_B（ TP20 ）がロードされて、次のPROBE_D （ LSPX1
）を使用する場合に何が起こるかの例を示します。

1. CMMは、
   TP20ラック用の固定点に移動し、PROBE_Bモジュールを放して、同じラック用の固定点に戻ります。

2. CMMはその後TesaStar -Rのラック用の固定点に移動し、 TP20本体を放します。

3. そこから、
   CMMはLSPX1プローブ本体をピックアップし、このラック用の固定点に戻ります。

4. CMMは、
   LSPX1ラック用の固定点に移動しPROBE_Dアセンブリをピックアップし、このラック用の固定点に戻ります。

5. CMMは、そこからのパーツの検査を続行します。

プローブとスロットが適切に設定されている場合、PC-DMISは、現在のプローブを卸して、新しいプローブをロードし、測定ルーチンの実行を続行します。このプロセスは、オペレータの介入を必要としません。

設定エラー

PC-DMISは現在のプローブをアンロードするか、またはご希望のように自動的にロードされるプローブをロードするいずれかにプロンプトが表示され、DCCの実行を停止した場合、構成エラーが発生した可能性があります。可能な原因は、以下の通り:

- 同じプローブは、あまりにも多くのスロットで定義され、 PC-DMISはそれに対処する方法を知らないかもしれません。
- 当該のプローブは、任意のスロットに割り当てられていません。
- 定義されているプローブのラックと互換性のないプローブが使用されています。

測定機インターフェースのセットアップ

このオプションは、オンライン モードで作動時にのみ利用可能です。

編集 | 優先設定 | 測定機インターフェース セットアップメニュー
オプションにより、使用中の特有の測定機インターフェース用の**測定機 オプション** ダイアログ ボックスが表示されます。当該ダイアログ ボックス上のインターフェース タブの内容は、インターフェース次第で非常に異なりますが、一般に、これらのタブには、以下のセットアップに関する説明があります:

- 測定機とプローブ ヘッドの通信
- メカニカル オフセット
- 軸線の方向性
- デバッグ情報

測定機インターフェース セットアップオプションは、オンライン モードで作動時にのみ利用可能です

注意: ほとんどの場合、このダイアログ ボックス内の値は変更するべきではありません。**メカニカル オフセット**エリアなど、このダイアログ ボックスの項目の中には、コントローラーのハードドライブに保存されている値を永久に上書きするものもあります。**測定機オプション**ダイアログ ボックスを、いつ、どのように使用するかについて、質問がある場合は、お近くのサービス担当にお尋ね下さい。

測定機オプションダイアログ
ボックスにあるパラメータについては、以下の測定機インターフェースに関する記述をご覧下さい:

Axila	LKドライバー	レニショー
Backtalk (B&S)*	LKRS232	Romer
ブライト	Manmiti	シャープ
DEA	Manmora	シェフィールド
ELM	Metrocom/Metromec	Tech80
Embboard (B&S)*	Metrolog	Wenzel
Faro	ミツトヨ	Zeiss
GOM	Mora	ZssGPIB
ヨハンセン	MZeizz	
ライカ	Numerex	
ライツ	Reflex	

*B&S = ブラウン＆シャープ

各種インターフェースのインストール/セットアップ方法に関する、さらに詳細な説明については、お手持ちのインストール文書（Machine_Interface_Installation_Manual.doc）を参照して下さい。

コントローラーからの工場設定を回復

Leitzインターフェースを使用する測定機において、**パラメータ設定**ダイアログ ボックス(**編集 | 優先設定 |**

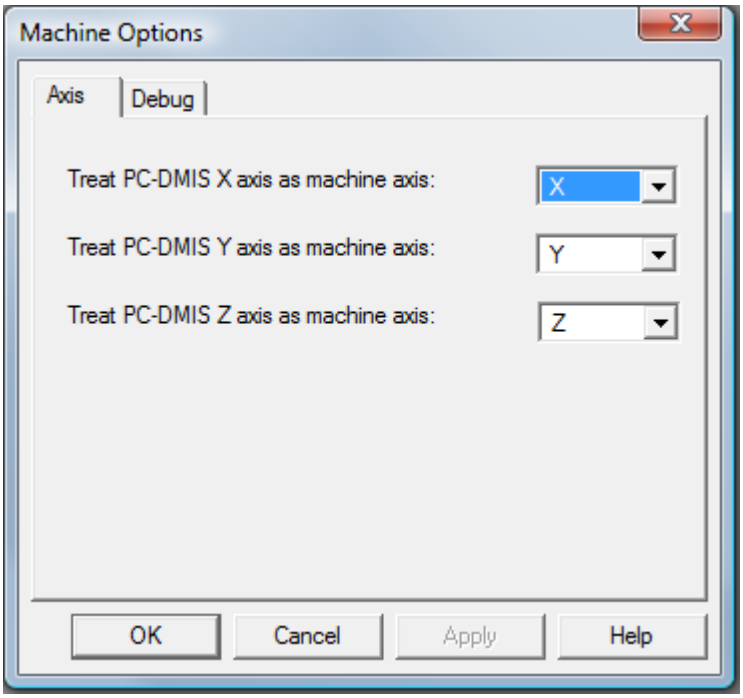
パラメータ)上のタブの一つにある**デフォルト**ボタンをクリックして、お手持ちのCMMの初期工場設定を保存している場合、以下の手続きによって、それらを回復することができます:

1. **測定機オプション**ダイアログ ボックス(**編集 | 優先設定 | 測定機インターフェース セットアップ**にアクセスして下さい。
2. 最初に表示されたタブから、**始動時に測定機デフォルト設定を読み込む**チェック ボックスを選択して下さい。これは、次回PC-DMISが始動した時に、CMMコントローラーにCMMのデフォルト設定を検索するよう、PC-DMISに指示します。
3. **OK** をクリックしてダイアログ ボックスを閉じます。

次回PC-DMISが作動した時、PC-DMIS設定エディタに保存されている数値が、CMMのコントローラーに保存されている初期工場設定値に置き換えられます。

付記:
コントローラーのハードドライブにおいて初期工場設定値が上書きされた場合には、このプロシージャで、その数値を回復することはできません。

測定機の軸線割り当て



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - 軸線タブ

機械オプションのダイアログ・ボックス(**編集|環境設定|機械インターフェースのセットアップ**)の**軸**タブは、X、YおよびZ軸の一覧を含んでいます。これらのドロップダウンリストを使用して、ドロップダウンリストにある測定機軸を適切な PC-DMIS 軸を割り当てます。

右側のドロップダウンリストの項目は、測定機の軸を表示します。次に、これらが左側の PC-DMIS の軸に割り当てられます。

警告: 定義する軸方向は右利き座標系を形成しなくてはなりません。

注意:
[軸線]タブのデフォルトを変更すると、測定機の体積測定補償が無効になる場合があります（コントローラー、及び、使用されている体積測定補償のタイプによる）。これらのオプションは、管理者権限だけで利用可能であり、さもないと無効になります。

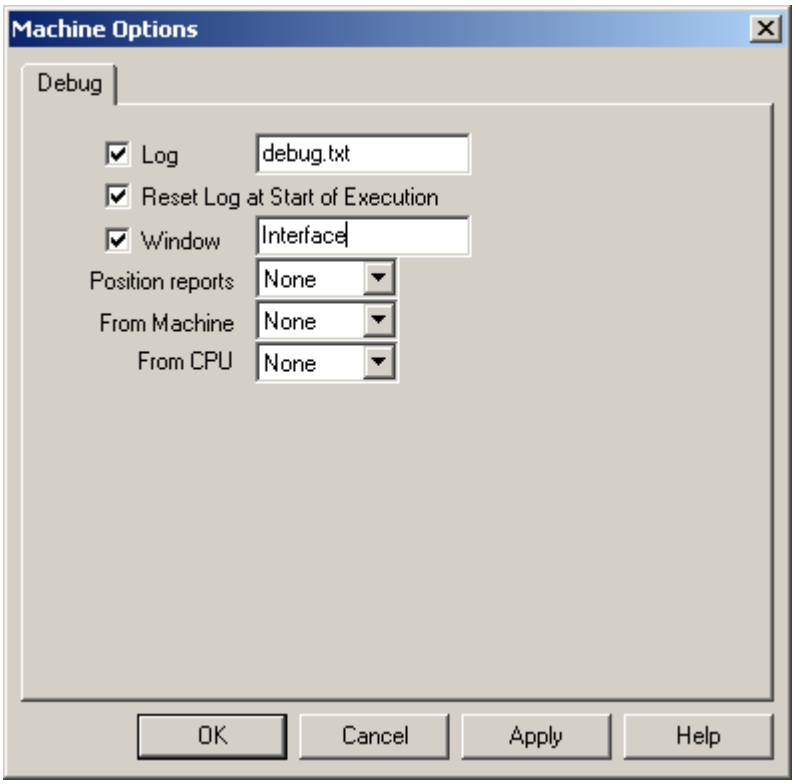
デバッグ ファイル作成

PC-DMISには、測定ルーチン実行中にPC-DMISとCMMの間で行われる全コミュニケーションを記録する、特別のテキストファイルを作成する能力があります。このファイルはデバッグファイルと呼ばれ、CMMが関与する特定の問題を解決するために、テクニカルサポートが使用します。

デバッグ ファイルには、PC-DMISがCMMに送ったコマンドすべて、受け取った応答すべて、及び、コントローラーによって作成されたエラー メッセージすべてが表示されます。

オンラインモードでCMMの作動の関与した問題が繰り返し起こる場合、以下のプロシージャに従い、デバッグ ファイルを作成することが可能です:

1. **測定機オプション**ダイアログ ボックスから(**編集 | 仕様 | 測定機インターフェースセットアップ**)、**デバッグ**タブを選択して下さい。



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - デバッグ タブ

2. **ログ**チェック ボックスを選択して下さい。

3. **ログ**チェック ボックスに隣接するボックス内で、デバッグ
ファイル名を選択して下さい。デフォルトによるファイル名は debug.txt
です。ご希望の場合には、当該ファイル名の前に完全な経路を付け、PC-DMISのデバッグ
ファイル送付先となるドライブとディレクトリを、特定することも可能です。デフォルト
では、PC-DMISがインストールされた先のディレクトリへ、PC-DMISは当該デバッグ
ファイルの書き込みを行います。

4. **適用する**そして**OK**をクリックして下さい。ダイアログ ボックスが閉じます。

5. お手持ちの測定ルーチンを実行し、エラーが発生した場合、ただちにPC-
DMISを閉じて下さい。

6. デバッグ ファイルがあるディレクトリに進み、当該デバッグ
ファイルの名称を変更して下さい。デバッグ
ファイルの名称変更を行わない場合、次回PC-DMISを始動すると、当該デバッグ
ファイルに記憶された既存の全データが自動的に上書きされます。

その後、当該デバッグ ファイル、測定ルーチン ファイル（.prg）,プローブ
ファイル（.prg）をその他の必要なファイルと共に、お客様のテクニカル
サポートへ送付して下さい。

新規のデバッグ ファイル開始

新規のデバッグ ファイルを開始し、現在のデータを消去するには、 **デバッグタブ**
から**実行の開始時にログをリセット** チェックボックスを選択します。PC-DMIS
は測定ルーチンの実行を開始するたびに、既存のデバッグファイルの内容を置き換えます。

実行開始時にログを再設定を選択解除すると、PC-
DMISは、既存ログの内容を消去するかわりに、既存のログ ファイルに記録を加えます。

追加のデバッグ オプション設定

記録されるデバッグ情報のタイプ、及び、その送付先についてコントロールが可能です。

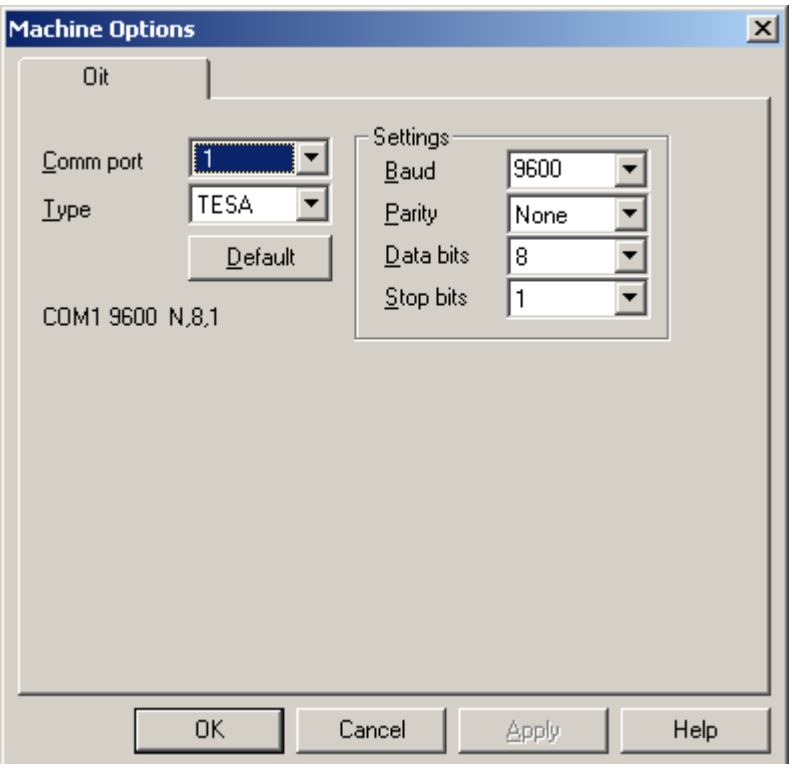
- **ウィンドウ**チェック
  ボックスをクリックして、ボックスの右側に送付先ウィンドウ名を記入してください。デバッグ情報は、レビューのためにそのウィンドウ内に表示されます。

- PC-DMISからのポジション レポートを記録する**ポジション**
  レポートの次に**なし**、**両方**、**記録**または**ウィンドウ**を特定して下さい。

- お客様の測定機からコンピューターへ送られた、デバッグ情報を記録する**測定機から**の次に**なし**、**両方**、**記録**または**ウィンドウ**を特定して下さい。すべてのインターフェースが、このオプションに対応しているわけではありません。

- お客様のコンピューターから測定機へ送られた、デバッグ情報を記録する**CPUから**の次に**なし**、**両方**、**記録**または**ウィンドウ**を特定して下さい。すべてのインターフェースが、このオプションに対応しているわけではありません。

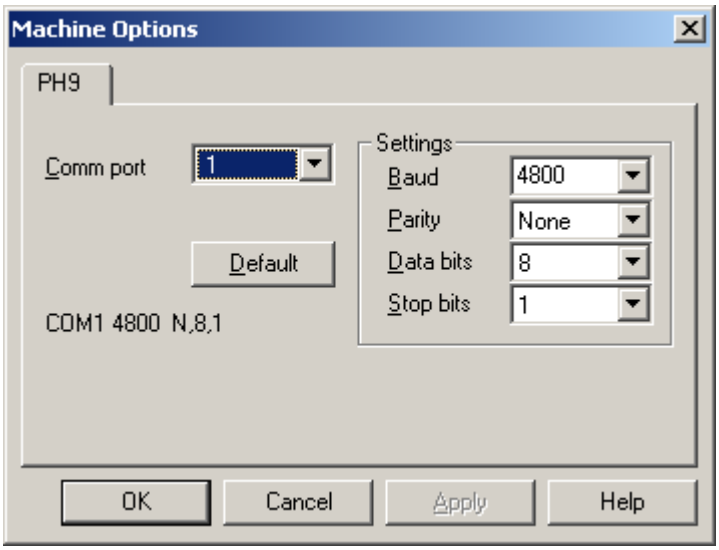
OIT 通信



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - OITタブ

OITタブを用いて、お手持ちのOITデバイスへのシリアル接続のコンフィギュレーションを行うことができます。お手持ちの通信ポート（COMポート）を選択し、COMポート設定を変更できます。お客様のCOMポート設定に関する説明については、お客様のコントローラーに付随の文書をチェックして下さい。利用可能なOITのタイプは、TESA、 VORNE、または、GEです。

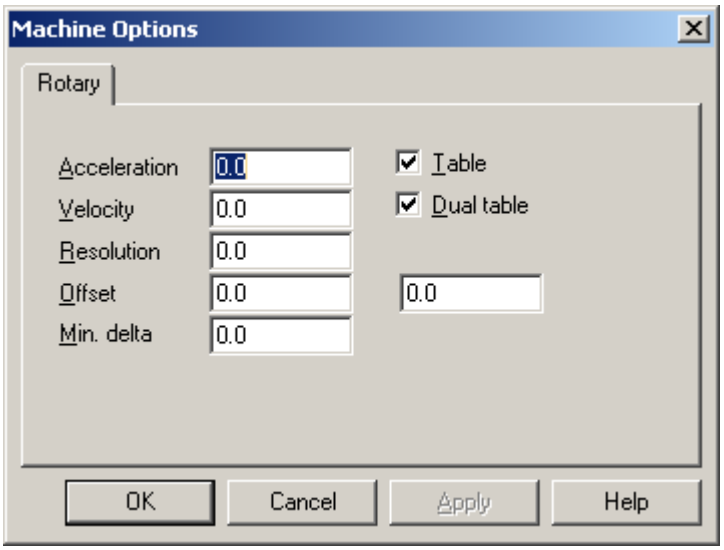
PH9通信



測定機オプション ダイアログ ボックス - PH9タブ

PH9タブを用いて、お手持ちのPH9デバイスへのシリアル接続のコンフィギュレーションを行うことができます。お手持ちの通信ポート（COMポート）を選択し、COMポート設定を変更できます。お客様のCOMポート設定に関する説明については、お客様のコントローラーに付随の文書をチェックして下さい。

回転テーブル設定



測定機オプション ダイアログ ボックス - 回転タブ

回転タブを用いて、お手持ちのインターフェース用に、回転テーブルのオプションのコンフィギュレーションを行うことができます。

加速-
このオプションは、回転テーブルの最高加速度です。通常、これらの数値は、コントローラーのコンフィギュレーションから読まれます。

速度-
このオプションは、回転テーブルの最高速度です。通常、この数値は、コントローラーから読まれます。

解像度-これは、回転テーブルを特定します。

オフセット -
お手持ちの回転テーブルの原点が、ゼロに位置付けられていないことがあります。テーブルが原点に戻った後で、それを真のゼロ位置に位置付けたい場合には、この値は、テーブルがホームポジションに着いた後で、回転する角度となります。オフセットの二番目の隣にあるボックスは、二つ目の回転テーブル用です。

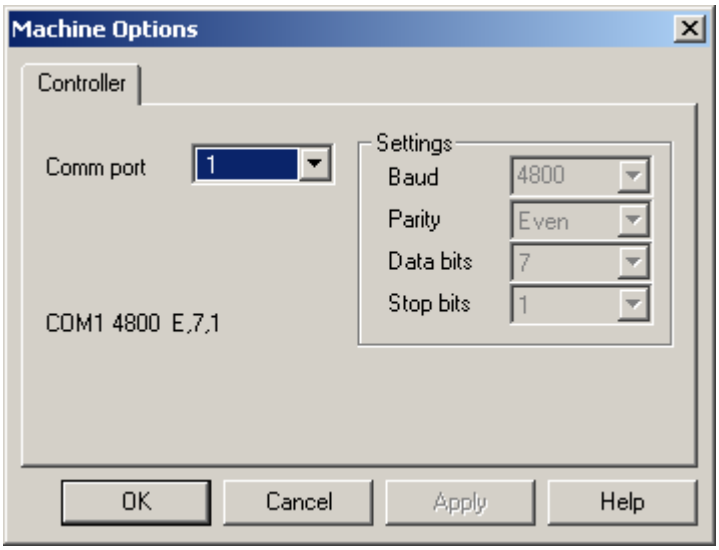
最低デルタ -
これは、その時点でのテーブル位置と新規に要求されるテーブル位置の、最低の差です。差がこの値を下回る場合、テーブル回転の要求は無視されます。

テーブル-
お手持ちの測定機に回転テーブルがある場合には、このオプションを選択してください。

二重テーブル -
お手持ちの測定機に二重回転テーブルがある場合には、このオプションを選択してください。

付記: 回転テーブル用のポートロックがプログラムされる必要があることに、注意してください。

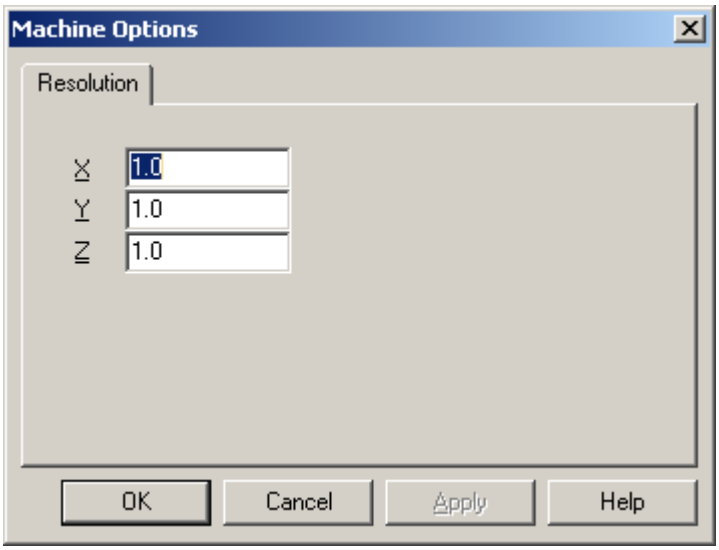
通信プロトコール設定



測定機オプション ダイアログ ボックス - コントローラー タブ

通信ポートまたは**コントローラー**タブを用いて、お手持ちのインターフェース用のへコントローラーに接続する、シリアル接続のコンフィギュレーションを行うことができます。お手持ちの通信ポート（COMポート）を選択し、COMポート設定を変更できます。お客様のCOMポート設定に関する説明については、お客様のコントローラーに付随の文書をチェックして下さい。

軸線のスケール係数の設定



測定機オプション ダイアログ ボックス - 解像度タブ

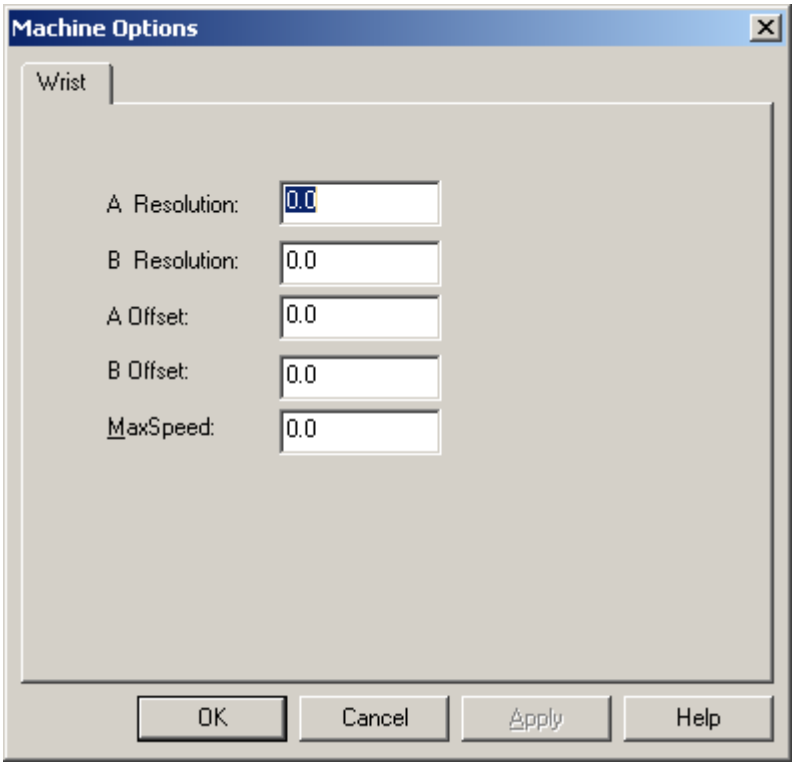
解像度タブを用いて、お手持ちの測定機の各軸線用に、スケール係数を指定することができます。スケール係数は、二つの理由から使用されます:

- コントローラーのいくつかは、実際の数字のスケール（例、637.24319876）で戻りませんが、数字だけ(例、63724319876）で戻ります。この場合、実際の数字のスケールを得るために、コントローラーから戻った数字だけのスケールは、1,000,000.0
の数字スケール係数で割る必要があります。

- これらの値は、お手持ちの測定機用の容積補償を行うためにもまた、使用される可能性があります。例えば、小さな線形エラーがある場合、10,000のかわりに9,998というスケール係数を使用することになります。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。数値を変えることはご希望でない結果を生むことにつながります。

リスト コンフィギュレーション



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - リスト タブ

関節タブを用いて、それぞれの**A** と**B**
解像度ボックスでは、お手持ちの関節デバイスのAとB軸線のスケール係数を指定することができます。リストリスト タブを用いて、それぞれのA & B 解像度ボックス内の、お手持ちのリストデバイスのA & B軸線のスケール係数を指定することができます。

A 及び**B オフセット** 値は、お手持ちの継続モーション
リストのホームポジションを「清算」するために用いられます。

最高速度ボックスは、お手持ちの継続モーション
リストの最高許容速度（パーセント）を表示します。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。数値を変えることはご希望でない結果を生むことにつながります。

軸インターフェース

注記: **Axila** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

これに関する記述は、PC-DMIS ポータブル 文書内にあります。

バック トーク インターフェイス

注記: **Backtalk** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

バック トークインターフェイスは、Man 3（外部シリアル
インターフェース）を伴った*ブラウン&シャープ*の手動測定機で使用されます。お手持ちの測定機に照明ペンが付いている場合、**設定エディタ**のMM2コントロールにおいて、コントローラーの設定を変更する必要があります。レジストリ
エントリーの変更に関する、より詳しい説明については、付録の「レジストリのエントリーを変更する」をご覧下さい。

お手持ちのバックトーク
コントローラーを設定するために、モニターをお客様のコントローラーにつなげる必要があります。PC-DMISの始動前に、backtalk.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

注記: Man3ボックスをお持ちで、かつ、Zレール マウスをご使用の場合、Zレール
マウスを不能にするために、照明ペンが必要です。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 |**
機械インターフェース設定）には、バックトーク
インターフェースに関して四つのタブがあります:

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**1**、**4800** Baud, **イーブン** parity、**7** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1.0, Y=1.0, Z=1.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ブライト インターフェース

ブライトインターフェースは、*ブライトミツトヨ ユーロC（ブライト）*測定機と共に使用されます。このインターフェースは、ミツトヨにより開発されたプロプライエタリ
カードを通して、コントローラーと通信します。このインストレーションが新規のPCを用いている場合、当該カードを元来の測定機から取り除き、新規の測定機に取り付ける必要があります。古いソフトウェアを、依然として、PC-
DMISと共に使用する必要がある場合、両方とも同一の測定機にインストールされなければいけません。

PC-DMISの始動前に、bright.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Brightインターフェースに関して四つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ライカ インターフェース

これに関する記述は、PC-DMIS ポータブル 文書内にあります。

DEAインターフェース

DEAインターフェースは *DEA GAMMA*と*新DEA*測定機 (Tutor P & B3Pシリーズ
コントローラー併用)、*マニュアル ミストラル*測定機（M内部カード
コントローラー併用）、及び、*スイフト マニュアル*測定機（「ホワイト ボックス」（AKA
CPM3）コントローラー併用）と共に使用されます。

お手持ちのPCに、Tutor for Windows が既にインストールされている場合には、PC-DMISが、WTUTOR.INI
ファイルの所在位置を見つけ、補償マップ、機械的オフセット、等に関する関連情報を抽出し、それに対応するオプションをレジストリに設定します。Tutor
が既にインストールされていないコンピューターに、インストールする場合には、レジストリにおいて、それに関連した変更を行う必要があります。

PC-DMISの始動前に、dea.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 |
機械インターフェース設定**）には、Deaインターフェースに関して七つのタブがあります:

DEAタブ

「DEA タブの使用」の項目を参照して下さい。

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**1**、**9600** Baud, **イーブン** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

PH9 タブ

「PH9通信」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **2**、**4800** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

リスト タブ

「リストのコンフィギュレーション」の項目を参照して下さい。デフォルト値は: A解像度 = 3600、B解像度 = 3600、Aオフセット = 0.0、B オフセット = 0.0、最大速度 = 100です。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

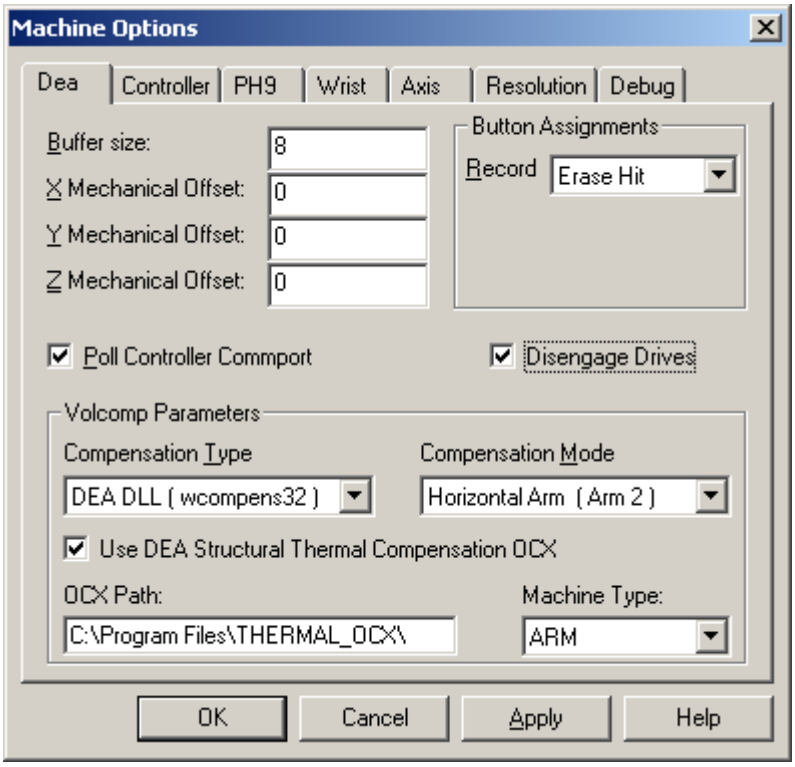
「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=10000.0, Y=10000.0, Z=10000.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

DEAタブの使用



測定機オプション ダイアログ ボックス - DEAタブ

Dea
タブを用いて、DEAインターフェースに特有の、以下の設定をコンフィギャーすることができます:

バッファのサイズ -
コントローラーのバッファへ一度に送付可能な動作の数を示します。測定機の中には、前もって送った動作が多すぎると、エラーになるものがあるので、これを減らすとうまくいくことがあります。しかしながら、この値を減らすと、システムの機能低下につながります。例えば、この値を1に設定すると、測定機が直前の動作を完了した後でのみ、次の動作コマンドを送ることになり、各コマンドが送られる前に、測定機が停止します。

XYZメカニカル オフセット- これらの値を用いて、お手持ちの測定機のメカニカル オフセットを設定できます。訓練を受けた技術士のみが、この調整を行うべきです。

ボタン割り当て -
記録ボタンを**直前のヒットを消去**または*終了/済み*キーとして作動するよう指定することが可能です。

コントローラー通信ポートの調査 - このチェック ボックスが作動可能とされている場合、PC-DMISは、通信の失敗を防ぐために、シリアル
ポートを定期的に調査します。通信上の問題がある場合にのみ、このチェックボックスをチェックして下さい。

ドライブ分離 -
DCC測定機を手動で使用するため、そのドライブを分離することが可能な場合、このチェックボックスをチェックして下さい。

補償の形式 - 以下の容積補償方法から選択することができます: 該当なし, DEA標準, DEA DLL (wcompens32), ASI, または ブラウン＆シャープ。

補償モード - 以下の補償モードから選択することができます: 標準測定機、 二重ドライブ、
水平アーム (アーム 1)、 または、 水平アーム (アーム 2).

DEA構造的温度補償OCXの使用 -
DEA構造的温度補償OCXを使用するためには、このオプションを選択して下さい。

OCXへの経路 - DEA構造的温度補償 OCXファイルへの経路を特定して下さい。

測定機のタイプ - 測定機のタイプを特定して下さい: アーム、または、ロボット

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。数値を変えることはご希望でない結果を生むことにつながります。

Elm インターフェース

Elmインターフェースは、*Elm*または*Starrett*インターフェース測定機を共に用いられます。このインターフェースは、API（Automated Precision
社）製造のPC配線盤と通信します。コントローラーへの直接の通信はすべて、この配線盤を通して行われます。PC-DMISのinterfac.dll は API dll (dccsim32.dll) と通信し、このAPI dllはPC-DMISディレクトリ内にある必要があります。

elmsetup.exe セットアップ プログラムは、PC-
DMISが使用する測定機のパラメータをコンフィギャーすることができます。このファイルは、elm setup.zip ファイル内のウィルコックス ftp サイトに位置します。このelmsetup.zip
ファイルはまた、セットアップ ユーティリティが必要とする、データ及びリソース
ファイルをも含んでいます。

PC-DMISの始動前に、elm.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

注記:API.INI ファイルは、Starrett社の測定機のコンフィギュレーションに使用できます。単にINI entry – INI_Filenameに適切なファイル名を追加して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Elmインターフェースに関して２つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

埋め込みボードインターフェース

注記: 埋め込みボードインターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

埋め込みボードインターフェースは、内部の埋め込みコントローラ カードを伴ったブラウン&シャープのマニュアル測定機と共に用いられます。これは、お客様のPC内にある、通常の大きさのカードで、そのアドレスが300hに設定されています。このアドレスが、当該システム内の別のボードに使用されていないことを確認する必要があります（あるネットワーク カードは、このアドレスを用いている）。

PC-DMISの始動前に、BSEMBED.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、埋め込みボードインターフェースに関して三つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1.0, Y=1.0, Z=1.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

FARO インターフェース

これに関する記述は、PC-DMIS ポータブル 文書内にあります。

GOMインターフェース

注記: **GOM** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

これに関する記述は、PC-DMIS ポータブル 文書内にあります。

ヨハンセン インターフェース

ヨハンセンインターフェースは、*ヨハンセン*測定機と共に使用されます。このインターフェースは、JoWinインストレーションの一部としてインストールされる、Protoソフトウェアを必要とします。PC-DMIS始動時に、Protoソフトウェアも始動され、PC-DMISが閉じると、Protoも閉じられます。Protoは、コントローラーと通信するための通信設定を検出します。

PC-DMISの始動前に、johansson.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Johanssonインターフェースに関して２つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ライツ インターフェース

ライツインターフェースは、ライツ プロトコールを利用するコントローラーでの使用を意図しています。これには、実際のライツ測定機、及び、ブラウン＆シャープの共通ファームウェア コントローラーに加え、ブラウン＆シャープ コントローラー（例えば、ライツ モードのシャープ32Z）が含まれます。このインターフェースを作動するには、オリジナル システムからの測定機パラメータ ファイルは必要ありません。

一部の新型コントローラーは、シリアル
ポートの代替として、TCP/IP通信を使用できます。このインターフェースは、どちらの方法にも対応しています。コントローラー通信コンフィギュレーションの検査、及び/または、変更は、一般的に、測定機用のサービス ユーティリティを用いて行われます。その後、PC-DMISのコンフィギュレーションは、コントローラーのコンフィギュレーションと合致するはずです。

PC-DMISの始動前に、leitz.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックスには、ライツ
インターフェースに関して八つのタブがあります:

ライツ プロトコール セットアップ タブ

「ライツ プロトコール セットアップ タブ」の項目を参照して下さい。

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

リスト タブ

「リストのコンフィギュレーション」の項目を参照して下さい。デフォルト値は次のとおりです: A 解像度 = 3600、B 解像度 = 3600、A オフセット = 0.0、B オフセット = 0.0、最大速度 = 100。

回転タブ

「回転テーブル設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は: 加速 = 0.0, 速度 = 20, 解像度 = N/A, オフセット = 0.0, 最低 デルタ = 0.5, テーブル = チェックなし, 及び 二重テーブル = N/A。

OITタブ

「OIT 通信」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **0**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。

パラメータ タブ

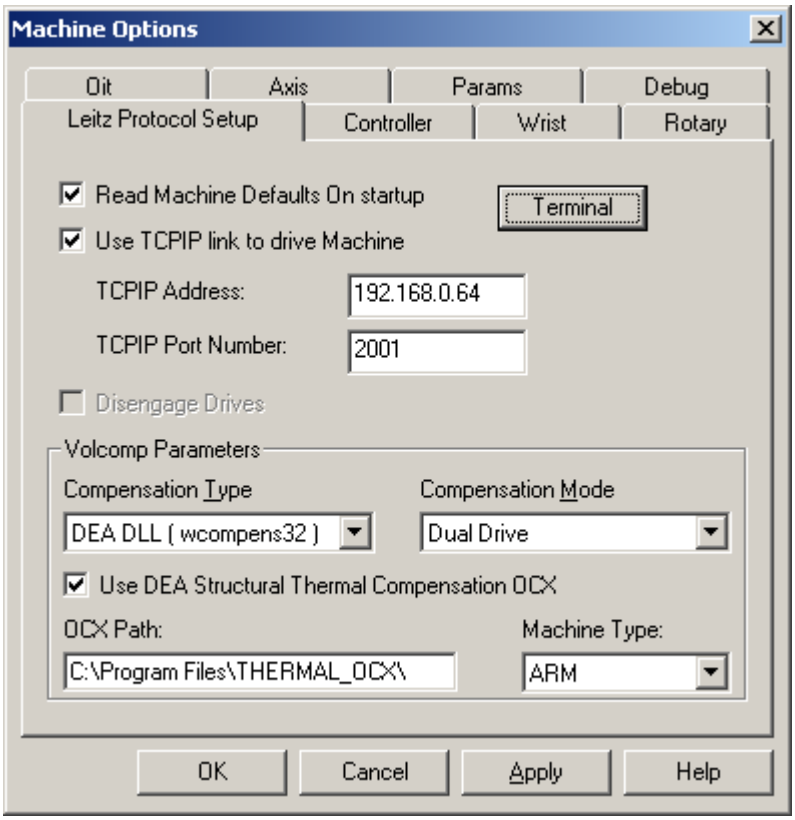
「ライツ パラメータ タブ」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ライツ プロトコール セットアップ タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - ライツ プロトコール セットアップ タブ

Dea
タブを用いて、DEAインターフェースに特有の、以下の設定をコンフィギャーすることができます:

始動時に測定機デフォルト設定を読む - この チェック ボックスがチェックされている場合、PC-DMISは、次回PC-DMISが始動した時に、CMMコントローラーにCMMのデフォルト設定を尋ねます。次回PC-DMISが作動した時、PC-DMIS設定エディタに保存されている数値が、CMMのコントローラーに保存されている初期工場設定値に置き換えられます。**付記:**
コントローラーのハードドライブにおいて初期工場設定値が上書きされた場合には、このプロシージャで、その数値を回復することはできません。

測定機操作に**TCPIP**使用 -
お手持ちのコントローラーに接続するために、TCP/IPを使用している場合、このオプションを選択して下さい。

TCPIP アドレス - 測定機コントローラの TCP/IP アドレスを指定します - これは測定機 (CMM コントローラ) 自身の IP アドレスです。

TCPIP ポート番号 -
コントローラーが聞くようコンフィギャーされた、ポート番号を特定して下さい。通常、この番号はポート2001です。

端末ボタン -
このボタンをクリックすると、TCPIPの設定に基づいた、お手持ちのコントローラーとの、端末間通信セッションが開かれます。

ドライブ分離 -
DCC測定機を手動で使用するため、そのドライブを分離することが可能な場合、このチェックボックスをチェックして下さい。

補償の形式 - 以下の容積補償方法から選択することができます: 該当なし, DEA標準, DEA DLL (wcompens32), ASI, または ブラウン＆シャープ。

補償モード - 以下の補償モードから選択することができます: 標準測定機、 二重ドライブ、水平アーム (アーム 1)、 または、 水平アーム (アーム 2).

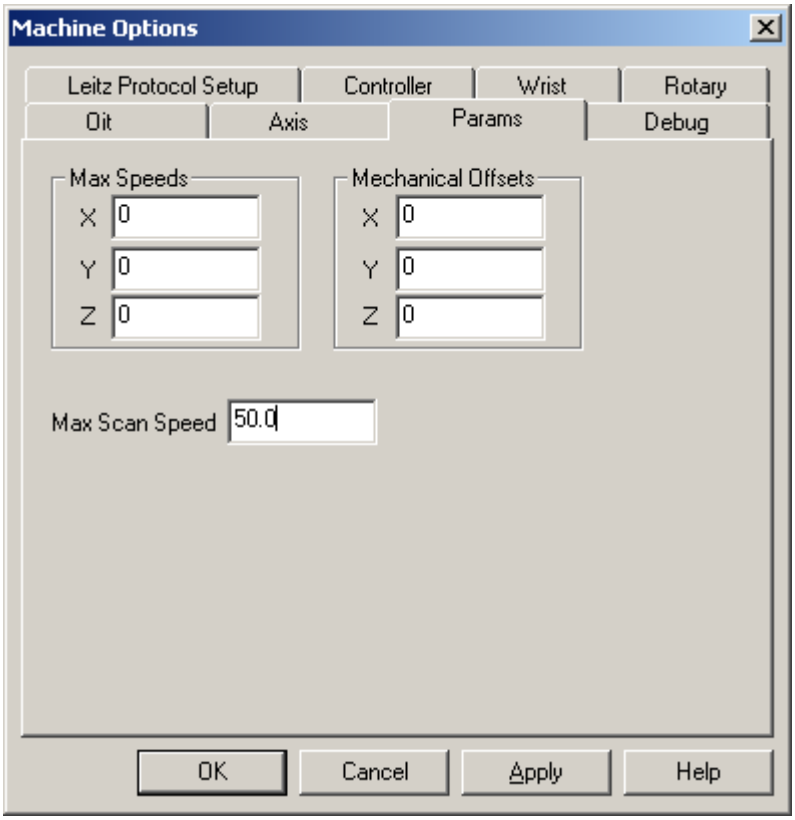
DEA構造的温度補償OCXの使用 -
DEA構造的温度補償OCXを使用するためには、このオプションを選択して下さい。

OCXへの経路 - DEA構造的温度補償 OCXファイルへの経路を特定して下さい。

測定機のタイプ - 測定機のタイプを特定して下さい: アーム、または、ロボット

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

ライツ パラメータ タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - パラメータ タブ

最大速度 -
これらの値はX、Y、およびZ軸に沿った最大速度を表します。通常、これらの値はコントローラーが読み取ります。

機械のオフセット -
これらの値を用いて、お手持ちの測定機のXYZ軸方向のオフセットを設定できます。通常、このインターフェースを介してコントローラー自体の体積補償が実行されます。いかなる場合においても、(0,0,0)以外のプローブの基準点を要するように設定されている場合、値はこれらのオフセットから取得可能です。

最高スキャン速度 -
この値は、許容されるスキャンの最高速度を設定します。この値は、SP600プローブまたはWAB光学プローブ等を使用したアナログスキャンにのみ使用されます。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

LKドライバー インターフェース

注記: LK インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

LKドライバーインターフェースは、*LK3000*、または*LK2000*コントローラーを持つ、*LK*測定機と共に使用されます。共通ドライバー
ソフトウェアは、LKから直接入手されなければなりません。このインターフェイスを利用するPC-DMISインターフェースのインストール/使用に先立って、当該ソフトウェアがインストール、及び、コンフィギャーされる必要があります。共通ドライバーDLL自体は、ドライバーのバージョン次第で、LKCMMDRV53.DLLに類似の名称を持ちます。この他にも、LKがドライバーと共に提供するDLL関連のものがあり、それらはドライバーの適切な作動に必要なものです。PC-DMISインターフェースと共に使用できるバージョンのうちで、最も初期のものは、LKCMM21.DLLです。初期のバージョンには、互換性がありません。

PC-DMISの始動前に、lkdriver.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、LKDriverインターフェースに関して２つのタブがあります:

LKドライバー タブ

「LKドライバー タブ」の項目を参照して下さい。

軸線タブ

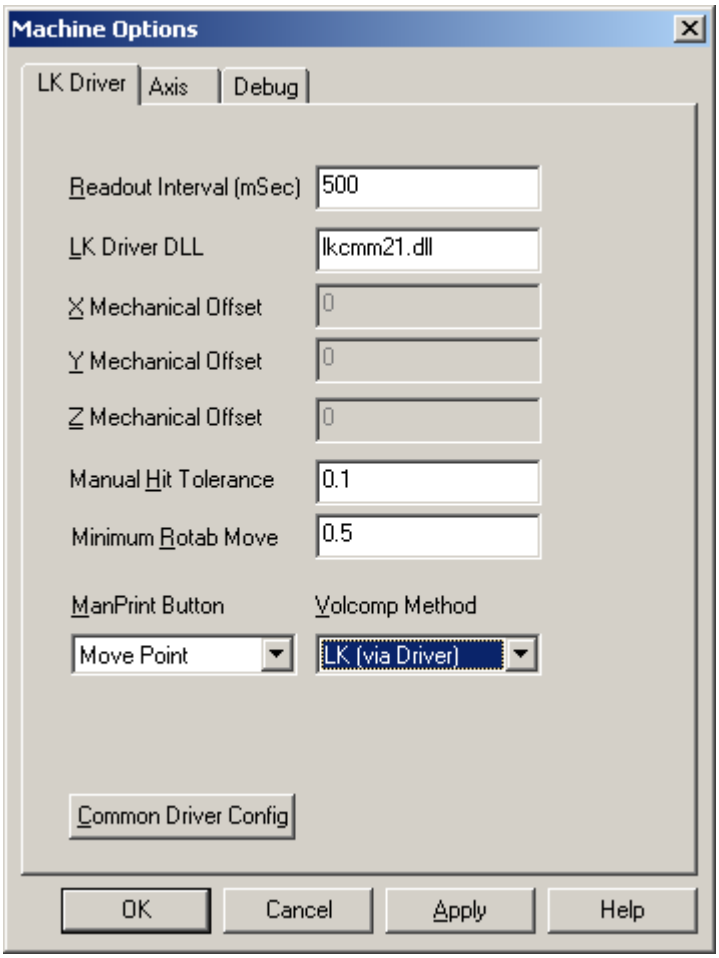
「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

LKドライバー タブ



測定機オプション ダイアログ ボックス - LK ドライバー タブ

LKドライバー タブを用いて、LKドライバー特有のパラメータを変更することができます。

解読間隔（mSec） -
これによって、解読モードで位置の読み取り情報が更新される頻度を決定できます。この値は、千分の一秒についての整数値です。デフォルト設定値は、500ミリセコンド（つまり、二分の一秒）です。

LKドライバーDLL - これは、PC-DMISが使用する、共通ドライバーDLLのファイル名を特定します。これは、LKが新バージョンのドライバーをリリースすると、後で変更する可能性があります。

XYZメカニカル オフセット - これらの値を用いて、お手持ちの測定機のXYZ軸線のメカニカルオフセットを設定できます。**容積補償**がASIに設定されている時のみ、これらの値を編集することが可能です。

手動ヒット誤差 -
この値は、真の手動ヒットを行った場合と手動印刷ボタンを押した場合の区別に用いられます。手動印刷ボタンを押した場合が、手動ヒットを行った場合と頻繁に間違われる時には、この値を増加してみてください。手動ヒットを行った場合が、手動印刷ボタンを押した場合（終了キーを押したのと同じ）と頻繁に間違われる時には、この値を減少してみてください。付記:
手動印刷ボタンを終了キーとして使用する場合、ボタンが押される時CMMの動作は停止している必要があります。CMMが動作中であれば、ほとんど確実に、手動ヒットと解釈されます。

回転テーブルの最小移動 -
これは、回転テーブル移動のカットオフ値を設定します。新規に要求されたテーブル角が、現在の角度を差し引いた上で、この値を超えていない場合、この動作要求は無視されます。

手動印刷ボタン - このオプションにより、必要に応じて、ジョグボックス上の手動印刷キーをPC-DMISの機能に指定することができます。利用可能なオプションは、DONE (終了キー)、
動作ポイント(動作を保存)、 または ヒット消去(直前のヒットを消去)です。

注記:
このインターフェースについては、「ヒット」モードの場合にのみ機能の割り当てが可能です。インターフェースを「解読モード」に切り換え中にこのボタンを押すと、手動印刷ボタンの設定に関わらず、不適切な接触であると解釈されます。

容積補償方法 - ドライバーからの容積補償を使用するために、**LK (ドライバーによる)**
を選択してください。または、これらの補償値を[**測定機のXYZオフセット**]ボックスに割り当てるためには、**ASI**を選択してください。

共通ドライバー コンフィギュレーション ボタン - このボタンは、LKドライバー
コンフィギュレーション アプリケーションを起動します。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

LKRS232インターフェース

注記: **LK** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

LKRS232 インターフェースは次の異なる8つのLKコントローラーとともに使用されます:
Cupeシリアル、Cupe GPIB、マイクロン
ドライブ、LK3000、LK2000/2002/2000+、LK4000、ACTおよびAIM。LK-3000は、LK-2000とLK-4000より古いバージョンです。ACTは2000シリーズの後続版でありAIMは4000の後続版です。

PC-DMISの始動前に、lkrs232.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ
ボックスには、LKRS232インターフェースに関して七つのタブがあります:

LK 直接タブ

「LK直接タブ」の項目を参照して下さい。

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルト設定値は X=10000.000000, Y=10000.000000, Z=10000.000000。

回転タブ

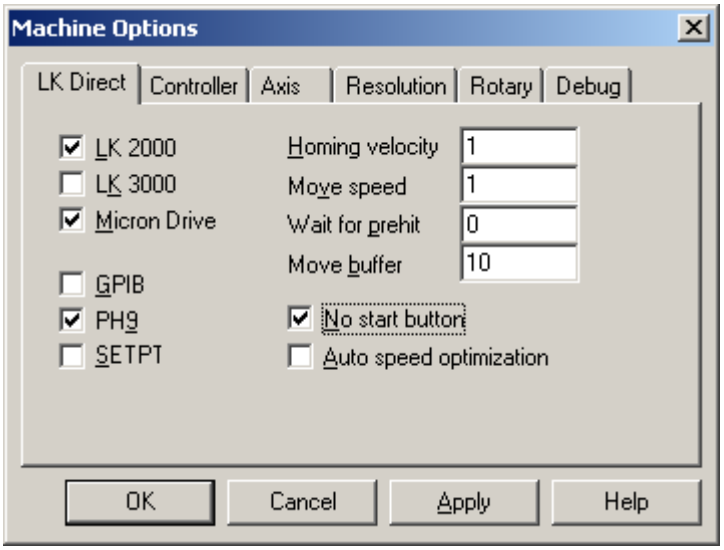
「回転テーブル設定」の項目を参照して下さい。デフォルト設定値は: 加速 = 0.0, 速度 = 0.0, 解像度 = 10000, オフセット = 0.000000, オフセット2 = 0.000000, 最低 デルタ = 0.5, テーブル = チェックなし, 及び 二重テーブル = チェックなし。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

LK 直接タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - LK 直接タブ

LK直接タブには、お客様のLKRS232インターフェース専用の設定が用意されています。

LK 2000 -
コントローラーがLK2000タイプのものである場合には、このオプションを選択することが必要です。

LK 3000 -
コントローラーがLK3000タイプのものである場合には、このオプションを選択することが必要です。LK3000オプションを選択する場合には、LK2000をも選択する必要があります。

ミクロン ドライブ - このコントローラーがミクロン
ドライブである場合、このオプションを選択することが必要です。**付記:** ミクロン ドライブ
コントローラーは、GPIB通信を使用しません。

GPIB -
お手持ちのコントローラーが、通信用にGPIBプロトコルを使用する場合、このオプションを選択して下さい。

PH9 - PH9をご使用の場合には、このオプションを選択して下さい。

SETPT -
測定機がヒットの登録を行わない場合、このオプションの選択が好ましいかもしれません。

ホームポジションへの速度 -
この値は、ホームポジションへの移動速度を設定します。測定機が、ホームポジションに到達する前に、限界速度に達する場合には、この値を減らし、コントローラーのスイッチを切り、再度試してください。この値が正しく設定されている時、測定機は限界速度に達し、その後、各軸線のホームポジションに到達します。デフォルト設定値は1です。

移動速度 - この値は、全体の移動速度を設定します。PC-DMISで速度を遅く設定したにもかかわらず移動速度が速すぎる場合には、この値を減らしてください。デフォルト値は1.00000です。

ヒット前の待ち時間 - この値は、０のままであるべきです。

動作バッファ - コントローラーのバッファへ一度に送付可能な動作の数を示します。測定機の中には、前もって送付した動作が多すぎると、エラーになるものがあるので、動作送付数を減らしてください。しかしながら、この値を減らすと、システムの機能低下につながります。例えば、この値を1に設定すると、測定機が直前の動作を完了した後でのみ、次の動作コマンドを送ることになり、各コマンドが送られる前に、測定機が停止します。

スタート ボタンなし - コントローラー（または、ジョグボックス）にマスター スタートボタンがない場合、このオプションを選択して下さい。

自動速度最適化 - あるLKコントローラーは、自動速度最適化に対応しており、コントローラーのこの特徴は、各動作に見合う、それぞれの最高速度で各軸線を操作します。お手持ちのコントローラーが、この機能に対応している場合、このオプションを選択することが可能です。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

Manmitiインターフェース

注記: **Manmiti** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

Manmiti インターフェースは、目盛りに接続されたMAG-1、 MAG-2、または、MAG-3コントローラーを伴う、*ミツトヨ手動*測定機と共に用いられます。これは、GPIBインターフェースです。

PC-DMISの始動前に、manmiti.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Manmitインターフェースに関して２つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Manmoraインターフェース

注記: **Manmora** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

Manmoraインターフェースは、*Mora*手動測定機と共に用いられます。この測定機には、幾つかのコントロール/セットアップ/送付
オプションが利用可能で、XYZ解読機能を持つ、GEMODEKタイプのMR01計数器ボックスが付随しています。コンフィギュレーション及びテストに関する、より詳しい説明については、MIIMを参照して下さい。

PC-DMISの始動前に、Manmora.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Manmoraインターフェースに関して四つのタブがあります:

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**2** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1.0, Y=1.0, Z=1.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Metrocom / Metromecインターフェース

注記: **Metrocom** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

Metrocom インターフェースは、*Metrocom*、*Metromec* (Metrocom S V2 & V3付き)、及び、旧式の*Wenzel* (Metromecエミュレーター付きのWenzel 2000)
測定機と共に使用されます。PC-

DMISが正常に作動するためには、Metrocomソフトウェアからの初期始動ファイル（METROCON.DAT）が、PC-DMISのディレクトリにコピーされる必要があります。

旧式のWenzel測定機（例えば、MetrocomSコントローラー付きの）は、METROCON.DATファイルさえあれば、作動します。しかしながら、新しいWenzel WPシリーズのコントローラーを使用している場合には、MetroSoftディレクトリからの、以下の四つのファイルがコピーされていなければなりません: WPMACH.PMC、 WPSW.PMC、 WPDAT.PMC、 及び、 WPGO.PMC

PC-DMISの始動前に、METROcom.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Metrocomインターフェースに関して２つのタブがあります:

Metromec タブ

「Metromec タブ」の項目を参照して下さい。

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**38400** Baud、**No** parity、**7** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

PH9 タブ

「PH9通信」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**38400** Baud、**No** parity、**7** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

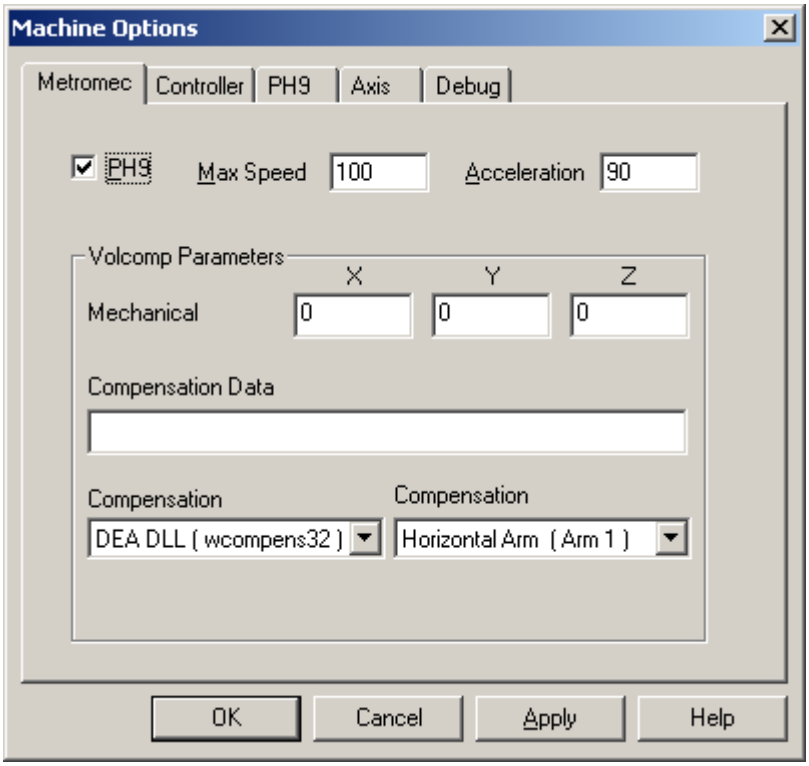
「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Metromec タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - Metromec タブ

Metromecタブを用いて、Metromecインターフェース用の、以下の設定をコンフィギャーすることができます:

PH9 - PH9をご使用の場合には、このオプションを選択して下さい。

最高速度 - このオプションは、お手持ちのCMMの最高速度を設定します。

加速 - このオプションは、お手持ちのCMMの最高加速度を設定します。

XYZメカニカル オフセット- これらの値を用いて、お手持ちの測定機のメカニカル
オフセットを設定できます。訓練を受けた技術士のみが、この調整を行うべきです。

補償データ - DEA補償形式を使用している場合、補償データ
ファイル（通常、compens.dat）は、このボックス内で特定されます。新規のDEA補償形式を使用している場合には、三つのテキスト ファイルがPC-
DMISディレクトリ内に存在する必要があります: FZYFILE.TXT, RCXFILE.TXT, 及び
RMXFILE.TXT。

補償の形式 - 以下の容積補償方法から選択してください: NONE、 DEA標準、 または、DEA DLL (wcompens32）。

補償モード - DEA DLL (wcompens32)
補償形式に対応する、以下の補償モードから選択することができます: 標準測定機、水平アーム (アーム 1)、または、水平アーム (アーム 2)。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

メトロログ インターフェース

Metrologインターフェースは*Metrologic* コントローラーとともに使用されます。PC-DMISでは、Metrologicコントローラーを駆動するモードは2つあります。

- *第*一のモードは、メトロロジック社発行のMTDIAL.DLLファイルを通して実行されます。このDLLは、メトロロジック社を通してのみ入手できる、別のポートロックを必要とします。このモードでは、CMM操作のために、MTDIAL.DLL内の機能を呼び出します。容積補償のすべても、当該DLL内で行われます。DLLは、指定された通信ポートに話しかけ、直接CMMと通信を行います。

- メトロジック社コントローラーを駆動する*第*2のモードは、MTDIAL.DLLを迂回し、直接通信ポートを通して行われます。このモードでは、メトロジック社発行の別のポートロックは必要ではありません。PC-DMISは、指定の通信ポートを通して、直接コントローラーと通信します。
  容積補償は以下の3つのフォーマットで提供されます。1) DEA Tutor フォーマット、2) Wcompens32.dll フォーマット、3)BNS comp.dat
  フォーマット。オプション１と２は、通常、DEAコントローラー上で使用されます。オプション３は、通常、Excel
  CMM上で使用されます。第1モードを用いる唯一の理由は、既存のCMM内に既に存在する可能性がある、メトロジックの容積補償を利用することです。

PC-DMISの始動前に、etrolog.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Metrologインターフェースに関して２つのタブがあります:

通信タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**1**、**9600** Baud, **イーブン** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ミツトヨ インターフェース

注記: **Mitutoyo GPIB** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

ミツトヨインターフェースはミツトヨ測定機に使用されます。これはGPIBインターフェースであり、オリジナルのミツトヨシステムから測定機のパラメーターファイルは必要ありません。ミツトヨはこれらの測定機を機械的に精確に考慮してるので、元のソフトウェア補償も行いません。ただし、いくつかの補償方法はサポートします。

これらの測定機を用いて、手動ヒットを行うには、ジョグボックスの「MEAS」ボタンを押す必要があります。

注記:
PH9,またはPH10を持つ測定機において、通常の測定機始動の順序には、特にヘッドを（一般的に、0,0
へ）位置付けるための手動コントロールの使用が含まれています。これによって、PH9/10コントローラーとヘッド自体の間の通信すべての初期化と適切な作動が保証されます。たとえそれが0,0をまず最初に読み、そして、ユーザは0,0までそれを置きたいとしても、これはまだされなければなりません。ハンドセットを通してのヘッドの初期化に失敗すると、DCC回転の失敗につながります（全く回転しない、あるいは回転終了時にエラー表示される可能性があります）。

PC-DMISの始動前に、mitutoyo.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Mitutoyoインターフェースに関して四つのタブがあります:

インターフェース タブ

「[ミツトヨ インターフェース]タブ」トピックを参照して下さい。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

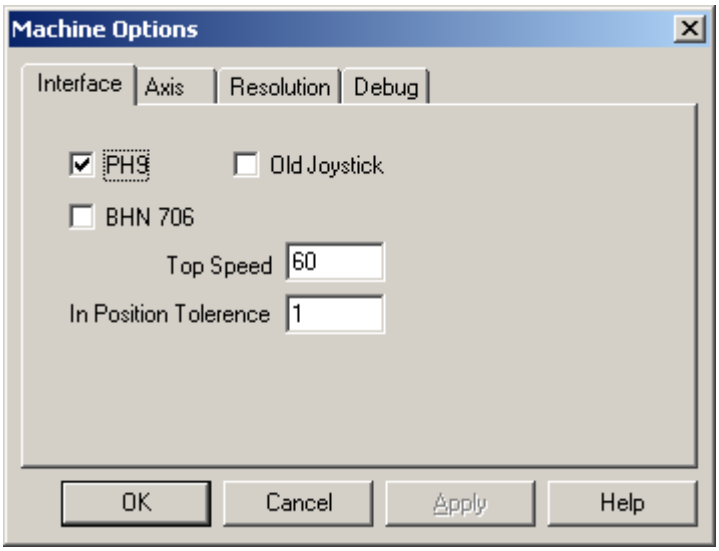
「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=10000.0, Y=10000.0, Z=10000.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

[ミツトヨ インターフェース]タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - インターフェース タブ

インターフェースタブを用いて、ミツトヨ
インターフェース用の、以下の設定をコンフィギャーすることができます:

PH9 - PH9をご使用の場合には、このオプションを選択して下さい。

古いジョイスティック--
ジョグボックスが古い型であれば、このオプションを1に設定しなければなりません。(ジョグボックスの機能が以下から出されるように、働かないなら、ユーザは古いジョイスティックを持っています)

BHN 706 - BHN 706CMMに接続するには、このオプションを選択して下さい。

最高速度 -
この値は、測定機の全体的な最高速度を設定します。この値が大きすぎる場合には、DCCの作動中、コントローラーから断続的な「速度超過」エラーが発せられます。デフォルト設定値は60です。

適所誤差 -
これは、測定機が指示された位置に移動する際、位置付けを確定するために、その位置にどれだけ接近しなければならないかを設定した値です。測定機が、各動作の合間に長い間停止するような場合には、この値を増加して下さい。

注意:
訓練を受けた技術士のみが、これらの数値の調整を行うべきです。これらの値を変更することで、望ましくない結果を引き起こす可能性があります。

Moraインターフェース

Moraインターフェースは、*Mora* CNC
測定機と共に用いられます。このインターフェースは単一のRS232通信ポートを必要とするだけで、オリジナル システムからの測定機パラメータ ファイルは必要ありません。

PC-DMISの始動前に、mora.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Moraインターフェースに関して３つのタブがあります:

通信タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

MZeizz インターフェース

注記: **MZeiss** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

MZeissインターフェースは、*Zeiss*手動測定機と共に用いられます。

PC-DMISの始動前に、Mzeiss.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、MZeissインターフェースに関して四つのタブがあります:

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**1**、**9600** Baud, **イーブン** parity、**8** データ ビッツ、及び**2** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1.0, Y=1.0, Z=1.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Numerex インターフェース

注記: **Numerex** インターフェイスは PC-DMIS 64-ビット版 (x64) では利用できません。

Numerexインターフェースは、*Numerex*測定機と共に使用されます。二つの異なる形式のNumerex
インターフェースが利用可能で、その一つはデジタル解読装置（DRO）付きのもの、もう一つはDROなしのものです。DROバージョンは、簡単にインストールできますが、お手持ちの測定機にDROがない場合には、Tech80カードに加え、Tech80カードとNumerexコントローラーを接続する専用部品一式が必要になります。これら二つのインターフェースのインストレーションに関する説明については、MIIMを参照して下さい。

このインターフェースを作動するには、オリジナル システムからの測定機パラメータ
ファイルは必要ありません。

PC-DMISの始動前に、Numerex.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Numerexインターフェースに関して四つのタブがあります:

Numerex タブ

「[ミツトヨ インターフェース]タブ」トピックを参照して下さい。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

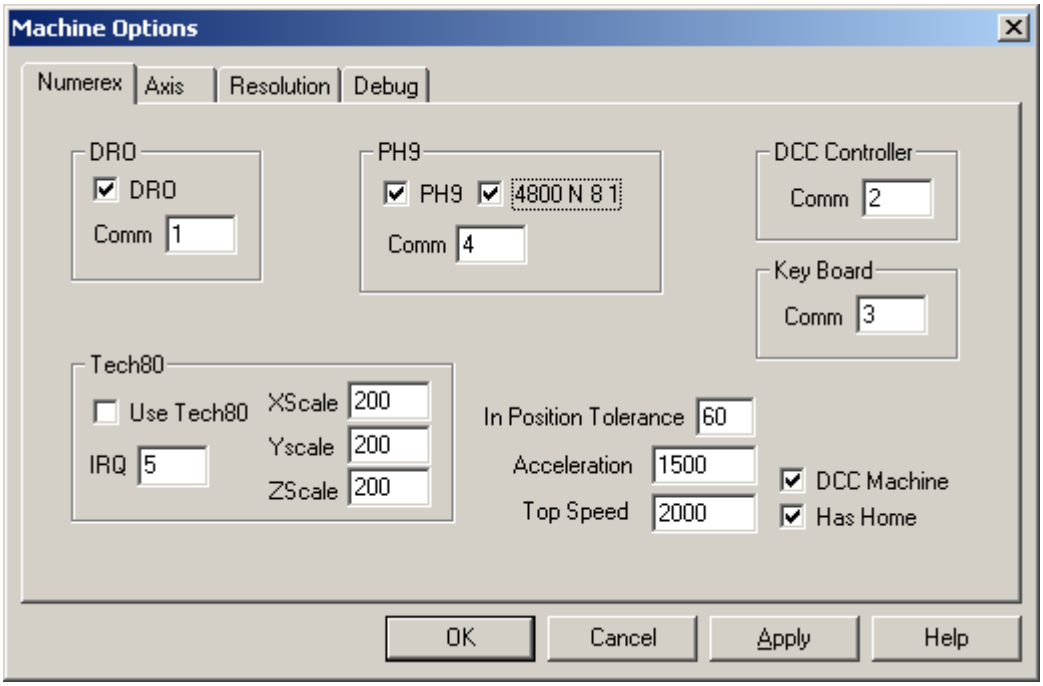
「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1.0, Y=1.0, Z=1.0。この倍率は、DRO装置がある場合に使用されます。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Numerex タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - Numerex タブ

Numerex タブを用いて、Numerex インターフェース用の、以下の設定をコンフィギャーすることができます。

DRO -
お手持ちのシステムがDROを用いて目盛りの読み取りを行う場合、このオプションを選択して下さい。

DRO通信ポート - DRO装置用の通信ポートを特定して下さい。

PH9 - PH9をご使用の場合には、このオプションを選択して下さい。

4800 N 8 1 -
お手持ちのPH9装置が、デフォルト設定である4800ボーNOパリティ7ビット2ストップビット(48007N2)の代わりに、これらの通信設定を使用する必要がある場合には、このオプションを選択して下さい。通常、セラミックスCMM（新型CMM）の場合、このオプションを選

択する必要があります。CMMが旧型の場合には、このオプションの選択を解除する必要があります。

PH9通信ポート - PH9装置用の通信ポートを特定して下さい。

DCCコントローラー用通信ポート -
DCCコントローラー用の通信ポートを特定して下さい。

キーボード通信ポート - キーボード用の通信ポートを特定して下さい。

Tech80の使用 -
お手持ちのシステムがTech80ボードを用いて目盛りの読み取りを行う場合、このオプションを選択して下さい。

Tech80 IRQ - この値は、Tech
80ボードの割り込みレベルを設定します。ジャンパーの設定およびWNS27レジストリの設定と一致しているか確認してください。

Tech 80 XYZ倍率 - これらの**XYZ倍率**オプションを用いて、Tech
80使用時の、各軸の倍率を特定することができます。これは、通常200.0の値をとります。この値が正しいかテストする簡単な方法は、既知のポイント間の距離を測定することです、測定距離と実際の読み取り値が異なる場合、当該数値を修正することが可能で、ほとんどの場合、その値は端数のない100, 1000,
500等になります。基本的なフォームの線形エラー補償（線形伸張）は、この値を微調整して行うことができます。

適所誤差 -
これは、測定機が指示された位置に移動する際、位置付けを確定するために、その位置にどれだけ接近しなければならないかを設定した値です。測定機が、各動作の合間に長い間停止するような場合には、この値を増加して下さい。

加速 -
このオプションは、DCC作動中のCMMの加速度を設定します。デフォルト値は1500です。CMMが始動時に急な動作を行って停止するような場合には、この加速度値を減少してください。

最高速度 -
このオプションは、測定機速度のマルチプライヤであり、これを用いて、測定機の最高速度をコントロールできます。PC-
DMISの100%の速度が、測定機の全力速度になるよう調整して下さい。

DCC測定機 -
このオプションが選択されるべきでない時は、唯一、DCC測定機としての作動ではなく、デ

バッグ目的でDROのテストを行う場合のみです。手動測定機の場合には、Tech80インターフェースを直接使用して下さい。

ホームポジション有り -
測定機がホームポジションを持つ場合、このオプションを選択してください。補償マップを使用する時には、これを選択する必要があります。

Reflexインターフェース

Reflexインターフェースは、*Reflex*コントローラーと共に用いられます。このインターフェースは、横断モードにおいて、Reflexボックスと共に、手動ゲージ2000測定機で使用することが意図されたものです。二つの「スマート
カード」が、コントローラーに挿入されます。上部は測定ルーチンが保存されるストレージカードです。Reflex コントローラーのスイッチがオンになると、以下のスクリーンが表示されます:

PC-DMISの始動前に、Reflex.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Reflexインターフェースに関して四つのタブがあります:

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **1**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

レニショー インターフェース

Renishawインターフェースは、インストールされている*Renishaw*のソフトウェア（V4.0以降）と通信します。また、UCC1コントローラーとの視覚的リンクを通した通信では、特別のインターフェース
カード（またはUSBモジュール）が用いられます。ソフトウェアとインターフェースは、Renishaw社から直接入手してください。

PC-DMISの始動前に、Renishaw.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Renishawインターフェースに関して２つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Romerインターフェース

これに関する記述は、PC-DMIS ポータブル 文書内にあります。

シャープ インターフェース

Sharpe インターフェースには、Sharpe、Sharpe 32、および Excel インターフェースが含まれます。実行するには、PC-DMISがオリジナル ソフトウェア パッケージに含まれるDOWNL.OADファイルを持つ必要があります。ソフトウェア補整が用いてられている場合、COMP.DATファイルも必要になります。DOWNL.OADファイル作成に関する、より詳しい説明については、シャープ インターフェースについての、MIIM文書を参照して下さい。

二重回転テーブル用にコンフィギャーされたシステムにおいて、第二のコントローラは、第二のテーブルのコントロールのみに使用されます。この場合、PC-DMISは、W軸のみ使用のコントローラに使用されるよう、適切にコンフィギャーされたDOWNL2.OADファイルを持つ必要があります。現在、テーブル限定の補整はないので、COMP2.DATファイルは必要ありません。

PC-DMISの始動前に、sharpe.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Sharpeインターフェースに関して七つのタブがあります:

シャープ 32 タブ

「シャープ32タブ」の項目を参照して下さい。

コントローラー タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**1**、**4800** Baud, **イーブン** parity、**7** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

コントローラー 2 タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port**0**、**4800** Baud, イーブン parity、**7** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

OITタブ

「OIT 通信」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **0**、**9600** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=0.0, Y=0.0, Z=0.0。

回転タブ

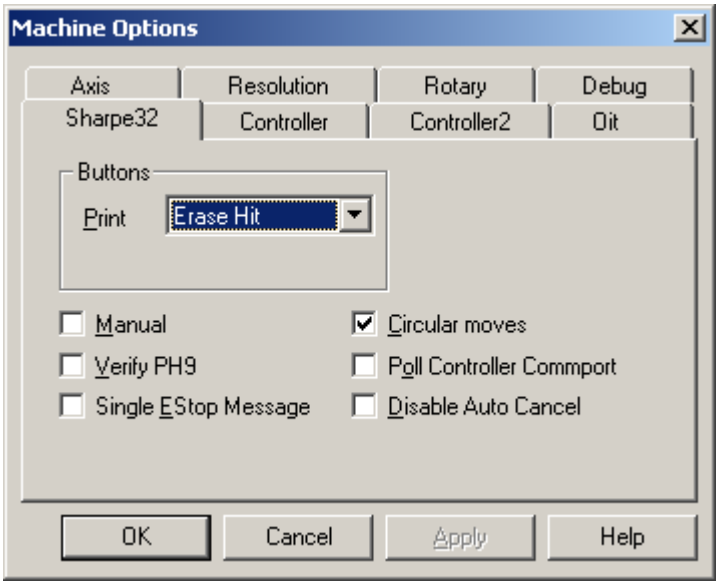
「回転テーブル設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は: 加速 = 46500.0, 速度 = 46500.0, 解像度 = 5000.0, オフセット = 0.0, 最低 デルタ = 0.5, テーブル = チェックなし, 及び 二重テーブル = チェックなし。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

シャープ 32 タブ



測定機オプション ダイアログ ボックス - シャープ タブ

Sharpe32 タブを用いて、以下をSharpe インターフェース用に設定することができます。

ボタン印刷 -
記録ボタン、*直前のヒットを消去*、*動作を保存*を指定するか、または*終了/済み*キーとして作動するよう指定することが可能です。

手動 - 手動（DCC能力なし）測定機を使用の場合には、このオプションを選択してください。

PH9を照合 -
コントローラーの中には、PH9を要求された角度に正確に位置付けしないものがあります。このチェック
ボックスを選択すると、要求された回転後にPH9の位置が点検されます。その位置付けが正しくない場合には、PH9の動作が繰り返されます。

単一 **EStop Message** - E-stopを押してこのオプションを選択すると、E-stopの状態にいる間にE-Stop警告メッセージが継続して繰り返すことなく、一度だけ表示されます。これにより、測定器をE-stopすることができ、　通常の PC-DMISユーザー
インターフェース機能にアクセス可能な間に、手動でプローブを動かすことができます。

円形動作 -
このオプションを選択すると、お手持ちのコントローラーが、円形動作の使用に対応します。

コントローラー通信ポートの調査 - このオプションが選択されている場合、PC-DMISは、通信を確かなものにするために、コントローラー シリアル
ポートを定期的に調査します。お手持ちのPCのRS232ポートに問題があるように思われる場合、これは役に立つオプションです。

自動キャンセルを作動不能にする - エラーには（例は
PH9エラー）すぐにリセットができても、再び同じエラーを起こすものがあります。エラーメッセージウィンドウが読み込みのために速く光りすぎ、何度も同じことを結果として繰り返します。このオプションが選択されると、ユーザーにエラーメッセージを読む十分な時間を提供するために、「自動キャンセルされた状態」からエラーメッセージダイアログを防ぎます。ホームポジションに付ける間、この設定に関係なく「自動キャンセル」をするダイアログボックスもあります。

シェフィールド インターフェース

シェフィールド インターフェースは*シェフィールド*
と共に使われます。このインターフェースを作動するには、オリジナル
システムからの測定機パラメータ
ファイルは必要ありません。シェフィールドCMMは、CMMが手動コントロールの時、またはDCCコントロールの時、PC－DMISをコントロールしません。コントロールボタンはジョグボックスにあります。CMMに回転テーブルがある際は、
PC－DMISは回転テーブルエンコーダにための別れたTech80カードを要求します。

PC-DMISの始動前に、sheffield.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Sheffieldインターフェースに関して四つのタブがあります:

インターフェース タブ

「シェフィールド インターフェース タブ」の項目を参照して下さい。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

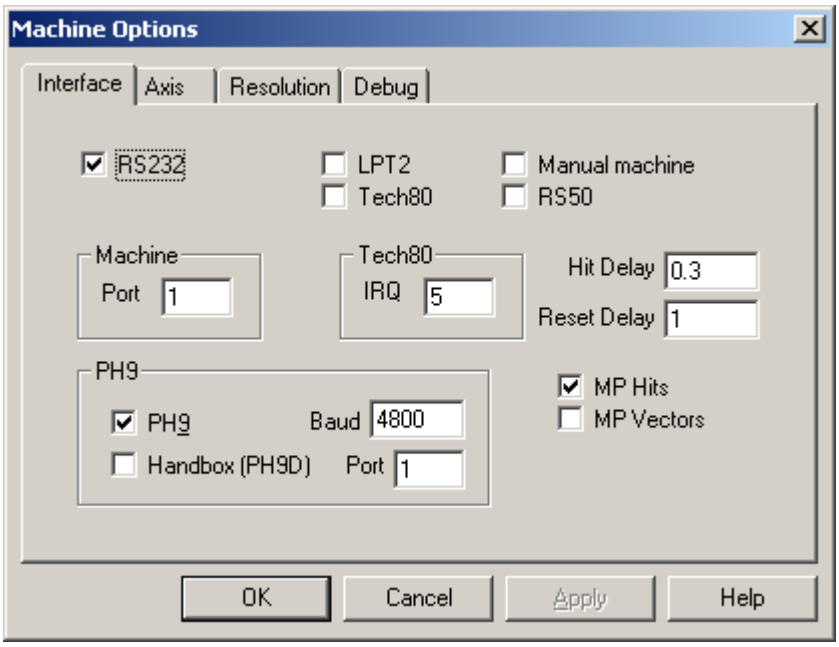
「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1000, Y=1000, Z=1000。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

シェフィールド インターフェース タブ



「測定機オプション」ダイアログ ボックス - インターフェース タブ

インターフェースタブを用いて、以下をSheffieldインターフェース用に設定することができます:

RS232 -
GPIBのかわりに、RS232を使用する予定の場合には、このオプションを選択してください。新規のシェフィールド
コントローラー、SMP3ｘｘ、及び、SMP400、はすべてシリアル通信を使用します。

LPT2 -
お手持ちのシステムがMSIボードを用いて目盛りの読み取りを行う場合、このオプションを選択して下さい。

Tech80 -
お手持ちのシステムがTech80ボードを用いて目盛りの読み取りを行う場合、このオプションを選択して下さい。

手動測定機 - これが手動測定機である場合には、このオプションを選択してください。

> **付記:** このオプションは、テストの目的でのみ、用いて下さい。

RS50 - お手持ちのシステムがRS50を使用する場合、このオプションを選択して下さい。

測定機ポート - この値は、コントローラー用のRS232通信ポートを設定します。

Tech80 IRQ - このオプションは、XYZ Tech 80
ボードの割り込み値を設定します。これを変更する場合、Tech 80
カードのジャンパーが同じであることを、確認して下さい。デフォルト設定値は5です。

> **付記:** これは、回転テーブルのTech 80
> ボードには適用されません。割り込みの必要はありません。

ヒットの遅延 -
これはMSIボードからヒットを読み取る前の遅延時間です。デフォルトは0.3です。この値が小さすぎるとボードの読み取りが早過ぎ、不正確な読み取り値となります。精度に問題がある場合、この値を徐々に大きくして見ることを薦めます。

> **注記:**
> **[MPヒット]**オプションを使用している場合、この値を変更しても何も効果はありません。

遅延時間の再設定 -
コマンドの送付が速すぎると、一部のMP装置は、入力を受け付けない状態になります。このような事態が起こっていると思われる場合には、遅延時間の値を増加できますが、この値の増加は、システム機能の低下につながります。

> **付記:** SMP 400 を併用している場合、この値は 1.0 でｓる必要があります。

PH9 - PH9をご使用の場合には、このオプションを選択して下さい。

PH9 ハンドボックス (PH9D) -
片手で持てるPH9「ペンダント」型コントロール装置がある場合、このオプションを選択してください。

PH9 Baud - この値は、PH9のボー･レートを設定します。有効な値は、 300 、 1200 、 4800 、または9600です。
デフォルトでは、使用されるシリアルプロトコルはストップ無しビットで、８桁のデータビット及び1桁のパリティビット(N81)です。

PH9ポート - このオプションは、PH9用のRS232通信ポートを設定します。

MP ヒット - このオプションを選択すると、 tech80ボードの代わりに Sheffield MP 装置から PC-DMISがヒットデータを得ることになります。この長所はMP装置がデータを補うので、ASI 補償マップを作成する必要がありません。不利な点は、「ヒットの取得」モードにおいて、このオプションがジョグボックスのマクロ
キー（終了、ヒットの消去、移動の記憶、等）の機能を無効にすることです（下記のジョグボックス トグルのオプションを参照して下さい）。

> 付記：
> このボードはすでに補正されたデータをレポートするので、MSIボードをお使いの際はこのオプションを使う必要はありません。また、Tech80をお使いの際には、プローブケーブルがMP装置のプローブシグナルに接続しないようにして下さい。

MPベクトル - このオプションが選択されていない場合、PC-DMISは、ヒットが行われる前のプローブの位置を読み取ることにより、ヒットのベクトルを追跡します。このオプションを選ぶと、PC-DMISは、MP装置から直接ベクトルを得ます。不利な点は、「ヒットを行う」モードにおいて、このオプションがジョグボックスのマクロ
キー（終了する、ヒット消去、動作記憶、等）の機能を作動不能にすることです（下記のジョグボックス トグルのオプションを参照して下さい）。

> **付記:**
> 一部の旧式システムは、この機能に対応していません。このオプションを伴い初期化を行って「無効パラメータ21」エラーが起こる場合、お手持ちのシステムはこの機能に対応していません。MPヒットをご使用の場合、（対応している場合）このオプションを選んで下さい。

Tech80インターフェース

> 注記: **Tech80** インターフェイスは PC-DMIS 64ビット版 (x64) では利用できません。

Tech80インターフェースは、手動*Tech80*及び*Scazon*カード
インターフェースに対応します。このインターフェースを作動するには、オリジナル
システムからの測定機パラメータ ファイルは必要ありません。

PC-DMISの始動前に、TECH80.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、
Techインターフェースに関して四つのタブがあります:

接続タブ

「Tech 80 接続タブ」の項目を参照して下さい。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

解像度タブ

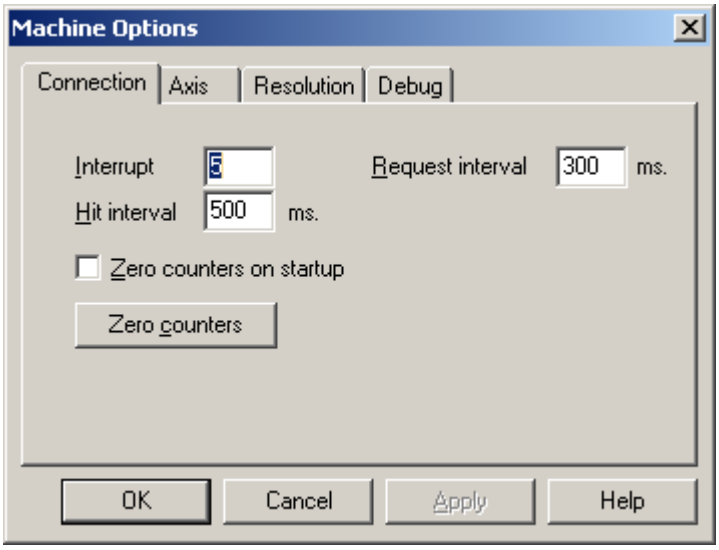
「軸線のスケール係数の設定」の項目を参照して下さい。デフォルトは X=1000.0, Y=1000.0, Z=1000.0。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース
インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Tech80 接続タブ



測定機オプション ダイアログ ボックス - 接続タブ

接続タブを用いて、Tech80インターフェース用の、以下の設定をコンフィギャーすることができます:

割り込み - この値は、Tech
80カードの割り込みレベルを設定します、これを変更する場合、Tech80カードのジャンパーが同じレベルに設定されていることを、確認して下さい。。

位置要求の間隔 - この値は、PC-
DMISがプローブの位置を追跡する速度をコントロールします。この値はミリ秒（例えば、0.3秒は300）で入力されます。デフォルト設定値の300は、1秒間におよそ3回の位置確認が要求されることを意味します。

ヒットの間隔 -
この値は、ヒット後、次のヒットが有効になるまでに待たなければならない、間隔の時間をコントロールします。これは、プローブがパーツから撤回する間の「ダブルヒット」を防ぐのに、役立ちます。値は、ミリセコンド（例えば、500は0.5秒）で入力されます。

始動時の計数器ゼロ - PC-
DMIS始動時に、計数器をゼロに設定したい場合には、このオプションを選択してください。

計数器ゼロボタン - 計数器をゼロに設定したい場合には、このボタンをクリックして下さい。

Wenzel インターフェース

Wenzel インターフェースは、Wenzel 2010 コントローラ（本来のWenzel
プロトコル）を持つ*Wenzel*
測定機と共に使用されます。このインターフェースは単一のRS232通信ポートを必要とするだけで、オリジナル システムからの測定機パラメータ ファイルは必要ありません。

PC-DMISの始動前に、wenzel.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 |**
機械インターフェース設定）には、Wenzelインターフェースに関して２つのタブがあります:

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

Zeissインターフェース

Zeiss
インターフェイスはIPを用いたZeissコントローラーと共に使われます。この新しいインターフェイスはTCPとUDPプロトコルの両方に対応しています。これらコントローラの間にはわずかな違いがあることが発見されたため、このインターフェイスは新しい interfac.dll
ファイルを必要とせずにこれらの違いに対応するため、構成ファイルを修正できるよう設計されています。更に、コントローラーの構成オプションの多くは、この構成ファイルに移りました。また、将来的には、WAIユーティリティーはPC-DMISの動作なしで測定器と通信可能です。

対応のプローブには、標準Zeissプローブ、RDS、DSE、及び、Vast
が含まれます。これらは、旧式のジョグボックス（数値パッドのついた小型のもの、と、キーパッドの付いた、より大型のもの、の両方）には、対応しており、最近のジョグボックス（ラップトップ型）も、基本的な機能ボタンとして用いられる、追加のIP型ユーティリティを伴えば、対応可能です。

PC-DMISの始動前に、Zeiss.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、Zeissインターフェースに関して四つのタブがあります:

PH9 タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **0**、**4800** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

ZssGPIBインターフェース

ZssGPIBインターフェースは、GPIB型RS232コントローラーを用いた、*Zeiss*測定機と共に使用されます。このインターフェースは、GPIB
Zeissコントローラー（灰色の60センチ四方の箱）に対応しています。PH9は、RS232ポートを通して、コントロールされます。

本来のRS 232 と、当該インターフェースの接続（Zeiss C 99
コントローラ）に対するサポートもありますが、ZSSRS 232 .DLLは、ZEISS
UMESS/COMETソフトウェア パッケージを通して、ZEISS CMMを操作します。PC-
DMISが、GPIBとRS 232 のどちらと通信するかは、設定エディタのZEISSセクションにある、RS

232
CMMオプションによって決定されます。本来のRS232については、これは1に設定されるべきです。レジストリ
エントリの変更に関する、より詳しい説明については、「レジストリエントリの変更」付録をご覧下さい。

PC-DMISの始動前に、zssgpib.dll をinterfac.dll に名称変更して下さい。

測定機オプションダイアログ ボックス(**編集 | 環境設定 | 機械インターフェース設定**）には、ZssGPIBインターフェースに関して四つのタブがあります:

PH9 タブ

「通信プロトコール設定」の項目を参照して下さい。デフォルト値は、Comm Port **0**、**4800** Baud、**No** parity、**8** データ ビッツ、及び**1** ストップ ビッツです。

軸線タブ

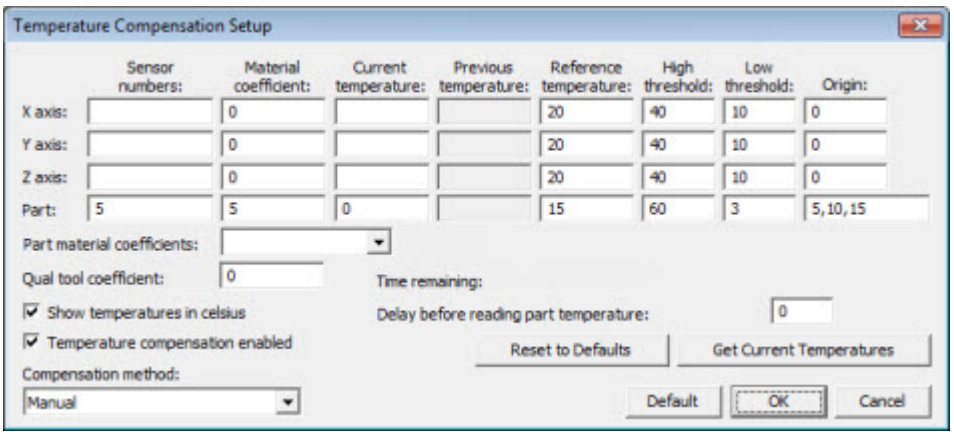
「測定機の軸線割り当て」の項目を参照して下さい。

デバッグ タブ

「デバッグ ファイル作成」の項目を参照して下さい。

付記: このインターフェースに関する、より詳しい情報については、測定機インターフェース インストレーション マニュアル（MIIM）をご覧下さい。

温度補償



[温度補償の設定]ダイアログ ボックス

温度補償セットアップダイアログボックスを開くには、 **[編集 | 環境設定 | 温度補償設定]**を選択します。このダイアログ
ボックスにより、区画とパーツの温度を補償できるので、検査プロセスでの正確性が増加します。

複数アームの校正中の温度補償については、「複数アームモードの使用」の章にある「複数アーム校正時の温度補償の使用」を参照して下さい。

STPファイルの使用

各CMMは、各軸線の温度補償用に、温度係数やセンサー割り当てといった、測定機特定のパラメータを使用します。ファイルが構造的、または、線形補償ファイルのいずれであるか、をPC-DMISに指示する、埋め込みコードと共に、これらのパラメータは、CMMベンダーにより作成された、専用STPファイル（.stp拡張子に由来するファイル名）内に保存されます。

PC-DMISは、温度補償のために、これらのファイルを必要とします。

温度補償に先立って、これらのSTPファイルがお手持ちのハードドライブ内の、適切な位置に所在することを確認して下さい。

- DEA構成の温度補償方法用のserv1.stpファイルが*C:\Thermal_OCX*ディレクトリ内にあることを確認して下さい。
- DEA線形温度補償方法用のserv1.stpファイルが*C:\Program Files\Thermal_OCX*ディレクトリ内にあることを確認して下さい。

線形、及び、構造的温度補償

線形補償 = （熱膨張係数） X （変位 + 各軸およびパーツの温度変化）。軸上に複数の温度センサーが存在する場合、PC-DMISは読み取り値の平均を取って温度変化を算出します。

構造的補償では、CMMの様々な構成部分の温度が異なる可能性のあることを認識します（例えば、測定機の一つの軸が部分により異なる温度であり、測定機の湾曲、屈曲、またはゆがみを引き起こしています）。次に、構造的補償では、CMMの特定の部分の温度適正化を行います。**[編集 | ユーザー設定 | 温度補償セットアップ]**メニュー項目を選択すると、Structural Thermal_OCXが作動し、PC-DMISは、一時的な体積補償マップを新たに算出します。

利用可能な入力パラメータ

次のパラメータは、**温度補償の設定**ダイアログボックス内にあります（**編集|環境設定|温度補償の設定**）：

センサー番号ボックス

センサー番号ボックスには、特定の軸線、または、パーツに使用される、センサーの番号を列挙した一覧があります。これらの値は、センサーの実際の設定と*一致しなければならない*ので、コントローラから温度を読み取る際に大変重要です。

- 各センサーには、 1 から 32 の間の番号が与えられています。

- 一覧内の番号は、単一の数字か、または、数字の範囲を示す最初と最終の数字かのいずれかです。
- これらの番号は、コンマか、または、空白によって区切られています。
- 軸線、または、パーツ用に、数値を32個まで入力することができます。

「手動」モードでは、これらの番号は、比較的に意味のないものですが、少なくとも一つのセンサー番号が、各軸線、及び、パーツ用に割り当てられている必要があります。

[素材および校正ツール係数]ボックス

材料係数

素材係数ボックスは材質の特性を反映した数字を含んでいます。彼らは、温度の単位変化ごとの長さの分数変化です。

- この数値は、測定機軸のスケールおよびパーツにどの種類の素材が使用されているかによって変わります。
- **摂氏で表示する**チェック
  ボックスで選択されるかどうかによって、単位は℃または°Fとなります。
- これは、メートル/メートル/℃、または、インチ/インチ/°Fと考えることができますが、分子と分母における長さは、同一の単位なので、これらは分けられます。

例:
11.5ミクロン/メートル/℃という係数のスケールは、0.0000115メートル/メートル/℃、または、単に0.0000115/℃となります。

校正ツール係数

校正ツール係数ボックスを使用して、パーツからプローブ校正ツールの材料係数を指定します。

ライツ測定機で使用可能なパーツの値

v42
MR2、v43MR1またはそれ以降のバージョンを使用し、かつライツ社の測定機を使用している場合、PC-DMISは[**パーツ**]ボックス表示されている素材係数を使用するよう求めます。使用可能な値は-.001～0.001メートル/°C（または-0.00056～.00056インチ/°F）となります。

- 受け入れ範囲外の値を[**温度補償セットアップ**ダイアログボックスに入力した場合、警告メッセージが現れ、[**パーツ**]ボックスの値が0.0にリセットされます。
- 旧バージョンのPC-
  DMISで作成され、受け入れ不可能な値を含む測定ルーチンを開いた場合、PC-

DMISは素材係数の値が範囲外であるというメッセージを表示し、値を0.0にリセットします。

- 受け入れ範囲外の値を使うためにTEMPCOMP/ORIGINコマンドを手動で編集した場合、PC-DMISは実行時に[**実行**]ダイアログボックスにエラーメッセージを表示します。このメッセージは、パーツの素材係数の値が範囲外であると知らせています。唯一のオプションは、[**キャンセル**]をクリックして受け入れ可能な値を含むコマンドに変更することです。

部品材質係数一覧

部品材料係数リストは標準物質の種類のリストが含まれています。これらの材料の1つを選択すると、自動的に**部品材質係数**ボックスに関連付けられている係数を配置します。詳細については、「材料係数及び校正ツール係数」を参照してください。

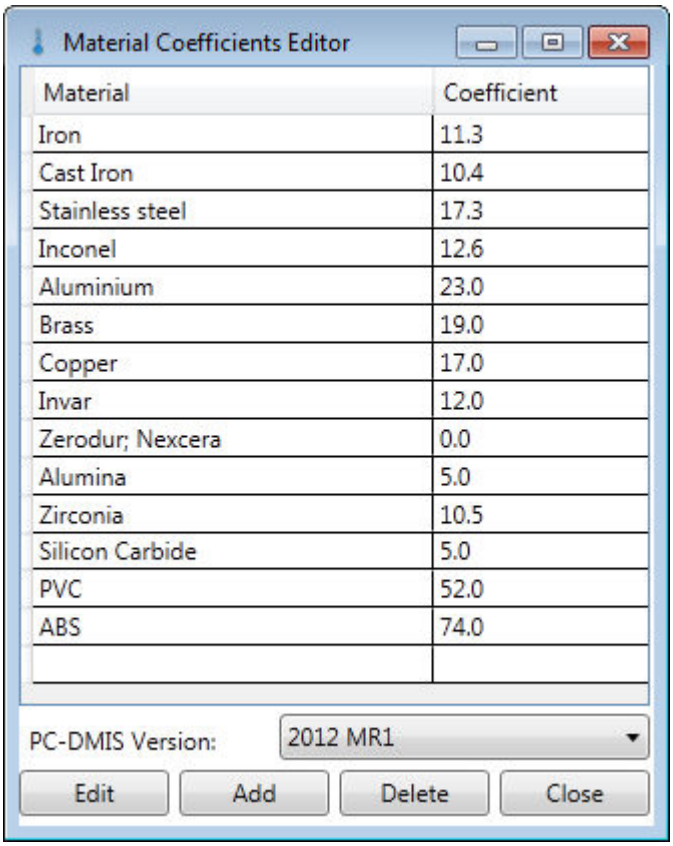
材質と係数の編集

これらの材質と係数は、お使いのシステムの隠されたデータパスに置かれたMaterialCoefficients.xmlファイルに格納されます。

材料係数エディタを使用して、このXMLファイルを変更することができます。変更が行われた後では、XMLファイルに加えられた変更を確認するには、**温度補正の設定**ダイアログボックスを再び開く必要があります。

注記:すべての係数値に小数点が含まれている必要があります。小数を含めていない場合は材質係数エディタは間違った入力に関するメッセージが表示されます。

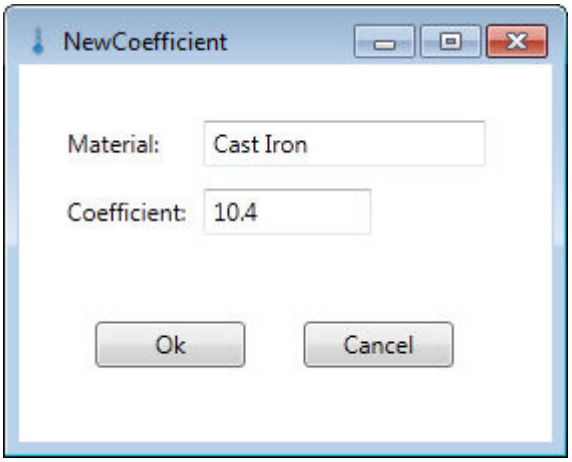
材質係数エディタを使用するには、MaterialCoefficientsEditor.exeユーティリティを実行します。このユーティリティはインストールされたディレクトリにあります。



このエディタでは、材料とその対応する係数が一覧表示されます。さらに、材料や値を編集するボタンも用意されています。

PC- DMIS バージョン - このリストには、あなたが行った変更から影響を受けたPC-DMISのバージョンを定義します。ユーザは、PC-DMISの複数のバージョンがインストールされていればそれが格納されます。このリストからバージョンを選択して、そのバージョンの材料や係数に引っ張ります。

[編集] -
このボタンは*簡単なダイアログボックス*を表示することによって選択された材料を編集できます。このダイアログボックスでは、**材質**名や関連する**係数**値を編集することができます。



追加 -
これは**編集**ボタンに説明したことと同様に入力ボックスを表示することにより、新たな材料と係数をリストへ追加します。

[削除] - このボタンは、材料のリストから選択された行を削除します。

クローズ -
このボタンは、エディタを閉じて、変更を保存するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。基本となる.xmlファイルへの変更を行うには、
[はい]をクリックします。変更を保存せずにそれを閉じるには、**いいえ**をクリックするか、またはエディタの右上にある赤いXを選択することで、エディタを閉じることができます。

現在の温度ボックス

現在温度ボックスには、適切な単位で表示された現在温度が表示されます。利用可能な測定機のタイプ、及び選択したオプション次第で、これらを入力するか、または、コントローラーから読み込むことができます。

以前の温度ボックス

前回の温度ボックスは、常時、以前に読み取られた温度を表示します。以前に読み取られた温度がない場合には、これらの値はゼロか、または、空白のままになります。

参照温度ボックス

基準温度ボックスには、温度補償調整を適用されるべきである基準温度が表示されています。

- 適用される修正量は、現在温度と基準温度の差を材料係数で掛けた結果に基づきます。
  修正量 = 材料係数 x (現在温度 ー 基準温度)

- 現在温度が参照温度と同一の場合、上記の算式の効果としては、温度補償の調整が適用されない、ということになります。
- これらのボックス内の値は、ほとんど常に20℃、または、それに相当する華氏の温度です。

高閾値ボックス

高閾ボックスは、それ以上の温度補償が適用されない、その時点での温度の上限（適切な単位で）を表しています。PC-DMISは、警告やエラーメッセージを表示しません。

例:
参照温度が20℃、現在温度35℃、及び、高閾値30℃の場合、実際に適用される温度補正値は、現在温度が上限を超えているので、(35 – 20)の代わりに、(30 – 20)の差に基づきます。

低閾値ボックス

低閾ボックスは、高閾と概念的に類似しており、唯一の相違点は、それ以下の温度では温度補償が適用されない、その時点での温度の最低限度を指定する、ということです。

原点ボックス

原点ボックスは、温度補償が適用される品目の長さの決定に使用されます。

長さ = その時点での位置の値 – 原点値

- ほとんどの場合、[**原点**]ボックスの**X, Y**、および**Z**値はゼロとなります。ただし、測定機の中にはスケールの原点としてゼロを使用しないものもあります。
- **パーツ**値もまた、ある特別の形式の取付具固定の制限がないかぎり、一般的にゼロです。

摂氏温度(℃)表示チャックボックス

摂氏温度表示 チェックボックスは、温度及び素材係数の両方で有効です。

- このチェックボックスをチェックすると、セ氏が表示に用いられます。
- このチェック ボックスのチェックが消された場合、PC-DMISは華氏を使用します。

温度補正を有効化チェックボックス

温度補償を有効化チェック ボックスは、PC-DMISに温度補償の使用を指示します。

- このチェックボックスが選択されていない場合、PC-DMISは温度補償を行わず、TEMPCOMPコマンド（測定ルーチン内に存在する場合）は何の効果を持ちません。
- このチェックボックスがチェックされている場合、PC-DMISは、入力パラメータに従って作動します。

注記: このチェックボックスをオンにし、PC-DMISが測定機コントローラーではなくパートの補償を行う補償方法の1つを選択すると、**[プローブデータの編集]**ダイアログボックスにある非携帯式測定機のプローブ直径は現在のパート温度によって変化します。「ハードウェアの定義」の章にある「プローブデータの編集」を参照して下さい。

補償方法一覧

以下は、補償方法及びPC-DMIS内のそれぞれのプロセスについての記述です。

注記: Sheffieldコントローラーについては、**素材係数]** および **[参照温度]** ボックスを定義し、それから、使用する補償方法にかかわらず、**デフォルト**をクリックする*必要があります。*

手動

- 補償は、測定機コントローラーの関与なしに、手動で（お客様の入力によりコントロール）行われます。
- PC-DMISがすべての補償に関する計算を行います。
- 測定ルーチン実行中、**[温度補償の設定]**ダイアログボックスが開き、残りの測定ルーチンの進行前に、その時点での設定を編集できます。

コントローラーの温度を読む

- このオプションをサポートする測定機を用いると、ユーザーがデータ入力するのではなく、PC-DMISがコントローラーからその時点での温度を自動的に読みます。
- PC-DMISがすべての補償に関する計算を行います。コントローラーは、その時点での温度のみを提供します。
- 測定ルーチン実行中、**[温度補償の設定]**ダイアログ ボックスは開きません。
- 測定ルーチンは、ユーザー確認のために停止することはありません。

注記:シェフィールドコントローラの軸のCTE
（熱膨張係数）値を取得するには、**現在の温度を取得**ボタンをクリックします。

コントローラーによる軸線限定補償

- コントローラーは測定機の軸自体の補償を行います。
- 軸に対する入力は使用されません。
- PC-DMISがパーツの温度補償を行っているので、パーツの入力パラメータが適用されます。
- 測定ルーチン実行中、[**温度補償の設定**]ダイアログ ボックスは開きません。
- 測定ルーチンは、ユーザー確認のために停止することはありません。

コントローラーによる軸線及びパーツの温度補償

- コントローラーは測定機の軸、及びパーツの両方の温度補償を行います。
- 軸に対する入力は使用されません。
- PC-DMISは、補償に関するいかなる計算も行いません。
- PC-DMISがコントローラーに情報を送る必要があるため、パーツの素材係数、参照温度、及び原点の入力は行わなくてはなりません。
- 測定ルーチン実行中、[**温度補償の設定**]ダイアログ ボックスは開きません。
- 測定ルーチンは、ユーザー確認のために停止することはありません。

注記:
シェフィールドのコントローラーについては、軸線用のCTE値を入力する必要はありません。

残り時間の表示

残りの時間表示は、温度の読み取りが行われる前の残り時間を表示します。温度読み取り実行の遅延時間が設定されている場合にのみ、これは表示されます。「パーツ読み込み前の待ち時間」を参照して下さい。

測定の温度を読み取るまでの時間ボックス

パーツ温度読み込み前の待ち時間ボックスを用いて、測定ルーチン実行中、センサーがその時点での温度を読む前に、PC-DMISが待つ時間を特定できます。ゼロを入力すると、一時停止がありません。

デフォルトにリセットのボタン

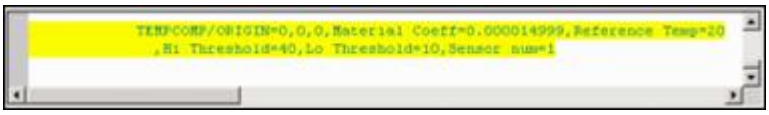
デフォルトにリセットボタンは、以前に変更された値を以前に保存された値に更新します。DEA測定機を使用し、serv1.stpが利用可能な場合には、PC-DMISは、そのファイルを読み込みます。

現在温度を取得ボタン

[**補償方法**]リストから[**コントローラーの温度を読む**]方法を選択し、かつ、このオプションに対応する測定機を使用している場合、[**現在の温度を測定**]ボタンにより、PC-DMISは現在の温度をコントローラーから読み、その結果を[**温度補償の設定**]ダイアログボックスに表示します。

編集ウィンドウ内の温度補償コマンド

OKボタンをクリックして、**温度補償セットアップ**ダイアログ ボックスの入力を確定すると、PC-DMISは、TEMPCOMPコマンドを測定ルーチンに挿入します。



挿入されたTEMPCOMPコマンドの例

常に、測定ルーチンは、1つだけのTEMPCOMPコマンドを使用しています。TEMPCOMPコマンドは、任意の測定の前に測定ルーチンの上部付近に配置する必要があります。それは測定ルーチン実行時に各種入力パラメータに従って動作します。

コントローラー対応

すべての温度補償方法が、すべてのコントローラに対応しているわけではありません。以下は、それぞれの異なる補償方法が対応しているコントローラーです。「補償方法一覧」を参照してください。

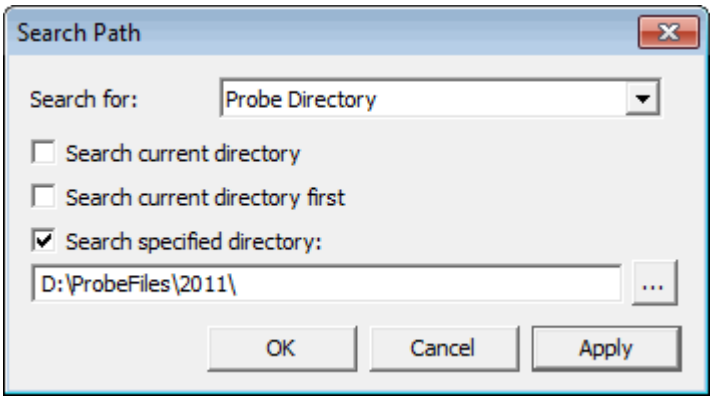
補償方法	対応のコントローラー
手動	全部、この方法に関与しているコントローラーはありません。
コントローラーの温度を読む	DEA（DEAC系列コントローラーとの併用の場合のみ）、ライツ社のプロトコール使用のシャー

	プ32z、シェフィールド
コントローラーによる軸線限定補償	ライツ社のプロトコール使用のシャープ32z、シェフィールド
コントローラーによる軸線及びパーツ温度補償	ライツ社のプロトコール使用のシャープ32z、シェフィールド

ローカル温度設定

TEMPCOMPコマンドを含む測定ルーチンを開くと、PC-DMISはパーツセンサーの数字をローカル設定と照合します。

- 値が異なる場合には、PC-DMISがその時点での設定を受けて、自動的にコマンドを更新し、さらに、新旧の値に関するコメントが測定ルーチン内に挿入されます。
- パーツ センサーがローカル設定を入手できない場合、PC-DMISは、編集ウィンドウ内の温度補償コマンドを赤色で表示します。



経路サーチ ダイアログ ボックス

編集 | 優先設定 | 検索パスの設定

メニューオプションは**検索パス**ダイアログボックスを表示します。このダイアログボックスを使用して、以下の場合にPC-DMISが使用するディレクトリを定義します:

- CAD データまたは測定ルーチンデータのエクスポート
- CAD データまたは測定ルーチンデータのインポート
- 測定ルーチンファイル (.prg) の読み込みおよび保存
- プローブファイルの読み込み (.prb)

- パーツ配置（aln）を呼び出す
- サブルーチンの呼び出し

PC-DMIS
が特定の設定およびファイルを保存する場所については、「ファイル位置の説明」トピックを参照してください。

利用可能なダイアログ ボックスオプション

検索 -
このリストには、ディレクトリに関連付けることができる様々な項目がすべて含まれています。残りのダイアログボックスは、ユーザーの選択に基づいて異なります。PC-DMIS
がこれらのファイルタイプの一つを検索したり操作を実行する必要がある場合、PC-DMISは選択した項目に関連付けられたディレクトリを使用します。以下にこのリストの項目を示します:

デフォルトのエクスポートディレクトリ - PC-DMISはCADデータまたは測定ルーチンデータをこの項目で指定されるディレクトリにエクスポートします。

デフォルト インポート ディレクトリ - PC-DMISは外部のCADデータまたは測定ルーチンデータをこの項目で指定されるディレクトリからPC-DMISにインポートします。

デフォルト 測定ルーチン ディレクトリ - PC-DMISはこの項目で指定されるディレクトリに対して測定ルーチンを保存および読み込みを行います。

プローブディレクトリ - PC-DMIS
は、この項目に紐付けられたディレクトリからプローブファイルを特定し保存します。

呼び出しディレクトリ - PC-DMIS
は、この項目に紐付けられたディレクトリから保存されたアラインメントファイルを呼び出し保存します。

サブルーチン ディレクトリ - PC-DMISはこの項目で指定されるディレクトリから測定ルーチンファイルおよびそれらの中に保存されたサブルーチンを読み込みます。

上記の選択内容に基づき、これらのチェックボックスが選択可能になります:

現在のディレクトリの検索 -
これをマークすると、このソフトウエアは現在の測定ルーチンが存在するのと同じディレクトリ内を検索します。

最初に現在のディレクトリを検索 -
これをマークしたとき、および**[現在のディレクトリを検索]**チェックボックスと**[特定ディレクトリを検索]**チェックボックスの両方を選択する場合、このソフトウエアは現在の測定ルーチンのディレクトリおよびユーザーが指定するディレクトリの両方を検索します。検索の順序はこのチェックボックスが選択されているかどうかによって異なります。

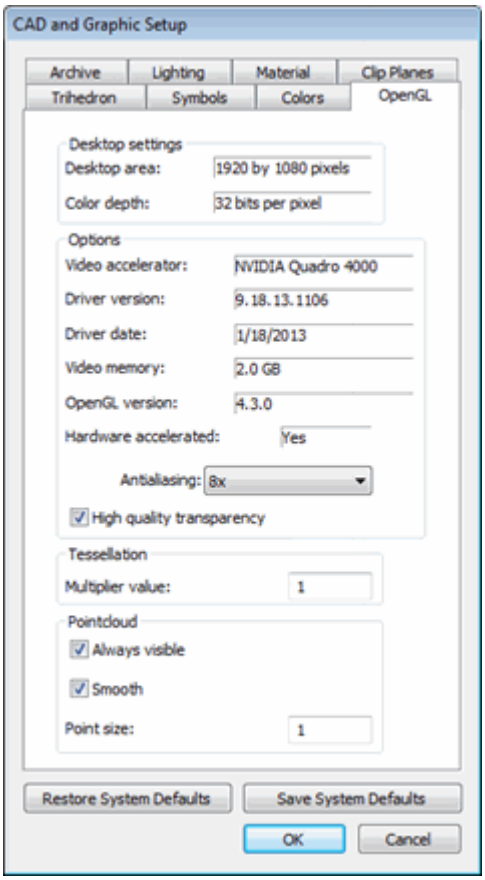
- マークしない場合、PC-DMISは最初に現在の測定ルーチンが存在するのと同じディレクトリにアクセスし、次にユーザーが指定するディレクトリにアクセスします。
- 選択されていない場合、検索順序が逆になり、最初にユーザー指定のディレクトリにアクセスし、次に現在の測定ルーチンが存在するディレクトリにアクセスします。

指定のディレクトリを検索 -
これをマークすると、このチェックボックスは指定のディレクトリ内を検索します。指定したディレクトリのパスがチェックボックスの真下のボックスに現れます。パスが定義されていない場合、システムの完全パスを入力するか、あるいは**...**ボタンを使用してシステムのディレクトリ構造からディレクトリを選択します。

新規のデフォルト ディレクトリを特定するには:

1. **編集 | 環境設定 | 検索パスの設定**を選択して **検索パス**ダイアログボックスを表示します。
2. **検索**リストからパスを定義したい項目を選びます。
3. 必要に応じてチェックボックスをマークします
4. ボックスにディレクトリパスを入力します (または **...** ボタンを使用してディレクトリに移動し選択します)。
5. **[適用]** をクリックします。
6. 必要に応じて、上記のステップを繰り返してその他の項目の検索パスも設定します。
7. **[OK]** をクリックします。

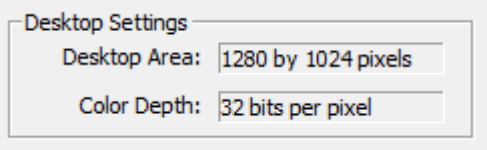
OpenGLオプションの変更



[CADおよびグラフィックの設定]ダイアログボックス - [OpenGL]タブ

[**編集 | グラフィックス表示ウインドウ | OpenGL**]メニュー
オプションは、[**CADおよびグラフィックの設定**]ダイアログボックスの[**OpenGL**]タブを表示します。このダイアログ
ボックスを用いて、立体画像モードのモデル表示をコントロールする、OpenGLオプションを変更することができます。パーツを立体画像に変更するには、「CAD表示の編集」の章にある「スクリーンビューの設定」を参照してください。

[**デスクトップ**]の設定エリア

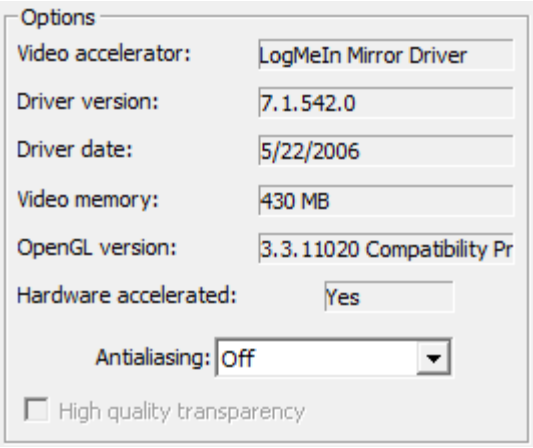


それぞれのデスクトップ表示の設定により、OpenGLのオプションは異なる可能性があります。**デスクトップの設定**エリアは、その時点でのデスクトップ設定の内容を表示します。

異なるモニター サイズによる解像度比率

通常のモニターで使用の1.3333比率のかわりに、ワイド スクリーン
モニターは、1.6比率が必要です。例えば、1200x1600 の解像度は 1.3333 (1600/1200)
の比率であり、普通サイズのモニターでうまく機能しますが、1680x1050 の解像度は
1.6の比率を持ち、ワイド スクリーン モニターに適しています。ワイド スクリーン
モニターを使用され、スクリーンは伸びて見える（多分、グラフィックス表示ウィンドウ上で、円が楕円として表示される）場合には、この問題を解決するために、1.6解像度比率を用いて下さい
。

[オプション]エリア



[オプション]エリアは、システムのビデオカードについての情報が表示されます。

- **ビデオアクセラレータ** - ビデオカードの説明
- **ドライバのバージョン** - ビデオドライバのバージョン
- **ドライバ日付** - ビデオドライバのリリース日付
- **ビデオメモリ** - ビデオカードのRAM容量
- **OpenGLのバージョン** - ビデオドライバに支援されているOpenGLのバージョン
- **ハードウェア加速** ー
  グラフィックスレンダリングがハードウェアであるかどうかに依存して「はい」、または「いいえ」を表示します。ハードウェア加速はソフトウェア加速よりはるかに速いです。

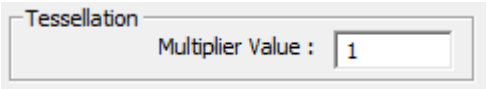
アンチエイリアシング -
アンチエイリアシングコンボボックスには、マルチサンプルの数を指定することにより、アンチエイリアシングのレベルの設定を可能にします。2xアンチエイリアシングは2度各ピクセルをサンプリングします。4xアンチエイリアシングは、各ピクセルを4回サンプリングします。アンチエイリアシングが可能になる場合、ピクセルはそれぞれピクセル内のわずかに異なる位置で複数回サンプリングされます。平均色は最終のピクセル色を決定するためにこれらのサンプルから計算されます

。これは事実上、グラフィックスウィンドウでモデルのエッジのギザギザを低減します。高いアンチエイリアシング設定が遅くシステム性能を犠牲にしてより良い視覚的な結果を生成します。

ビデオカードの機能はアンチエイリアスオプションを決めます。いくつかのグラフィックアクセラレーターは64xアンチエイリアシングを支援するかもしれませんが、他のものは単に16xまで支援するかもしれないか、またはそれを全く支援しないかもしれません。お使いのグラフィックスアクセラレータは、アンチエイリアシングを支援している場合、それは持っているRAMの量と、画面の解像度は、（4×の最大デフォルト値）デフォルト値を決めます。ビデオカードがアンチエイリアシングを支援していない場合、PC-DMISは**オフ**にデフォルトが設定されます。

高品質透明チェックボックスは`HighQualityTransparency`登録セッティングをコントロールします。PC-DMISは、デフォルトでこのチェックボックスをクリアします。これは単にお使いのグラフィックスドライバが、OpenGL 4.2サポートし、ビデオアダプタのメモリが1GB以上を持っている場合のみに機能します。

[**基盤目状表示**]エリア



[**基盤目状表示**]エリアは、[**乗数**]ボックス内に、格子用の乗数を設定することで描画された画像をコントロールします。PC-DMISは、CADシステムの格子の値に入力された[**乗数値**]を掛けます。これらの値は影付き画像の作成に使用されます。

基盤目状値は、陰影を付けるためにパーツの表面を断片に分割するデフォルト設定値です。

[**乗数**]ボックスの外側をクリックするか、TABキーを押してダイアログボックスの別の項目に移動すると、直ちに格子乗数はグラフィックの表示ウィンドウを更新します。

重要: 重要: このテセレーション値を変更すると、PC-DMISはエッジを表すポリラインのセグメント長さを加算して曲面のエッジの周囲の距離を計算するため、外周スキャンが影響を受けます。テセレーション乗数は各ポリラインセグメントの長さを変更します（許容値を低くするとセグメントが小さくなります）。実際の外周点は正確にエッジ曲線上にありますが、異なるテセレーション許容値の差は各点がエッジ曲線に沿って位置する場所では結果として小さくなります。

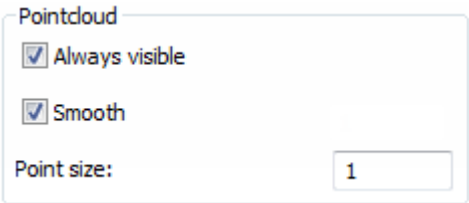
注記:

CADデータファイルのサイズと使用するテセレーション乗数値は必要なメモリの量に影響を与えます。これらは共にモデルを表示するのに必要なモザイク面の量に影響します。使用するテセレーション

乗数値が小さいほど、面のために多くのメモリを必要とします。大きな CAD
モデルでは、「メモリの容量不足」エラーが起こる可能性があります。これが発生した場合、現在の PC-DMIS セッションは不安定な状態になるため強制終了しなくてはなりません。

デフォルトのテセレーション乗数値は 1.0 です。テセレーション乗数を 0.1
に設定するとデフォルト値の 1.0 よりも必要なメモリ容量が 10 から 20
パーセント増加します。さらにテセレーション乗数値を 0.01
に下げると必要なメモリ容量はさらに 50 から 65 パーセント増加します。

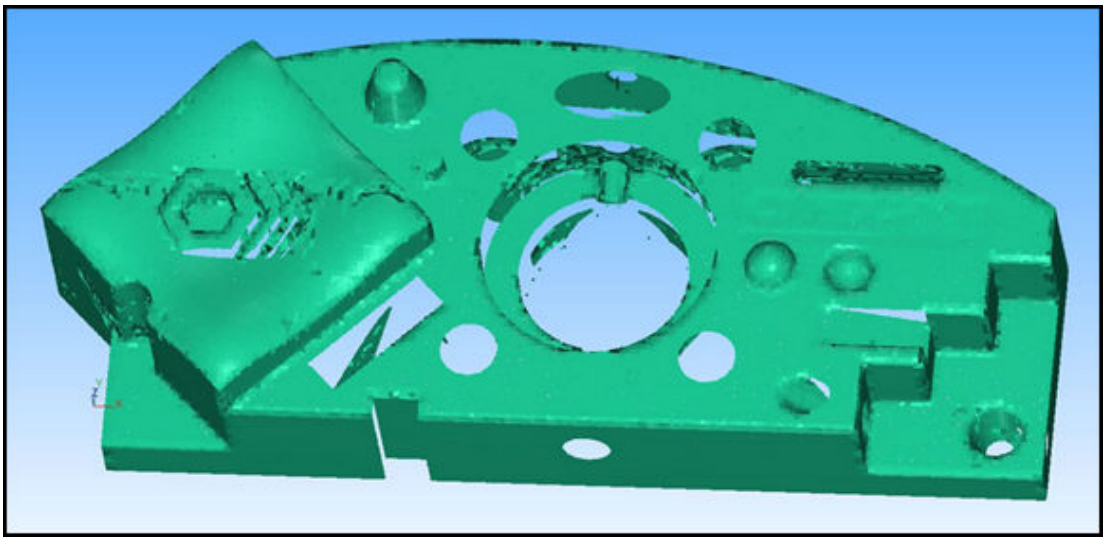
ポイントクラウドエリア



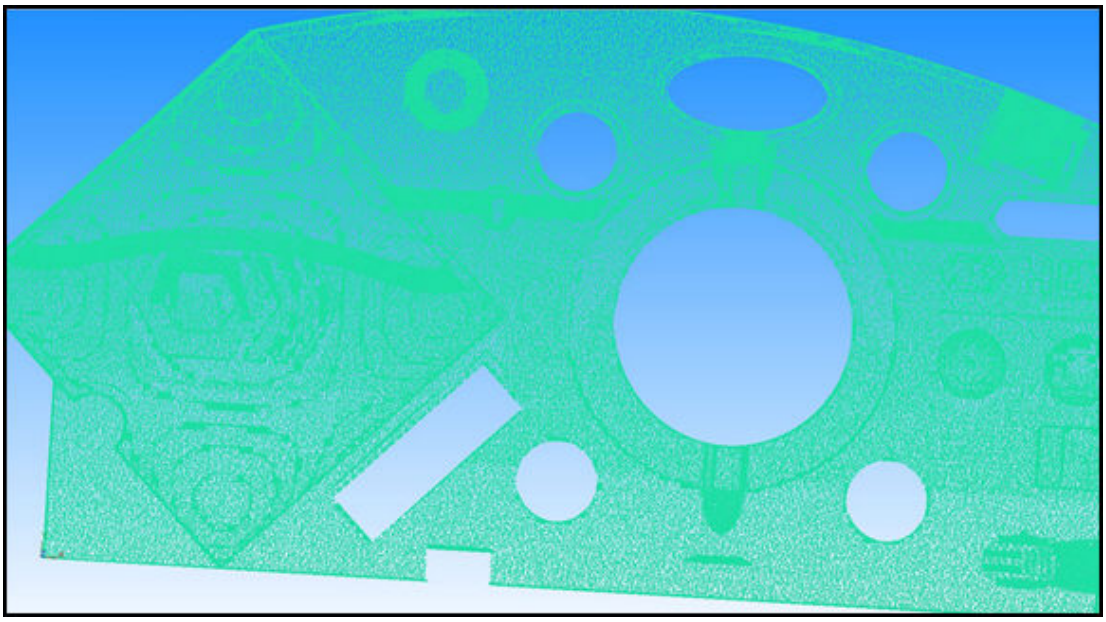
点群のセクションでは、点群または点（ COP
）の雲がグラフィックスウィンドウに描画方法を決定します。COPは、典型的に速く多くの点を集めることができるレーザープローブから生成されます。点群についての詳細は、「PC-DMISレーザー」ドキュメンテーションを参照してください。

常に表示-
もしマークされれば、CADが非表示されても、COPは常に目に見えます。オフにした場合、COPは単にCADが非表示になる場合、或はCOPラベルが**要素を非表示**に設定されている場合のみに非表示になります。

滑らかーこれがマークされた場合、点群はより滑らかに描かれて、そのため、点群は個々の点ではなく、表面のように見えます。オフにした場合、 点群は、別個の点として描かれます。



滑らかなオプションが有効された点群



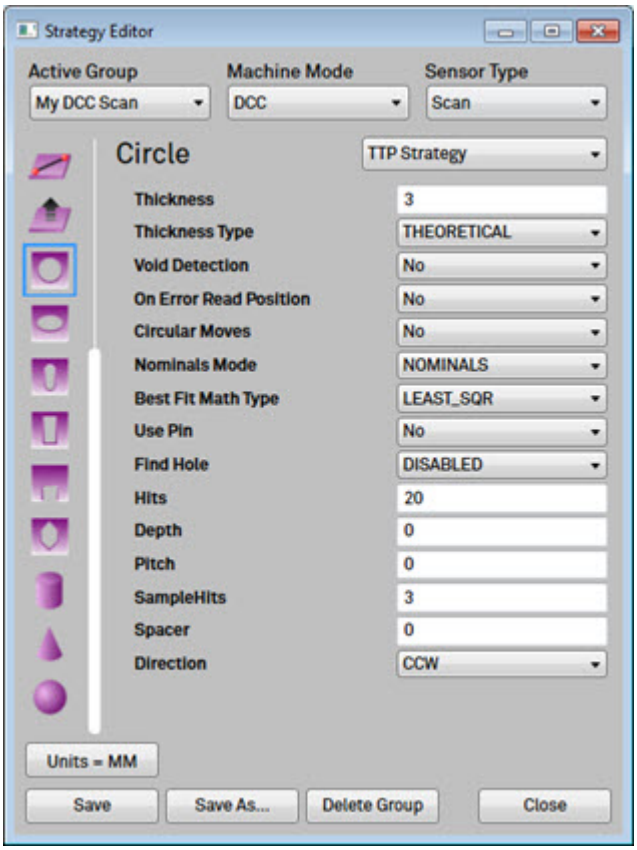
滑らかなオプションが無効された点群

ポイントサイズ - pointcloudのポイントにサイズをピクセル単位で指定します。

測定方法エディターの使用

「**編集|環境設定|測定方法エディタ**」を選択して、測定方法エディターアプリケーションにアクセスします。このアプリケーションは、数十個の設定や自動要素タイプを使用してデータベースに接続します。SQL
Serverは設定のデータベースをホストします（ローカルまたはリモートのいずれか）。すべての自

動要素の設定を変更し、マシンモードとセンサの種類に基づいてカスタムグループとしてそれらを保存するために測定方法エディターのアプリケーションを使用することができます。



測定方法エディター

注記:アプリケーションを取得するには、
MMS設定サーバーのインストーラを実行する必要があるかもしれません。測定方法エディターがサーバーを見つけることができないと、アプリケーションは、左側のツールバーで自動要素の種類を表示しません。

PC-DMISは、次の操作を行うたびにアクティブな設定、（**アクティブグループ**の下に選択されたアイテム）を使用します。

- 測定ルーチンに検査プレン（.planxml）をインポートすること
- 計画の変更マネージャを使用して、.planxmlをインポートすること
- CAD用の変更マネージャの使用

検査プレンをインポートするか、または変更マネージャの使用方法については、「PC- DMISに検査プレンの使用」章を参照してください。

測定方法エディターの使用方法

1. 「**編集|環境設定|測定方法エディタ**」を選択して、測定方法エディターアプリケーションにアクセスします。必要に応じてアプリケーションを配置するか、またはウィンドウの高さを決めることができます。

2. 希望する**マシンモード**と**センサータイプ**を選択してください。

3. アプリケーションに表示する単位を決定します。デフォルトでは、ボタンは**単位= MM**を表示します。

4. 左側のツールバーから、上下にスクロールして、自動要素を選択して、その設定を変更することができます。

5. 要素の設定を変更します。

6. 一つの要素が変更されると、必要があれば、別のをクリックします。さまざまな要素の間をクリックするとアプリケーションが一時的に変更内容を保存します。

7. 必要に応じて設定を変更し続けます。

8. **[保存]**をクリックし、表示される入力ボックスに自分の名前を入力して、設定のグループを保存します。

9. 必要に応じて十分な設定グループを保存します。

10. 変更された設定を保存することに開始すると、**アクティブなグループ**リストは測定方法エディタウィンドウに表示されます。

11. **アクティブなグループ**リストから、使用しようとする設定グループを選択します。

測定方法エディターの説明

アクティブなグループ -
ユーザが測定方法エディタを使用する最初に、ユーザは、設定を変更していないので、**アクティブグループ**一覧を表示することができません。それは目に見えるようにするには、まずは**保存**か、または**名前を付けて保存**をクリックして、修正された設定グループを保存する必要があります。それは目に見えるようになると、**アクティブなグループ**一覧は、元の設定と一緒にすべて保存された方法のリストをアルファベット順で示します。

マシンモード -
一般のCMMの場合、このリストは**手動**および**DCC**（ダイレクトコンピュータ制御）を示していま

す。このリストを使用すると、マシンの類別によって手動CMMまたはDCCの運動機能付きのCMMのいずれかを設定を保存することができます。

センサのタイプセンサの種類を決定します。アプリケーションは、使用できる選択されたセンサのタイプの設定を示します。伝統的なCMMの場合、これは**タッチトリガー**と**スキャン**を示しています。タッチトリガーセンサやプローブは離散的なヒットに基づいてヒットを記録します。スキャンセンサーまたはプローブは、パーツに接触したままで、時間と距離に基づいて、ヒットを記録します。

内部方策 -
一部の要素（HighPoint、円、平面、線、円筒、及び円錐）はその特定の方法に基づいていない設定のグループを選択できるように事前に定義された内部方法を持っています。

特長 -
下の左側のツールバーは、すべての自動要素を含んでいます。自動要素が選択されると、その設定はウィンドウに表示されます。

単位= MMまたは**単位= IN** - これが**MM**を表示すれば
、アプリケーションはミリメートル単位で表示された値を表示します。それが**IN**を表示すれば、アプリケーションはインチで値を表示します。このサーバーは常にミリメートルで、その設定を保存します。

保存 - SQL
Serverに変更された設定グループをを保存します。アクティブなグループはカスタムグループを示して、変更された最新設定でそのグループを更新します。ユーザは、元の設定を上書きすることはできません。アクティブなグループは元の設定を表示する場合、**グループ名**入力ボックスが表示されて、新規セットとしてグループを保存することができます。 PC- DMISは、SQL
Serverに方法を保存します（ローカルサーバーまたはリモート1のどちらか）。

名前を付けて保存 -
グループ名の入力ボックスはいつも表示されて、ユーザが新規セットとしてグループを保存することができます。

グループの削除 -
データベースから選択されるアクティブなカスタムグループを削除し、アクティブなグループ一覧の一番上の項目を選択します。

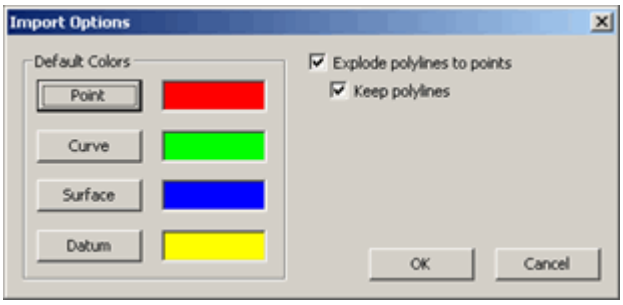
クローズ - 変更を保存せずにアプリケーションを終了します。

異なる設定の詳細については、「自動要素の作成」の章の「
自動要素ダイアログボックス」およびPC- DMIS
CMMマニュアルの「プローブツールボックスの使用」 を参照してください。

インポート オプションの設定

あるインポートされたエンティティ タイプのデフォルト色を決めることにより、または、PC-DMISによるインポートされた曲線の表示様式を決めることにより、容易にインポートオプションを設定できます。

これらの操作を行うには、**[編集 | ユーザー設定 | インポートオプション]**メニュー項目を選択して下さい。これは**[インポートオプション]**ダイアログボックスを表示します。

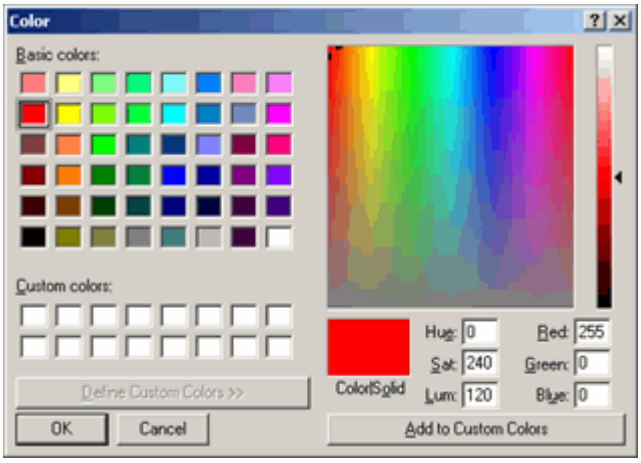


インポート オプション ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスには、幾つかのチェック ボックスに加えて、**デフォルト色**エリアがあります。

デフォルト色

このエリアでは、インポートされた点、曲線、局面、及び基準点エンティティタイプのデフォルト色を変更することができます。当該エンティティタイプが、既に定義された色を持たない場合、このデフォルト色が使用されます。色を変更するには、このエリアにあるボタンをクリックして下さい。標準の色ダイアログボックスが現れ、新しい色を選択できます。



色ダイアログ ボックス

次の要素がインポートされる時、PC-DMISは新たに定義された色を使用します。

チェックボックス

ポリラインを点に分解

-

通常、曲線エンティティをインポートする場合、それらは個々の曲線として現れます。しかし、現実には、各曲線は、本当は折れ線、一連の点で接続されている多数の線からなっています。このチェック
ボックスを選ぶと、インポートされた折れ線曲線エンティティが、各折れ線の頂点を1点とする、一連の点として現れます。このチェック
ボックスのチェックを消すと、インポートされた曲線は、普通の状態で表示されます。

ポリライン表示を維持

- ポリラインを点に分解チェック ボックスを選んだ状態で、このチェック
ボックスを選ぶと、画像は引き続き、元来のポリラインを点と共に表示し続けます。このチェックボックスのチェックをクリアすると、一連の点のみが表示されます。

PC-DMISは、次回からのインポートオペレーションすべてに、これらの設定を使用します。

ファイル位置の説明

新しいオペレーティング システム標準に対応するために、PC-DMIS 2010 MR2
以降では様々なユーザー特定の設定やファイルに対するデフォルトのファイル位置(パスの位置)が変更されました。以前はこれらの情報の多くは PC-DMIS
インストールディレクトリ内に保存されていました。

以下に、各ファイルの機能に基づきこれらのファイルが現在保存されている場所を示します:

パブリックドキュメント (測定ルーチン、プローブファイルなど)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Documents\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\Users\Public\Public Documents\WAI\PC-DMIS\<version>

Public Documents (報告するディレクトリー)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\Reporting

- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\Users\Public\Public Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\Reporting

<バージョン> とは PC-DMIS のバージョンを意味します。

パブリックドキュメント (CADファイル)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\CAD
- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\Users\Public\Public Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\CAD

<バージョン> とは PC-DMIS のバージョンを意味します。

パブリックドキュメント (固定ファイル)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\FIVEUNIQUE
- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\Users\Public\Documents\WAI\PC-DMIS\<version>\FIVEUNIQUE

<バージョン> とは PC-DMIS のバージョンを意味します。

プログラムデータファイル [非表示] (校正ファイル、セットアップファイル等)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>
- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<version>

- <バージョン> とは PC-DMIS のバージョンを意味します。

ユーザーデータファイル
(ツールバーおよびメニューレイアウトファイル、照明および材料の設定等)

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>
- **Vista / Win7 / Win8:**
  C:\Users\<username>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<version>

ここで、<ユーザー名>とは Windows のログインユーザー名であり、<バージョン>とは PC-DMIS のバージョンのことです。

データファイル特有の情報についての詳細は、「.DAT ファイルの説明」トピックを参照してください。

注記:
加えて、ユーザー独自のファイルおよび設定のバックアップ、復元、またはクリアのための機能がPC-DMIS
設定エディタに追加されました。個別のファイルを手動で削除または復元するよりも、設定エディタに用意されているツールを使用することを推奨します。より詳しい情報については「PC-DMIS設定エディタ」の文書を参照してください。

DATファイルの理解

PC-DMISのレジストリ エントリーが、PC-DMIS設定の大部分を保存しますが、PC-DMISは、.datファイル名の拡張子を持つ、幾つかのファイルをもまた、情報保存のために使用します。テキスト エディタ内にあるこれらのファイルの一部を編集できますが、その多くは、PC-DMIS内でのみ編集可能です。しかし、削除された項目について、PC-DMISを元来の状態に戻すため、これらのファイルのほとんどを削除できます。削除すべきでないファイルについては、以下の表の内容欄に記述があります。

重要: Windows 7 で必須の新しいオペレーティング システム標準に対応するために、PC-DMIS 2010 MR2 以降のバージョンではユーザー固有の .dat
ファイルを保存する場所が変更されました。これについても「ファイル位置の説明」トピックを参照してください。
PC-DMIS を始めて起動すると、AppData (Vista/7) または Application Data (XP)
ユーザーフォルダにインストールした PC-DMIS ディレクトリから複数の .dat ファイルがコピーされます。ここで、ユーザー特定のファイルは PC-DMIS
が使用するものです。ただし、管理者権限を使用すればオリジナルの工場出荷時のファイルを変更することができます。下のテーブルでファイル名の横にアスタリスク文字 (*)
が付いているものはオリジナルの工場出荷時のファイルがユーザーのインストールディレクトリに存在することを意味します。

加えて、ユーザー独自のファイルおよび設定のバックアップ、復元、またはクリアのための機能が PC-DMIS
設定エディタに追加されました。個別のファイルを手動で削除または復元するよりも、設定エディタに用意されているツールを使用することを推奨します。より詳しい情報については「PC-DMIS設定エディタ」の文書を参照してください。

次は利用可能の多く.datファイル及びそれらのファイル名、テキストエディターの中でそれらを編集することができるかどうか、それらがコンピューター上に格納される場所などを詳述します:

注記: <username>がウィンドウのログインユーザー名で、 <version>がPC -DMISのバージョンのように後述のファイルの場所は定義されています。

colors.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは編集ウィンドウの色の変更を保存します。編集ウィンドウの色を変更した場合のみ、PC-DMISはこのファイルを生成します。このファイルはPC-DMISを終了したときに作成されます。このファイルを削除すると編集ウィンドウの色がデフォルト設定に戻ります。

「編集ウィンドウの色定義」を参照して下さい。

ファイルの場所:

XP:

C:\Documents and Settings\<username>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<version>

Vista/7:

C:\Users\<username>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<version>

custommenuitem.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルには、**カスタマイズ**ダイアログボックス（**編集 | ツールバー | カスタマイズ**）の**メニュー**タブにある**ユーザー定義コマンド**一覧上に列挙された、デフォルト設定項目とユーザー定義項目に関する情報があります。このファイルを削除すると、ユーザー定義のメニュー項目がすべて除去されます。PC-DMISと共に出荷された、デフォルト自動操作ウィザードは、新規の.datファイル内に再製されます。ファイル削除後、PC-DMIS旧バージョンからのtoolbar.datファイルをお持ちの場合には、削除されたユーザー定義の全メニュー項目が、PC-DMISの次回実行時に再製されます。

「ユーザーインターフェースの利用」内の「ユーザーインターフェースのカスタマイズ」を参照して下さい。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

DefaultDimensionColors.dat

ファイルを編集することができません。

[編集|グラフィック表示ウィンドウ
|寸法色]メニューアイテムからアクセスして**外形寸法色編集**ダイアログボックスを使用するたびにそれが作成され、自動的に変更されます。

このdatファイルは寸法色情報を含んで、2014年以前のバージョンではそれはPC-DMIS Settings Editorでこれらの登録エントリーに格納された:

- `DimensionColorLimits`
- `DimensionColorNumZones`
- `DimensionColorShowInTwoDirections`
- `DimensionColorTol1..40`
- `DimensionColorTolOutNeg`
- `DimensionColorTolOutPos`
- `DimensionTolerancePercentage`

このデータファイルには次のような情報を含んでいます：

- 寸法の色範囲を定義します。
- 公差色が2方向に表示されているか否かを判断します。
- 1から40までのパーセンテージで公差範囲内に残っている寸法に使用する色を定義します。
- 寸法が負の値で公差範囲の外にあるときに表示される色を定めます。
- 寸法が正値で公差範囲の外にあるときに表示される色を定めます。
- PC-DMISは寸法色ウィンドウ（色バー）で偏差の割合に公差を表示するかどうかを判断します。

ファイルの場所:

- **XP:**
  C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\WAI\PC-DMIS\

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

<バージョン> とは PC-DMIS のバージョンを意味します。

elogo.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは、編集ウィンドウの最終ページにある、フッターのフォーマットをコントロールします。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると、編集ウィンドウの最初のページにある、ヘッダーが消去されます。

「編集ウィンドウの使用」内の「ヘッダー及びフッターの変更」を参照して下さい。

ファイルの場所:

PC-DMISがインストールされた先のディレクトリ内

executebarstate.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルは測定ルーチン実行中のツールバーおよびドッキング可能なウィンドウのレイアウトから成ります。測定ルーチンの実行が開始及び終了される時に、PC-DMISは、これら二つのファイル（gbarstate、及び、execbarstate）の再ロードを交互に切り換えて行います。このファイルを削除すると、デフォルト設定のレイアウトが回復されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

gbarstate.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルは測定ルーチンの（実行時ではなく）内部のツールバーおよびドッキング可能なウィンドウのレイアウトから成ります。このファイルを削除すると、デフォルト設定のレイアウトが回復されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

header.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは、編集ウィンドウの最初のページを除く、全ページにあるヘッダーのフォーマットをコントロールします。「編集ウィンドウの使用」内の「ヘッダー及びフッターの変更」を参照して下さい。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると、編集ウィンドウの該当ページにある、ヘッダーが消去されます。

ファイルの場所:

PC-DMISがインストールされた先のディレクトリ内

illumination.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルはビジョン測定機に使用されます。ファイルは照明クイックセットとして保存されます（基本的に測定器の照明の情報を含みます一電球の点灯と明るさです）。消去した場合、カスタムクイックセットは失われ、PC-DMISはいくつかのクイックセットのデフォルトのためにこのファイルを再度作成します。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\All Users\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

layout#.dat

ファイルを編集することができません。

これらのファイルは、**ウィンドウ レイアウト**ツール
バー内に保存された、特有のレイアウトに関する情報を保存します。gbarstate.datに類似していて、各保存レイアウトにつき、1ファイルがあります。daPC-
DMISは、新規にレイアウトが作成されるごとに、ファイル番号を自動的に増加します。特定のLayout#.dat ファイルを削除すると、**ウィンドウ レイアウト**ツール
バーから、関連のレイアウト ボタンが除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

layouttoolbar.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルには、**ウィンドウ レイアウト**ツール
バーを用いて保存された、全レイアウトの一覧があります。このファイルを削除すると、**ウィンドウ レイアウト**ツール バーからのお手持ちのウィンドウ レイアウトが除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

lightingmaterials.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルはデフォルトシステムへの関係経路、照明と素材の設定をdefault.txtに保存します。これはデフォルトで**CAD及びグラフィックセットアップ** ダイアログボックス（**編集 | グラフィック表示ウインドウ | 照明、材質**）の**アーカイブ**タブに表示されます。このテキストファイルのはじめにあるコメントはファイルのフォーマットについて説明しています。このテキストファイルのはじめに

あるコメントはファイルのフォーマットについて説明しています。「L」、「M」という文字は各品目がどの一覧にあるか特定しています。（「L」はLighting、「M」はMaterial、「U」はUser
Recallを意味します）。default.txtは人間には識別不可能であることに注意してください。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると**CAD及びグラフィックセットアップ**ダイアログボックスに照明や素材のファイルを通知できません。削除してしまった場合は手動かPC-
DMISの再インストールによりファイルを再度作成しなければなりません。

ファイルの場所:

PC-DMISがインストールされた先のディレクトリ内

logo.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは、編集ウィンドウの最初のページにあるヘッダーのフォーマットをコントロールします。「編集ウィンドウの使用」内の「ヘッダー及びフッターの変更」を参照して下さい。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると、編集ウィンドウの最初のページにある、ヘッダーが消去されます。

ファイルの場所:

PC-DMISがインストールされた先のディレクトリ内

machine.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルはヴァーチャル測定器を定義します。仮想測定機は本物の測定機のようにグラフィック表示ウィンドウで動画を表示します。

このファイルは削除しないで下さい。代わりにmachine.dat
entriesのカスタマイズにusermachine.datファイルを使用して下さい。

このファイルは削除しないで下さい。削除される場合、この測定機モデルは利用可能できません。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

menu_<language>.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルは、ユーザーによりカスタマイズされたメニューを保存します。ファイル名の <language> という部分は、PC-DMISの表示に使用されている、お客様の言語を表す三文字の言語コードです。このファイルを削除すると、カスタマイズされたメニューがすべて除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

messageboxoptions.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルには、オフにされる警告メッセージのリストを格納します。このファイルを削除すると、すべての警告メッセージが再び表示されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

probe.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルはPC-DMIS内で利用可能なプローブコンポーネントをすべて表示します。ユーザー独自のプロー

ブファイルを構築すると、PC-DMISは
このファイルの情報を使用して**プローブユーティリティー** ダイアログボックス（**挿入 | ハードウェアの定義 | プローブ**）にデータを投入します。

このファイルは削除しないで下さい。代わりに、usrprobe.datファイルで、カスタマイズしたプローブハードウェアを表示、または作成して下さい。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると、利用可能なプローブコンポーネントの全情報が消去され、プローブの変更、及び、作成が不可能になります。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

probechanger.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルはヴァーチャルプローブ交換機を決定します。仮想プローブ交換機はグラフィック表示ウィンドウで動画で表示され、衝突検出として空間体積内に表示されます。これは実際のプローブ交換機の代わりになります。

このファイルは削除しないで下さい。プローブ交換機の動画を決定するためにPC-DMISをお使い下さい。

このファイルは削除しないで下さい。削除される場合、この測定機モデルは利用可能できません。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\All Users\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

quickfix.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは、グラフィックス表示ウィンドウ内に付加可能なクイック取付具をすべて表示します。

このファイルは削除しないで下さい。このファイルを削除すると、利用可能なクイック取付具の全情報が消去され、これらのファイルの作動が不可能になります。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

reportingtoolbar.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルには、**レポート**ツール バー上の、保存されたレポート テンプレート及びカスタム レポートの一覧が含まれています。このファイルを削除すると、**レポート**ツールバーからの保存済みの情報がすべて除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

templreppickerlist.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルには、**テンプレートの選択**アイコンをクリックして「**レポート･ウィンドウ**」ツールバーからアクセスできる「**レポートテンプレート**」ダイアログボックスに追加されたレポートテンプレートの一覧を含んでいます。このファイルを削除すると、**テンプレート選択**ダイアログ ボックスからのファイルが除去されますが、実際のレポートテンプレート自体は、除去されません。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

toolbar.dat

ファイルを編集することができません。

このファイルには、カスタマイズされたツール
バーの定義、（ボタン）、及び、名称があります。ツール
バーがカスタマイズ、または、作成される時、PC-
DMISは、このファイルを作成します。このファイルを削除すると、カスタマイズされたツール バーがすべて除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

userlightingmaterials.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは照明と素材の設定のカスタムユーザー設定を**CAD及びグラフィックのセットアップ** ダイアログボックス（**編集 | グラフィック表示ウインドウ | 照明及び素材**）の**アーカイブ**タブを使って保存するたびに自動的に作成されます。lightingmaterials.dat,は保存したカスタムコンフィギュレーションの関係経路を決定します。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

usermachine.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは測定機の動画をカスタマイズします。また、machine.datから（品目として一覧になった）測定機をコピーしてこのファイルに貼付けたり、テキストファイルの中で直接か、**仮想測定機の起動**ダイアログボックス（**挿入 | ハードウェア定義 | 測定機**）を使ってカスタマイズ可能です。後でダイアログボックスにアクセスする際は毎回、使用可能なPC-DMIS
は使用可能な測定器を表示し、machine.datに加え、このファイルを読み込みます。このファイルを削除すると、カスタマイズされたマションがすべて除去されます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\All Users\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

usrprobe.dat *

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは手動で作成しなければいけません。それからプローブ情報をprobe.datからコピーし、このファイルに貼付けて必要に応じて情報をカスタマイズします。PC-DMISは **プローブユーティリティー** ダイアログボックス（**挿入 | ハードウェア定義 | プローブ**）にプローブを表示した時にこのファイルとprobe.datファイルを読み込みます。このファイルを消去するとカスタマイズしたプローブ情報が失われます。

ファイルの場所:

XP:
C:\Documents and Settings\<ユーザー名>\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

userquickfixture.dat

ユーザはこのファイルを編集することができます。

このファイルは、「**クイック治具**」ダイアログボックスの**利用可能な備品**セクションに見つかれたカスタムクイック治具を定義します（「**挿入|ハードウェアの定義|クイック治具**」）。またquickfix.datから（項目としてリストされる）治具をコピーして、このファイルに情報

を貼り付けることができます。その後、テキストファイルの中に直接、それらをカスタマイズするか、または**クイック治具**ダイアログボックスを使用して、新しいカスタム治具を作成することができます。後でそのダイアログボックスにアクセスするたびに、利用可能な治具が表示される場合に、 PC-DMISは、このファイルとquickfix.datファイルを読み込みます。このファイルを削除すると、カスタマイズされた治具がすべて除去されます。

XP:
C:\Documents and Settings\All Users\Local Settings\Application Data\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

Vista/7:
C:\ProgramData\WAI\PC-DMIS\<バージョン>

*
アスタリスク文字が意味する内容については、このトピックの初めにある**重要な**注記を参照してください。

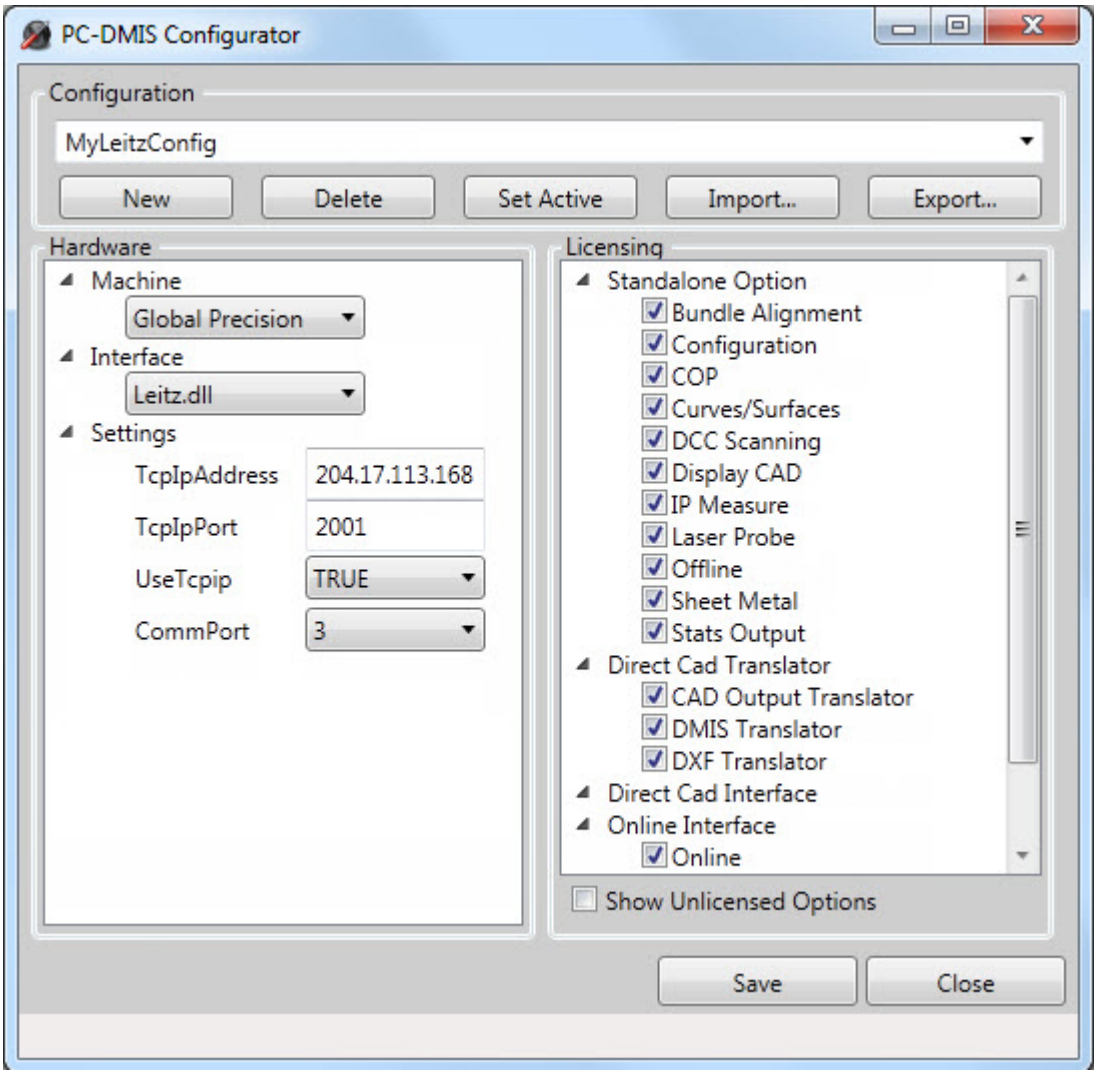
PC-DMIS コンフィギュレータの使用

PC-DMIS コンフィギュレータは、利用可能でサポート可能なタイプの測定機およびインターフェイスの様々な構成を定義するためのスタンドアロンのユーティリティです。これらの構成は[**構成**]リストの[**設定**]ツールバーに現れ、定義した構成をオンザフライで切り替えることができます。より詳しい情報については、「ツールバーの使用」の項にある「ツールバーの設定」トピックを参照して下さい。

PC-DMIS コンフィギュレータには以下の方法でアクセスすることができます:

- PC-DMISがインストールされたディレクトリに移動し、Configurator.exeファイルをダブルクリックします。
- 測定ルーチンを開いていない場合、[**編集 | コンフィギュレータ**] を選択します。
- 測定ルーチンを開いていない場合、[**編集 | ユーザー設定 | コンフィギュレータ**] を選択します。
- [**Portable**] ツールバーにある[*コンフィギュレータを起動] アイコン*をクリックします。

コンフィギュレータが開きますが、最初の構成を定義するまでは空でグレイ表示されます。



PC-DMIS コンフィギュレータ

新規構成の定義

1. [構成]エリアのボックスに構成名を入力します。ボタンおよびリストが選択可能になります。

2. 左の[ハードウェア]エリアにある[測定機]を拡張し、そこでお使いの測定機を選択することで、測定装置を選択します。

3. 左の[ハードウェア]エリアにある[インターフェイス]を拡張し、そこでファイルを選択することで、インターフェイスファイルを選択します。

4. 選択内容に基づき、[設定]リストが左側の[ハードウェア]エリアに現れることがあり、ここで TCPIP アドレス、TCPIP

ポート番号、通信ポートなど、測定機との接続に必要な情報を入力することができます。必要に応じて、[**設定**]リストにこの情報を提供します。

5. ライセンスのオプションを選択します。使いたいと思っているライセンス付きのコンポーネントの中には設定によって有効、無効になっているものもあります。これは右側の[**ライセンス**]エリアから目的のチェックボックスをオンにしたりオフにしたりすることでコントロールできます。 項目をクリアするとコンポーネントがライセンスサーバーに戻され、組織内の他のユーザーがそれを使用することができます。[**ライセンス付与されていないオプションを表示**]チェックボックスをオンまたはオフにすることでライセンス付与されていないオプションを表示したり隠したりできます。デフォルトでは、ライセンス付与されていないオプションはビューから隠されています。

6. **保存**ボタンをクリックします。 XML
ファイルが作成されます。コンフィギュレータは開いたままであり、追加の構成を作成できます。

7. 必要に応じて上記のステップを繰り返し、複数の構成を定義します。

8. 完了後に、**閉じる**をクリックして下さい。

構成の編集

既存の構成を編集するには、[**構成**]エリアから構成を選び、任意のオプションを変更して[**保存**]をクリックします。

構成の削除

既存の構成を削除するには、[**構成**]エリアから構成を選び、[**削除**]をクリックします。

構成のアクティベート

PC-DMIS
で構成を使用するには、[**構成**]エリアから構成を選び、[**アクティブに設定**]をクリックします。

構成のインポートおよびエクスポート

XMLファイルは以下の場所に保存する必要があります:

C:\Users\<ユーザー名>\AppData\Local\WAI\PC-DMIS\<バージョン>\Configurations\

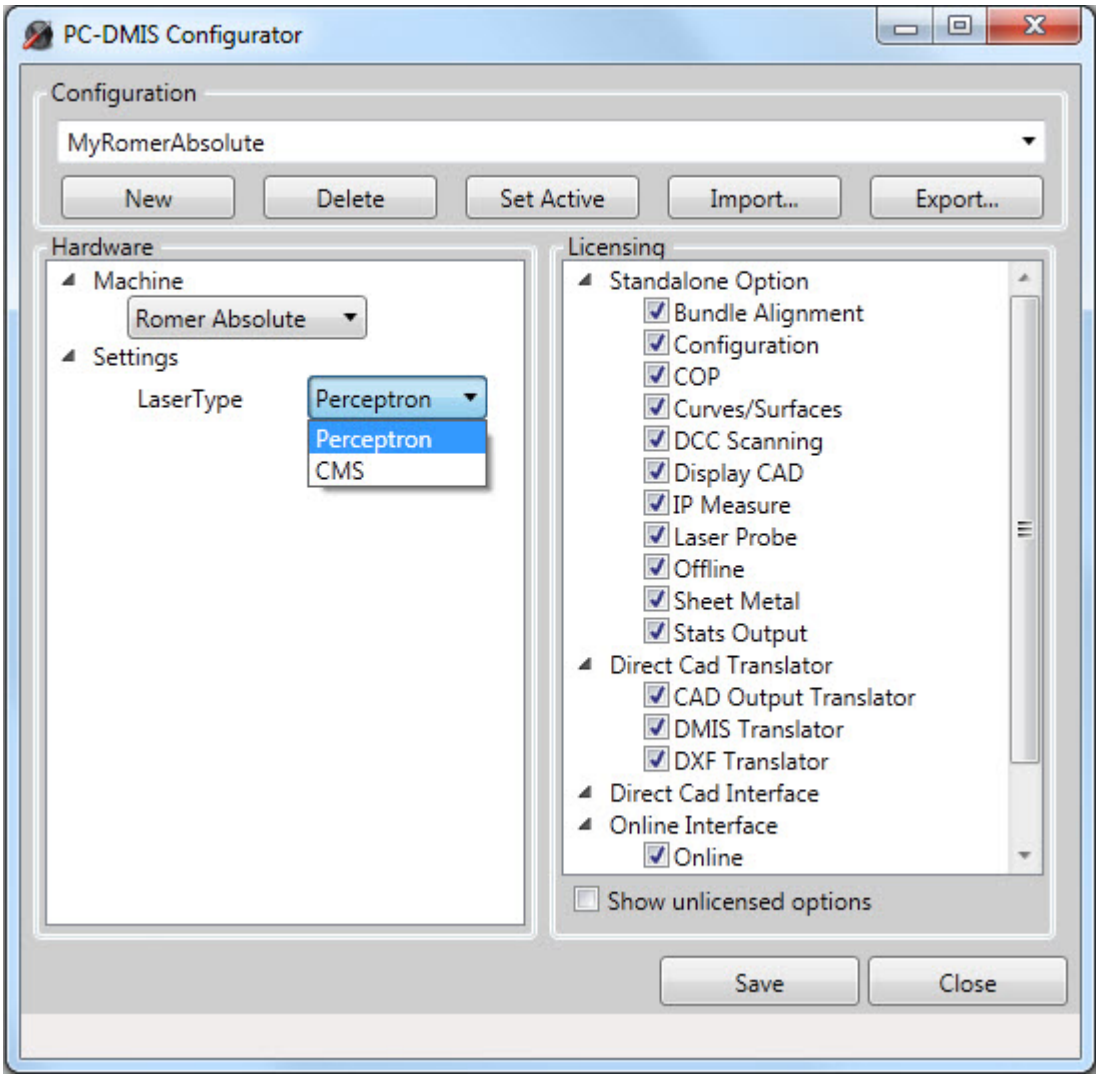
一部のコンピュータシステムの中には、このフォルダが隠されているか無効化されているものもあります。

[**インポート**]ボタンは、XMLファイルをこの必要なディレクトリへ簡単に置く方法を提供します。外部位置からコンフィギュレータが予想するデフォルト位置へ構成XNLファイルをインポートするには、[**インポート**]ボタンをクリックし、[**開く**]ダイアログ
ボックスを使用してXML構成ファイルが位置する場所を参照し、[**開く**]を選択します。

同様に、[**エクスポート**]ボタンでは、バックアップ目的、または単に他のユーザーと共有する目的でXML構成ファイルを別のディレクトリに保存できます。ファイルをエクスポートするには、[**エクスポート**] ボタンを選択し、[**名前を付けて保存**] ダイアログ
ボックスを使用してXMLファイルを送信したい場所を参照し、[**保存**]をクリックします。

レーザー構成

1. 上記に説明するようにコンフィギュレータダイアログを開きます。
2. ダイアログの[**構成**]セクションにあるドロップダウンリストから、使用するレーザーシステムに適した構成オプションを選択します。



レーザー用PC-DMISコンフィギュレータ

3. ハードウェア領域から、[設定]を展開し、
   LaserTypeから使用される適切なレーザーを選択します。

4. 必要に応じてライセンスオプションを選択します。

5. [保存] をクリックしてすべての変更を保存するか、または [閉じる]
   をクリックして変更を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。